松山市文化財調査報告書 28

文　京　遺　跡

―― 第2・3・5次調査 ――

1992

愛　媛　大　学

(財) 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

文　京　遺　跡

―― 第２・３・５次調査 ――

1992

愛　媛　大　学
(財) 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版　3次調査出土分銅形土製品

序

松山市街地の中心部にあってそのシンボルともいうべき松山城の北部一帯には、「道後城北遺跡群」として、古くは縄文時代後期から下って古墳時代・中世にいたるまでの遺跡が多く分布しております。明治42年の道後今市での平形銅剣10数口の発見以来、この地域は特に弥生時代における先進的集落として注目されてきました。

「文京遺跡」は、愛媛大学城北キャンパスを中心とした地区に所在し、弥生時代中・後期に遺跡としての盛期を迎えるこの遺跡群にあって、とりわけ中核的存在であることが近年明らかになりつつあります。このことには、本書に収められた第2次・第3次・第5次調査での成果や、愛媛大学埋蔵文化財調査室による数次の調査・報告事例が基礎資料として大きく貢献していることはいうまでもありません。

報告にいたるまでには少なからぬ年月を要しましたが、ここに本報告書を刊行してまとまった調査成果を公表できますことは、埋蔵文化財の保護、継承に日々携わる者として大きな喜びであります。これも、ひとえに愛媛大学関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解と、ご協力のたまものと厚く感謝申し上げる次第であります。

本書が文化財保護、教育文化の向上、今後の調査研究の一助にご利用いただければ幸いに存じます。

平成4年8月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　田　中　誠　一

例　　言

1．　本書は、松山市教育委員会が松山市文京町愛媛大学城北地区構内において実施した発掘調査、第２次・第３次・第５次調査の報告書である。第２次調査は昭和55年度実施の工学部質源工学教棟新営に伴う事前調査、第３次調査は昭和56年度実施の法文学部８階教棟新営に伴う事前調査、第５次調査は昭和59年度に工学部危険物貯蔵所建設に伴う調査として実施された。

2．　本書の刊行は、松山市教育委員会における埋蔵文化財調査部門の松山市教育委員会文化教育課より、財団法人 松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターへの平成３年度移行に伴い、愛媛大学の委託を受けて同財団が行った。刊行にあたっての組織は下記のとおりである。なお、調査における組織は各調査の本文中に記した。

刊行委託　愛媛大学　学長　福西　　亮

刊行主体　財団法人　松山市生涯学習振興財団

理事長　田中　誠一

埋蔵文化財センター　所　　長　和田祐三郎

次　　長　田所　延行

調査係長　西尾　幸則

調査主任　田城　武志

担　　当　調査員　栗田　茂敏

池田　　学

3．　使用した方位は、すべて磁北である。

4．　遺物図の縮尺は、土器を１／４、石器・石製品を１／３、土器片・土製品・鉄器を１／２に統一することを原則とした。

5．　遺物の実測は、栗田茂敏、池田学が行い、遺構・遺物の製図は栗田茂敏が行った。

6．　遺構の撮影は、西尾幸則、栗田茂敏、池田学が行い、遺物の撮影は大西朋子が担当した。

7．　本書にかかわる遺物、記録類は松山市立埋蔵文化財センターに収蔵、保管されており、その一部は付設の考古館において展示公開されている。

8．　田辺昭三（京都造形芸術大学）、下條信行（愛媛大学）の両先生にはそれぞれ発掘調査、執筆にあたって貴重なご指導、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

9．　本書の執筆・編集は栗田茂敏が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　文京遺跡をめぐる環境 …… 1

Ⅱ　2次調査の概要 …… 6
1．調査に至る経緯と組織 …… 6
2．遺構と遺物 …… 7
(1)　層　序 …… 7
(2)　竪穴住居址 …… 11
(3)　掘立柱建物 …… 26
(4)　その他の遺構 …… 34
(5)　包含層出土の遺物 …… 46
3．小　結 …… 53

Ⅲ　3次調査の概要 …… 55
1．調査に至る経緯と組織 …… 55
2．遺構と遺物 …… 56
(1)　層　序 …… 56
(2)　竪穴住居址 …… 59
(3)　方形周溝状遺構ＳＸ－1 …… 77
(4)　隅丸長方形竪穴遺構 …… 85
(5)　その他の土壙・柱穴 …… 95
(6)　包含層出土の遺物 …… 99
3．小　結 …… 119

Ⅳ　5次調査の概要 …… 122
1．調査に至る経緯と組織 …… 122
2．遺構と遺物 …… 123
(1)　層　序 …… 123
(2)　竪穴遺構 …… 123
(3)　掘立柱建物・柵列 …… 125
(4)　包含層出土の遺物 …… 126
3．小　結 …… 127

V　出土弥生式土器の検討 …… 128
(1)　弥生時代中期後葉 …… 128
(2)　弥生時代後期初頭 …… 134
(3)　他地域との交流 …… 136
(4)　おわりに …… 138

図　目　次

図１　文京遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …… 2
図２　文京遺跡における各調査の位置 …… 5
２次調査
図３　調査地の区割 …… 7
図４　調査地西壁（北半）土層図 …… 8
図５　調査地南壁土層図 …… 8
図６　遺構配置図 …… 9
図７　竪穴住居ＳＢ－１ …… 11
図８　ＳＢ－１出土遺物(1) …… 12
図９　ＳＢ－１出土遺物(2) …… 13
図10　ＳＢ－２出土遺物 …… 13
図11　竪穴住居ＳＢ－２・３ …… 14
図12　ＳＢ－３出土遺物 …… 15
図13　竪穴住居ＳＢ－４ …… 17
図14　ＳＢ－４出土遺物(1) …… 18
図15　ＳＢ－４出土遺物(2) …… 19
図16　ＳＢ－４出土遺物(3) …… 20
図17　竪穴住居ＳＢ－５ …… 20
図18　ＳＢ－５出土遺物(1) …… 21
図19　ＳＢ－５出土遺物(2) …… 22
図20　竪穴住居ＳＢ－６ …… 23
図21　竪穴住居ＳＢ－７ …… 24
図22　竪穴住居ＳＢ－８ …… 24
図23　竪穴住居ＳＢ－９ …… 25
図24　ＳＢ－９出土遺物 …… 25
図25　掘立柱建物ＳＢ-10 …… 26

図26　ＳＢ−10出土遺物 …… 27
図27　掘立柱建物ＳＢ−11 …… 28
図28　ＳＢ−11出土遺物 …… 29
図29　掘立柱建物ＳＢ−12 …… 30
図30　掘立柱建物ＳＢ−13 …… 31
図31　掘立柱建物ＳＢ−14 …… 32
図32　掘立柱建物ＳＢ−15 …… 33
図33　土壙ＳＫ−１ …… 34
図34　ＳＫ−１出土遺物 …… 34
図35　土壙ＳＫ−２ …… 35
図36　ＳＫ−２出土遺物 …… 35
図37　土壙ＳＫ−３ …… 35
図38　ＳＫ−３出土遺物(1) …… 37
図39　ＳＫ−３出土遺物(2) …… 38
図40　土壙ＳＫ−４ …… 39
図41　ＳＫ−４出土遺物 …… 39
図42　土壙ＳＫ−５ …… 39
図43　ＳＫ−５出土遺物 …… 39
図44　円形周溝状遺構ＳＸ−１・不整形竪穴遺構ＳＸ−２ …… 40
図45　ＳＸ−１出土遺物 …… 41
図46　ＳＸ−２出土遺物 …… 42
図47　ＳＤ−１出土遺物 …… 43
図48　柱穴出土遺物 …… 45
図49　包含層出土弥生式土器(1) …… 47
図50　包含層出土弥生式土器(2) …… 48
図51　包含層出土弥生式土器(3) …… 50
図52　包含層出土須恵器 …… 51
図53　包含層出土土製紡錘車 …… 51
図54　包含層出土石器・石製品 …… 52

３次調査

図55　調査地の区割 …… 57
図56　調査地南壁土層図 …… 57
図57　遺構配置図 …… 58
図58　竪穴住居ＳＢ−１・２ …… 59

図59　ＳＢ－１出土遺物(1) …… 61
図60　ＳＢ－１出土遺物(2) …… 62
図61　ＳＢ－１出土遺物(3) …… 63
図62　ＳＢ－１出土遺物(4) …… 64
図63　ＳＢ－２出土遺物 …… 64
図64　竪穴住居ＳＢ－３・５ …… 65
図65　ＳＢ－３出土遺物(1) …… 66
図66　ＳＢ－３出土遺物(2) …… 66
図67　ＳＢ－５出土遺物(1) …… 67
図68　ＳＢ－５出土遺物(2) …… 67
図69　竪穴住居ＳＢ－４ …… 68
図70　竪穴住居ＳＢ－６ …… 69
図71　ＳＢ－６出土遺物(1) …… 70
図72　ＳＢ－６出土遺物(2) …… 72
図73　ＳＢ－６出土遺物(3) …… 73
図74　ＳＢ－６出土遺物(4) …… 73
図75　竪穴住居ＳＢ－７ …… 74
図76　ＳＢ－７出土遺物(1) …… 75
図77　ＳＢ－７出土遺物(2) …… 76
図78　ＳＢ－７出土遺物(3) …… 76
図79　方形周溝状遺構ＳＸ－１ …… 77
図80　ＳＸ－１溝内堆積土層 …… 78
図81　ＳＸ－１主要遺物出土分布 …… 79
図82　ＳＸ－１出土遺物(1) …… 81
図83　ＳＸ－１出土遺物(2) …… 83
図84　ＳＸ－１出土遺物(3) …… 84
図85　竪穴遺構ＳＫ－１ …… 85
図86　ＳＫ－１出土遺物(1) …… 86
図87　ＳＫ－１出土遺物(2) …… 87
図88　ＳＫ－３出土遺物 …… 88
図89　竪穴遺構ＳＫ－６・７・８ …… 89
図90　ＳＫ－６出土遺物(1) …… 90
図91　ＳＫ－６出土遺物(2) …… 90
図92　ＳＫ－７出土遺物(1) …… 92

図93　ＳＫ－７出土遺物(2)…… 93
図94　ＳＫ－８出土遺物…… 94
図95　土壙ＳＫ－９…… 95
図96　ＳＫ－９出土遺物…… 95
図97　土壙ＳＫ−10…… 96
図98　ＳＫ−10出土遺物…… 96
図99　土壙ＳＫ−17…… 96
図100　ＳＫ−17出土遺物…… 96
図101　土壙ＳＫ−20…… 97
図102　ＳＫ−20出土遺物…… 97
図103　柱穴出土遺物…… 98
図104　包含層出土弥生式土器(1)…… 100
図105　包含層出土弥生式土器(2)…… 101
図106　包含層出土弥生式土器(3)…… 102
図107　包含層出土弥生式土器(4)…… 103
図108　包含層出土弥生式土器(5)…… 105
図109　包含層出土弥生式土器(6)…… 106
図110　包含層出土弥生式土器(7)…… 107
図111　包含層出土弥生式土器(8)…… 108
図112　包含層出土弥生式土器(9)…… 110
図113　包含層出土弥生式土器(10)…… 111
図114　包含層出土絵画土器…… 111
図115　包含層出土紡錘車・土玉…… 112
図116　包含層出土分銅形土製品…… 113
図117　包含層出土石器類(1)…… 115
図118　包含層出土石器類(2)…… 116
図119　包含層出土石器類(3)…… 117
図120　包含層出土土師器…… 118

5次調査

図121　遺構配置と調査地北壁の土層…… 124
図122　ＳＸ－２出土遺物(1)…… 125
図123　ＳＸ－２出土遺物(2)…… 125
図124　ＳＢ－１出土遺物…… 126
図125　包含層出土遺物…… 126

出土弥生式土器の検討

図126　弥生時代中期後葉の甕…… 129
図127　弥生時代中期後葉の壺…… 131
図128　弥生時代中期後葉の高坏・鉢…… 133
図129　弥生時代後期初頭の土器…… 135
図130　他地域の影響を受けた土器…… 137

図　版　目　次

巻頭図版　文京遺跡第３次調査出土分銅形土製品

図版１　文京遺跡第２次調査１　文京遺跡の遠景（南西より）
２次調査地調査前全景（北西より）
図版２　文京遺跡第２次調査２　調査地東半の遺構配置（南上方より）
竪穴住居ＳＢ－１（東南より）
図版３　文京遺跡第２次調査３　竪穴住居ＳＢ－２・３（東より）
竪穴住居ＳＢ－４（東より）
図版４　文京遺跡第２次調査４　竪穴住居ＳＢ－５遺物出土状況（南より）
竪穴住居ＳＢ－５（北東より）
図版５　文京遺跡第２次調査５　竪穴住居ＳＢ－６（北より）
竪穴住居ＳＢ－７（東より）
図版６　文京遺跡第２次調査６　調査地西半の遺構配置（南上方より）
竪穴住居ＳＢ－８（南より）
図版７　文京遺跡第２次調査７　竪穴住居ＳＢ－９（北より）
円形周溝状遺構ＳＸ－１・不整形竪穴遺構ＳＸ－２（南上方より）
図版８　文京遺跡第２次調査８　ＳＸ－１遺物出土状況（西より）
掘立柱建物ＳＢ-11（南上方より）
図版９　文京遺跡第２次調査９　土壙ＳＫ－１遺物出土状況（西より）
土壙ＳＫ－２（東より）
図版10　文京遺跡第２次調査10　土壙ＳＫ－３遺物出土状況
溝ＳＤ－１（東より）
図版11　文京遺跡第２次調査11　出土遺物(1)（ＳＢ－１・３・４、ＳＸ－１）
図版12　文京遺跡第２次調査12　出土遺物(2)（ＳＢ－５・11、ＳＫ－１）

図版13　文京遺跡第２次調査13　出土遺物(3)（ＳＫ－３）
図版14　文京遺跡第２次調査14　出土遺物(4)（ＳＢ－１・４・５、包含層）
図版15　文京遺跡第３次調査１　３次調査地調査前全景（東上方より）
完掘状況全景（東上方より）
図版16　文京遺跡第３次調査２　竪穴住居ＳＢ－１検出状況（東より）
ＳＢ－１遺物出土状況（北より）
図版17　文京遺跡第３次調査３　隅丸長方形竪穴遺構ＳＫ－１遺物出土状況（東より）
ＳＢ－１・ＳＫ－１周辺の遺構（南より）
図版18　文京遺跡第３次調査４　ＳＢ－１・ＳＫ－１（東より）
竪穴住居ＳＢ－２・土壙ＳＫ－９（東より）
図版19　文京遺跡第３次調査５　竪穴住居ＳＢ－３・５、隅丸長方形竪穴遺構ＳＫ－２～５（南より）
ＳＢ－３とＳＫ－３・４（北東より）
図版20　文京遺跡第３次調査６　調査地東半の遺構配置（南上方より）
調査地西寄りの遺構配置（南上方より）
図版21　文京遺跡第３次調査７　竪穴住居ＳＢ－６（南東より）
ＳＢ－６分銅形土製品出土状況
図版22　文京遺跡第３次調査８　竪穴住居ＳＢ－７（北より）
ＳＢ－７鉢形土器出土状況
図版23　文京遺跡第３次調査９　隅丸長方形竪穴遺構ＳＫ－７（西より）
ＳＫ－７壺出土状況
図版24　文京遺跡第３次調査10　隅丸長方形竪穴遺構ＳＫ－８（南西より）
ＳＫ－８遺物出土状況
図版25　文京遺跡第３次調査11　方形周溝状遺構ＳＸ－１遺物出土状況（北東より）
ＳＸ－１遺物出土状況（部分、北東より）
図版26　文京遺跡第３次調査12　ＳＸ－１完掘状況（北東より）
調査地西半の遺構配置（南上方より）
図版27　文京遺跡第３次調査13　出土遺物(1)（ＳＢ－１）
図版28　文京遺跡第３次調査14　出土遺物(2)（ＳＢ－３・５・６、ＳＫ－３）
図版29　文京遺跡第３次調査15　出土遺物(3)（ＳＢ－６・７、ＳＫ－７）
図版30　文京遺跡第３次調査16　出土遺物(4)（ＳＸ－１）
図版31　文京遺跡第３次調査17　出土遺物(5)（ＳＸ－１）
図版32　文京遺跡第３次調査18　出土遺物(6)（ＳＫ－１、ＳＫ－８）
図版33　文京遺跡第３次調査19　出土遺物(7)（ＳＫ－１）

図版34　文京遺跡第３次調査20　出土遺物(8)（ＳＫ－９・10、Ｐ－66、包含層）
図版35　文京遺跡第３次調査21　出土遺物(9)（包含層）
図版36　文京遺跡第３次調査22　出土遺物(10)（包含層）
図版37　文京遺跡第３次調査23　出土遺物(11)（ＳＢ－１、包含層）
出土遺物(12)（ＳＢ－１・６、包含層）
図版38　文京遺跡第３次調査24　出土遺物(13)（ＳＢ－６、包含層）
図版39　文京遺跡第３次調査25　出土遺物(14)（ＳＢ－５・７、包含層）
図版40　文京遺跡第３次調査26　出土遺物(15)（ＳＢ－１・３、ＳＫ－７、包含層）
出土遺物(16)（ＳＢ－１、ＳＫ－１、包含層）
図版41　文京遺跡第３次調査27　出土遺物(17)（包含層）
図版42　文京遺跡第５次調査１　５次調査地調査前全景（東より）
遺構検出状況（東より）
図版43　文京遺跡第５次調査２　完掘状況全景（西より）
竪穴遺構ＳＸ－２・３・４（西より）
図版44　文京遺跡第５次調査３　ＳＸ－２遺物出土状況
掘立柱建物ＳＢ－１・柵列ＳＡ－１・竪穴遺構ＳＸ－１（東より）
図版45　文京遺跡第５次調査４　出土遺物（ＳＸ－２、包含層）

Ⅰ　文京遺跡をめぐる環境

文京遺跡の所在する松山平野は、その北部から北東部を高縄山系南西面、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線へ向けて扇状に開けた沖積平野である。この平野には、現在２本の主要な河川が流れている。平野中央部を東から西へ流れる重信川と、高縄山系に源を発し、北東から南西に流れて河口付近、出合で文字どおり重信川に合流する石手川とである。平野はこれらの河川の沖積堆積物によって形成されている。文京遺跡はこのうち石手川の旧流路によって形成された半径約６㎞の扇状地の扇端付近に立地し、高縄山系南西麓の分岐丘陵、御幸寺山と独立丘陵勝山（松山城址）とに挟まれた部分、松山市文京町に位置している。

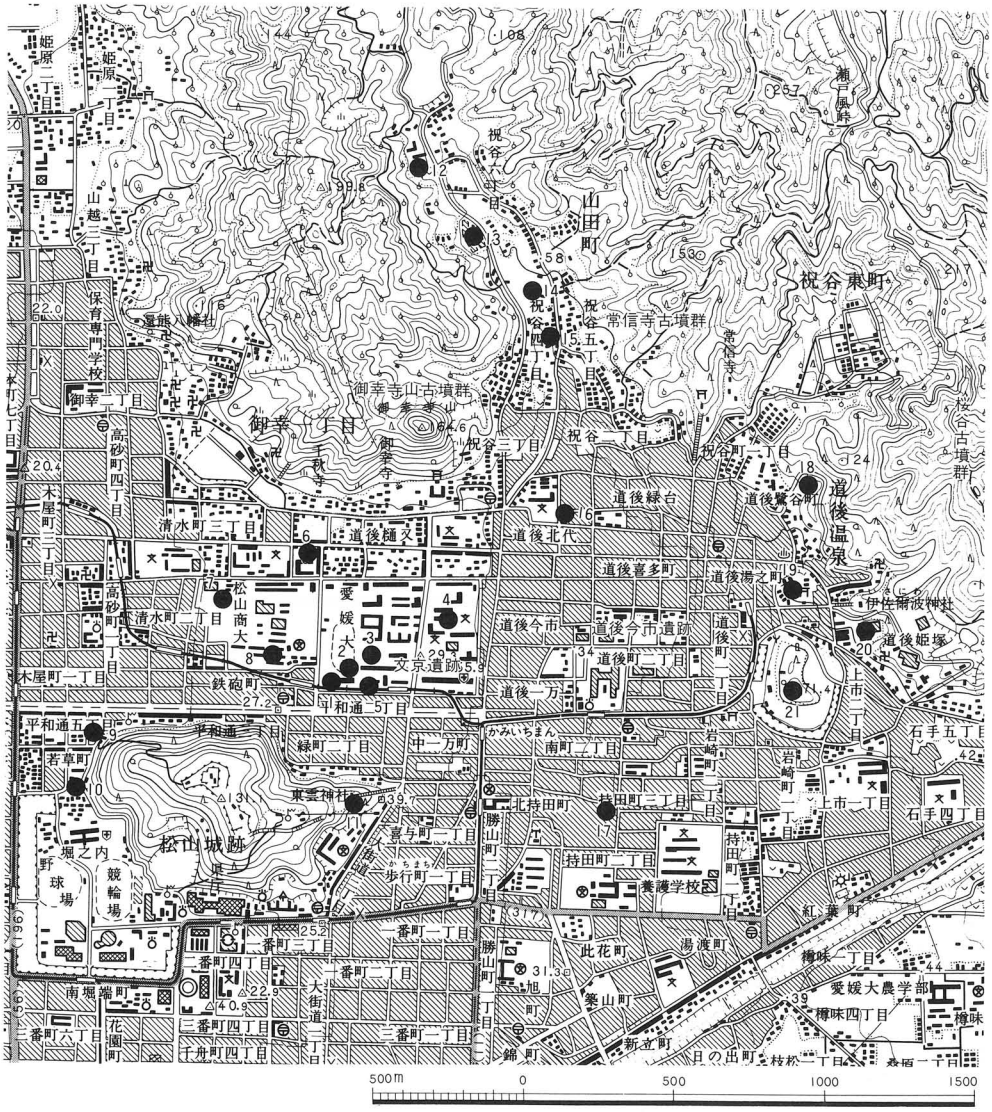
この地区は愛媛大学、松山大学をはじめとして、いくつかの小・中・高等学校が密集する市内でも有数の文教地区であるが、このうち愛媛大学城北キャンパス構内、松山東中学校構内に所在する遺構群を文京遺跡と呼称している。

文京遺跡周辺には道後今市遺跡①、松山北高遺跡②、松山大学構内遺跡③、若草町遺跡④、祝谷六丁場遺跡⑤等をはじめとする数多くの遺跡が分布しているが、最近ではこれらの遺跡相互の有機的関連を重視し、大きなまとまりとしてひとつの遺跡群としてとらえ、遺跡群内での動態を把握しようとする考え方が主流を占めており、石手川扇状地上、および周辺の丘陵部の遺跡を総称して「道後城北遺跡群」と呼称している。したがって、ここでは「道後城北遺跡群」内における歴史的環境を概観してみたい。

この地域での旧石器の出土は、祝谷丸山遺跡⑥が知られている。旧石器時代に関しては、松山平野では明確な遺構に伴う例や、層位的に把握された例は全くなく、いずれも採集資料であったり、古墳の封土中からの出土であったりしているが、本例でもその例に洩れず、採集資料である。出土地は祝谷、丸山川左岸の標高120ｍの丘陵部で、13点の細石核、細石刃、他が採集されている。

この地区周辺の縄文遺跡はごく最近まで知られていなかったが、文京遺跡北西300ｍの道後樋又遺跡１次調査地（南海放送遺跡）で縄文後期、晩期後葉の包含層が層位的に検出されたのをはじめ⑦、本調査に引き続いて断続的に行われている愛媛大学城北地区構内での調査、文京遺跡８次・９次調査によって後、晩期の包含層が、また11次調査においては後期の屋外炉が検出され、少なくとも縄文時代後期には文京遺跡において安定した面上での生活が行われていたことが明らかになってきている⑧。

弥生時代前期前半の遺構は、松山東中学校構内での文京遺跡４次調査において円形竪穴住居址２棟が検出されている。そのほか、遺構等の詳細は不明ながら、持田遺跡出土の木葉文壺、御幸寺山東麓出土の綾杉文壺等がよく知られている。弥生時代前期後半から中期前葉の



1	文京遺跡	1次調査地	7	松山大学構内遺跡	13	祝谷六丁場遺跡	19	冠山遺跡
2	〃	2次調査地	8	松山北高遺跡	14	祝谷丸山遺跡	20	道後姫塚遺跡
3	〃	3次調査地	9	若草町遺跡	15	祝谷大地ヶ田遺跡	21	湯築城址
4	〃	4次調査地	10	カキツバタ遺跡	16	土居窪遺跡		
5	〃	5次調査地	11	東雲神社遺跡	17	持田遺跡		
6	道後樋又遺跡1次調査地（南海放送遺跡）		12	祝谷六丁目遺跡	18	道後鷺谷遺跡		

図－1　文京遺跡の位置と周辺の主な遺跡

遺構、遺物は道後冠山遺跡⑪、姫塚遺跡⑫、鷺谷遺跡⑬、土居窪遺跡⑭、道後今市遺跡等、扇状地高位部周辺の低丘陵部に多く検出されている。中期中葉になると、遺跡分布はより高位の丘陵上に多く認められるようになる。祝谷地区の六丁場遺跡、六丁目遺跡⑮、大地ヶ田遺跡⑯、勝山丘陵上の東雲神社遺跡等⑰がその代表例である。六丁場遺跡はその後、後期前半まで引き続き存続し、平形銅剣を出土しているが、弥生時代中期後葉から後期初頭の集落は本報告で詳述されるように、文京遺跡を中心とした扇状地低位部に展開している。後期中葉から後葉にかけては、文京遺跡のさらに西方低位部に集落の移動が認められ、松山大学構内遺跡や、松山北高遺跡において該期の住居址群が、また若草町遺跡、カキツバタ遺跡⑱では、円形周溝墓群や壺棺墓といった墓の検出もみている。

弥生時代の「道後城北遺跡群」の政治的位置を最も端的に象徴しているのは、青銅祭器の突出した出土量の多さである。特に、武器形祭器である平形銅剣は、松山平野で出土している22本のすべてをこの地域で独占している。内訳は道後一万10本、樋又８本、湯月３本、祝谷六丁場１本である⑲。鑑鏡類では、文京遺跡10次調査で小型中国鏡の分割鏡を、若草町遺跡においては、重圏日光鏡、小型仿製鏡各１面を出土している。

古墳時代の集落は弥生時代後期に引き続き、文京遺跡西方の松山大学構内遺跡、松山北高遺跡や、若草町遺跡に営まれているが、東方の道後今市遺跡においても検出例が報告されており、文京遺跡内では希薄になるものの、周辺地域に拡散している様相が窺える。また、古墳そのものは、扇状地を眼下にする高縄山系東麓の丘陵上に営まれている。石手寺古墳群、桜谷古墳群、常信寺古墳群、御幸寺山麓古墳群等がそれであるが、その実態については不明な部分が多い。

古代以降の集落はこの地域では知られていないが、道後地区において、白鳳時代の寺院址、湯の町廃寺、内代廃寺の存在が古瓦の分布によって推定されている。また、現在の県立道後公園は、中世、河野氏の築造になる湯策城址であり、近年㈶愛媛県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が一部行われ、多大な成果が上がっている⑳。

注

①愛媛県埋蔵文化財調査センター　『道後今市遺跡』　1985

②愛媛県教育委員会・愛媛県立松山北高等学校　『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書』　1981

③松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　『松山大学構内遺跡－第２次調査－』　1991

④相原浩二・栗田茂敏　「若草町遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991

⑤松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　『祝谷六丁場遺跡－調査報告１－』　1991

⑥長井数秋　「丸山遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会　1986

⑦西尾幸則　「道後城北ＲＮＢ遺跡」『松山市埋蔵文化財調査報告Ⅱ』松山市教育委員会　1989

⑧愛媛大学法文学部考古学研究室　『文京遺跡第８・９・11次調査－文京遺跡における縄文代遺
愛媛大学埋蔵文化財調査室　跡の調査－』　1990

⑨西尾幸則　「文京遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会　1986

⑩松岡文一　「北四国地方」『弥生式土器集成 本編Ⅰ』杉原荘介・小林行雄編　東京堂　1964

⑪名本二六雄　「冠山－道後平野における弥生文化の受容と展開序説－」『遺跡 第32号』　1990

⑫愛媛県教育委員会　『道後姫塚遺跡埋蔵文化財調査報告書（資料編）』　1979

⑬宮崎泰好　「道後鷺谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会　1989

⑭岡本健児　「愛媛県土居窪遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編　東京堂　1961

⑮松山市史料集編集委員会　『松山市史料集 第一巻 考古編』　1980

⑯宮崎泰好　「祝谷大地ヶ田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会　1989

⑰前掲注⑮文献

⑱古代学協会四国支部　『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』（シンポジウム資料）　1988

⑲西田　栄　「松山平野の青銅器出土遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会　1986

⑳石田茂作　「湯之町廃寺」『飛鳥時代寺院址の研究』第一書房　1936

吉本　拡　「湯之町廃寺」「内代廃寺」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会　1986

図－2　文京遺跡における各調査の位置

Ⅱ　2次調査の概要

1．調査に至る経緯と組織

昭和55年5月、愛媛大学学長（当時）野本尚敬より、松山市文京町3番・愛媛大学城北地区構内における工学部校舎建設に伴う埋蔵文化財確認調査願が、松山市教育委員会・文化教育課に提出された。愛媛大学城北地区構内は松山市指定の埋蔵文化財包蔵地のうち「67樋又遺物包含地」に含まれる周知の包蔵地にあたり、昭和22年愛媛大学附属小学校校舎の仮設時に弥生土器の出土が、また昭和37年5月、同校舎跡地に愛媛大学法文学部校舎を建設する際にも松岡文一らによる弥生時代中・後期の遺物採集が伝えられている。さらに、昭和50年7月には建設予定地の南西に隣接する工学部5階教棟部分の増築に伴う発掘調査が「文京遺跡」として松山市教育委員会の手によって行われ、弥生時代中・後期の住居址を6棟検出し、城北地区構内にはかなりな部分にわたる弥生時代の集落のひろがりが推測されているところであった。

これらのことをふまえて、同年6月19日申請地の試掘調査を行ったところ予測に違わず弥生時代中・後期の遺物を包含する層が申請地の特に南半に濃密に遺存することが確認された。

この試掘結果に基づき愛媛大学、松山市教育委員会の二者は本格調査に関わる協議を行い、松山市教育委員会が調査主体となり、愛媛大学の協力を得て本格調査を「文京遺跡第2次調査」として実施することとなった。野外調査は同年7月8日に開始、9月9日をもって終了し、引続き現地における屋内整理作業を9月30日まで行った。調査組織は以下に記したとおりである。

調 査 地　松山市文京町3番

調査面積　600㎡

調査期間　昭和55年7月8日～9月30日

調査委託　愛媛大学学長　野本　尚敬

調査主体　松山市教育委員会　教　育　長　関谷　勝良

教育次長　森田富士弥

〃　小林　義春

文化教育課長　藤原　渉

課長補佐　坪内　晃幸

第二係長　大西　輝昭

調査担当　主　任　西尾　幸則

調　査　員　池田　学

〃　　栗田　茂敏
調査補助員　　谷若　倫郎（現・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター）

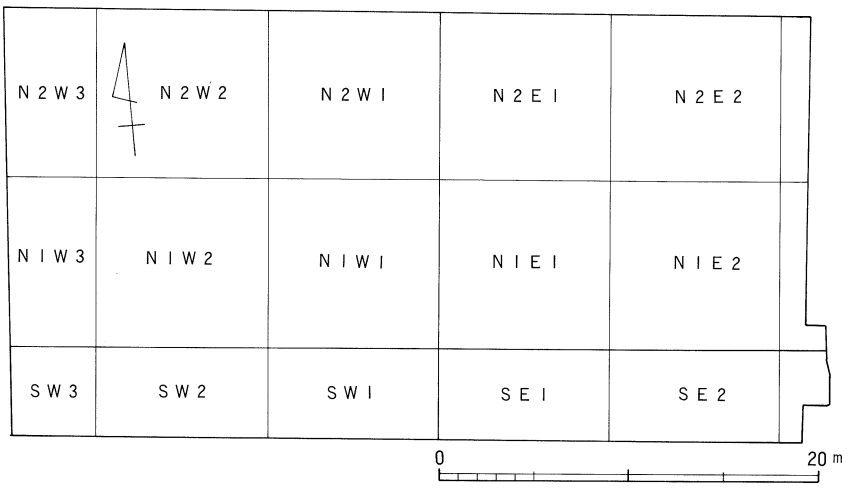
2．遺構と遺物

(1)　層序（図4・5）

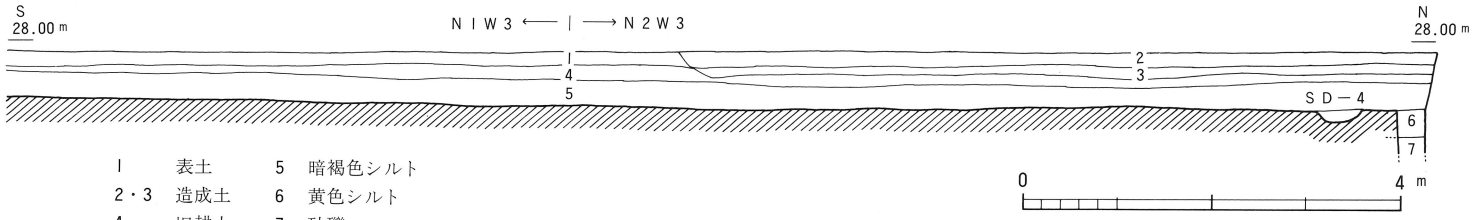
調査地は、地山面で東から西へ42ｍの間に20cmの、また南から北へ24ｍの間に20cmの勾配を持っている。つまり、南東部から北東部にかけての緩傾斜をなしている。第1層が表土、第2・3層はグラウンドの造成土で、第1層を切り込んで調査区北半のみに存在する。第4層は旧耕土で、調査区南西部では削平されている。旧耕土、または表土直下の第5層、暗褐色シルト層に弥生時代中期後半から後期初頭、さらに僅かではあるが古墳時代の須恵器が包含され、25～30cmの厚さで堆積している。遺構はこの暗褐色シルト下面の第6層、黄色シルト（地山）上面で検出された。この黄色シルトの約30cm下層には、礫層が分厚く堆積していることが調査区南西隅の坪掘りによって確認された。近年における愛媛大学の数次にわたる調査によって、この地山とした黄色シルト層中には縄文時代後・晩期の遺物が包含されることが確認、報告されており、本調査の溝ＳＤ−1から1個体、2点出土した縄文晩期土器片も、本来この層に関わりを持つものと考えられる。

調査区の地区割は、調査区全体を9ｍ四方の大グリッドに割り、遺物の採りあげに際してはこの9ｍグリッドを、さらに3ｍ四方の9区に分ける方法を採った。グリッドの南北軸は磁北より6°23′東に振れている。

調査では、弥生時代の竪穴住居址9棟、掘立柱建物4棟、円形周溝状遺構1基、溝4条、その他土壙、柱穴等が検出されている。以下、これらの遺構、および遺物について記述する。

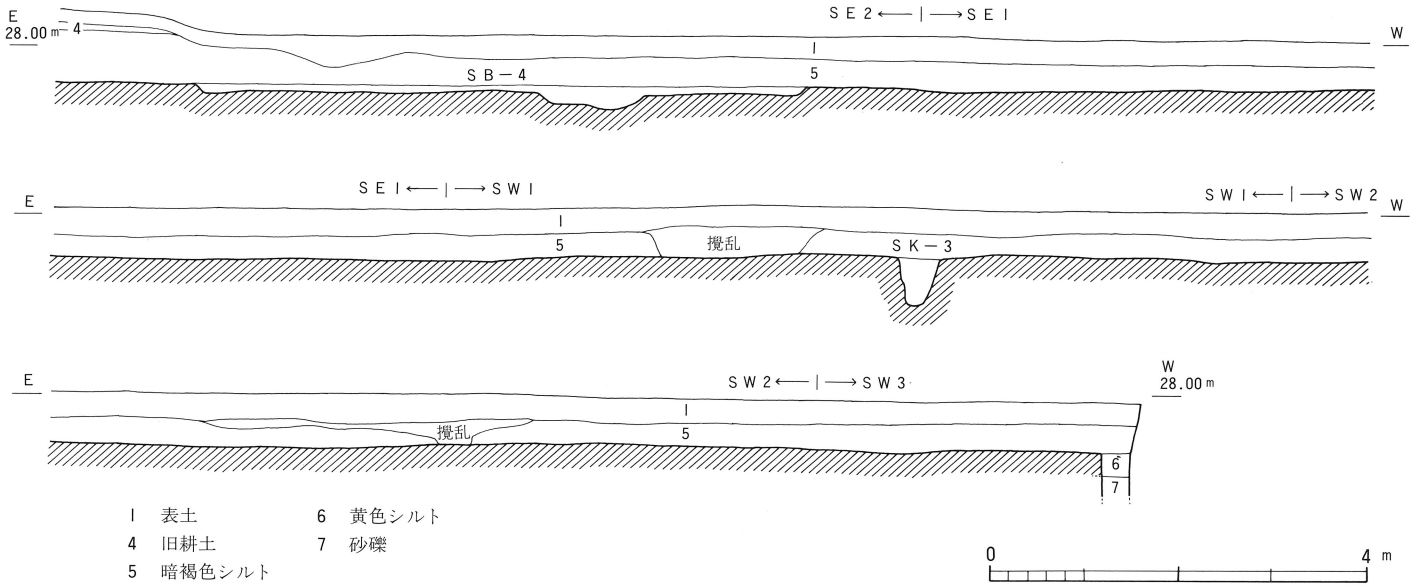


図−3　調査地の区割



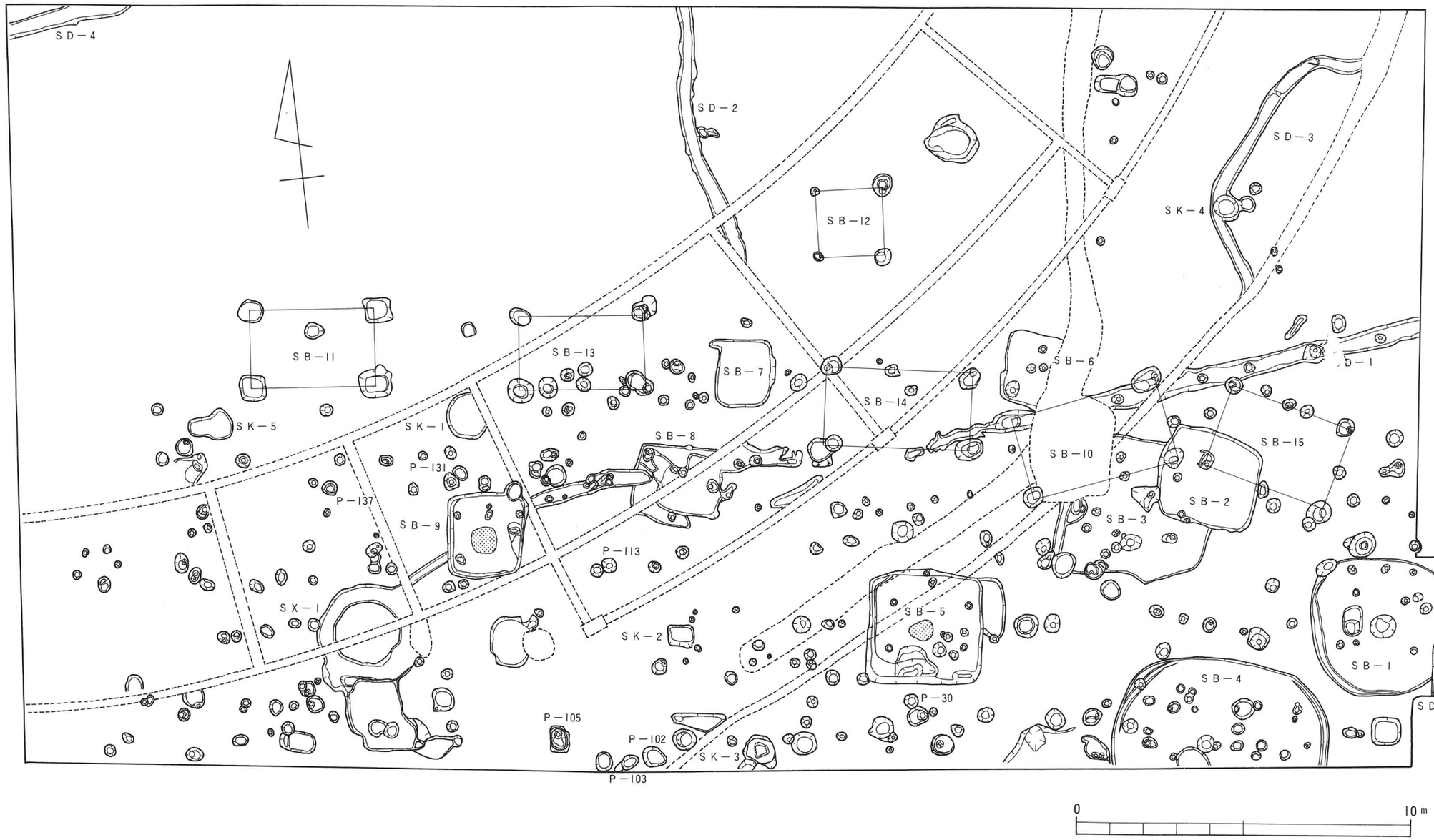
1　表土　　5　暗褐色シルト
2・3　造成土　　6　黄色シルト
4　旧耕土　　7　砂礫

図－4　調査地西壁（北半）土層図



1　表土　　6　黄色シルト
4　旧耕土　　7　砂礫
5　暗褐色シルト

図－5　調査地南壁土層図

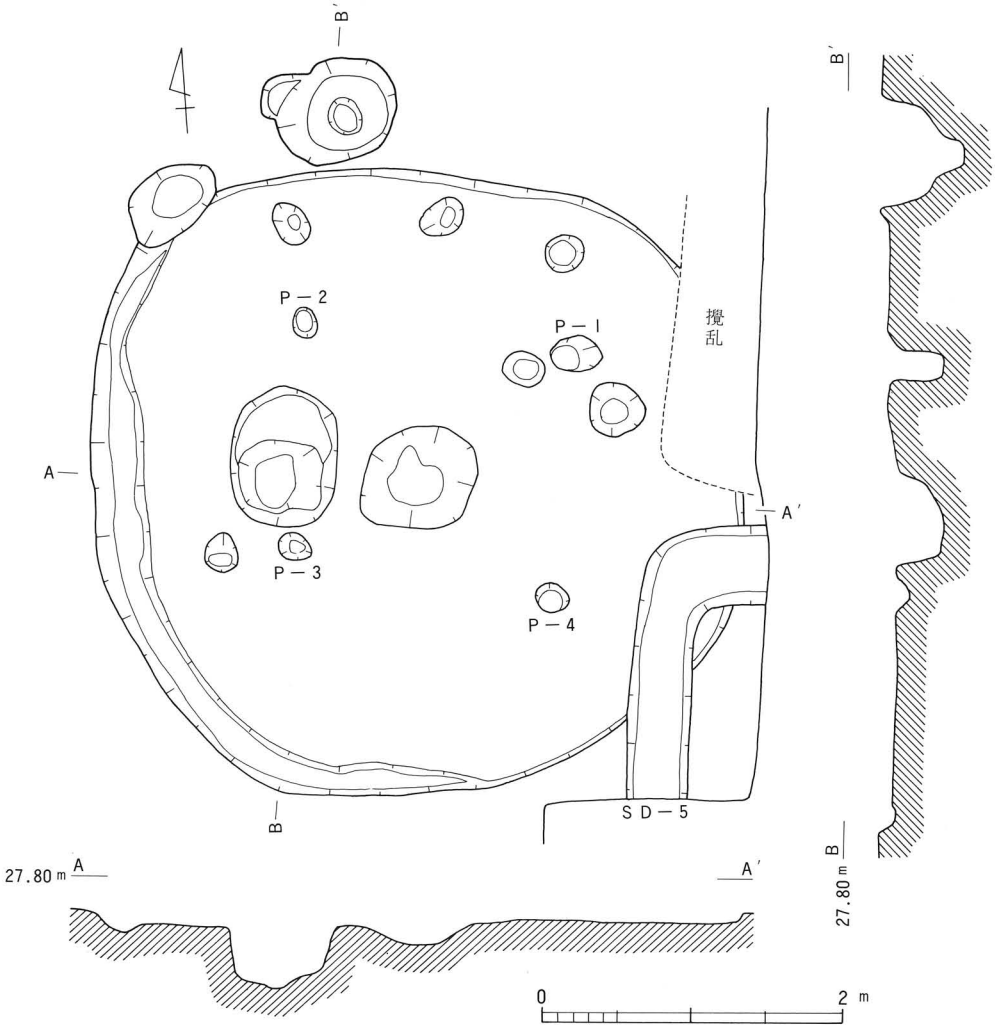

SD－4
SD－2
SD－3
SB－12
SK－4
SB－11
SB－13
SB－7
SB－6
SD－1
SB－14
SK－5
SK－1
SB－8
SB－10
SB－15
P－131
P－137
SB－9
SB－3
SB－2
P－113
SX－1
SB－5
SK－2
SB－1
SB－4
P－30
SD－5
P－105
P－102
SK－3
P－103
0
10m

図－6　遺構配置図

(2) 竪穴住居址

ＳＢ－１（図７）

調査区南東隅で検出された円形竪穴住居址である。東端を攪乱され、また、溝ＳＤ－５に切られている。直径4.2ｍ、残存壁高10㎝内外を測る。西壁立ち上がり直下に幅15㎝前後、深さ10㎝足らずの溝を持つが、周回はせず、途中で消滅している。床面中央部で検出された窪みでの焼土、炭化物の出土はなく、炉址とするのは難しい。床面からは、そのほか11基の大小の柱穴が検出されたが、本住居址にともなう主柱穴は、Ｐ－１～Ｐ－４の４基であると考えられる。床面直上より、壺・甕片、ミニチュア土器、砥石を出土している。遺物のうちには、特に壺口縁部１のように若干古い要素を持ったものを含んでいるが、凹線文盛行期の壺口縁部片３を出土していることから、弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。



図－７　竪穴住居ＳＢ－１

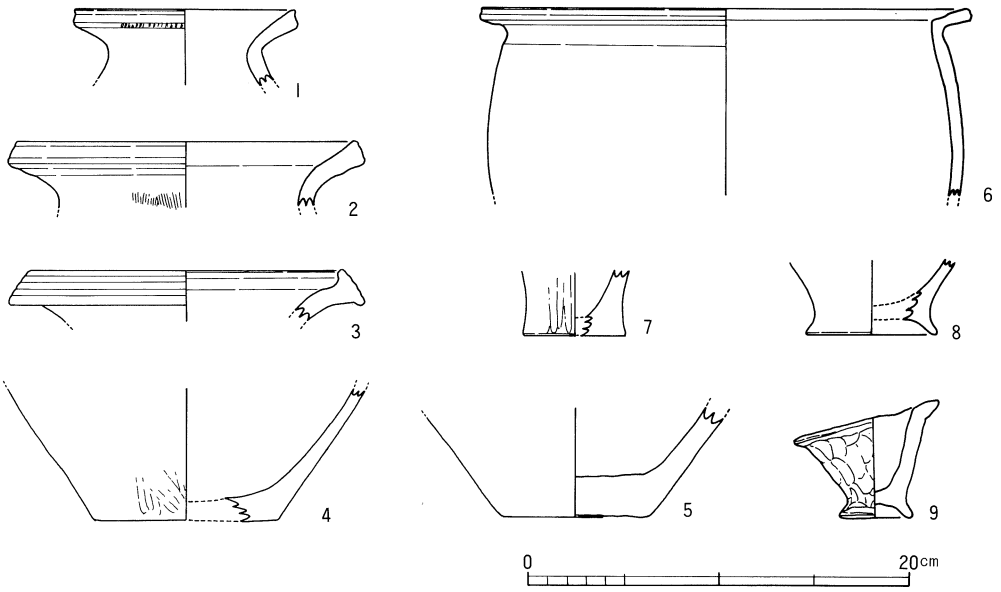
ＳＢ－１出土遺物（図８・９）

壺（１～５）　口頸部片３点と、底部片２点が検出されている。１は「く」の字状に折れ曲がる短い頸部に、斜め上方に延びる短い口縁部を持つ。口端部は肥厚せず、端面は横撫でによる凹面をなし、下端部を比較的鋭い工具によって刻んでいる。２の口端部は僅かに肥厚し、端面の上下位に横撫でによる凹線状が２条施される。口縁部外面には、横撫でによる凹凸がみられる。３の口縁部は端面を上下方、特に上方に拡張し、４条の凹線が施される。内面の上方拡張基部は強く横撫でされている。底部４・５はともに平底から斜め上方に立ち上がるが、５に比べて４は薄く、シャープなつくりである。４の立ち上がり外面には、僅かに縦ないしは斜め方向のヘラ磨きが看取される。５は二次的に火熱を受けたものと思われ、器表面の損傷が著しい。

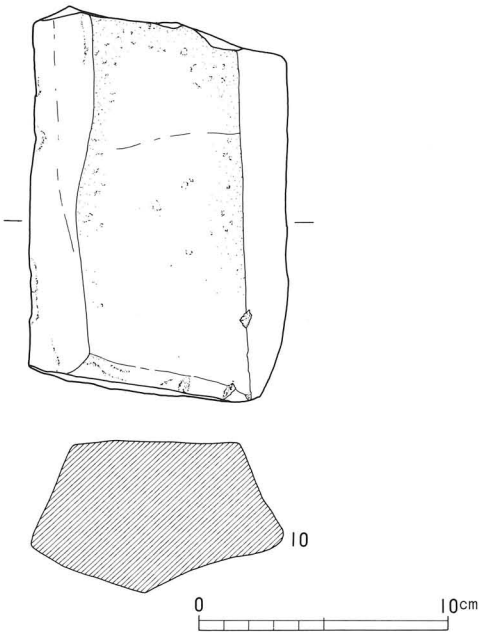
甕（６～８）上半部片１点と、底部片２点が出土している。６は口径、胴径がほぼ等しくなるもので、直角に近く折り曲げられた口縁部は、外端面に凹線状の窪みが１条巡っている。頸部は、強く横撫でされているが、器表面の磨滅のため、その他の部位の調整は不詳である。底部片は、平底の７と、くびれの上げ底の８とが出土している。

ミニチュア土器（９）　手捏ねによる鉢形のミニチュア土器である。くびれの上げ底から外上方に直線的に開き、外方に短い口縁部をひねりだしている。

砥石（10）　断面が不定型な五角形を呈する安山岩系の砥石である。小口を除く各面ともに使用されているが、それほど使い込まれてはいない。1721ｇを量る。



図－８　ＳＢ－１出土遺物(1)



図－9　ＳＢ－１出土遺物(2)

ＳＢ－２（図11）

ＳＢ－１の北西３ｍで検出された隅丸方形の竪穴住居址である。竪穴住居ＳＢ－３、掘立柱建物ＳＢ-10・15を切っている。一辺2.8ｍ、遺存の良好な北辺で、壁高15cmを測る。床面での主柱穴の検出はみられなかった。床面中央部の60×70cm、深さ５cmの楕円形の窪みから炭化物が検出されており、炉址と考えられる。遺物は、壺下半部片、ミニチュア土器片が出土している。ＳＢ－３を切ることから、弥生時代後期初頭以降の遺構であると考えられる。

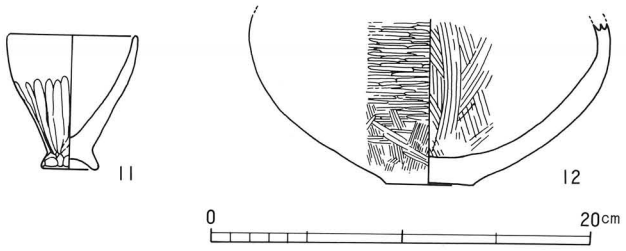
ＳＢ－２出土遺物（図10）

ミニチュア土器（11）　器高7.2cm、くびれの上げ底を持つ鉢形をしている。外面下半部には、縦方向のヘラ撫でが看取される。

壺（12）　体部下半の片である。直径５cmの平底に、大きく胴の張った偏球形の体部を持つ。外面は刷毛目調整の後、細かい横ヘラ磨きを施されるが、底部寄りの磨きは、その方向、密度ともに粗くなっている。内面は粗い刷毛目調整を施されている。

ＳＢ－３（図11）

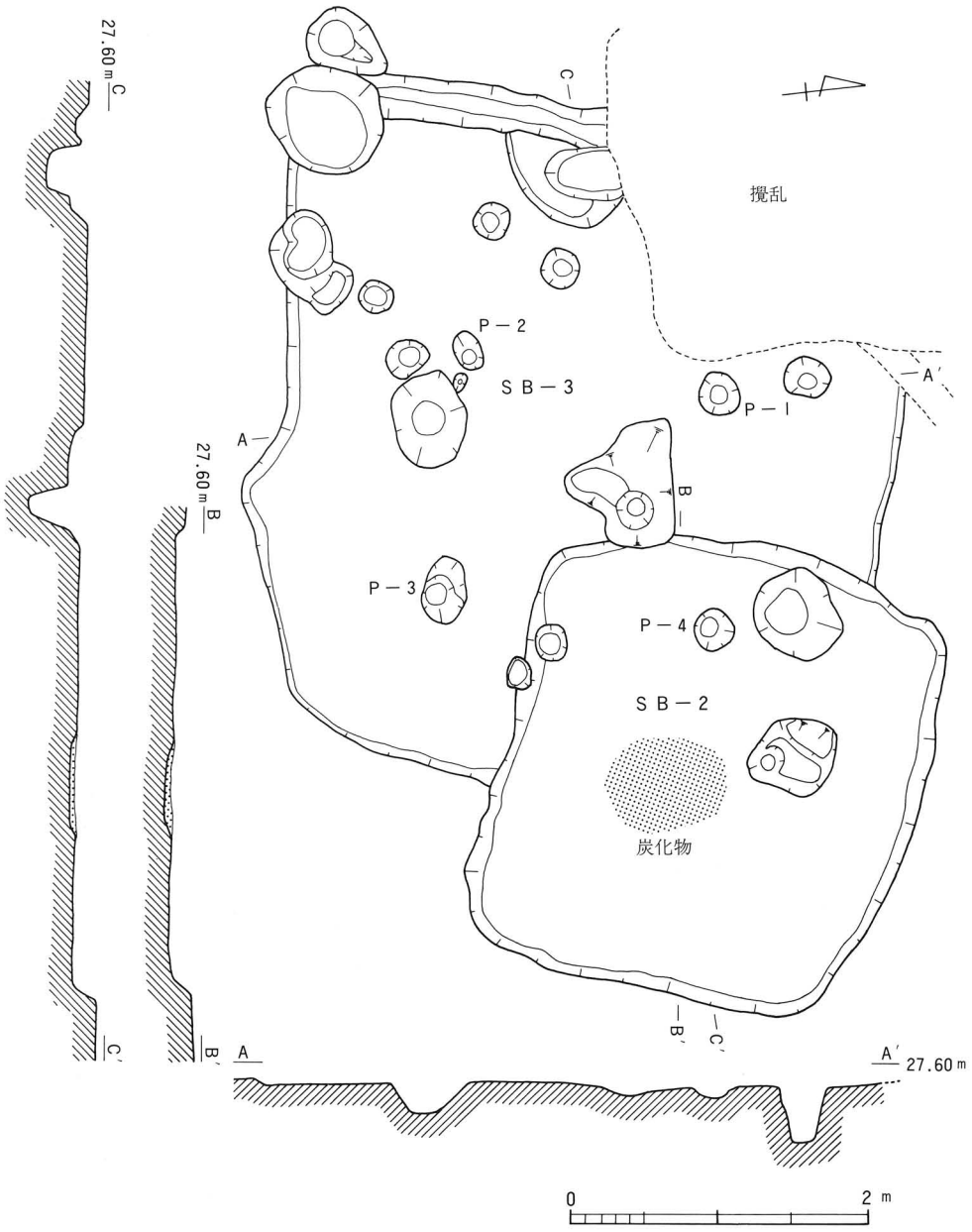
4.4×4.6ｍの方形に近い不整形の竪穴住居址で、北東部を攪乱によって失っている。遺存壁高７cm前後を測る。西辺のみの壁下に幅30cm、深さ７cm程度の溝を持つ。主柱穴は、Ｐ－１～Ｐ－４の４本であると考えられる。壺、甕片、ミニチュア土器を出土しており、中期的な遺物と型式学的により新しい要素を持った遺物、例えば14の壺口縁部、16の甕のようなものを含んでいることから、後期初頭の遺構であると考える。



図－10　ＳＢ－２出土遺物

ＳＢ－３出土遺物（図12）

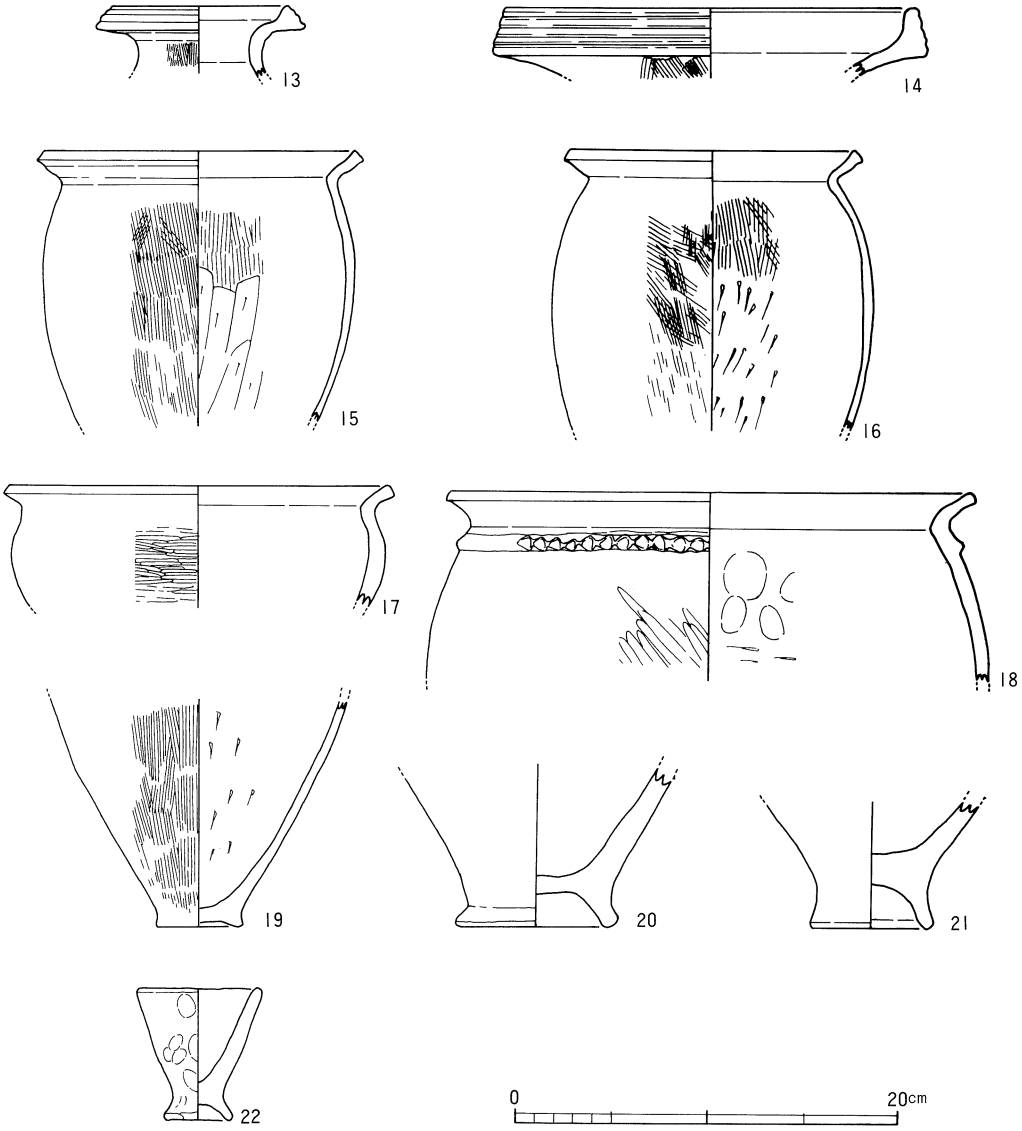
壺（13・14）　口縁部、口頸部片１点ずつが出土している。13は口径９㎝、大きく外反する短い頸部から水平に張り出した口縁部を持つ。口端部は上方に肥厚し、外斜め下に傾いた面をなす。この面に凹線が３条施される。頸部と、口縁部との境には横撫でによる凹凸がみ



図－11　竪穴住居ＳＢ－２・３

られる。頸部外面は縦刷毛目で調整されている。14は復原口径21.7cmを測る大型壺の口縁部片である。若干内傾気味に肥厚というよりもむしろ立ち上がった口端部は、丸みを帯びた面をなす。口縁部外面には4条の凹線が施される。

甕(15〜21)　上半部片4点、下半部片1点、底部片2点が出土している。15・16は口径16cm前後を測る。15の口径と胴部径は、ほぼ同じであるが、16では胴部径が僅かに凌いでいる。両者ともに、胴部外面および内面の頸部寄りを、縦ないし斜めの刷毛目で調整され、刷



図−12　SB−3出土遺物

毛目以下の内面に底部から上へのヘラ削りを施されている。15には特に顕著であるが、頸部と口端部周縁を強く横撫でされるため、口縁部外面には凹凸がみられる。17は口径が器高をうわまわるであろうと思われる個体で、鉢としたほうが適切かもしれない。胴部外面を横方向に磨かれている。18は頸部に貼付け突帯を持つ大型品である。この種大型品の頸部突帯は、頸部屈曲部を埋めるように貼付けられることが多いが、この個体は、やや下がった位置に貼付けられている。胴部外面は斜め方向のヘラ磨き、内面は横方向に削られている。なお、頸部寄りの内面には指頭痕が残されている。19は底部径4.6cm、残存高12cmを測る甕の下半部で、僅かな上げ底をなしている。外面は縦刷毛目、内面は削り上げられている。20・21は大型甕の底部で、くびれの上げ底をなしている。20は比較的安定が良く、くびれも小さい。

ミニチュア土器（22）　くびれの上げ底を持つ鉢形をなす、手捏ねによるミニチュア土器である。口径6.5cm、底部径3.5cm、器高7cmを測る。

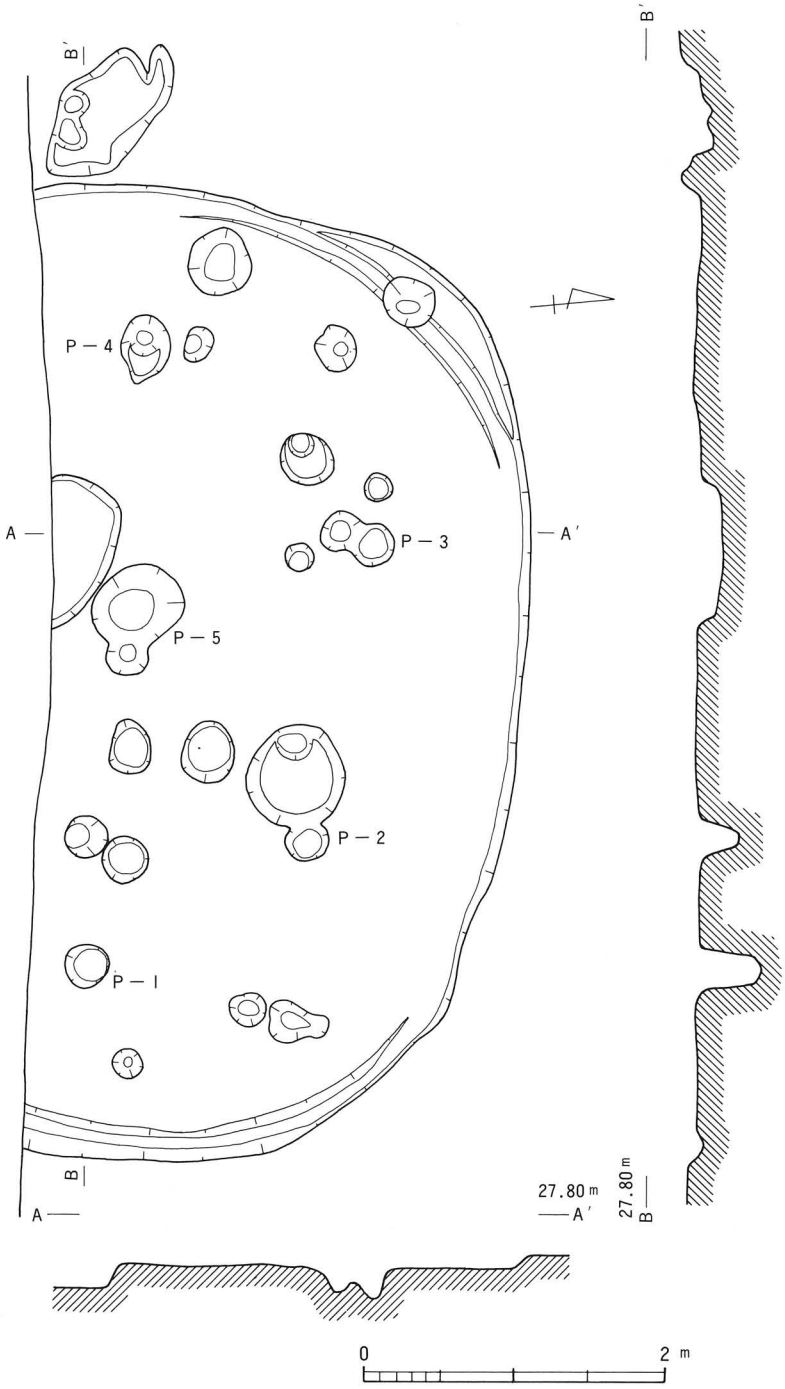
ＳＢ－4（図13）

調査区南東部で、ＳＢ-1の南西に接するように検出された円形、または楕円形の竪穴住居址で、本調査中最大の規模を持つ。住居址南半部は調査区外に及び、したがって北半部のみの検出である。直径6.4mを測るが、壁高10cm足らずの遺存であった。北西部と、東部壁下に幅15cm程度の浅い溝を持つが、周回はしない。床面より、多数の柱穴が検出されており、P-1～P-4が本住居址にともなうものとみられ、6本の主柱穴による住居址と考えられる。P-5を中央ピットと考えれば、東西に長い楕円形住居址に復原されうる。P-5の南西に接する深さ20cmの窪みからは、焼土、炭化物等の検出はみられず、炉址とするのは難しい。出土遺物は不安定な部分はあるが、総体的に後期色が強い。古い要素の濃い壺23・26を捨象し、中期的な甕34～36を次段階への残存と考えて後期初頭の遺構としておく。

ＳＢ－4出土遺物（図14～16）

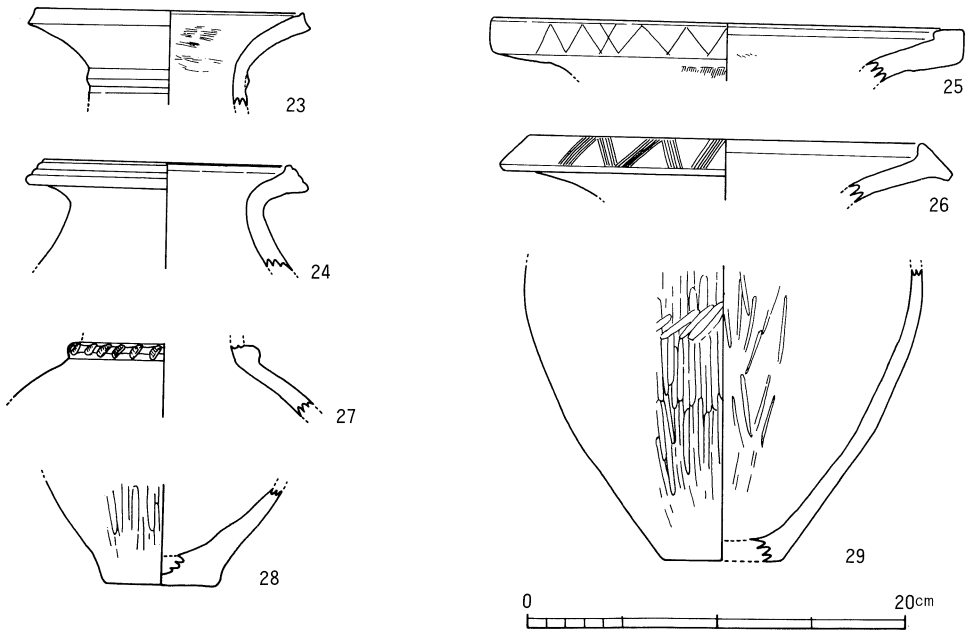
壺（23～29）　23は口径14.1cmを測る口頸部片で、断面三角形の突帯を頸部に巻かれる。漏斗状に開いた口縁部は、口端面に横撫でによる凹面を持つ。24は口径13.2cmの口頸部片で上方に肥厚した口端部端面に3条の凹線を施されている。25は口径25cm、口端部上面に幅1.6cmの薄い粘土帯を貼付けて肥厚帯としている。口端部外面には、鋭い工具を用いて沈線鋸歯文を施している。住居址内検出の破片と、住居址外の包含層出土の破片が接合しており、混入の可能性が高い。26は径20.8cmを測る口縁部で、上下方に肥厚した端部外面には6本単位の櫛歯状工具による鋸歯文を施文されている。27は頸部から肩部の片で、頸部には断面半円形の突帯を巻かれており、右上がりの楕円形状の押圧施文が施されている。28・29はともに、平底の壺の底部、下半部である。外面には、縦方向のヘラ磨きが、29の内面にはヘラ先による縦方向の撫でがみられる。

甕（30～41）　口径15cm前後の小型品30・32・33、20cm前後の中型品31・34・36、20cmを



図－13　竪穴住居ＳＢ－４

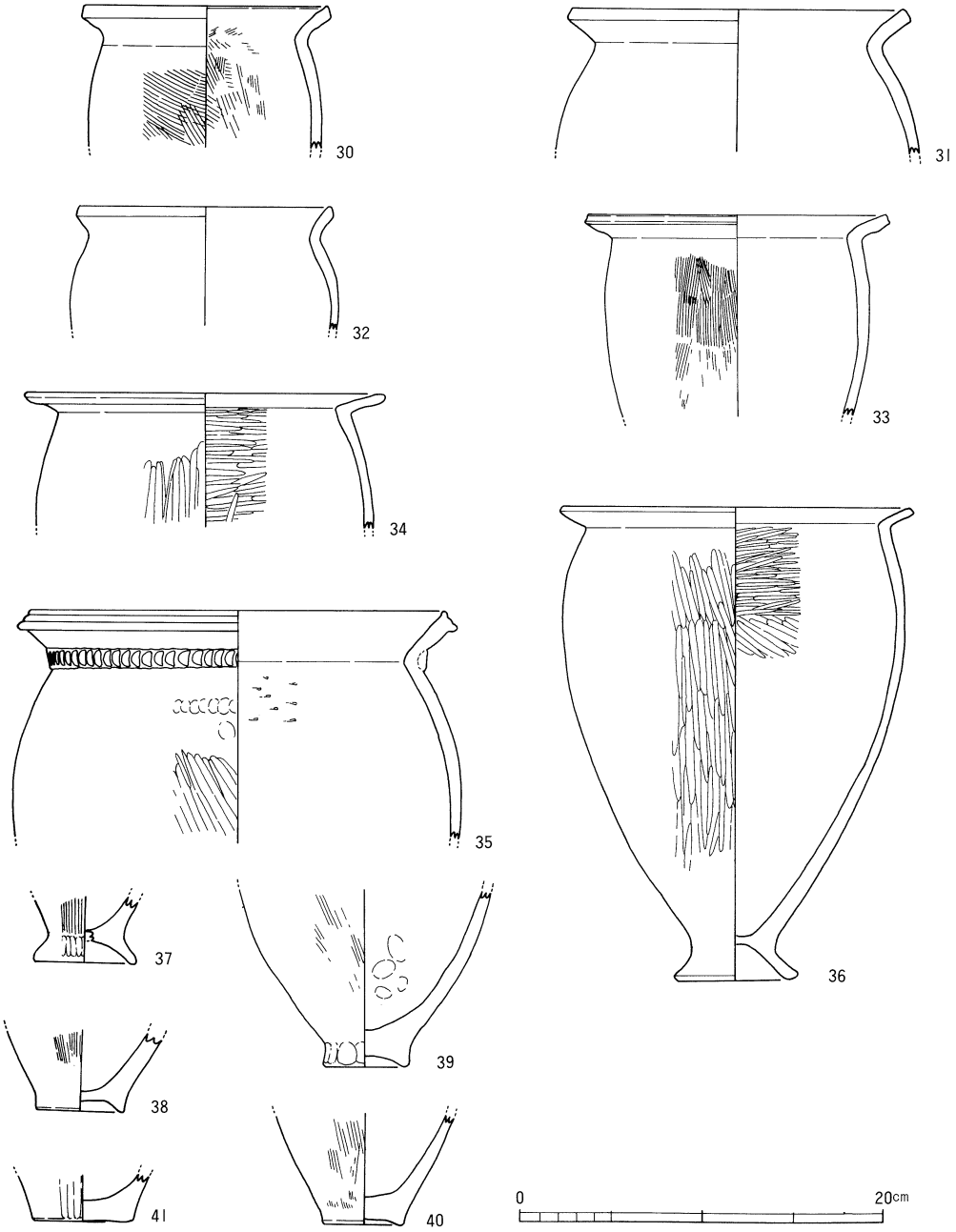
越える大型品35がある。また、底部はいずれも中・小型品のそれである。小型品のうち30は、口径、胴部径がほぼ等しく、外上方に折り曲げられた口縁部は、端部に面を持つ。胴部は、内外面ともに粗い刷毛目で仕上げられている。32の口縁部は、あまり大きく開かず、胴部径は口径を凌ぐ。33では逆に、口径が胴部径を上回っている。頸部でかなり強く屈曲した口縁部は、端面に横撫でによる凹面を持たされている。外面胴部は縦刷毛目、内面胴部の調整は不詳である。中型品のうち36は口径19.6cm、底部径6.9cm、器高26.2cm、胴部の張りを胴上位に置き、くびれの上げ底を持つ復原完形品である。「く」の字状に折り曲げられた口縁部には、横撫でが施されている。胴部外面、および内面頸部以下、胴上部にはヘラ磨きがみられる。外面は縦方向のヘラ磨き、内面の頸部以下、胴張り部までは横方向の密な磨き、以下4cm程度の範囲には、外面と同様のやや幅広の斜め方向の磨きを施されている。それ以下の内面は、削りの後撫でられている。34も36と同様のプロポーションを持つものと思われるが、口縁部が若干長く、より水平に近く屈曲し、端部を丸く収められている。胴部外面は縦方向、内面は横方向のヘラ磨きで調整される。35は口径23cmの大型品で、頸部に突帯を巻かれている。外斜め上方に延びた口縁部は、上下方に肥厚され、2条の凹線を施される。外面頸部の下3cm前後の部分には指頭圧痕が看取されるが、突帯上に押圧施文する際の手の位置と関連があるのかもしれない。胴張り部以下の外面には斜め方向のヘラ磨き、内面頸部直下4cm内外の部位に横方向の削りが施されている。底部には、くびれの上げ底になるもの37、くびれずに僅かに上げ底を呈するもの38～40、平底のもの41とがある。37のくびれ部以下の外面に



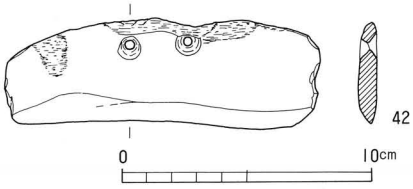
図－14　ＳＢ－４出土遺物(1)

は縦方向のヘラ先による撫でが、くびれ部以上は縦方向の刷毛目調整が施されている。

石庖丁（42）　全長12.5cm、最大幅4.2cm、厚さ7mmを測る。内湾刃の鎌形を呈しているが、石鎌からの転用であるのか、研ぎ直しによる変形であるのかは判然としない。刃部は両面から研ぎ出されているが、刃付けは片面に大きく偏っている。



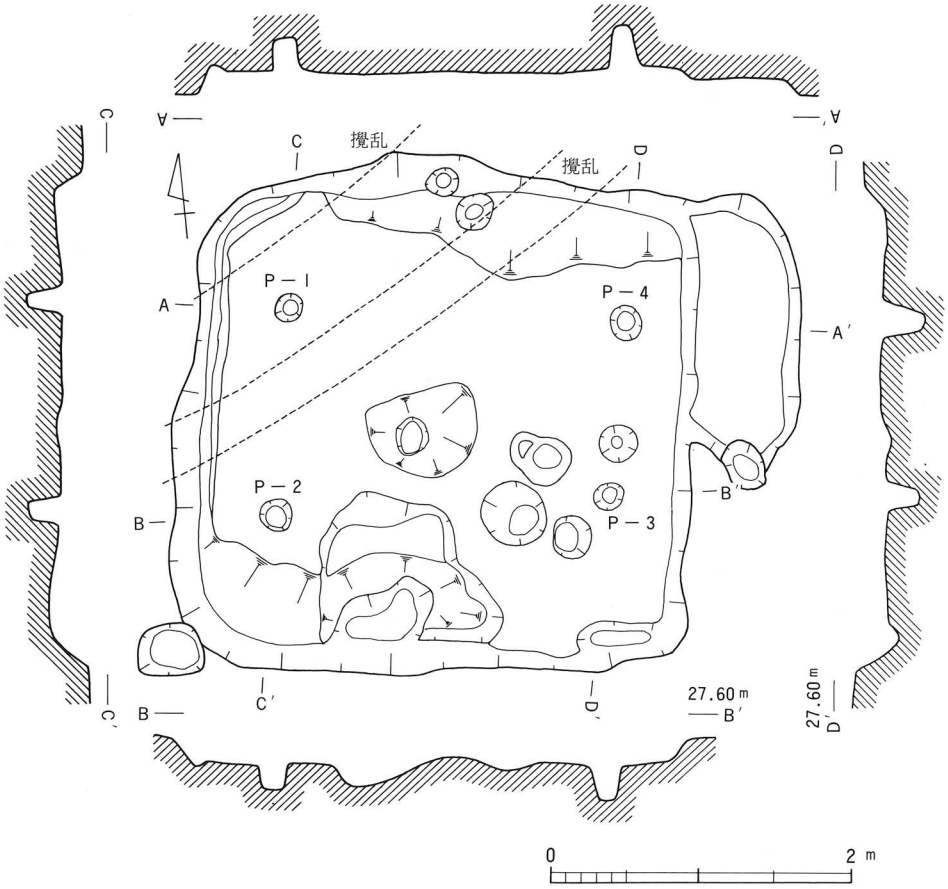
図－15　ＳＢ－４出土遺物(2)



図－16　ＳＢ－４出土遺物(3)

ＳＢ－５（図17）

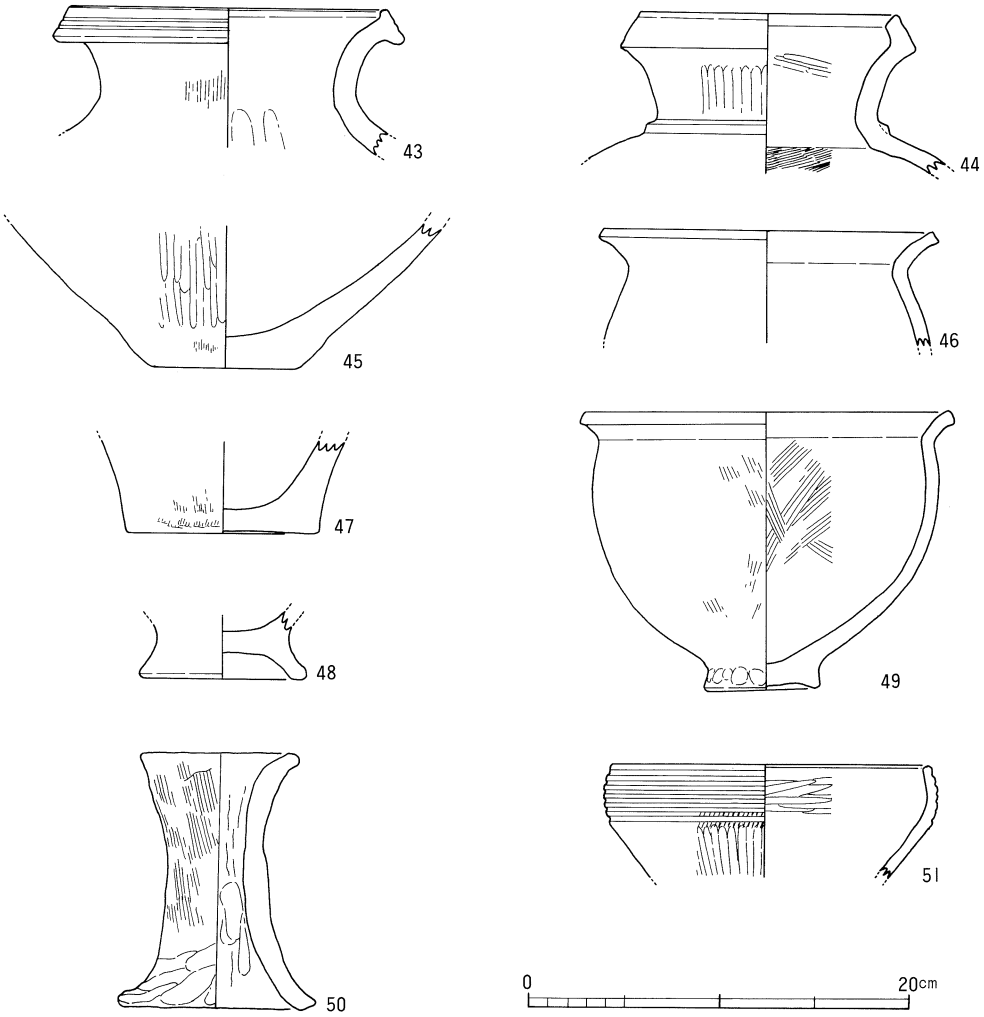
調査区の若干南東寄りで検出された、3.2×3.4ｍ、残存壁高10～15cmを測る隅丸方形竪穴住居址である。浅い攪乱により、一部損壊を受けているが、攪乱底面でのプランの確認は可能であった。東面、北東半部に幅80cmの張り出し部を持つ。この張り出しは、住居址床面よりも約７cm高くなっており、その平面形は、隅丸長方形ないしは長楕円形状を呈している。西辺から南辺にかけて、深さ５cmの溝を持つが周回はしない。床面中央部の長径70cm、深さ17cmの不整円形、断面擂り鉢状の窪みからは、炭化物が検出されており、炉址と考えられる。床面は、中央部付近が最も高くなっており、四辺へむけて５～６cmの緩傾斜を持っている。主柱穴は、Ｐ－１～Ｐ－４の４本と考えられる。壺、甕、高坏、支脚等の土器類のほか、石庖丁、敲石、砥石片を出土している。弥生時代後期初頭の遺構と考えられる。



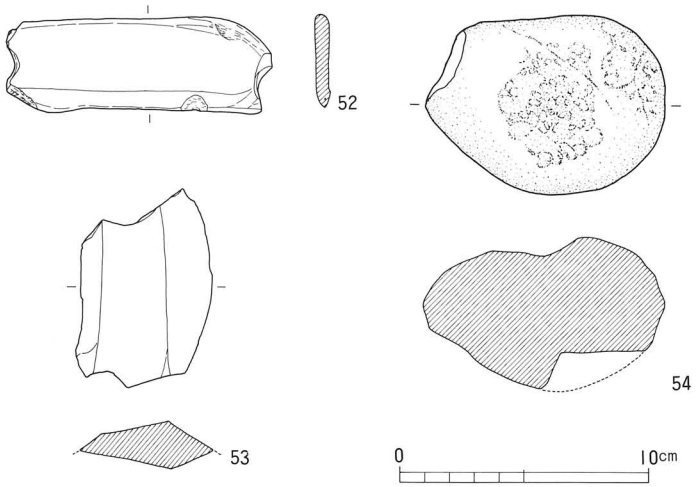
図－17　竪穴住居ＳＢ－５

ＳＢ－５出土遺物（図18・19）

壺（43～45）　43は口径16.9cm、外反する短い頸部から斜め上方に立ち上がった口縁部は、端部を上下方に拡張し、端部に２条の凹線を施しているが、凹線そのものは浅い。頸部の外面には縦刷毛目、内面には縦方向の指撫でがみられる。44は口径13.5cm、頸基部に断面三角形の貼付け突帯を持ち、外斜め上方に一旦外反した頸部から逆「く」の字状に内傾した口縁が立ち上がる。端部は内側に傾斜した平坦面をなしている。口縁部外面には、顕著な横撫で痕が看取されるが、施文は行われない。頸部外面には縦方向のヘラ磨きが、内面上位には斜め方向のヘラ磨きが行われる。頸部以下の肩部内面は、横刷毛目で調整されている。45は大型壺の底部である。直径7.7cmを測る平坦な底面から、大きく斜め外上方に開いている。外



図－18　ＳＢ－５出土遺物(1)



図－19　ＳＢ－５出土遺物(2)

面底部寄りには縦刷毛目が、その他の部位は縦ヘラ磨きされている。

甕（46～49）　復原完形品49と、口頸部片46、底部片47・48とがある。46は口径17.4cmの中型品で、口径、胴部径とがほぼ等しくなるものと思われる。口端部は、横撫でによる面をなしているが、その他の部位の調整は不詳である。47は底径10.2cmの平底で、大型品の底部、48は底径8.8cmを測るくびれの上げ底で、やはり大型品である。49は口径19.8cm、器高14.8cm、底部径6.1cm、胴部最大径18.4cmを測る。胴部の外面、内面上半は、ともに斜め方向の刷毛目、内面下半は撫でられている。口縁部内外面は横撫でによる。底部は若干の上げ底を呈し、外面周縁には指頭痕が看取される。

支脚（50）　上下端の開いた筒状を呈する。器高13.5cm、外面には粗い刷毛目を施され、裾部は斜め方向に撫でられる。内面にはシボリ痕、縦撫で痕がみられる。

高坏（51）　深椀タイプの坏部上半片である。直線的に外上方に開いた坏体部を経て、口縁部が内湾する。口縁部には６条の凹線が施され、最下段の凹線の上下位の凸面を、鋭い工具によって斜め方向に刻んでいる。口縁部内面は横方向、坏体部外面は縦方向にヘラ磨きされている。なお、口縁部外面と、口端部内面は横撫でされている。

石庖丁（52）　緑色片岩製、直線刃長方形状の磨製石庖丁である。刃部の研ぎだしは両面から行われている。両側縁には抉りがいれられており、この抉りの部分や、背部も磨かれているが、両主面の磨きはそれほど入念ではない。長さ10.5cm、幅3.7cm、最大厚0.7cm、重さ54ｇを測る。

砥石（53）　流紋岩製の砥石片である。多面体のうち、３面が確認できるが、この３面ともに非常によく使いこまれている。

敲石（54）　砂岩の転石を敲打具として用いており、使用による明瞭な窪みが観察できる。火を受けたことによる破損が各所にみられる。現況重量430ｇを量る。

ＳＢ－**6**（図20）

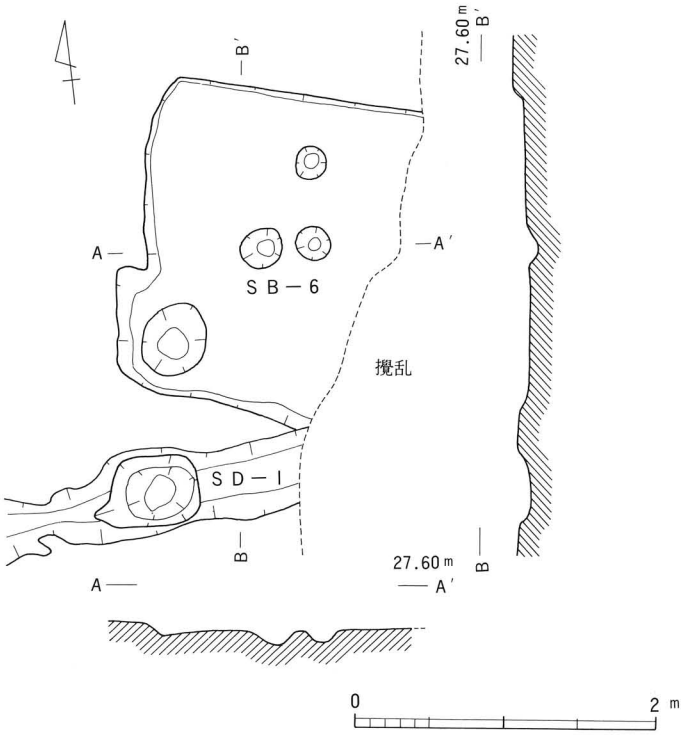
一辺２ｍの隅丸方形プランの竪穴住居址になるものと思われるが、東半部を攪乱により失っているため、正確なところは不詳である。検出面より床面まで、最深部で５㎝と遺存も悪い。土器小片を数点出土しているが、時期を確定するまでには至らない。

ＳＢ－**7**（図21）

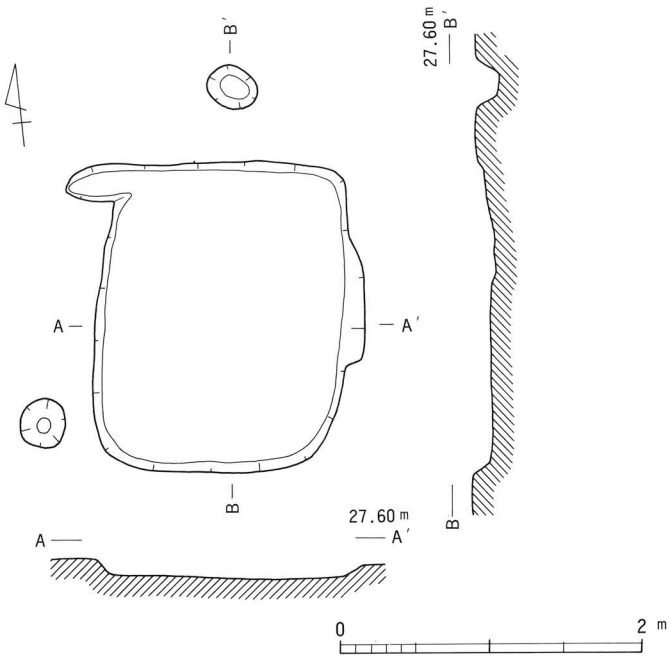
1.65×２ｍの隅丸長方形プランを基本とするが、北西隅部が西へ僅かに突出している。深さ10㎝程度の遺存で、床面には柱穴、その他の施設は検出されておらず、竪穴住居址とするには根拠が薄いかもしれない。遺物の出土もみていない。

ＳＢ－**8**（図22）

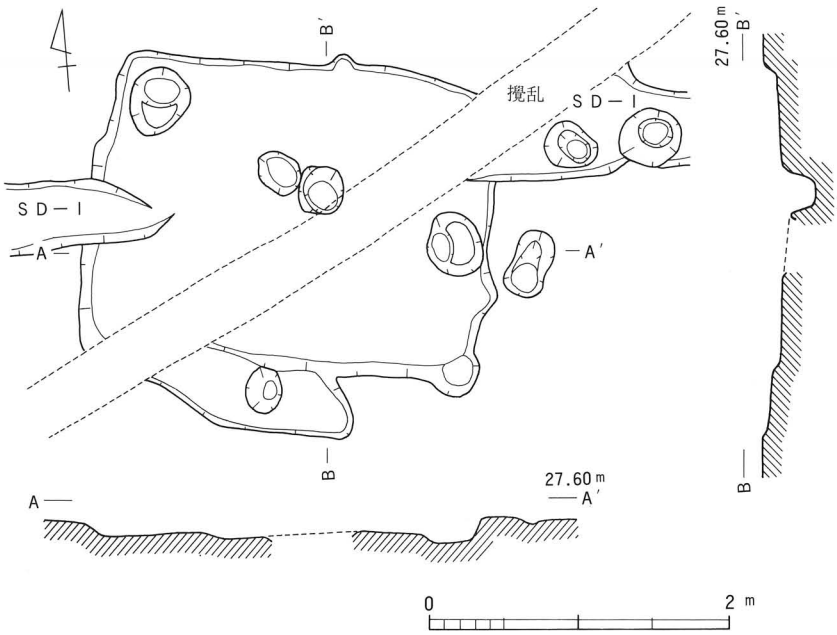
調査区のほぼ中央部南寄りで検出された。２×2.6ｍを測る隅丸長方形竪穴住居址で、ＳＢ－５同様の張り出しを南西部に持つ。溝ＳＤ－１に切られている。北東コーナー部から、南西コーナー部にかけて攪乱溝により破壊され、主柱穴については明らかでない。壁高８㎝程度の遺存であった。遺物は出土していない。



図－20　竪穴住居ＳＢ－６



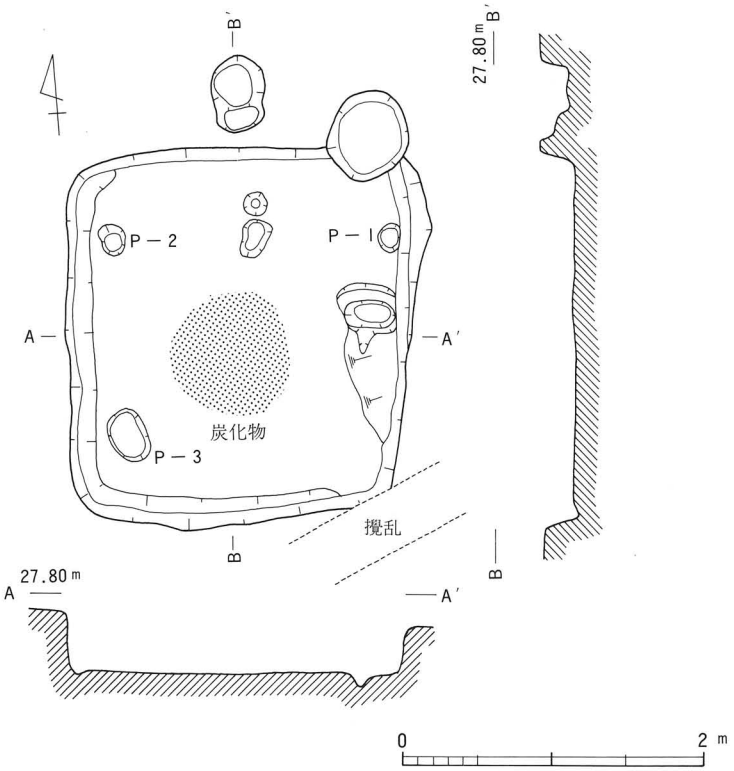
図－21　竪穴住居ＳＢ－７



図－22　竪穴住居ＳＢ－８

ＳＢ－９（図23）

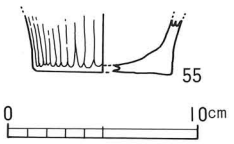
ＳＢ－８の西３ｍで検出された隅丸方形竪穴住居址である。一辺2.5ｍ前後を測る。本調査検出の住居址のうちでは最も遺存状況が良好で、壁高20～40cmまで遺存していた。西壁、南壁直下に幅10cmの溝を持つが、周回はしない。床面中央部に炭化物のひろがりが、径80cmの円形の範囲に確認された。４本柱の主柱穴構造を想定して、床面の精査を入念に行ったが、南東部の柱穴は検出することができなかった。細片遺物を数点出土しているが、図化し得たのは甕底部片１点のみであった。



図－23　竪穴住居ＳＢ－９

ＳＢ－９出土遺物（図24）

甕（55）　平底の底部片で、復原底径7.5cmを測る。外面には縦ヘラ磨きが看取できる。

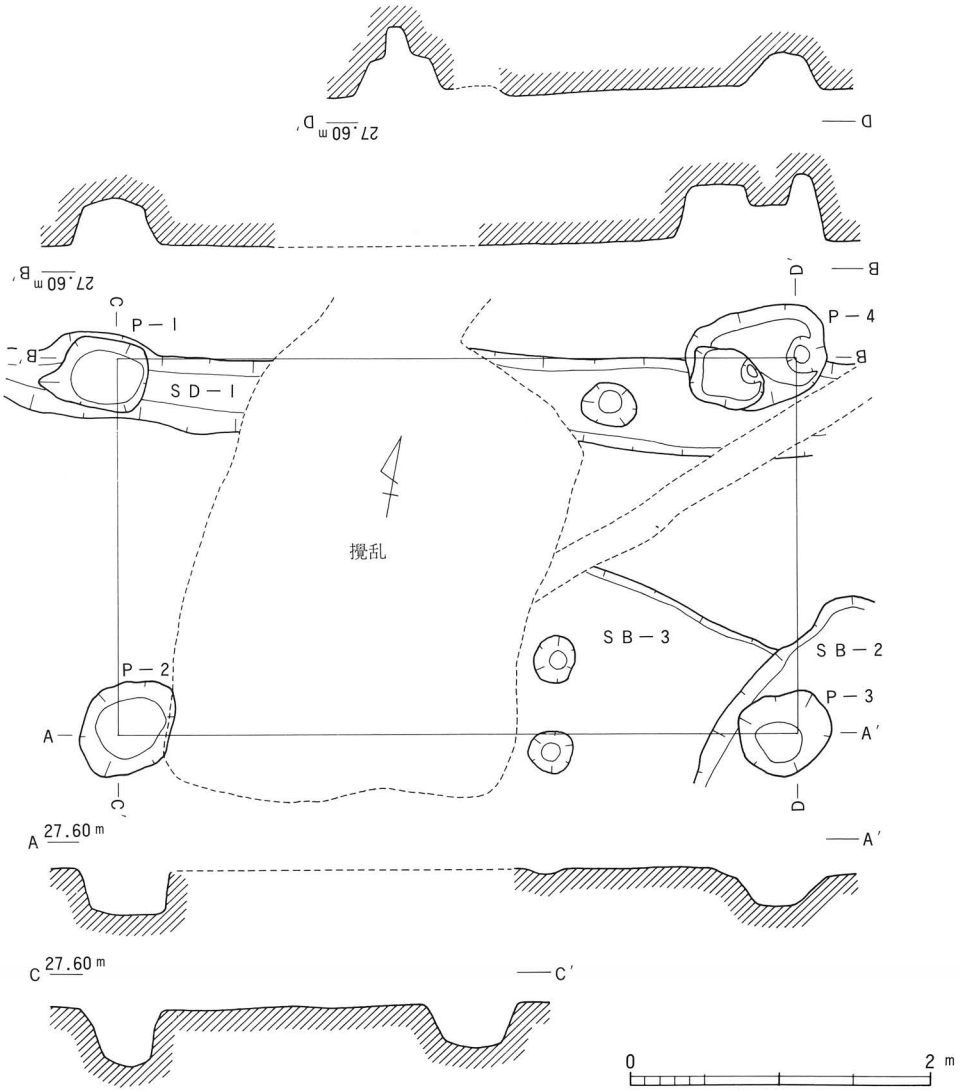


図－24　ＳＢ－９出土遺物

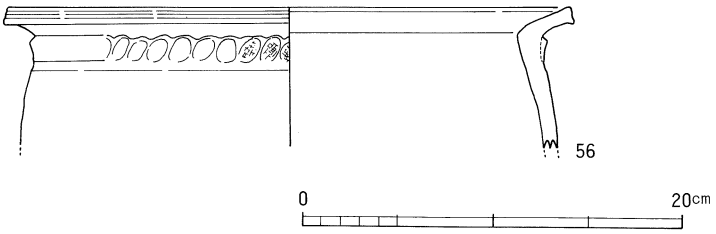
(3) 掘立柱建物

ＳＢ－10（図25）

調査区東寄りでＳＢ－２・３、ＳＤ－１と切り合って検出された１×１間、東西棟の掘立柱建物である。主軸をN79°Eにとり、竪穴住居ＳＢ－２、溝ＳＤ－１に切られている。桁行4.5ｍ、梁行2.5ｍを測る。柱穴は、直径60～70cmの円または楕円形で、深さ25～50cmの遺存である。柱穴、Ｐ－３より出土の弥生甕片、および後期初頭の竪穴住居址ＳＢ－２に切られることから、弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。



図－25　掘立柱建物ＳＢ－10



図－26　ＳＢ－10出土遺物

ＳＢ－10出土遺物（図26）

甕（56）　Ｐ－３出土の口径29.8cmを測る大型甕である。「く」の字状に折り曲げられた口縁部は端面を横撫でされ、その際の擦痕が擬凹線状に残っている。頸部外面には１条の突帯が貼付けられ、突帯上の押圧施文部には、布目がみられる。口頸部内外面は横撫で、胴部外面は板状工具による斜め方向の撫で、内面には横方向のヘラ磨きが観察できる。

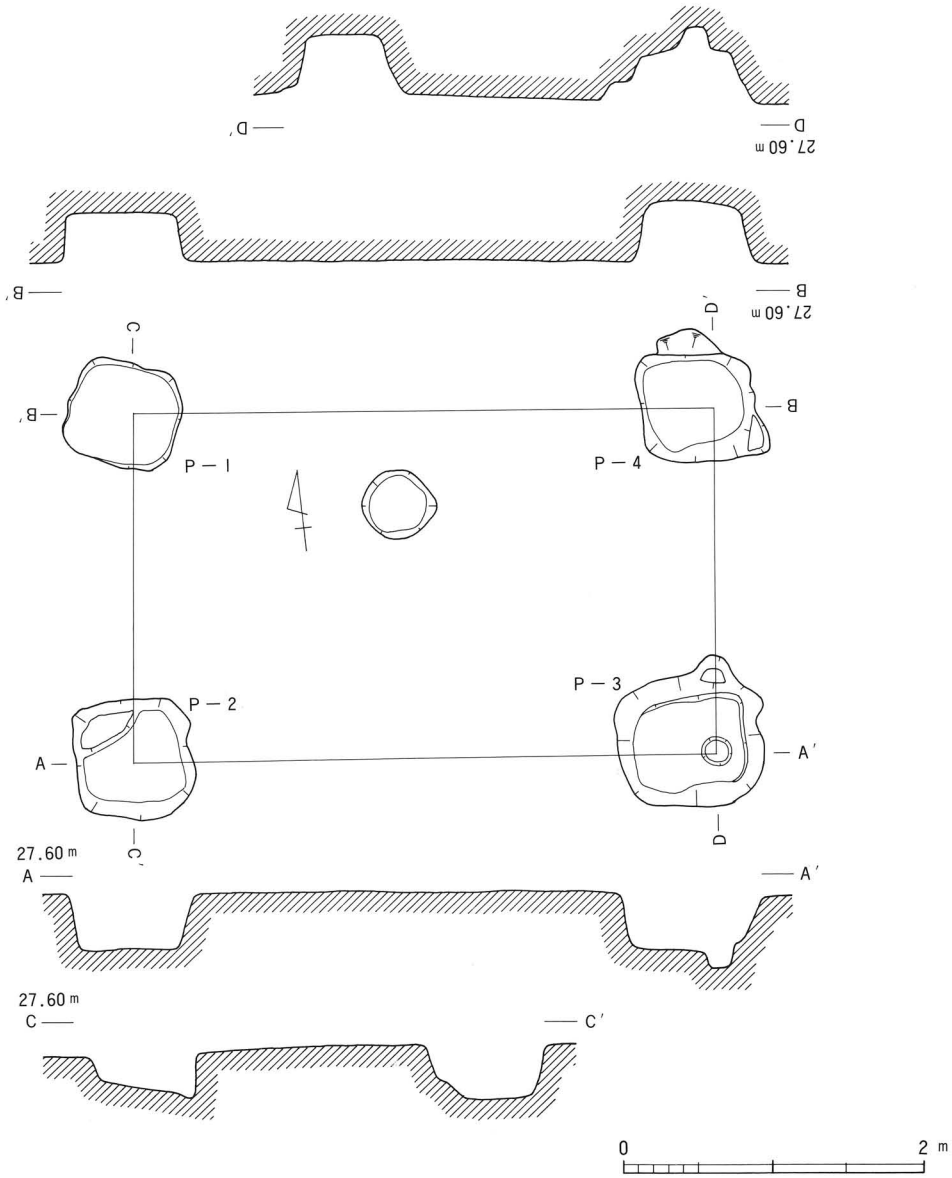
ＳＢ－11（図27）

調査区西寄りで検出された１×１間、主軸をＮ82°Ｗにとる東西棟の掘立柱建物である。桁行3.85ｍ、梁行2.3ｍを測る。柱穴は一辺70cm前後の隅丸方形で、深さ40～50cmの遺存である。Ｐ－２・３・４より壺片を出土しているが、特にＰ－３では柱穴としては比較的まとまった遺物の出土がみられ、建物の建築時、または廃棄に際して柱穴祭祀のような行為が行われた可能性が高い。これらの遺物より、弥生時代中期後葉の遺構であると考えられる。

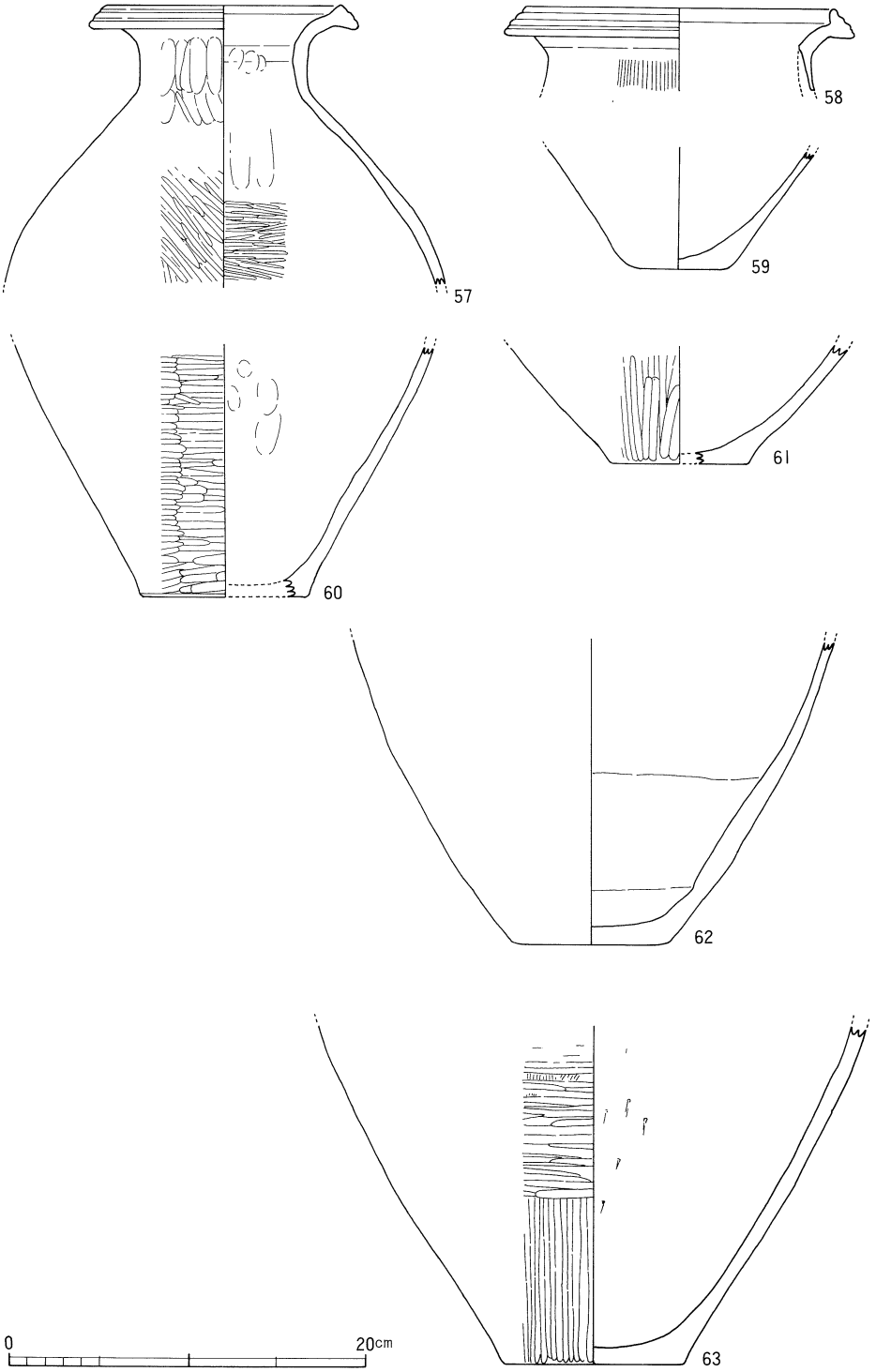
ＳＢ－11出土遺物（図28）

壺（57～63）　57～60・63はＰ－３出土である。57は壺の上半部片で、口径13.3cm、残高16cmを測る。さほど張らない肩部、筒状の頸部から水平方向に口縁部が外反する。口端部は上下方に肥厚され、端面に２条の浅い凹線が施される。体部外面は、斜め方向のヘラ磨き、頸部は、幅広のヘラ状工具による縦方向の撫で、口縁部は内外面ともに横撫でされる。肩部の内面には縦方向の撫でが、以下には緻密な横ヘラ磨きが施されている。58は口径17.7cmを測る口頸部片で上下方、特に上方に大きく肥厚された口端面には４条の凹線が施される。口縁部の横撫では、入念に行われ、焼成も堅緻である。頸部外面には、縦刷毛目が観察され、また内面は粘土帯の接合部で剥離している。59・60はそれぞれ底径5.5cm、9.5cmを測る底部片である。ともに平底であるが、シャープで安定した60にくらべて、59は不安定で、器表面の摩滅も著しく、調整は不詳である。60の外面には、横方向のヘラ磨きが顕著に観察できる。内面は、縦方向に撫でられている。63は後述の土壙、ＳＫ－５出土の破片と接合している。底径10.3cm、残存高19.2cmを測る平底の下半部である。外面底部より10cm内外の部分は縦方向、以上は横方向に入念にヘラ磨きされている。ヘラ磨きの前に縦刷毛目で調整されていることが部分的に観察できる。61はＰ－２出土の底部片で、底径7.7cmを測る平底である。外面は、

縦方向のヘラ磨き、内面は縦方向に撫でられている。62はP－4出土の壺下半部片で、底径8.8cm、残存高17.5cmを測る。胎土に1～3㎜大の石英、長石粒を多く含んでいる。器外表面の損傷が著しく、調整は不詳、内面は縦方向に撫でられている。また、内面に粘土帯の接合痕が観察できる。



図－27　掘立柱建物ＳＢ－11



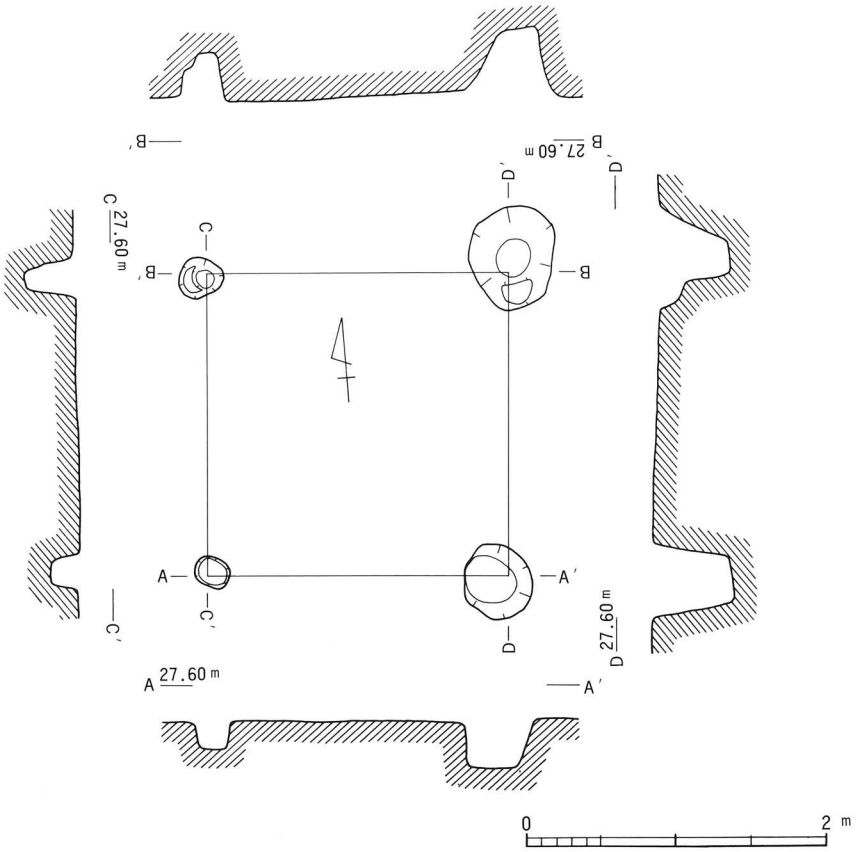
図－28　ＳＢ－11出土遺物

ＳＢ－12（図29）

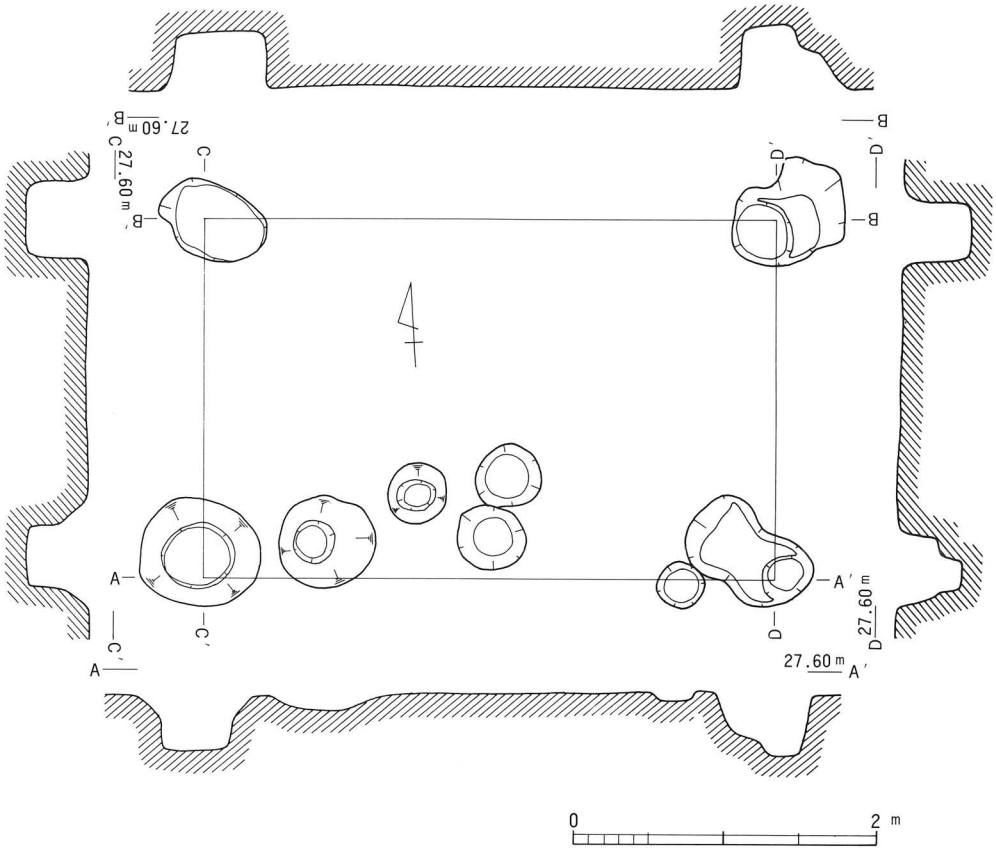
調査区中央北寄りで検出された１×１間の建物で、一辺２ｍを前後する正方形プランを呈する。他の掘立柱建物が、すべて長方形プランの東西棟であるのとは異なっており、壁面の立ち上がりを失った竪穴住居址の可能性もある。時期決定に有効な遺物の出土はない。主軸をＮ85°Ｗにとる東西、または南北棟の建物である。柱穴は直径60cmを前後する円形プランで、深さ40～60cmの遺存である。

ＳＢ－13（図30）

ＳＢ-11の東約４ｍで検出された１×１間の建物で、主軸をＮ85°Ｗにとる東西棟である。柱穴は直径60cmを前後する円形プランで、深さ40～60cmの遺存である。桁行3.7ｍ、梁行2.4ｍを測る。遺物の出土はみられなかったが、その規模、方向等、後述のＳＢ-14も含めてＳＢ-11と同時期に併存していたものと考えられる。



図－29　掘立柱建物ＳＢ－12



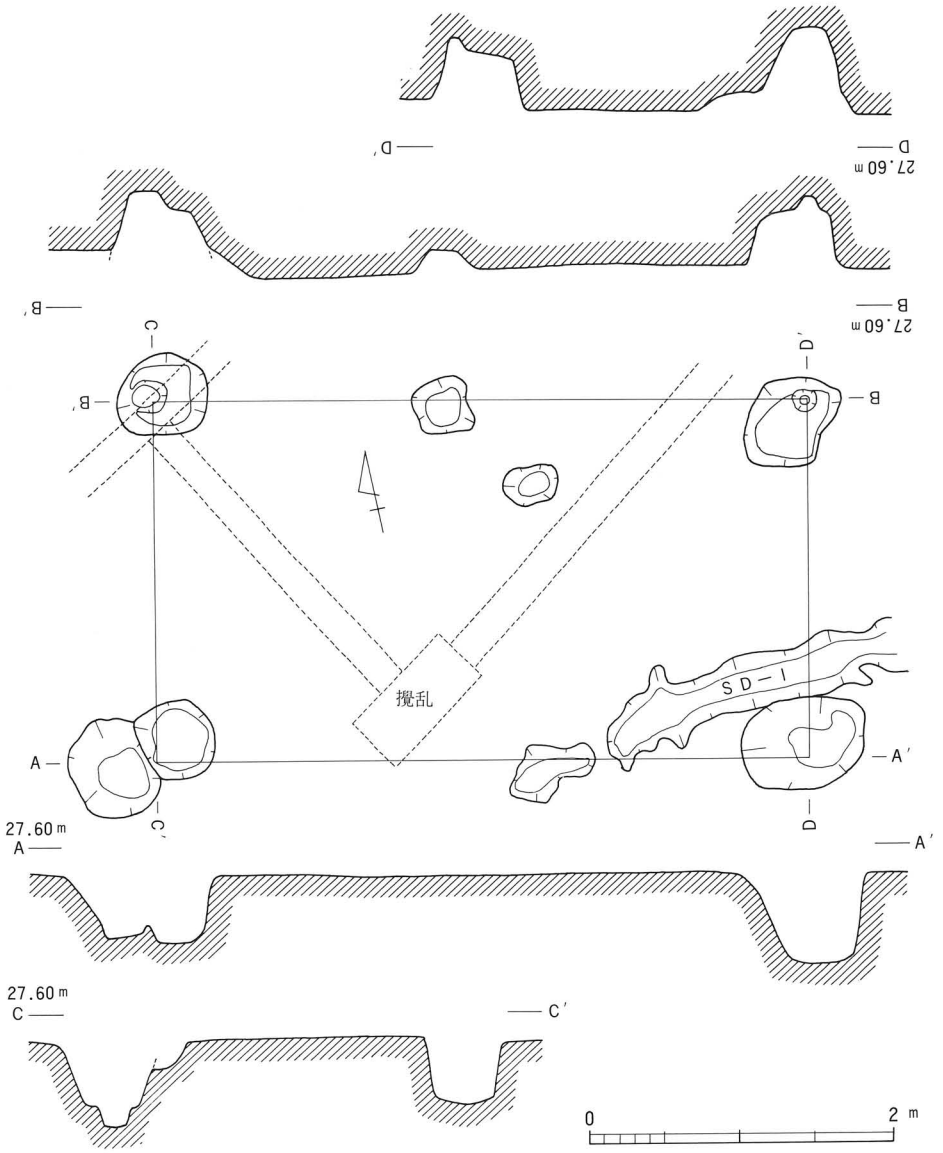
図－30　掘立柱建物ＳＢ－13

ＳＢ－14（図31）

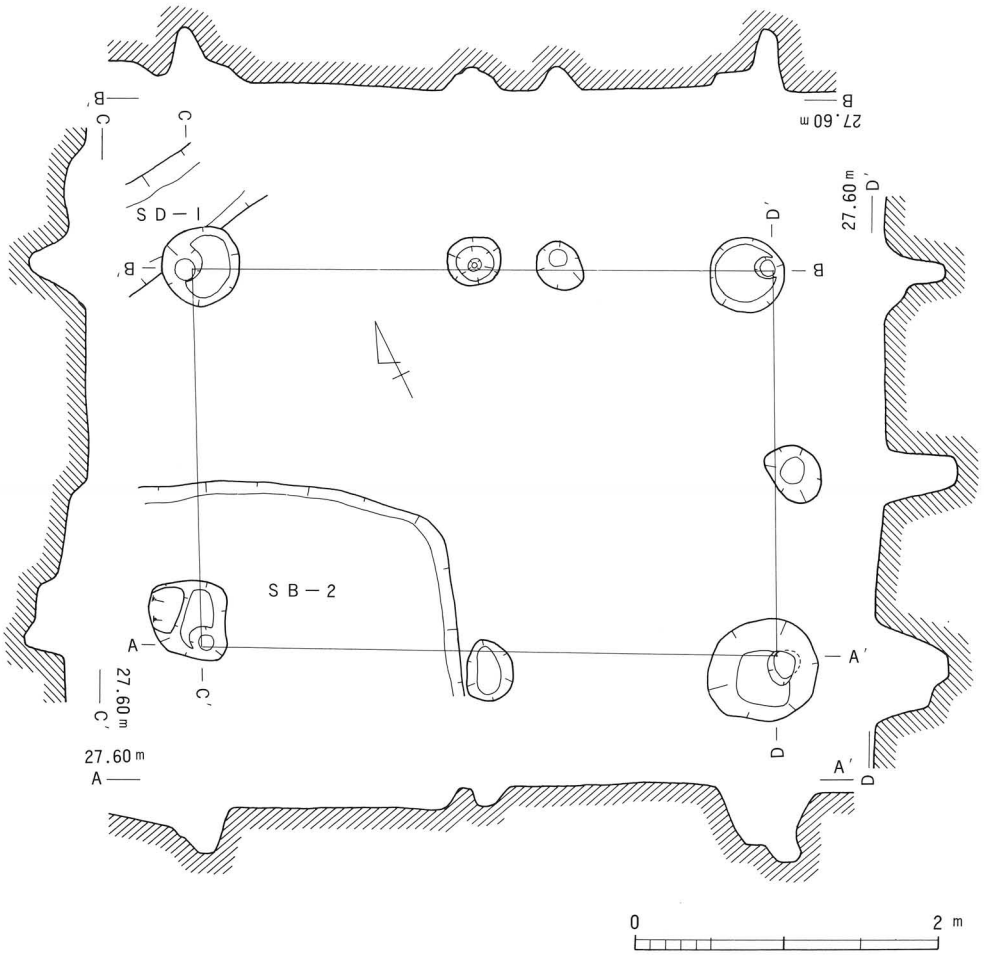
調査区中央よりやや東寄り、ＳＢ-13の東６ｍで検出された１×１間の建物である。主軸をN86°Wにとる東西棟で、桁行4.3ｍ、梁行2.4ｍを測る。柱穴は直径50～60cmの円形で、深さ40～60cmの遺存である。柱穴よりの遺物の出土はない。ＳＢ-11から14までの４棟は、いずれも真北を意識した柱穴配置になっている。

ＳＢ－15（図32）

調査区東端付近でＳＢ-２に切られて検出された。主軸をN63°Wにとる１×２間の東西棟、桁行柱間、1.9ｍ、総長3.8ｍ、梁行2.5ｍを測る。四隅の柱穴は直径50～60cm、深さ30～50cm、桁行側の中間の柱穴で、直径40cm前後、深さ15cmを測る。ＳＢ-２に切られることから、下限を弥生時代後期初頭におくことができる。



図－31　掘立柱建物ＳＢ－14



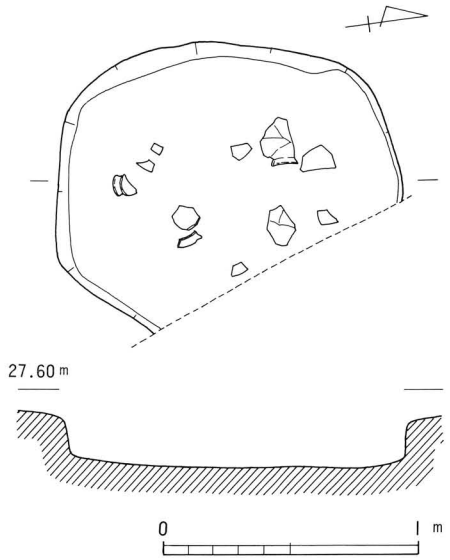
図－32　掘立柱建物ＳＢ－15

(4) その他の遺構

土 壙

ＳＫ－１（図33）

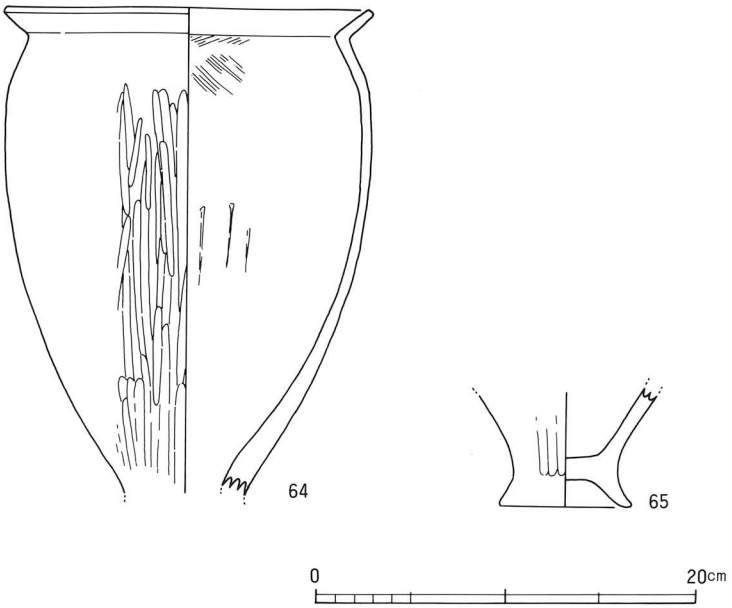
ＳＢ－９の北２ｍで検出された円形土壙で、東部を攪乱により失っている。直径1.4m、深さ20cmを測り、壙底はフラットである。弥生時代中期後葉の甕２点を出土している。



図－33　土壙ＳＫ－１

ＳＫ－１出土遺物（図34）

甕（64・65）　底部を欠失した個体64と、底部片65が出土している。64は口径19.4cm、胴部最大径19.3cm、残存高25.6cmと口径、胴部径がほぼ等しい。頸部で「く」の字状に折り曲げられた短い口縁部は外上方に開き、端部は丸みを帯びた面をなしている。口縁部内外面、頸部外面屈曲部以下３cmまでの範囲は横撫で、それ以下の胴部外面は縦方向のヘラ磨き、頸部外面の横撫でに対応する範囲の内面は斜め方向の刷毛目、以下は削り上げられている。65は底径７cmを測るくびれの上げ底の底部である。底部周縁の内外面は横撫で、以上の外面は縦ヘラ磨き、内面は調整不詳である。底部の成形は、粘土板充塡によっている。



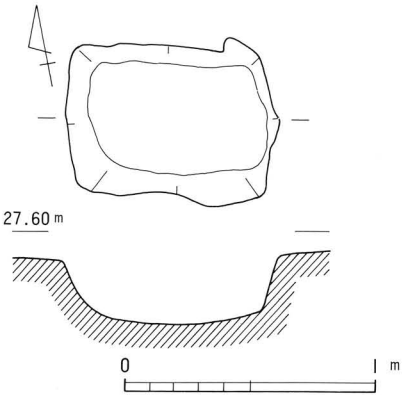
図－34　ＳＫ－１出土遺物

ＳＫ－２（図35）

調査区中央南寄りで検出された長方形土壙で、60×80㎝、深さ30㎝を測る。埋土中より弥生甕底部片を１点出土している。

ＳＫ－２出土遺物（図36）

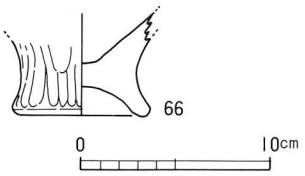
甕（66）　底径7.3㎝を測る安定感のあるくびれの上げ底である。器壁の損傷が著しいが、外面は縦ヘラ磨きが看取される。１～３㎜大の石英、長石粒を多く含み、外面が橙褐色を呈するのに対し、内面は黒色である。



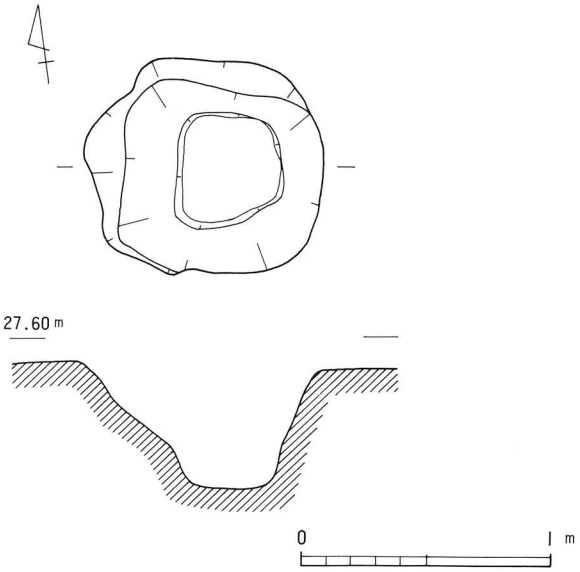
図－35　土壙ＳＫ－２

ＳＫ－３（図37）

調査区中央、南端で検出された、一辺80～90㎝の隅丸長方形プランをなす竪穴である。深さは50㎝、断面形は擂り鉢状で、弥生時代中期後葉の掘立柱建物の柱穴である可能性が高い。遺物の出土状況から柱穴祭祀が行われたものと思われる。



図－36　ＳＫ－２出土遺物



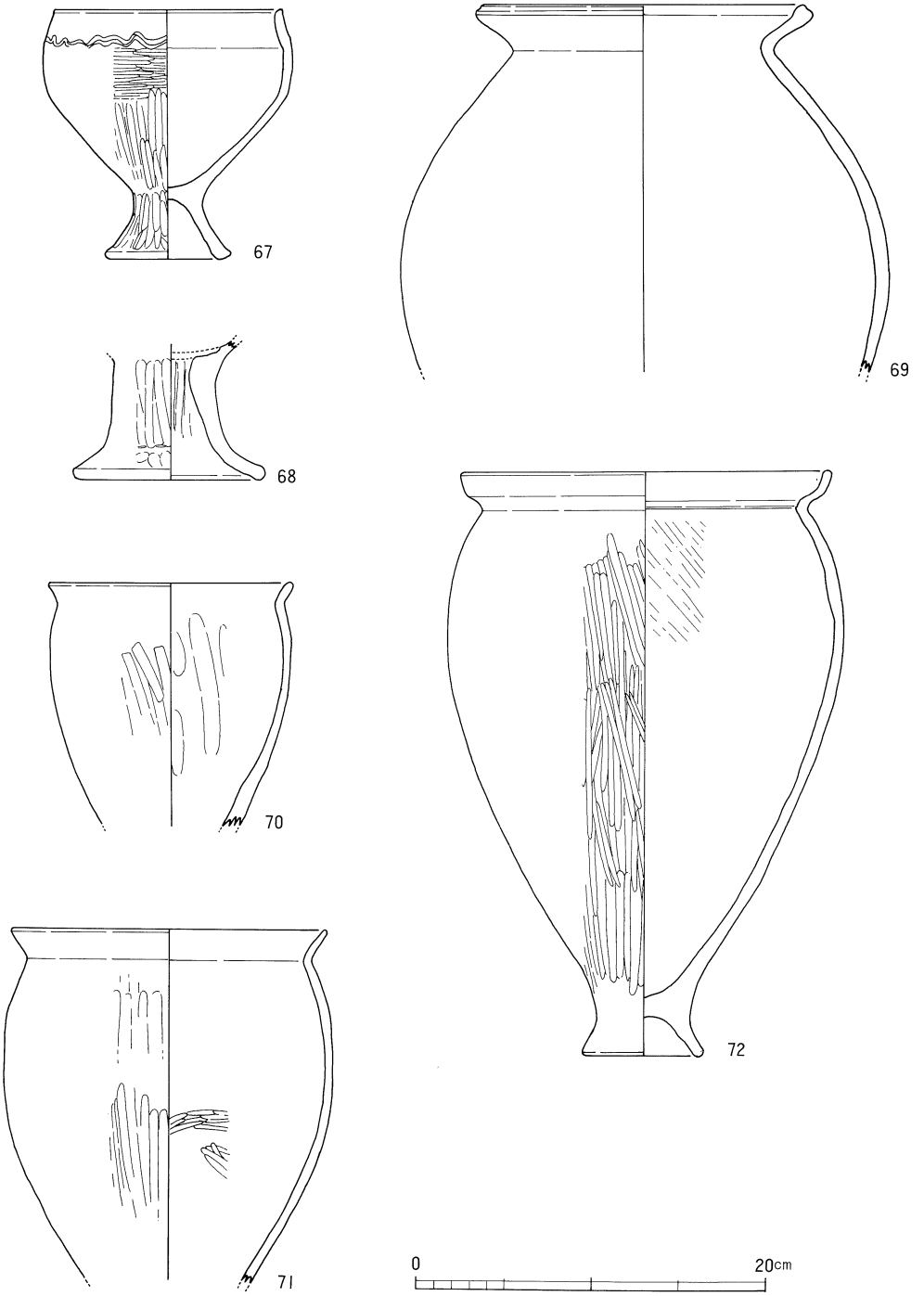
図－37　土壙ＳＫ－３

ＳＫ－３出土遺物（図38・39）

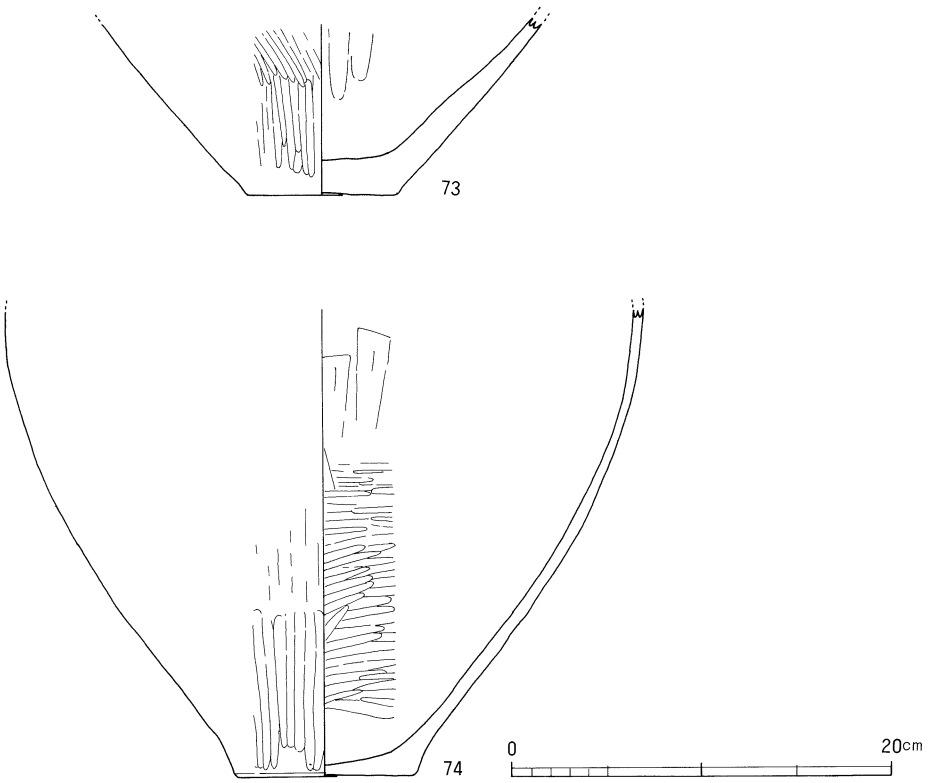
高坏（67・68）　完形品67と、脚68が出土している。67は甕の底部のような低い脚に、深椀タイプの坏部を持つ。器高14cm、口径13.1cm、脚裾径7.2cmを測る。口縁部をやや下った外面に、不明瞭で粗雑な３本単位の波状文が描かれているが、櫛歯状の工具ではなく、植物の茎を束ねたようなもので施文されたものと思われる。内面および、口縁部外面は横撫で、外面のその他の部位はヘラ磨きされている。坏部最大径部より上位は横方向に細かく、以下は縦方向に若干幅広く磨かれている。68は脚付き壺等の器型も考えられるが、一応高坏として扱っておく。脚裾径10.6cm、残存高7.8cmを測る。筒状の脚柱部から開いた裾部の外面には、指頭痕がみられる。脚柱部外面は縦方向のヘラ状工具による撫で、内面は横撫でされているが、上位の部分にはシボリ痕が認められる。なお、充塡粘土板の剥離痕が観察される。

甕（69～72）　復原完形品72と、底部を欠失した個体69～71が出土している。69は口径18.4cm、胴部最大径27.6cmと胴径が口径を大きく凌ぐものである。強くすぼまった頸部から外上方に屈曲した口縁部は、端部を若干内面に肥厚され、端面には横撫でによる凹面が看取される。胎土には１～５mm大までの石英、長石粒を多く含んでいる。器表面の損傷のため、口縁部内外面の横撫でのほか、調整は不詳である。70・71はともに底部を欠くが、似通ったプロポーションを呈しており、張りの少ない胴部に屈曲の小さい、短い口縁部を持つ。70は復原口径14cm、胴部最大径13.8cmを測る。短く折り曲げられた口縁部は、頸部に稜を持たず、端部を丸く収めている。胴部外面は板状工具により上方から下方に撫でられ、内面は指頭による縦方向の撫でである。口縁部内外面は横撫でされるが、さほど入念な撫でではなく、折り曲げの際の指頭痕が残っている。71は復原口径18cm、胴部最大径17.7cmを測る。口頸部内外面は横撫で、胴部外面は縦ヘラ磨き、内面には一部横方向、ないしは斜め方向のヘラ磨きが看取されるが、器表面の摩滅のため観察不能な部位が多い。復原完形品72は器高33.4cm、口径21.1cm、胴部最大径22.4cm、底部径７cmを測る。くびれの上げ底の底部、張りを上位に持つ胴部、大きく内湾して外上方に立ち上がる口縁部を持つ。頸部は強く横撫でされ、内面屈曲部の上面には凹線状が１条巡っている。胴部外面は縦方向のヘラ磨き、内面上位は板状工具による斜め方向の撫で、下位は削りの後撫でられている。

壺（73・74）　73は底径7.8cmを測る平底から外斜め上方に大きく開く底部である。外面底部寄りは縦、上位は斜め方向のヘラ磨き、内面は縦方向に撫でられている。74は壺の胴張り部以下である。底径9.5cm、残存高24.7cmを測る。器型の割には極めて薄く器壁を削られている。底部寄りの外面には縦ヘラ磨きが看取されるが、以上の外面は器表面の損傷のため調整不詳である。内面は縦方向に削り上げられ、下位の部分はヘラ状工具により、横方向に撫でられている。



図－38　ＳＫ－３出土遺物(1)



図－39　ＳＫ－３出土遺物(2)

ＳＫ－**4**（図40）

調査区北東部で検出された直径70cm、深さ60cmの円形土壙で、溝ＳＤ－３に切られる。壙底部より弥生時代中期中葉に比定される高坏１点を出土している。

ＳＫ－**4出土遺物**（図41）

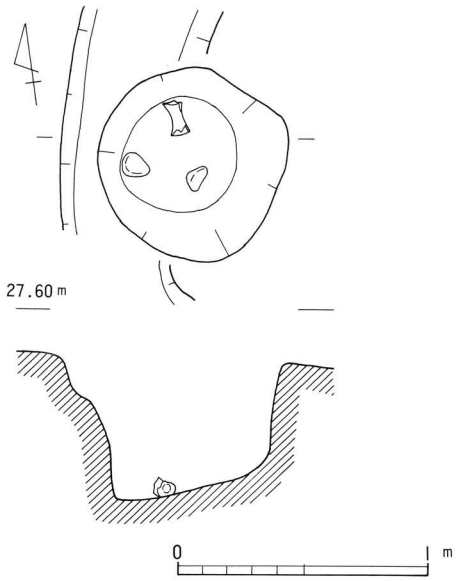
高坏（75）　筒状の脚柱部に、あまり大きく広がらない裾部を持ち、平坦な脚端面全体で接地する。脚裾径8.9cmを測る。坏部は脚部から緩やかに外反してひろがる。外面は縦ヘラ磨き、脚裾周縁部は内外面ともに横撫で、脚柱部内面にはシボリ痕がみられる。粘土板の充塡が観察できる。

ＳＫ－**5**（図42）

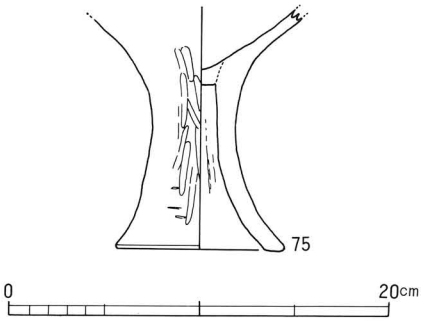
調査区西部でＳＢ-11の南西に接して検出された不整型の土壙で、0.55×1.3ｍを測る。深さは10cmと遺存は良くない。底部片を２点出土しているが、うち１点はＳＢ-11の柱穴Ｐ－３出土の壺下半部63と接合しており、弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。

ＳＫ－５出土遺物（図43）

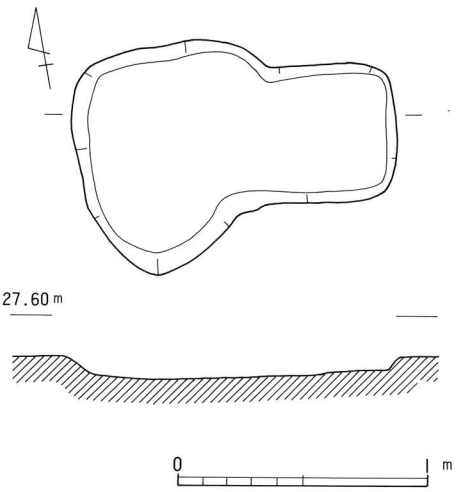
甕（76）　平底の甕底部片である。復原底径6.9cmを測る。内面の削り上げによって、極めて薄く仕上げられている。外面は縦ヘラ磨きされている。



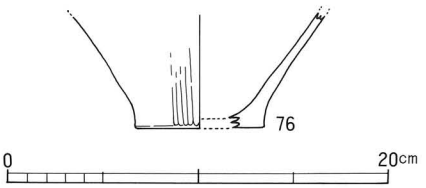
図－40　土壙ＳＫ－４



図－41　ＳＫ－４出土遺物



図－42　土壙ＳＫ－５

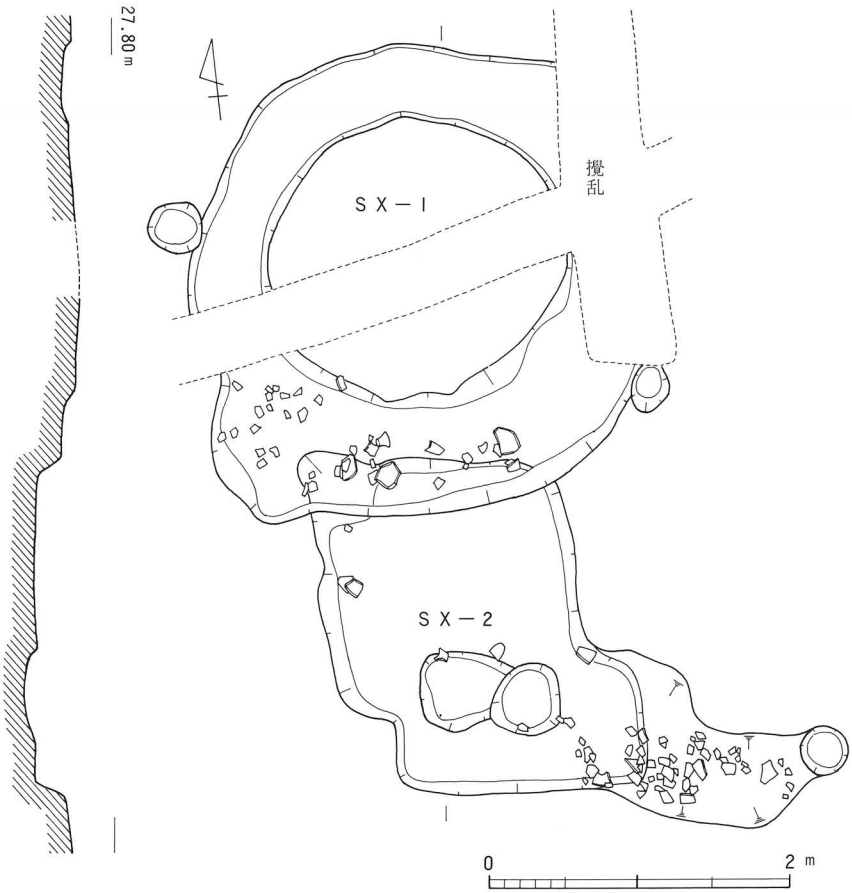


図－43　ＳＫ－５出土遺物

円形周溝状遺構ＳＸ－１・不整形竪穴遺構ＳＸ－２（図44）

ＳＸ－１

調査区南西部で検出されたもので、幅50cmを測る溝が直径3.1ｍの円形に巡る遺構である。上部を削平されているものと思われ、深さ10cm程度の遺存である。不整形の竪穴ＳＸ－２を切っている。遺物は、弥生時代後期に属すると考えられる壺、高坏を出土しているが、これらの遺物は南側のＳＸ－２との切り合い部分に集中している。弥生時代後期のこの種の遺構は、調査地の西側に隣接する文京遺跡10次調査地や、小坂所在の釜ノ口遺跡等でも検出されており、何らかの祭祀的遺構とされている。このＳＸ－１においては、その遺存状況の悪さも手伝って祭祀的行為を示すような遺物は出土はみていないが、一応他の類例と同様の性格を想定しておく。

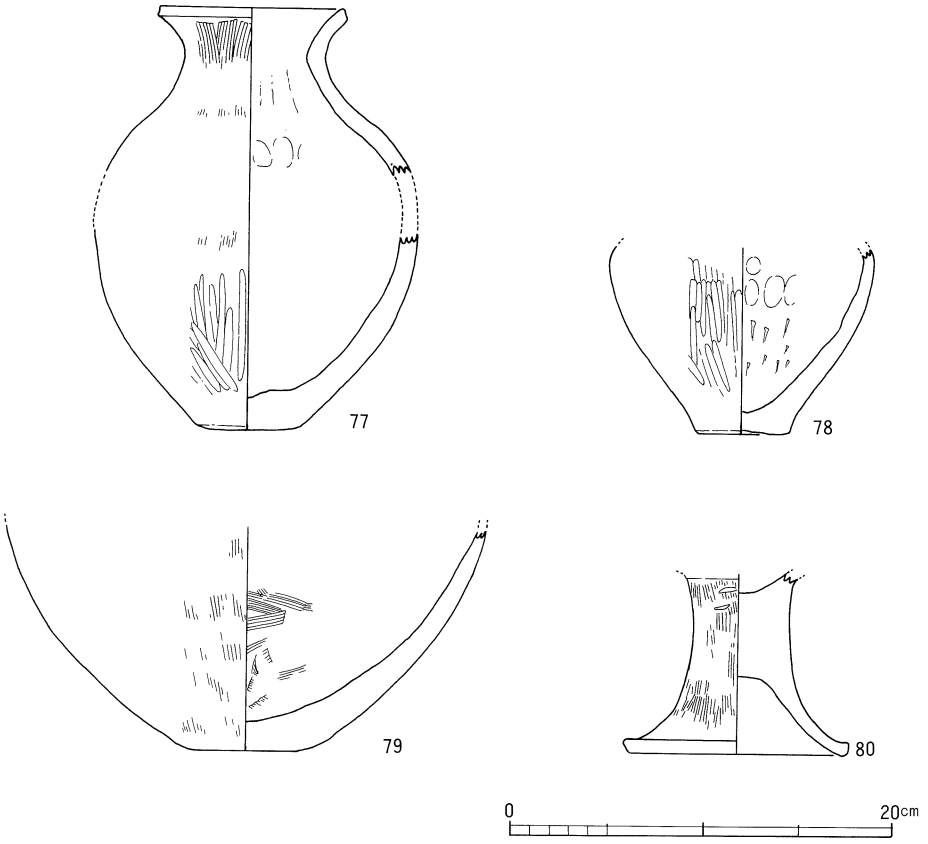


図－44　円形周溝状遺構ＳＸ－１・不整形竪穴遺構ＳＸ－２

ＳＸ－１出土遺物（図45）

壺（77～79）　77の上半部と下半部は接合はしないが、同一個体である。口径10cm、胴部最大径17cm、底径5.5cm、推定器高22.5cmを測る。器肉の厚いぼってりとした器型で、不安定な平底、短く外上方に開く口縁部を持つ。胴部外面下半部は縦ヘラ磨き、以上は口縁部に至るまで粗い縦刷毛目で調整されている。内面口縁部は横撫で、以下の部分は不詳であるが、頸部から肩部のあいだにはシボり痕、指頭痕がみられる。胎土には１～５mm大の石英、長石粒が多く含まれている。78は底径５cm、残存高10cmを測る小型壺の下半部である。外面は縦ヘラ磨き、内面底部寄りは粗い削り、以上は指撫でされている。79は小さな平底をなす大型壺の底部である。外面は縦刷毛目、内面は横方向の刷毛目で調整されている。

高坏（80）　裾径11.6cm、残存高9.6cmを測る脚部である。中実の脚柱部から外反して開く裾部は、端部を若干丸みを帯びた平坦面に収めている。内面、および外面の裾周縁部は横撫で、脚柱部外面は縦刷毛目で調整されているが、柱部上位に刷毛目原体の小口による深い傷がみられる。



図－45　ＳＸ－Ｉ出土遺物

ＳＸ－２

完掘のプランをみてみると、ＳＢ－６～９のような小規模な方形竪穴住居址と溝状遺構が切り合っていた可能性もあるが、平面プラン検出の時点では明確な遺構の重複の状況は確認できなかった。したがって、不整形の竪穴遺構として取り扱っている。遺物は南東端の溝状の窪みに特に多く検出された。これらの遺物により、弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。

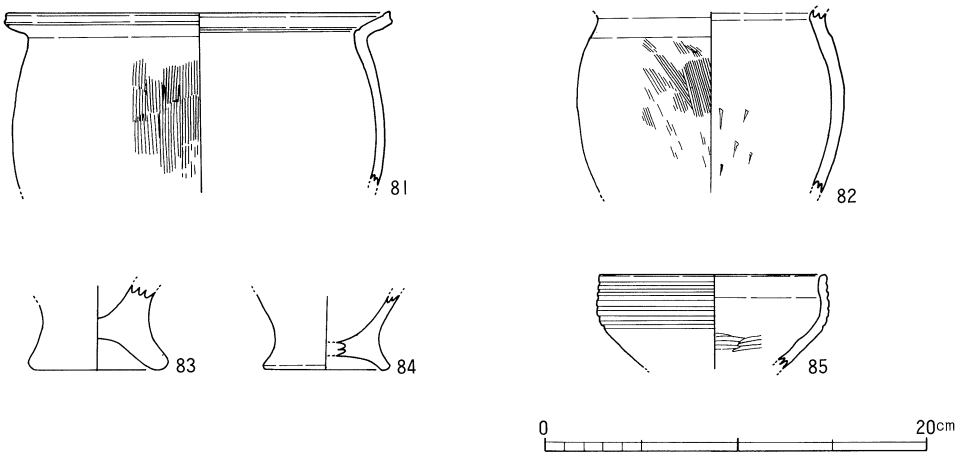
ＳＸ－２出土遺物（図46）

甕（81～84）　81は口径20.3cmを測る上半部片である。短く折り曲げられた口縁部は、端部を上方に僅かに肥厚し、端面は横撫でによる凹面をなす。頸部は強く横撫でされ、屈曲部内面の上面には凹線状が１条巡る。胴部外面は縦刷毛目、内面は板状工具による斜め方向の撫でを施されている。82は胴部最大径14.1cmを測る上半部片であるが、口縁部を欠失している。外面頸部には強い横撫で、以下には斜め方向の刷毛目が、内面は下から上へ掻き取るように削られている。83・84はくびれの上げ底の底部で、それぞれ底径7.4cm、6.8cmを測る。

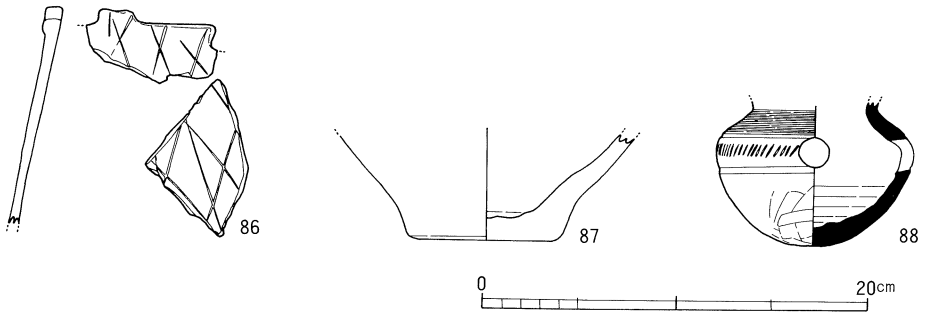
高坏（85）　復原口径12.1cmを測る深椀タイプの坏部片である。ほとんど直上に立ち上がった口縁部外面には６条の凹線が施される。口縁部は内外面ともに横撫で、その他の内面は横ヘラ磨き、外面は不詳である。

溝

計５条の溝が検出されている。ＳＤ－１は調査区を東から西へ走る幅50～60cm、深さ10cm内外の溝で、総長43ｍ分が検出された。各竪穴住居、掘立柱建物を切っている。この溝からは縄文土器、弥生土器、須恵器を出土しており、須恵器の年代から古墳時代後期以降に埋没したものと考えられる。ＳＤ－２は調査区中央北端から南へ走る幅60cm、深さ10cmの溝で、12ｍ分を検出している。ＳＤ－４は調査区北西隅で検出された東西溝で幅60cm、深さ10～15cm、



図－46　ＳＸ－２出土遺物



図－47　ＳＤ－１出土遺物

４ｍ分が検出された。ＳＤ－２・４ともに時期決定に有効な遺物の出土はみていない。ＳＤ－３は調査区北東隅から南西へ蛇行しながら走る溝で、長さ11ｍにわたって検出された。幅60㎝、深さ10～20㎝を測る。ＳＤ－５は調査区南東隅で円形住居址ＳＢ－１を切って検出された南北溝であるが、隅丸方形状に東へ屈曲する様相が窺える。ＳＤ－４・５ともに弥生時代中期後葉の土壙ＳＫ－４や、住居址ＳＢ－１を切ることから、上限を弥生時代中期後葉におくことができる。

ＳＤ－１出土遺物（図47）

深鉢（86）　縄文時代晩期の深鉢口縁部片である。口端部内面を断面隅丸方形状に肥厚し、この肥厚した部分がヒレ状突起となり、このヒレ状突起の中央部にさらに若干中央がくぼんだ長方形状の突起がある。外面には、先端の尖った工具による斜格子状の施文が行われている。晩期中葉の遺物と考えられる。

壺（87）　弥生壺の底部片である。分厚い円板状の底部から内湾気味に外上方に立ち上がっている。底径8.2㎝を測る。

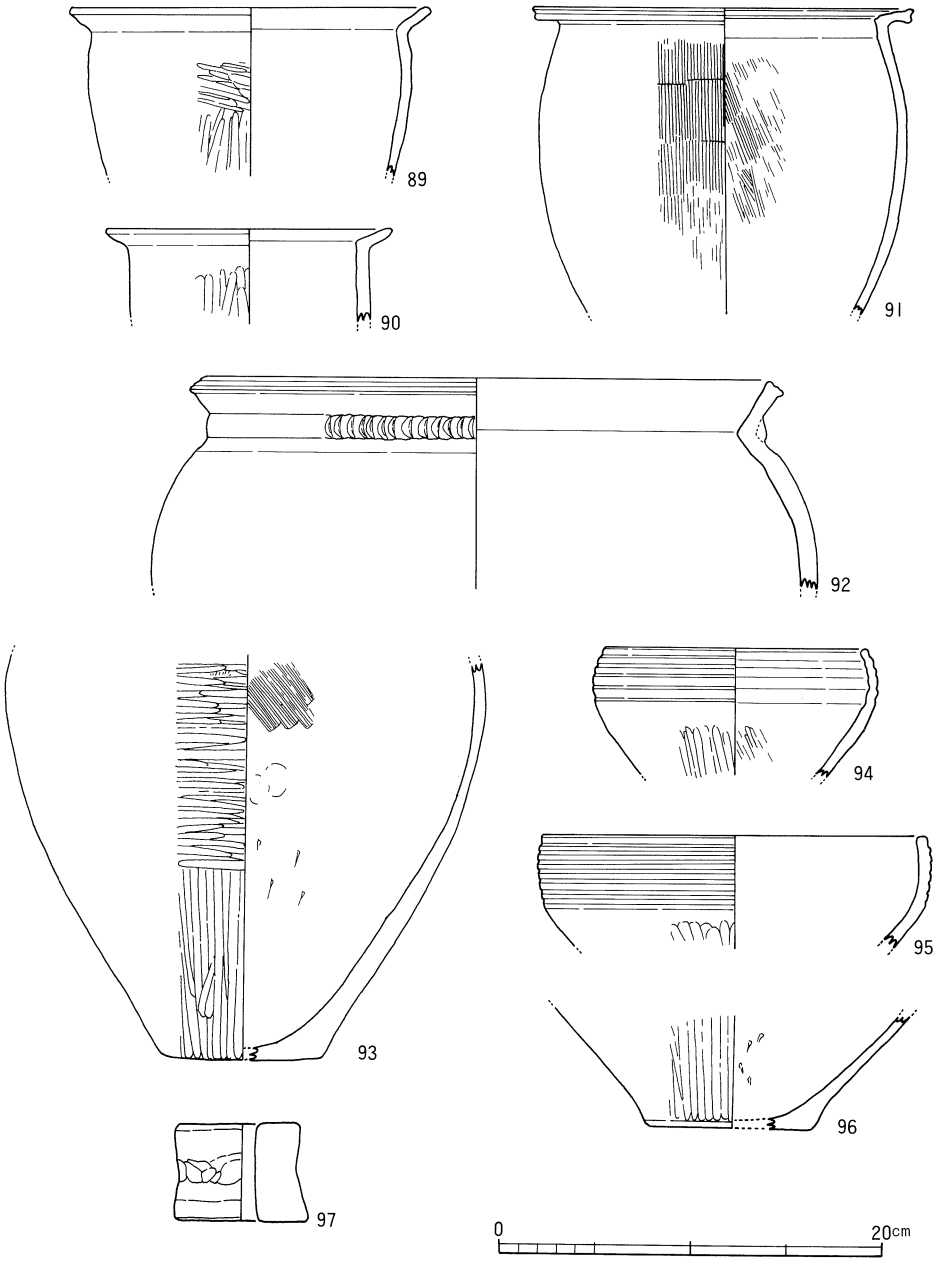
甕（88）　口頸部を欠失しているが、短く開くものと思われる。胴部最大径10.4㎝を測る。胴部には２条の凹線、この凹線間に櫛歯状工具による刺突列点文が施される。外面肩部は掻き目、底部は板状工具により不定方向に撫でられている。５世紀末頃に比定されよう。

柱穴・柱穴出土遺物（図48）

調査区南半を中心に多くの柱穴が分布しているが、これらのなかから遺物を出土したものについて記述しておく。

Ｐ-30は方形住居址ＳＢ－５の南40㎝足らずの位置で検出された直径40㎝、深さ30㎝の円形ピットで、91の甕を出土している。口径20.2㎝、胴部最大径19.4㎝を測る。外方に水平に開く口縁部は、貼付けによる。端部は上方につまみあげられ、端面には１条の凹線が施される。また、頸部屈曲部の上面にも１条の凹線状が巡っている。口頸部は内外面ともに横撫で、胴部外面は縦、内面は斜め方向の刷毛目調整である。Ｐ-102・103・105は調査区中央南端付近

で検出されている。P−102は直径70cm、深さ30cmの円形で、89の甕を出土している。口径19cm、胴部最大径17.1cmを測る。折り曲げによる口縁部は端部を丸く収める。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面頸部寄りは横、以下は縦方向のヘラ磨き、内面は縦方向に撫でられている。P−103は102の西側にほとんど接するようにして検出された楕円形ピットで、長径60cm、短径40cm、深さ25cmを測る。出土した甕92は口径29.8cm、胴部最大径35.1cmを測る大型品である。下方に若干肥厚した口端面には2条の浅い凹線が、頸部外面には刻み目突帯が巡っている。口頸部内外面は横撫で、胴部外面は器表面の摩滅のため調整不詳、内面は板状工具による縦方向の撫でを施されている。P−105は50×70cmの長方形状をなすピットで、深さ40cmを測る。93・96の壺を出土している。93は胴部最大径25.4cm、底径8.5cmの平底をなす壺下半部である。外面底部寄りは縦、以上は横方向のヘラ磨き、内面胴部以上は斜め刷毛目、以下は縦方向に削り上げられている。96は平底の壺底部で、復原底径9.1cmを測る。外面は縦ヘラ磨き、内面は縦方向に削られている。P−113は直径50cm、深さ20cmの円形ピットで、甕90を出土している。口径15.1cmを測る張りを持たない胴部から屈曲して、短い口縁部が水平に近く開いている。口頸部内外面は横撫で、胴部外面は縦ヘラ磨きされている。P−131はSB−9の北西コーナーに接するように検出された直径50cm、深さ20cmの円形ピットで、高坏94を出土している。口径13.8cm、口縁部外面に5条の凹線文を持つ深椀タイプの高坏であるが、口縁部内面にも外面の凹線に対応する横撫でによる凹凸がみられ、調整による凹凸というよりも施文を意図したものと思われる。坏部は内外面ともに縦、ないし斜め方向のヘラ磨きを施されている。P−137は直径40cm、深さ15cmの円形で、支脚97を出土している。上面径6.5cm、下面径7cm、器高5.5cmを測る。俯瞰形は円形で、中心部に径2.5cmの中空部がある。P−140は、調査区西端近くで検出された円形ピットで、直径45cm、深さ10cmを測る。出土した高坏95は、口径20.3cm、口縁部外面に7条のしっかりした凹線が施されている。口縁部は内外面ともに横撫で、坏部外面は縦ヘラ磨きされている。



図－48　柱穴出土遺物

(5) 包含層出土の遺物

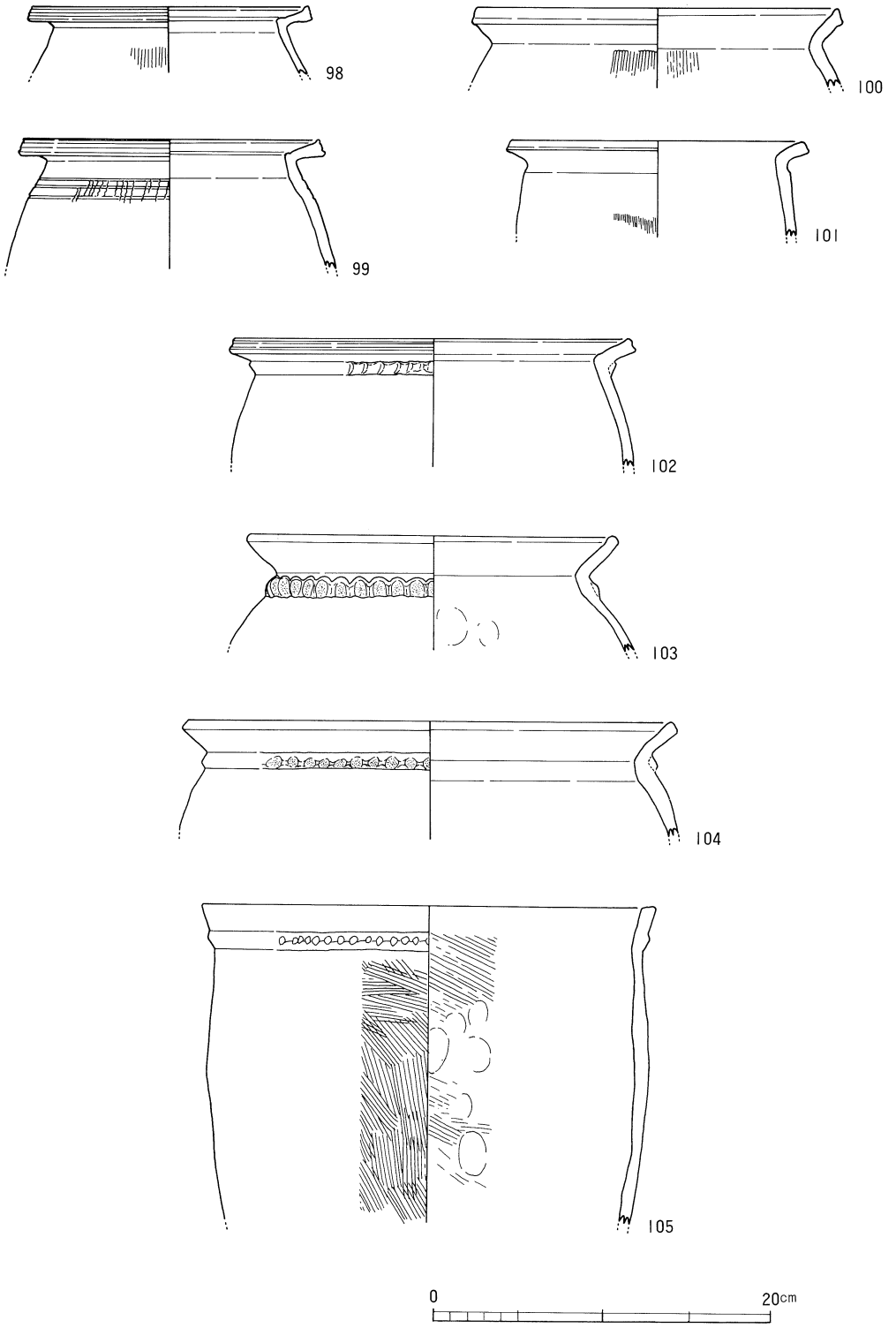
弥生式土器（図49～51）

甕（98～122）　口頸部、ないし上半部片98～105と、底部片106～122が出土している。98は口径16.3cm、水平に近く屈曲した口縁部は、端部を上方につまみ上げ、拡張した外端面に4条の擬凹線が、頸部屈曲部内面の上面には浅い凹線状が巡っている。口頸部内外面は横撫で、以下の外面は縦刷毛目、内面は板状工具による斜め方向の撫でを施されている。99は口径17.5cm、98と同様の形態をなす。口端部の施文は2条の凹線で、頸部屈曲部内面の上面にやはり凹線状が1条巡る。頸部直下の外面には3条の凹線を施した後、二枚貝腹縁による刺突列点文を刻んでいる。口頸部内外面の横撫での他、調整は不詳である。100・101ともに口端面の施文を持たない個体で、それぞれ口径24.1cm、17.2cmを測る。100では口端部上下端をつまむように横撫でして肥厚させた結果、口端面に凹線状の窪みが1条巡っている。101には口端部の肥厚はみられないが、口端面は横撫でによる僅かな凹面をなしている。頸部外面は強く横撫でされ、胴部との明瞭な境が稜として残っている。102～105は頸部に刻み目突帯を持つものである。102は口径23.5cm、口端部を僅かに上方につまみ上げ、端面に幅広の凹線を1条巡らせる。口頸部内外面は横撫で、胴部外面はヘラ状工具により縦方向に撫でられている。103は内湾気味の口縁部が外上方に立ち上がり、端部上面を玉縁状に丸く肥厚させている。口径29.1cmを測る。突帯は屈曲部直下に貼られ、指先大の押圧施文を施されている。押圧部には布目が明瞭に観察される。104は口径28.8cm、この個体も口端部を僅かにつまみ上げられているが、摩滅のため不明瞭になっている。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面は不詳、内面には斜め方向の撫でが一部看取される。105は口径27.1cm、胴部最大径26.4cmを測る。僅かに外方に開いた直立気味の口縁部下位に、断面三角形の低い刻み目突帯が貼付られている。口端部は水平な平坦面をなしている。口頸部外面、口縁部内面は横撫で、他の部位は斜め、ないし縦刷毛目で調整されている。胴部内面には指頭圧痕がみられる。胎土、焼成は、他の多くの土器群とは際だった違いをみせており、灰褐色の色調をなす。東・南部九州の影響を強く受けた甕である。

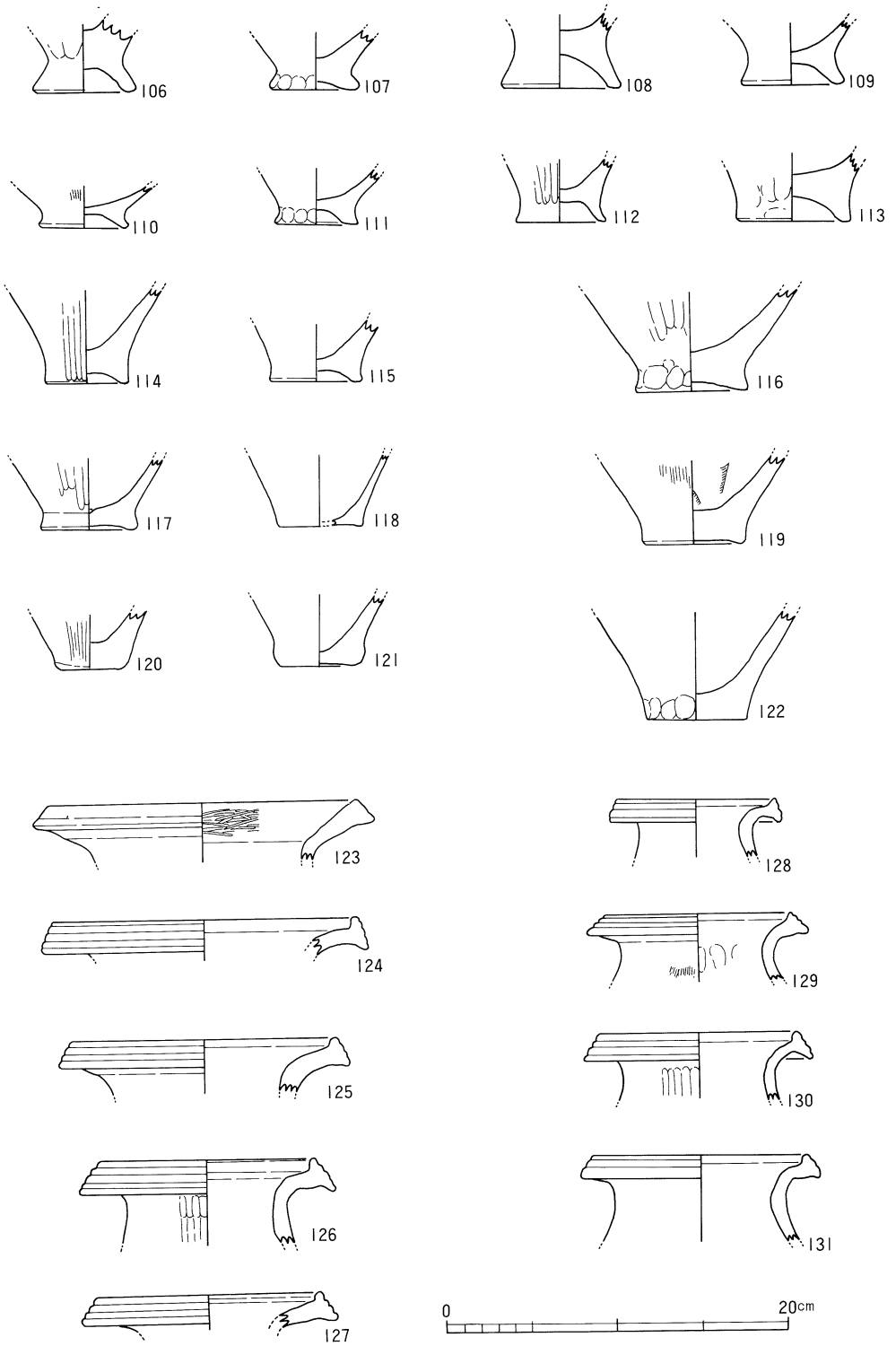
106～122は底部片である。106・108・109が典型例であるが、くびれの上げ底を呈するもの、大きくはくびれずに上げ底を呈するもの113～115、上げ底というよりも若干の窪み底になるもの116～119、平底の120～122等がある。これらのうち、120・121は他にくらべて、より後出の色彩が濃いものである。

壺（123～136）　123～131は口縁部、ないし口頸部片である。口端面に施文を持たないものと、凹線文を持つものとがある。これらの壺の口縁部外面は、口端部下端、頸部上位を強く横撫でする結果、凸部がみられる例が多いことが特徴的である。

123は口径18.2cm、口端部下端をつまむように横撫でして下方に肥厚するが、端面に施文は行われない。口端部周縁内外面、および口縁部外面は横撫で、口縁部内面は横方向の細か



図－49　包含層出土弥生式土器(1)



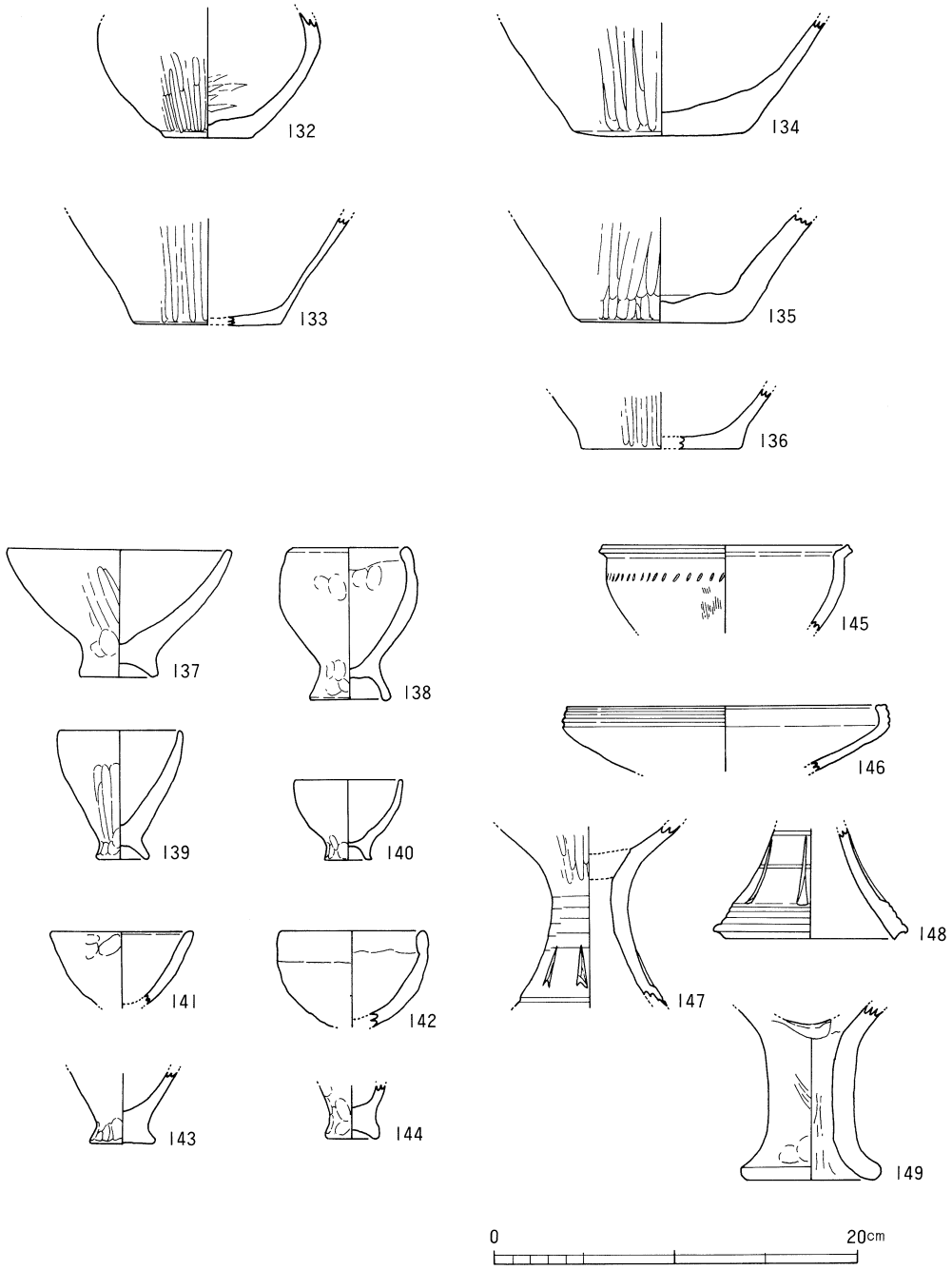
図－50　包含層出土弥生式土器(2)

いヘラ磨きで調整されている。124は口径18cm、口端部上方の肥厚は内面基部に明瞭な稜を持って立ち上がっている。端面には5条の凹線が巡る。口端部周縁の内外面は横撫で、その他の部位の内外面には縦刷毛目がみられる。125は口径15.7cm、4条の凹線を持つ。口縁部内外面ともに横撫で、頸部内面は縦方向に撫でられる。126は口径12.7cmを測る。上下方への肥厚や、口縁部外面の起伏が顕著で、上方立ち上がり基部の内面には稜を持っている。口端面には4条の凹線が施文されている。口縁部内外面ともに横撫で、頸部外面は縦方向に磨かれる。127は口径13.4cm、焼成が堅緻なこともあって、口端面の3条の凹線は非常にしっかりしている。128は口径9.3cm、上下方に肥厚した口端部外面には3条の凹線が巡る。口縁部内外面ともに横撫で、頸部内面は縦方向の撫で、外面の調整は摩滅のため不詳であるが、口縁部の大きく湾曲した部分に刷毛目原体の小口と思われる痕が数箇所観察され、縦刷毛目調整が行われていたものと考えられる。129は口径11cm、口端面の3条の凹線はしっかりしている。口縁部内外面、頸部外面の上位は入念に横撫でされ、したがって口縁部外面の凹凸も顕著である。頸部外面の下位には縦刷毛目が、頸部内面には縦方向の撫でがみられる。130は口径11.8cm、口縁部外面の横撫では一気に行われており、他の個体と異なって口縁部外面の凹凸はみられない。口端面の凹線は3条施されている。頸部外面には縦ヘラ磨きが、他の部位は内外面ともに横撫でされている。131は口径12.7cm、2条の凹線文を口端面に持つ。二次的に火熱を受けたものと思われ、器表面の損傷が著しい。胎土には砂粒を多く含み、大きなものでは径7mmに達するものも含まれている。

132～136は壺底部、または下半部片である。132は小型壺の下半部、底部は僅かに突出した平底で、径4.8cm、残存高7.3cmを測る。外面は縦ヘラ磨き、内面底部寄りは板状工具により斜め方向に掻きとられている。134～136はいずれも平底の底部片である。133は底径8.2cm、底部から立ち上がりに至るまで極めて薄く仕上げられている。立ち上がり外面は縦ヘラ磨き、内面は削り上げられている。134は底径9.4cm、立ち上がり外面は縦ヘラ磨き、内底面から立ち上がりにかけては不定方向の撫でが看取される。135は底径9.3cmを測る。外面立ち上がりは縦ヘラ磨き、内底面は未調整のままで凹凸が激しい。立ち上がり内面は斜め方向に掻きとられている。136は底径8.6cm、これも比較的薄くつくられている。外面立ち上がりは縦ヘラ磨き、内面は縦方向に削られた後、撫でられる。

ミニチュア土器（137～144）　器高10cm未満の手捏ねによる土器群で、様々な形態をとるが、これらの器型においても甕と同様にくびれの上げ底を持つものが多い。

高坏（145～148）　145は口径13.6cm、鉢に分類したほうが良いかもしれない。短く折り曲げられた口縁部は上端部を僅かにつまみあげ、端面には1条の凹線が巡っている。頸部直下には右上がりの刺突列点文を施されている。口頸部内外面は横撫で、列点文以下の外面には縦刷毛目が一部看取される。内面の調整は不詳である。146は口径17.7cm、僅かに内傾する短い口縁部外面には3条のしっかりした凹線を施され、水平な端面にも1条の凹線状の窪



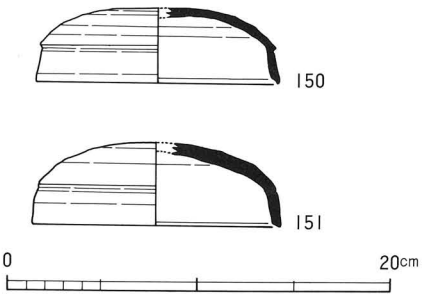
図－51　包含層出土弥生式土器(3)

みが巡っている。坏部外面には縦方向の、内面には斜め方向のヘラ磨きが僅かに観察できる。147は脚柱部から坏部下位の破片である。脚柱部上位には、非常に鋭い工具による沈線が5条巡っているが、螺旋状に連続して施されたものではなく、1条ごとの施文である。起点と終点は、どの沈線においても食い違いをみせている。裾部付近には1条の凹線が看取でき、この凹線と沈線間に矢羽根状の透かしが施文される。破片には2方向の透かしが残存しているが、9方向に復原され得る。坏部と脚部の間には、粘土板の充塡剥離痕が明瞭に観察できる。坏部外面には縦方向のヘラ磨きが看取できるが、その他の部位については不詳である。脚部内面にシボリ痕が残っている。148の脚片は裾径10.7cmを測る。脚端面に1条、裾部に4条の凹線が施されており、内端で接地する。細長い矢羽根透かしは7方向に施文され、矢羽根の頂点と中位に、それぞれ2条の沈線が巡っている。横撫で調整されるのは凹線文施文部のみで、外面の脚柱部には縦ヘラ磨きが僅かに認められる。また、内面は裾端部まで横方向にヘラ削りされている。

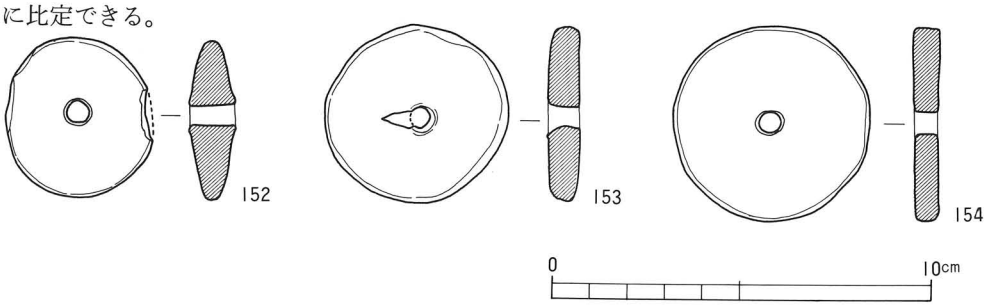
支脚（149）　両開きの円筒上部の片面を「U」字状に切り欠いた支脚で、裾部径7.7cm、残存高9.7cmを測る。外面は粗い撫で、内面にはシボリ痕が観察される。

須恵器（図52）

蓋坏（150・151）　蓋が2点出土している。150は口径12.7cm、器高4cmを測る。天井部と口縁部の間に明確な稜を持ち、口縁部は僅かに外方に開く。斜めに傾いた面をなす口端部は横撫でによる段状の稜をなすが、稜そのものは甘い。天井部外面は、その3/4の範囲をヘラ削りされている。轆轤の回転方向は逆時計方向である。151は口径13cm、器高4.4cmを測る。天井部と口縁部との境には凹線状が1条巡っている。口端部は若干傾いた平坦面をなす。天井部外面の2/3を回転ヘラ削りされている。轆轤は時計方向に回っている。これらの坏は6世紀初頭から前半期に比定できる。



図－52　包含層出土須恵器



図－53　包含層出土土製紡錘車

土製品（図53）

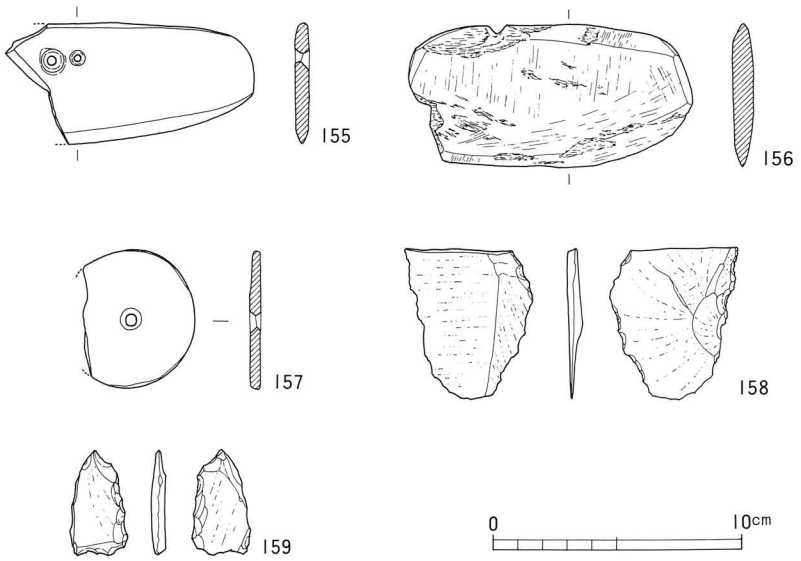
紡錘車（152～154）　土製の紡錘車が3点出土している。152の平面形は4.2×3.9cmの楕円形で、最大厚1.2cmの紡錘形断面をなす。中央部の径6㎜の穴は焼成前に穿たれている。重量、17.3gを量る。153・154ともに平板な円形粘土板の中央部に焼成前の円孔を持つ。153は直径4.8cm、154は5.1cm、重量はそれぞれ21.2g、24.6gを量る。

石器・石製品（図54）

石庖丁（155・156）　出土した2点のうち、156は未製品である。155は約1/2を欠失しており、現存長9.9cm、幅4.8cm、厚さ5㎜を測る。外湾刃楕円形で、穿孔を中央背部寄りの2箇所に持つ。刃の研ぎ出し、穿孔ともに両面から行われている。未製品156の平面形は、ほぼ完成しており、楕円形状を呈している。刃部の研ぎ出しも完了している。全長11.4cm、幅5.7cm、厚さ8㎜、重量95.4gを測る。研磨は粗く、その方向は明瞭に観察できる。この後さらに穿孔して、再研磨が施されて製品として完成されるものと考えられる。両者ともに緑色片岩を素材としている。

紡錘車（157）　緑色片岩製の紡錘車で、一部を欠失している。直径5.5cm、厚さ4㎜に研磨した円板の中央部に径6㎜の孔が両面から穿たれている。周縁の研磨は入念に行われ、円形に磨き出されているが、両面の研磨は部分的な凸部を擦り落としているのみである。現況重量22.6gを量る。

剥片石器（158・159）　スクレーパー状の打製石器が2点出土している。いずれもサヌカイトの剥片を素材とし、簡単な剥離調整によって刃部をつくり出している。



図－54　包含層出土石器・石製品

3．小　結

2次調査においては弥生時代中期後葉以降の集落関連の遺構が多く検出されている。ここでは各遺構の時期、分布について再整理を行っておきたい。中・後期を通じた遺構分布をみてみると、遺構密度は調査区中央部以南に濃厚で、北部では希薄である。西隣接地における愛媛大学埋蔵文化財調査室による調査、「文京遺跡10次調査」でも同様の遺構分布がみられ、①くわえて南西隣接地での「1次調査」における中・後期住居址群の検出事例②を考えると、城北地区構内の南西部域では、中・後期を通じて本調査検出の掘立柱建物群以南に集落としての拡がりが想定される。ただし、次章「3次調査の概要」で詳述されるように文京集落を総合的に見た場合、中期後葉の集落の中心は本調査地のさらに北東部に展開している。

2次調査で検出された遺構のうち竪穴住居址は計9棟、そのうち中期後葉に比定されるものは調査区南東端の円形住居址ＳＢ−1の1棟のみで、続く後期初頭段階に確実に比定されるものが隅丸方形ないしはそれに近いプランをなす住居址ＳＢ−3・5の2棟である。出土遺物に若干の不安定さはあるが、円形住居址ＳＢ−4も同時期の遺構とみてよかろう。ＳＢ−3を切るＳＢ−2に関しては遺物の出土をみていないものの、包含層出土の遺物が殆ど中期後葉から後期初頭段階のもので占められることから、ＳＢ−3より新しくなるとはいえ、それほどの時期差は考え難い。遺物を出土していない方形、隅丸方形の一群ＳＢ−6〜9も、その規模、プランから後期段階の遺構である可能性が高い。

一方、掘立柱建物ではＳＢ−11が中期後葉に比定され、同じく正方位をとり、類似プランをなすＳＢ−13・14も同時期に併存していたものと考えられる。これら3棟と類似規模ながら、方位を異にするＳＢ−10・15はＳＢ−2に切られることから、下限を弥生時代後期初頭におくことができ、なかでもＳＢ−10の柱穴からは中期後葉に比定される甕を出土しており、上限は中期後葉ということになれば、自ずとその年代はしぼられてくる。先述の3棟があまりにも整然と配置されていることからみて、それらと同時併存ということは考え難いにしても、中期後葉から後期初頭の間に存在していたものと考え得る。

これらのことより、文京集落の弥生時代中期後葉には、円形竪穴住居と掘立柱建物という2形態の建物が存在していたことになる。これら建物形態の違いを、一般的にいわれるように居住用の建物としての竪穴住居、貯蔵用倉庫としての掘立柱建物と理解するならば、該期の居住域の西限は本調査地東端のＳＢ−1のあたりまでで、その西北の集落縁辺部に倉庫を配した集落景観の一部が復原され得る。さらに、これら掘立柱建物の建築にあたっての正方位を意識した計画的な配置、またＳＢ−11にみられるような建築時、または廃棄時における柱穴祭祀のような行為等は、集落内における特別な建物としての扱いを象徴している。このような掘立柱建物に伴う柱穴祭祀は、松山平野では弥生時代中期中葉には既に確実な例があり、③文京遺跡の中期後葉の段階には3・7・10次調査でも確認されているようにかなり普遍

的な行為であったものと思われる。穀物貯蔵に伴う穀霊、地霊に対する「まつり」、あるいは火災除けを願っての行為であったのかもしれない。

後期初頭に至ってこの地区では掘立柱建物群が姿を消し、代わって比較的小規模な竪穴住居址群が現れ、居住域としてのひとつのまとまりがみられるようになる。冒頭にも述べたように中期後葉段階の集落の中心が後述の3次調査地にあり、同地区において後期の居住施設が希薄なことをあわせて考えると集落の中心が、本調査区周辺に移動していることが解る。また、この段階の住居址群とともにＳＸ－１のような周溝を伴った祭祀的遺構が検出されていることにも注目しておきたい。この種の遺構は松山平野では、松山市小坂所在の釜ノ口遺跡6次調査で後期後葉の検出例がある。[④] 文京遺跡においては、西隣接地の10次調査で後続する時期、後期前葉の同種の遺構が、[⑤] また3次調査においてもさらに規模の大きな方形周溝状を呈する祭祀的遺構が検出されており、祭祀そのものの内容は不詳ながら、後期段階を通じてこの種の集落内祭祀が存在することが明らかとなったのはひとつの成果といえよう。

注

①愛媛大学埋蔵文化財調査室　『文京遺跡10次調査－文京遺跡における弥生時代遺跡の調査－』　1991

②愛媛大学・松山市教員委員会　『文京遺跡』　1976

③栗田茂敏　「大峰台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会　1989

④西尾幸則　「釜ノ口Ⅵ遺跡」　『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会　1987

⑤前掲注①文献

Ⅲ　3次調査の概要

1．調査に至る経緯と組織

昭和56年11月、愛媛大学学長（当時）伊藤猛夫より、松山市文京町3番・愛媛大学城北地区構内における法文学部校舎新営に伴う埋蔵文化財確認調査願が、松山市教育委員会・文化教育課に提出された。前章でも述べたように愛媛大学城北地区構内は松山市の指定する「67樋又遺物包含地」に含まれる周知の包蔵地にあたる。校舎新営は既存の法文学部校舎の西隣接地に計画されたが、昭和37年5月に松岡文一らにより弥生時代中・後期土器の採集が行われたのはこの既存の校舎建設時のことである。また、前年度調査の「2次調査地」の北東約60mの位置にあたっていることからも遺物包含層のみでなく、さらなる弥生集落のひろがりが充分に予測できる地点であった。

確認調査願の提出を受け、松山市教育委員会は同年12月14日から17日の間、試掘調査を実施した。その結果、弥生時代中・後期の多量の遺物とともに住居址と思われる遺構等が比較的良好な状況で遺存していることが確認された。

これらのことにより愛媛大学、松山市教育委員会の二者は記録保存を目的とした緊急調査を行うこととし、協議の結果、松山市教育委員会を調査主体として愛媛大学の協力のもと、「文京遺跡第3次調査」として本格調査を実施することとなった。調査期間は当初昭和57年1月10日から2月28日の予定であったが、予想を上回る遺構、遺物の検出をみたため愛媛大学側の理解と、積極的な協力を得て3月25日まで期間延長を行った上で調査を終了した。調査は下記の組織で行った。

調 査 地　松山市文京町3番

調査面積　800㎡

調査期間　昭和57年1月10日～3月25日

調査委託　愛媛大学学長　伊藤　猛夫（前任）
　　坂上　　英

調査主体　松山市教育委員会

教　育　長　西原多喜男
教育次長　森田富士弥
〃　二神　貢
文化教育課長　藤原　渉
課長補佐　坪内　晃幸
第二係長　大西　輝昭

調査担当　文化教育課第二係

主　任　西尾　幸則
調査員　池田　学
〃　栗田　茂敏
調査補助員　谷若　倫郎
（現・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター）

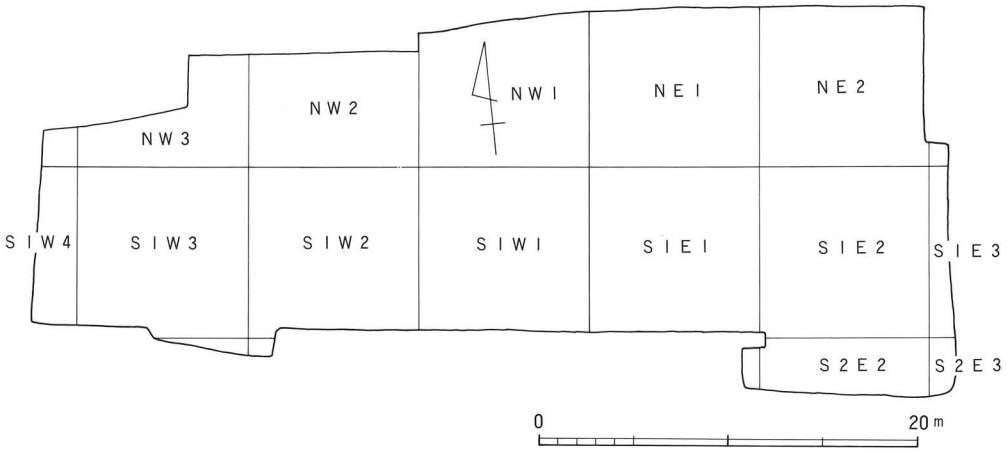
2．遺構と遺物

(1) 層序（図55・56）

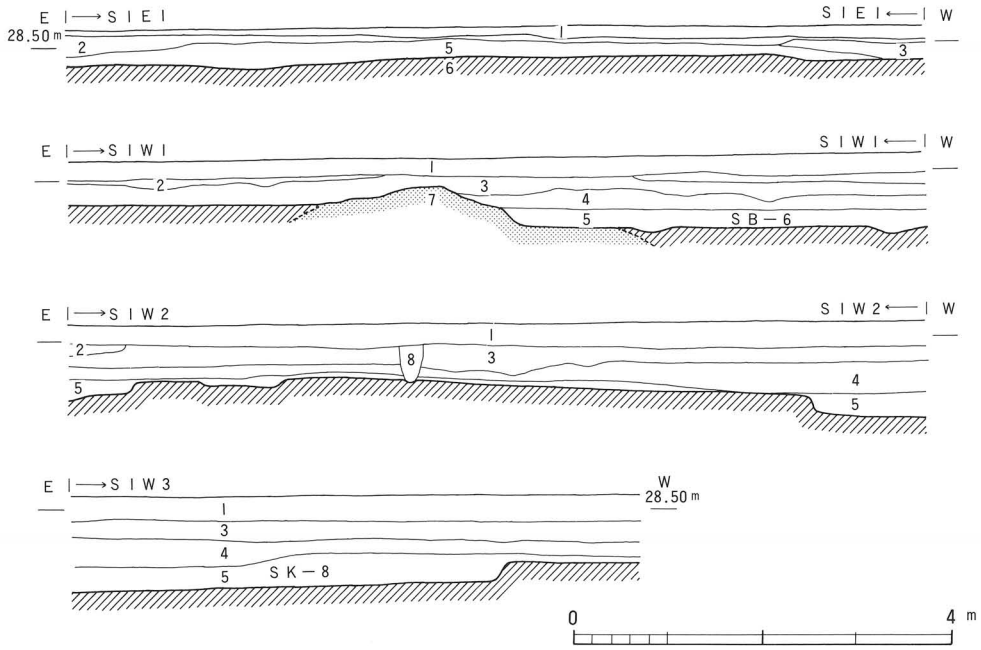
調査地の区割は、2次調査と同様に9ｍごとの大グリッドに分割し、さらにこの大グリッドを3ｍ四方の小グリッドに9分する方法をとっている。

調査地は、明治22年以降同地周辺一帯に設営された陸軍練兵場の諸施設や、昭和22年の愛媛大学附属小学校仮設により、特に北半部を多く攪乱されている。この仮設校舎撤去後、近年においては整地、造成を行い、アスファルト舗装による駐車場として利用されている。したがって、第2層の旧耕土は削平され調査地の西部では消滅し、第1層直下に包含層である第3層が検出されている。この第3層淡褐色シルトと第4層暗褐色シルト、第5層暗褐色粘質土に弥生時代中期後葉を中心とする時期の遺物が包含されている。第3層では散発的な遺物の出土がみられるのみで、包含量は下位の2層に比べて少ない。第4層は第3層と同様の土質ながら、若干暗い色調を呈している。第5層はこの第4層の粘質が強くなった層で、第3・第5層を比べた場合その違いは明確であるが、この間に第4層を介在させると必ずしもその分層は明確には行い得ず、同一土層の漸移的な変化のような印象が強い。いずれにしても、遺物の時期差を明確に反映するような分層とはなり得なかった。

遺構は地山である第6層、黄色シルト上面で検出されたが、2次調査の項でもふれたようにこの黄色シルトは砂礫層の上に乗っており、調査区の中央部では黄色シルトは存在せず、砂礫層が尾根状に隆起したように露出している。遺構も当然この砂礫層を切り込んで構築されているが、遺存の良くない遺構では砂礫層にかかる部分でのプラン検出が事実上不能になっている。



図－55　調査地の区割



1　アスファルト・積土
2　旧耕土
3　淡褐色シルト(包含層)
4　暗褐色シルト(包含層)
5　暗褐色粘質土(包含層)
6　黄色シルト(地山)
7　砂礫(地山)
8　攪乱

図－56　調査地南壁土層図

SB－4
SK－17
SK－10
SB－1
SK－1
SK－9
SB－2
SB－3
SK－3
SK－2
SK－4
SB－5
SK－5
SB－6
SK－20
SK－7
SB－7
SK－6
SK－8
SX－1
P－66
P－65
P－58
0
10m

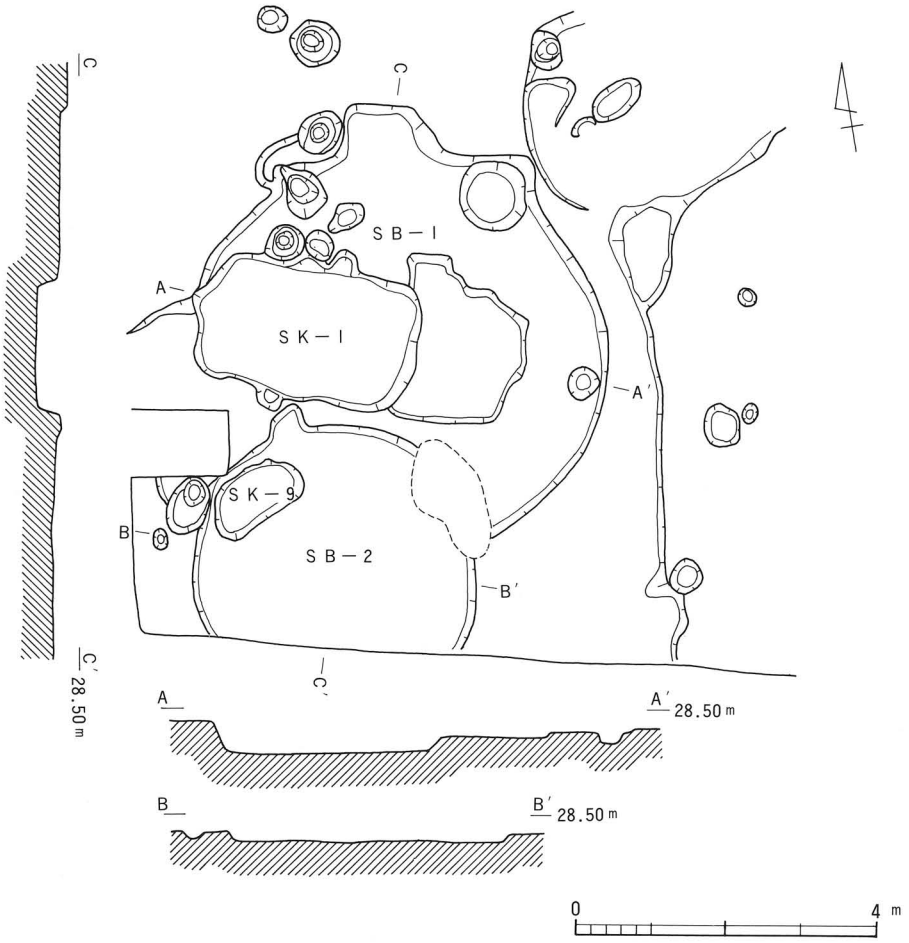
図－57　遺構配置図

(2) 竪穴住居址

ＳＢ－１・２（図58）

調査区南東部で検出された円形竪穴住居址である。ＳＢ－１はＳＫ－１を切り、ＳＢ－２に切られている。直径5.6ｍの円形で、北部に不整形な張り出しを持つ。比較的遺存の良好な北部で壁高10cmを測る。床面より柱穴数基が検出されているが、本住居址に確実にともなう主柱穴については不詳である。

ＳＢ－１を切るＳＢ－２は、直径3.8ｍ、壁高10cm程度の遺存である。楕円形土壙ＳＫ－９を切っている。床面での柱穴の検出はみられなかった。ＳＢ－１・２ともに周壁溝を持たない。ＳＢ－１は弥生時代中期後葉、ＳＢ－２は鉢口縁部片１点のみの出土であるが、ＳＢ－１と大差ない時期の遺構であろう。



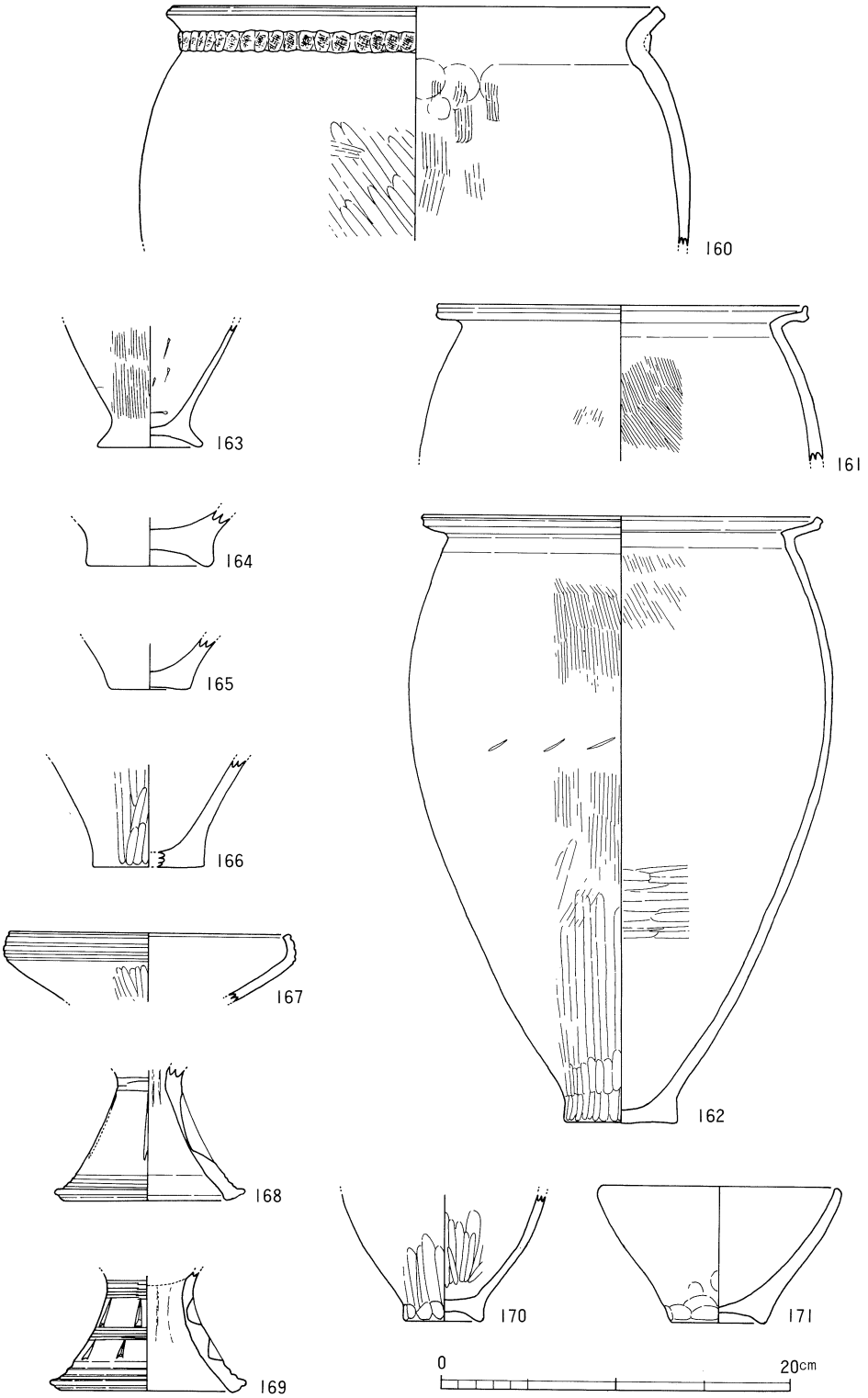
図－58　竪穴住居ＳＢ－Ｉ・２

ＳＢ－１出土遺物（図59～62）

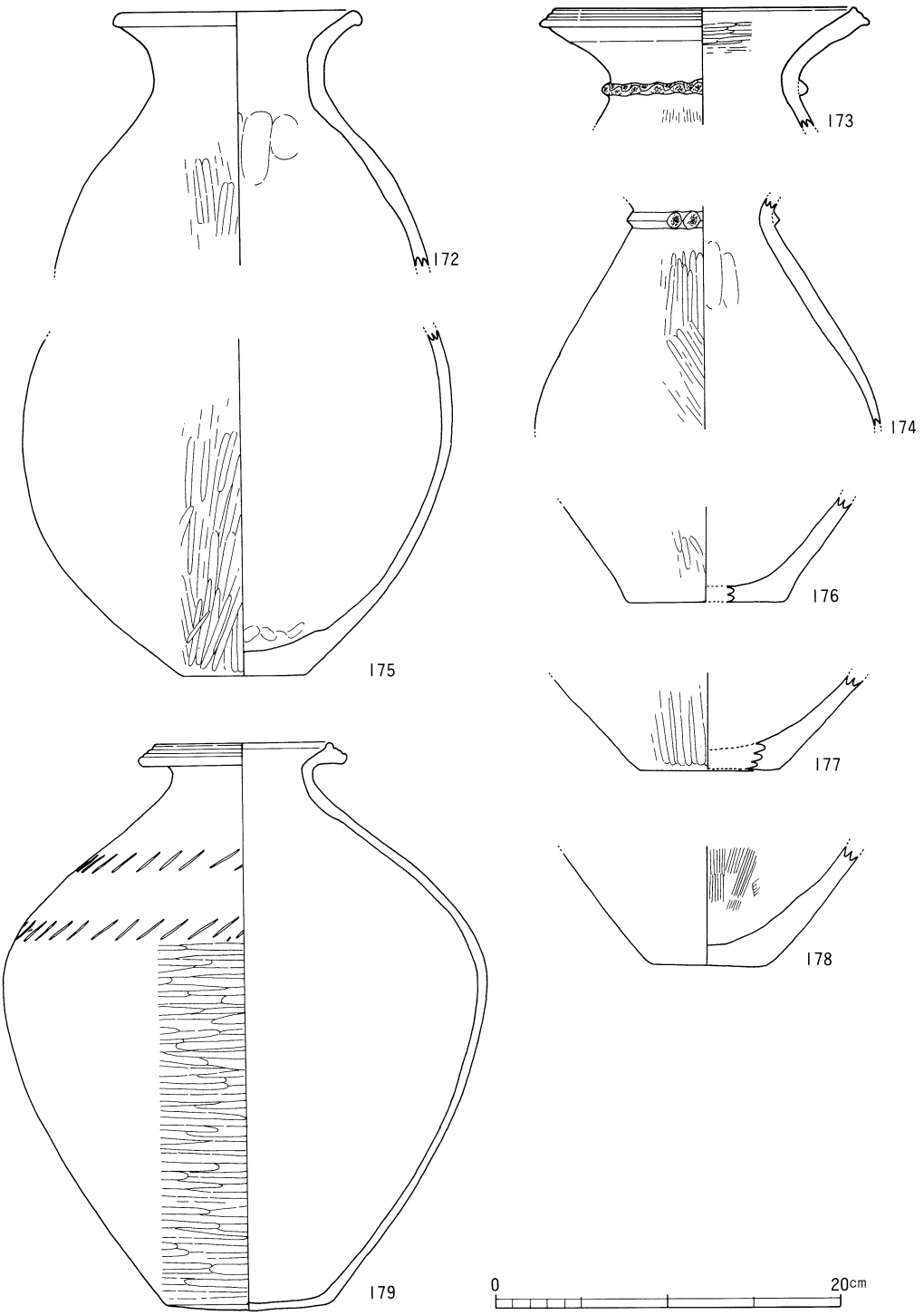
甕（160～166）　復原完形品１個体を含む７点が出土している。160は口径28cm、胴部最大径31.7cmを測る上半部である。頸部に布目痕を持つ圧痕文突帯を貼付けられている。外上方に短く開いた口縁部の端面には、横撫でによる凹線状の窪みが巡る。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面は斜め方向にヘラ磨きされている。胴部内面は縦刷毛目、頸部内面に指頭圧痕が残っている。161・162ともに、よく似たプロポーションを呈している。161は口径20.7cm、水平に近く屈曲した口縁部は、端部をつまみ上げて上方に肥厚、端面に１条の凹線を施している。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面には縦刷毛目の後の縦ヘラ磨きが部分的に観察できる。内面には斜め方向の刷毛目調整を施されている。162は器高35.3cm、口径22.4cm、胴部最大径24.2cm、底径6.6cmの平底の甕である。胴張りを器高中位よりも上におき、水平に近く屈曲した口縁部は、端部をつまみ上げて上方に肥厚、端面に凹線が１条巡る。頸部屈曲部の上面にも浅い凹線が１条施されている。また、胴張り部直下の外面には右上がりの「ノ」の字状の刺突文が刻まれている。口頸部内外面ともに横撫で、外面胴部上半は縦刷毛目、下半は縦ヘラ磨き、内面は刷毛目の後撫でられている。なお、下半部の一部に横方向のヘラ磨きが看取される。163～166は底部片であるが、種々の形態が揃っている。163は粘土板充塡による比較的低いくびれの上げ底で、底径5.8cmを測る。内外面のくびれ部以下は横撫で、その他の外面は縦刷毛目、内面は削り上げられている。164は大型甕の底部片、底径7.4cmのくびれを持たない上げ底である。165は底径5.8cmの僅かな窪み底、166は復原径6.6cmの平底である。

高坏（167～169）　坏部片167は口径18cm、比較的浅い坏部から内傾する口縁部外面には４条の凹線が施される。端部は平坦な面をなす。口縁部外面ともに横撫で、坏部は内外面とも縦ヘラ磨きされている。168の脚部片は裾径11cm、残存高7.7cmを測る。内下方に傾斜した裾端部は内外方に肥厚、端面に浅い凹線が１条巡る。裾部周縁にも３条の凹線が施される。脚部上端には３条の沈線が遺存、この沈線と凹線の間に矢羽根透かしが２箇所確認されるが、５方向に復原され得る。器面の損傷が激しく、調整は不詳である。169は裾径11.2cm、残存高6.8cm、内端で接地する裾端部は外方に肥厚、端面に１条の凹線が巡る。裾部周縁には３条の凹線が、脚中位と上端部にそれぞれ５条の鋭い沈線を逆時計回りに引き、沈線間、中位の沈線と裾部の凹線との間に矢羽根透かしを施文している。上段は８方向、下段は10方向となっている。この矢羽根の切り取りと沈線とは同一の工具によるものと思われる。裾部周縁の外面、および内面は横撫で、外面のその他の部位は縦ヘラ磨き、内面脚柱部にはシボリ痕が残っている。また、坏部との接合部には充塡粘土板の剥離痕が観察される。

鉢（170・171）　170は小型壺、または甕の下半部の可能性もある。底径4.4cm、残存高7.3cmを測る。低い上げ底の周縁部内外面には指頭痕が残る。体部は内外面ともに縦方向のヘラ状工具による撫でを施される。171は器高7.8cm、口径13.4cm、底径５cmを測る。低い上げ底



図－59　ＳＢ－１出土遺物(1)



図－60　ＳＢ－Ｉ出土遺物(2)

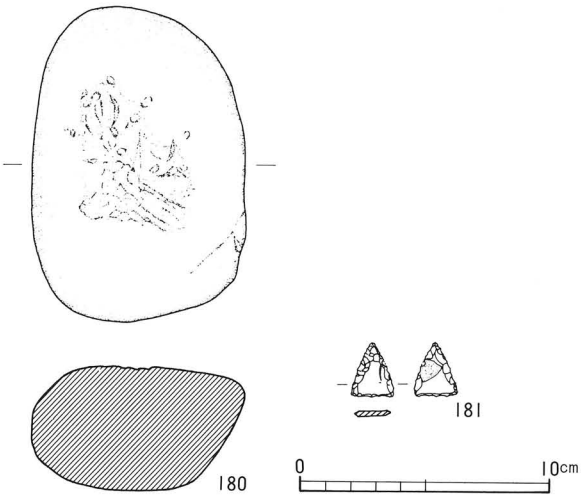
から外上方に直線的に開き、口縁部で僅かに内湾、端部を丸く収める。体部内面は横方向に削られ、その他の部位は内外面とも撫でられる。底部周縁、口縁部内面には指頭痕が看取される。

壺（172～179）　172は口径13.2cmを測る上半部片で、張りの小さい肩部から直立気味の短い頸部を経て外反する口縁部は端部を丸く収める。口頸部内外面は横撫でされ、頸部以下の外面は縦方向にヘラ磨きされる。173は口径17.4cm、直線的に外上方に開いた口縁部は端部周縁を強く横撫でした結果、上下方に若干肥厚気味となる。端面には２条の凹線が巡り、頸部には布目押圧の突帯を貼付けられる。口頸部外面は横撫で、突帯以下の外面には縦刷毛目が窺える。口縁部内面は横方向に細かくヘラ磨きした後、端部付近を強く横撫でしている。174は頸部から肩部の片であるが、胴張りを器高中位以下に持つものと思われる。頸部に巻かれた断面三角形の突帯には部分的に２個一対の押圧を施される。胴部外面は縦、ないし斜め方向のヘラ磨き、内面は撫でられている。175は壺の下半部で、底径7.2cm、胴部最大径25.1cm、残存高20cm、平底の底部に球形状の胴部を持つ。外面には縦ヘラ磨きが、内面底部は雑な撫で、立ち上がりを指頭による縦撫で、以上の部分にはヘラ状工具による横方向の撫でを施している。176～178はいずれも平底の底部片である。復原完形品179は器高33.5cm、口径10cm、胴部最大径28cm、底径9.7cmを測る。凸レンズ状の平底に、大きく肩の張った肩部、短い頸部から強く外反した短い口縁部は水平に近く開く。口端部は上下方に肥厚し、端面に３条の凹線を施す。肩部と、胴張り部直上に11本単位の刷毛目状調整具による「ノ」の字状列点文を刻んでいる。口頸部内外面は横撫で、外面の肩部から胴張り部までは縦刷毛目の後撫で、以下は横方向に入念にヘラ磨きされている。内面肩部は指頭撫で、胴部中位を縦刷毛目、以下を削り上げている。底部も含めて、全体に極く薄くつくられている。

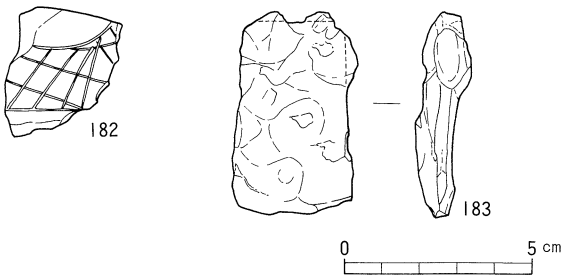
敲石（180）　偏平な砂岩の転石を敲打具として利用している。使用されているのは、１面の平坦面のみである。814.2ｇを量る。

石鏃（181）　サヌカイト製の平基三角形鏃である。薄く剥ぎとった剥片の縁辺部のみを調整、両面に主剥離面が残っている。一部を欠損しており、現況重量1.0ｇを量る。

絵画土器（182）　ヘラ描きの施文を持つ土器小片である。1.6cm間隔でひかれた２条の湾曲する沈線の間を斜格子で埋めている。シカの胴部、または家屋を描いたものと思われる。



図－61　ＳＢ－１出土遺物(3)

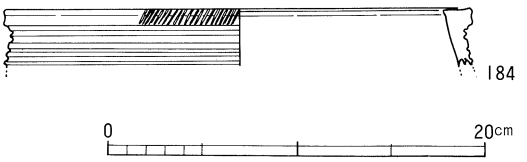


図－62　ＳＢ－１出土遺物(4)

鉄斧（183）　全長５cm、基部幅2.7cm、刃部幅３cm、厚さ４mmの短冊型をなす小型の板状斧で、現況重量26ｇを量る。

ＳＢ－２出土遺物（図63）

鉢（184）　復原口径24.9cmを測る鉢形土器の口縁部片である。外方に短く、水平に張り出した口端部は、端面に斜線の刻みを施されている。口縁部外面には凹線が４条まで確認できる。



図－63　ＳＢ－２出土遺物

ＳＢ－３・５（図64）

ＳＢ-１の北西２ｍで、切り合って検出された円形竪穴住居址２棟である。ＳＢ-５がＳＢ-３、長方形土壙ＳＫ-５を切り、ＳＢ-３はＳＫ-３、ＳＫ-４を切っている。

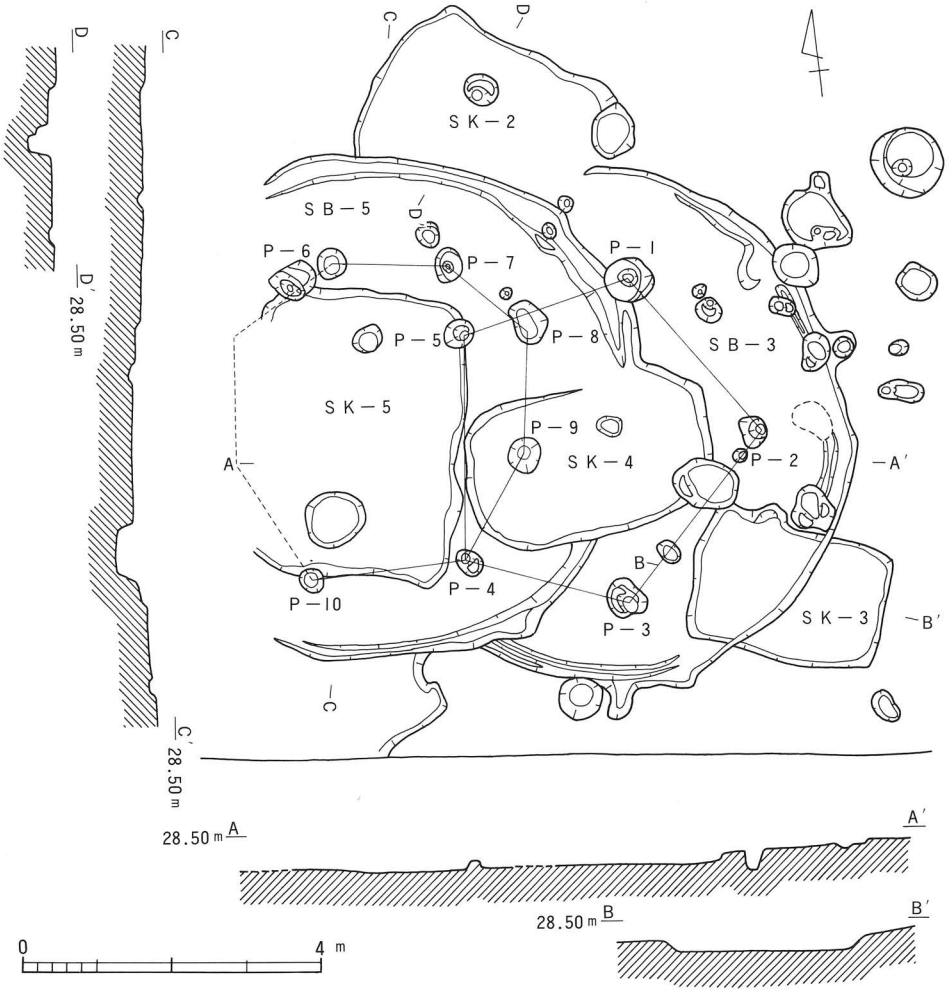
ＳＢ-３は直径6.8ｍ、最も遺存の良好な部分で壁高10cmを測るが、立ち上がりが消滅している部分もある。中央ピットＰ-６を中心に、Ｐ-１～Ｐ-５の主柱穴構造となる。柱穴は径30～60cm、深さはいずれも30cm前後、柱間2.4～2.9ｍを測る。周壁溝は幅約20cm、深さ５～10cmで、部分的に途切れながら巡っている。

ＳＢ-５はＳＢ-３と同規模で、直径6.8ｍを測る。東３/４部分は黄色シルトを、西１/４部分は黄色シルト面に露出した下位の砂礫層をベースとしているが、この部分での明確なプランは検出できなかった。主柱穴は８本で構成されるものと思われ、これらの柱穴は径30～50cm、深さは25～30cm、柱間1.5～２ｍを測るが、Ｐ-４をＳＢ-３と共有し、同規模、類似プランであることから、ＳＢ-３が建て替えられたものと考えられる。

ＳＢ-３は出土の大型甕から弥生時代中期後葉に、またＳＢ-５は時期決定に有効な遺物を欠くが、建て替えとの判断が許されるならば、ＳＢ-３と大差ない時期の遺構であろう。

ＳＢ－３出土遺物（図65・66）

甕（185）　下半部を欠失している。口径30.2cm、胴部最大径32.5cm、残存高29.5cmを測る大型甕である。水平に近く屈曲した口縁部は端部を上下方に肥厚、端面に２条の浅い凹線が施される。内面屈曲部の上面にも１条の浅い凹線が巡る。頸部外面には刻み目突帯が貼付けられている。口頸部は内外面ともに横撫で、胴部は内外面ともに縦ないし斜め方向の刷毛



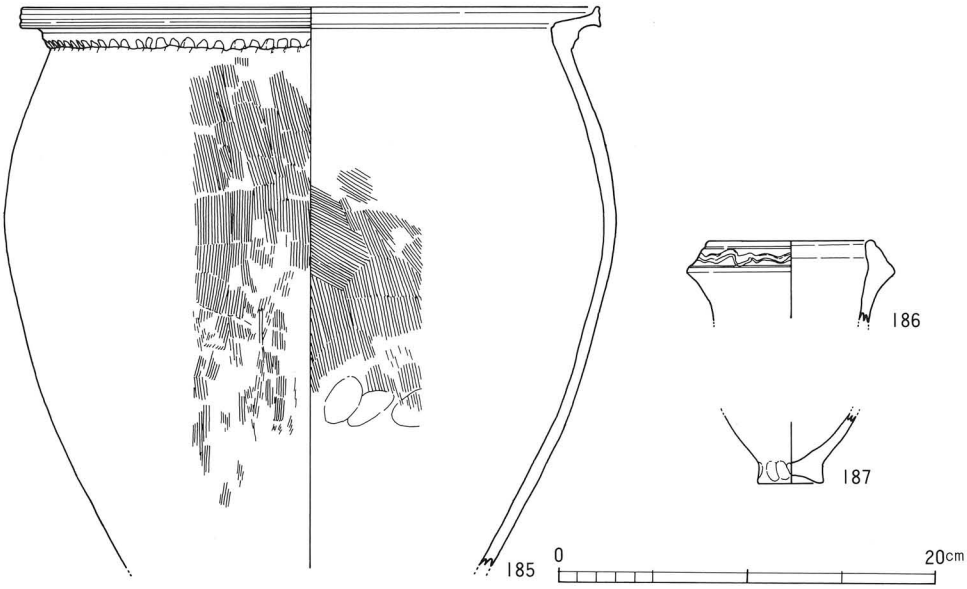
図－64　竪穴住居ＳＢ－３・５

目。外面の下位はその後磨かれ、内面の下位は撫でられる。

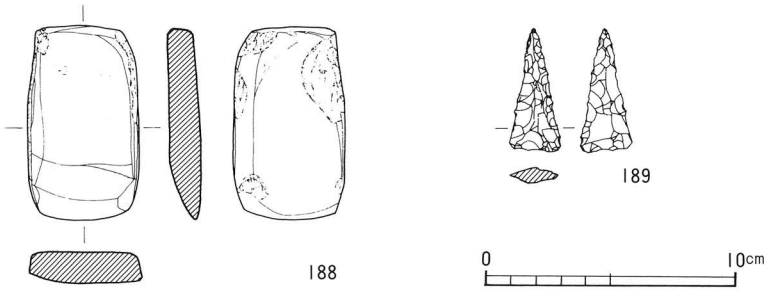
壺（186）　口径8.9cmを測る口頸部片である。複合口縁によく似た形状をなす口縁部の外面には、植物の茎を束ねたような工具による粗い波状文が施されている。同種の小型壺口頸部は松山市祝谷所在、六丁場遺跡の弥生時代中期中葉の包含層、第５層よりの出土例が報告されている。

ミニチュア土器（187）　上げ底の底部を持つ鉢形土器である。底部の周縁には指頭痕が残っている。

石斧（188）　全長7.7cm、幅4.5cm、厚さ1.2cm、重量96.4ｇを測る偏平片刃石斧である。隅丸長方形状に周縁を研磨し、片面より刃付けを行っている。石材は緑色片岩を用いている。



図－65　ＳＢ－３出土遺物(1)



図－66　ＳＢ－３出土遺物(2)

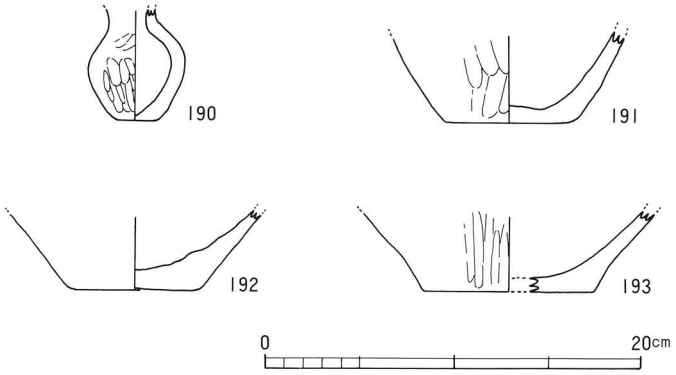
石鏃（189）　平基三角形鏃で、全長4.9cm、基部幅2.1cm、厚さ６mmと細長い形態である。剥離主面を残さず、横断面紡錘形に入念につくられている。重量4.1ｇを量る。石材はアプライトを用いている。

ＳＢ－５出土遺物（図67・68）

ミニチュア土器（190）　口縁部を欠くが、残存高5.9cm、底径２cm、胴部径5.3cmを測る壺形をなす。外面下半部はヘラ磨きされている。

壺（191～193）　いずれも平底の壺底部片である。順に底径6.8cm、７cm、９cmを測る。

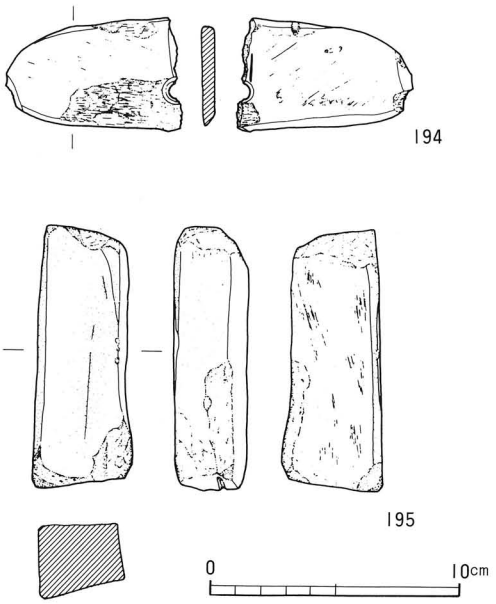
石庖丁（194）　穿孔を刃部寄りに持つ石庖丁であるが、半折しており現況長6.9cm、幅4.4



図－67　ＳＢ－５出土遺物(1)

cm、厚さ5.5mmを測る。石鎌からの転用製作途中で折損したものと思われ、破断部刃側の長さ６mmにわたる小突起状の部分には、刃付けが行われておらず、擦り潰した平坦面をなしている。石材は緑色片岩である。

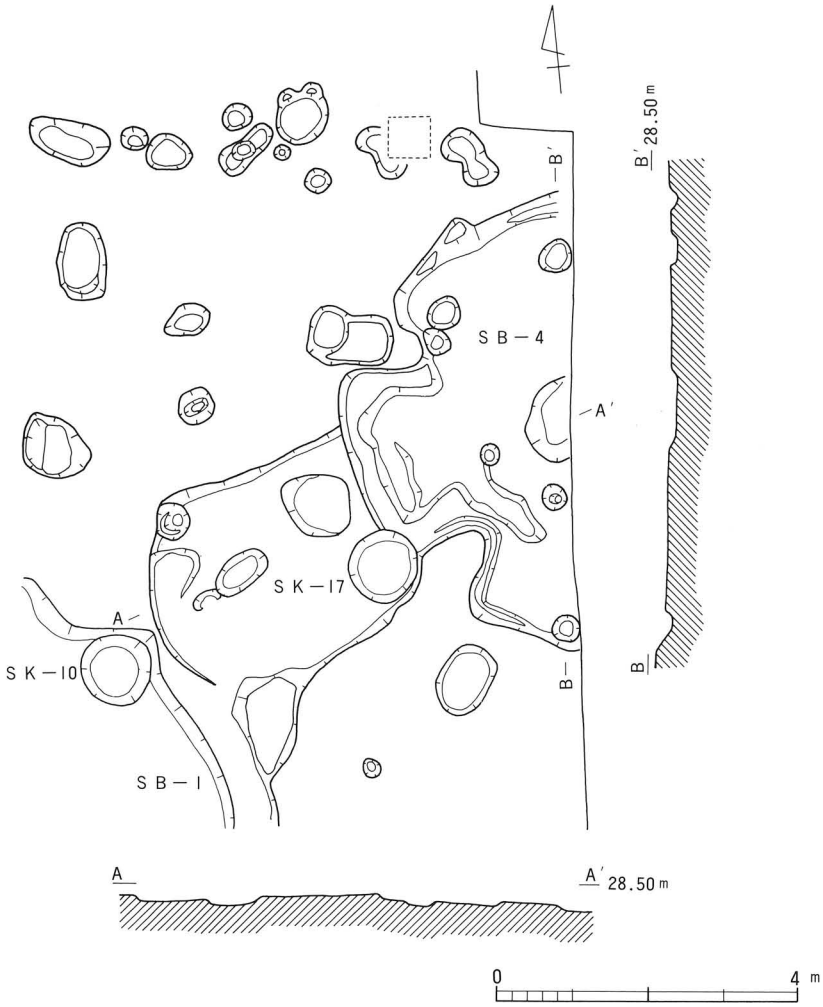
砥石（195）　長さ10.3cmの方柱状の砥石で、砂岩製である。４面を平面研磨用に、片方の小口部を筋砥石として用いている。



図－68　ＳＢ－５出土遺物(2)

ＳＢ－４（図69）

調査区東端で、その西半部が検出された円形プランを基本とする住居址で、複数の隅丸方形状の張り出しを持つ。いわゆる「花弁型住居」となる可能性がある。直径6.2ｍで、中央部に径１ｍ、深さ10cm前後の不整形の窪みを有する。立ち上がり12cm程度の遺存である。立ち上がり基部に小溝を持つが、部分的に途切れる場合がある。張り出しは、高床部を形成せず、床面はフラットである。床面より６基の柱穴が検出されているが、いずれも深さ10cmを前後する程度の浅いもので、主柱穴については不明とせざるを得ない。遺物の出土はみられなかった。



図－69　竪穴住居ＳＢ－４

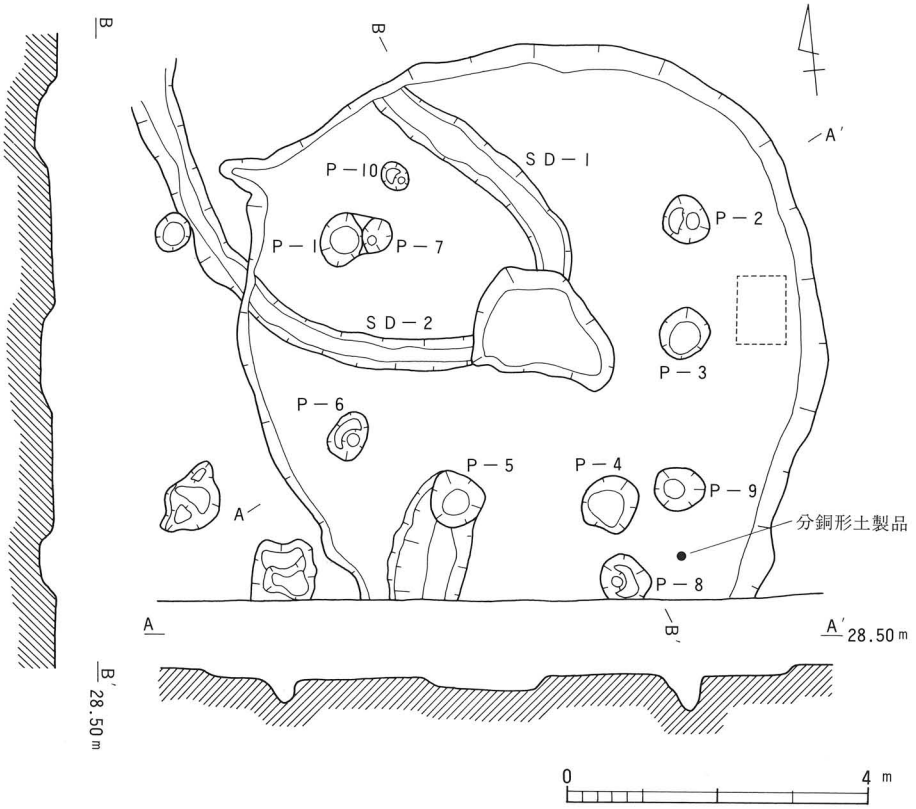
ＳＢ－６（図70）

調査区のほぼ中央、南寄りで検出された円形プランを基本とする住居址である。東西径7.9ｍ、南北7.5ｍ分が検出されている。壁高10～15cmの遺存で、周壁溝は持たない。床面中央部の1.35×1.9ｍの不整形の窪みは深さ10cmを測り、埋土中より炭化物の検出をみており、炉址と考えられる。床面北西部は、炉を中心として幅40cm、深さ10～15cmの２条の溝によって「U」字状に区画される。この区画溝のうち、ＳＤ－２は周壁外に延び、ＳＢ－７に切られる。床面より10基の柱穴が検出されており、このうちＰ－１～Ｐ－６までの６本が主柱穴になると思われるが、配置は必ずしも規則的ではない。Ｐ－２～Ｐ－５が20～30cmの深さと比較的浅いのに対して、Ｐ－１・２は50cmと深くしっかりしており、この深さがＰ－１・Ｐ－２間4.7

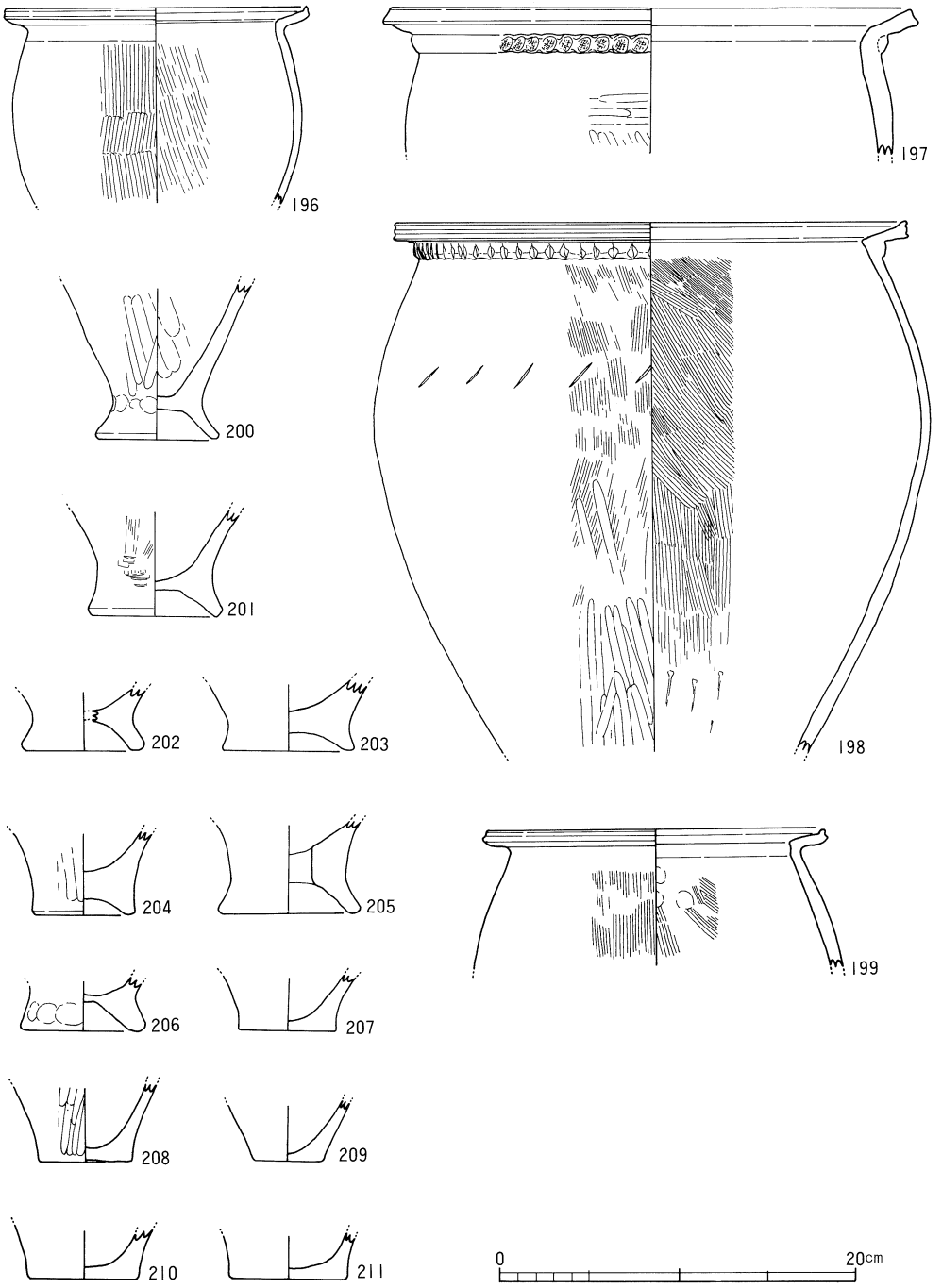
mととりわけ長くなることに関係しているのかもしれない。また、平面形は円形プランを基本とするが、南部が幾分細長く、全体的に「イチヂク」状の形態をなしており、南部に入口を持っていたものと思われ、もしそうであればP－8、およびP－5から南方へ延びる浅い溝は、何らかの入口施設に伴うものであった可能性がある。なお、この推定入口部分のP－8の東60cmの位置で、分銅形土製品が1点出土している。弥生時代中期後葉の遺構である。

ＳＢ－6出土遺物（図71～74）

甕（196～211）　口頸部、ないしは上半部片4点と底部片11点を出土している。196は口径16.8cm、胴部最大径16.3cmを測る。口端部を上方につまみ上げ、拡張した端面には浅い凹線が1条巡る。頸部屈曲部上面にも1条の凹線を施されている。口頸部内外面ともに横撫で、胴部は内外面ともに幅広の縦刷毛目であるが、典型的な刷毛目とヘラ磨きとの中間のような調整である。199も口端部を上方につまみ上げられ、端面に1条の凹線を持つが、頸部屈曲部上面の凹線は持たない。頸部は強く横撫でされ、内面には明瞭な凹面が巡る。口径19cm、胴径は口径を凌ぐ。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面は縦刷毛目、内面は斜め方向の刷



図－70　竪穴住居ＳＢ－6



図－71　ＳＢ－６出土遺物(1)

毛目で調整されている。197・198は、ともに頸部屈曲部外面に刻み目突帯を持つ大型甕である。197は口径29.4cm、口端部は下端部と端面をつまむようにして横撫でされるため、下方に僅かに肥厚した凹面をなす。頸部に貼付けられた突帯は指頭押圧による刻みを施され、押圧部には布目痕が明瞭に残っている。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面は横、および縦方向のヘラ磨き、内面は不定方向に撫でられている。198は口径28.8cm、胴部最大径31.5cm、残存高29.8cmを測る。口端部を上方につまみ上げ、肥厚した端面に2条の凹線、強く屈曲した頸部内面の上面にも凹線が1条巡る。頸部突帯は菱形状に刻まれている。胴張りを器高の上位に持つが、この部分に刷毛目状調整具の小口による「ノ」の字状列点文を施されている。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面は縦刷毛目で、中位以下はその後縦方向にヘラ磨きされる。胴部内面は中位以上を縦刷毛目、以下を縦方向にヘラ削りされている。

底部は平底やくびれの上げ底が多いが、204のようにくびれを持たない上げ底もある。202・204の底面には、粘土板充塡によって塞いだ様子が観察できる。205の底面は焼成後に径2.6cmの円孔を穿たれ、甑として用いられている。

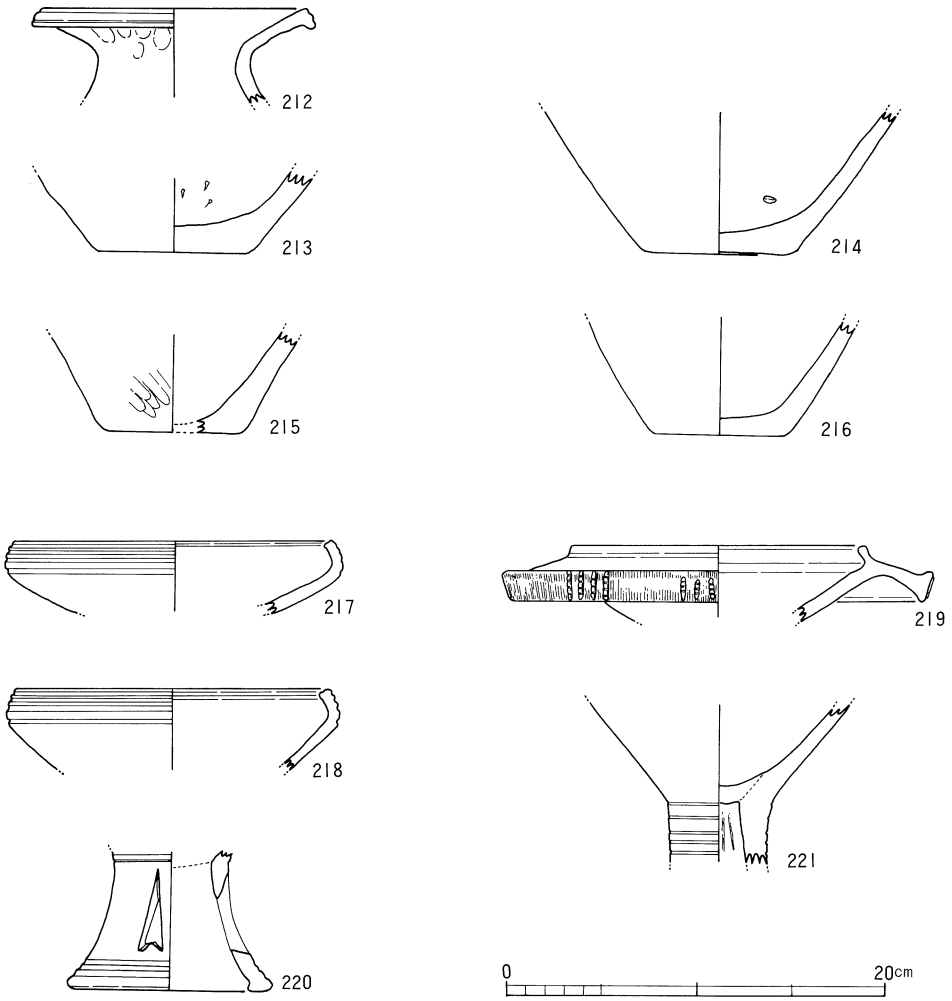
壺（212～216）　口頸部片212と、底部片213～216が出土している。212は口径13.8cm、短い頸部から口縁部が大きく外反して開く。端部は粘土帯を貼付けて下方に肥厚、外斜め下方に傾いた面に2条の凹線文を施文している。口縁部外面に指頭痕が残っている。頸部外面は横撫で、その他の部位の調整は不詳である。底部はいずれも平底で、外面をヘラ磨きされる例が多い。214の内面には籾圧痕が残っている。

高坏（217～221）　坏部片217～219、脚部片220、坏部下位から脚部上位の片221が出土している。217は口径16.8cm、218は16.4cm、ともに内湾しながら内傾する口縁部外面に4条の、また口端面にも1条の凹線文を施している。217の坏部が浅くなるのに対して、218は若干深い。なお、217の内外面には赤彩が施されていたものと思われ、部分的に観察することができる。218の口縁部は内外面ともに横撫で、その他の外面は縦、内面は横方向のヘラ磨きで調整されている。219は口径23cmを測る、いわゆる「水平口縁、内面突帯」の範疇に含まれる高坏の坏部片であるが、口縁部は水平には延びず、若干下方に湾曲しながら垂れ下がっている。東西の該期の高坏の折衷的な要素を多分に持った器形である。口端部は上下方、特に上方に肥厚し、横撫でによる僅かな凹面をなす端面を刷毛目状調整具の小口によって細かく刻んでいる。刻みそのものは鋭く、比較的浅く施されるため、端面の中央部の凹部にまで刻みが達しない部分もある。この刻みの後、さらに4本1組の棒状浮文を貼られる。現状で2箇所の確認ができるが、10方向に復原され得る。この浮文も刻まれている。口縁部上面の突帯は内傾し、端部を丸く収められている。口縁部内外面ともに横撫で、坏部外面は縦、内面は横方向にヘラ磨きされている。220は、貫通する矢羽根透かしを持つ脚部片で、復原裾径10.9cmを測る。内外方に肥厚した脚端部は、丸みを帯びた平坦面をなし、端面全体で接地する。裾部周縁には3条の凹線文、脚上端には鋭い工具による沈線が2条まで確認できる。

透かしは推定6方向、坏部との接合部には充塡剥離痕が観察される。器表面の損傷のため調整は不詳である。221は、比較的大型の高坏片で、脚部上位の5条の沈線が確認できる。

紡錘車（222・223）　出土した2点ともに、土器片再利用のものである。222は甕の胴部を利用したものと思われる。厚さ4㎜の土器片を、直径3.8～4㎝のほぼ円形に近い平面形に仕上げ、中央よりもやや偏った位置に、両面から径4㎜の孔を穿っている。若干湾曲した凸面にはヘラ磨きが、凹面には刷毛目が観察できる。重量8.4gを測る。223は直径2.9㎝、厚さ4㎜、重量5.4gのもので、やはり両面から穿孔しており、孔径4㎜を測る。本来、土器の外面であったと思われる面には刷毛目が、また、もう一方の面には指頭痕が僅かに看取される。

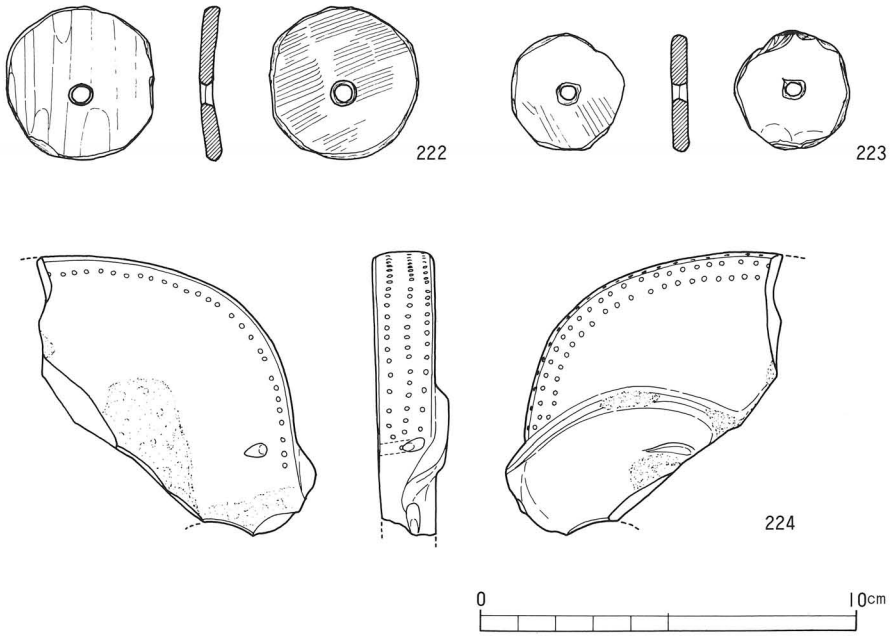
分銅形土製品(224)　住居址南東部床面から出土している。正面からみて左上半部約1/4



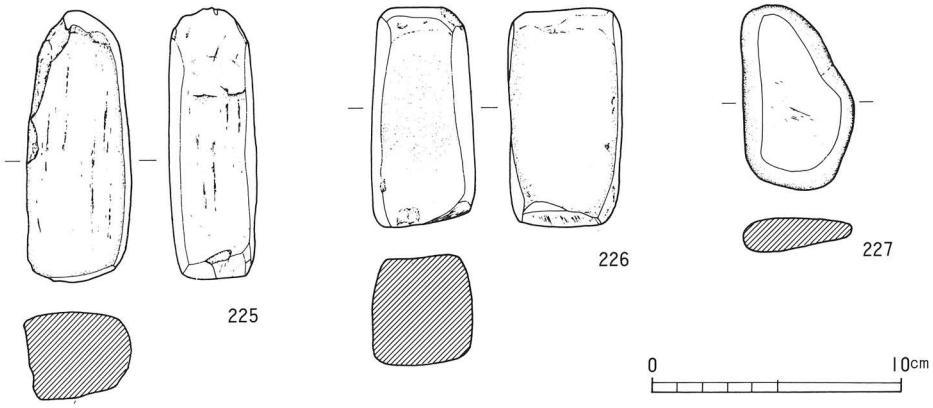
図－72　ＳＢ－６出土遺物(2)

の片である。眉の表現は隆起帯、眼は陰刻による。頭部正面に2列、背面に1列、側面に3列施された刺突は頭髪表現のようにも見える。側面の眉直上から背面にかけて、懸垂用の孔が焼成前に斜めに穿たれている。全体に赤彩を施されていたものと思われ、各面、部分的に痕跡が窺える。

砥石（225～227）　225・226は陶石製、方柱状の砥石である。225では3面を、226では小口部に至るまで全面を使用されている。227は偏平なアプライトの転石の片面を使用している。



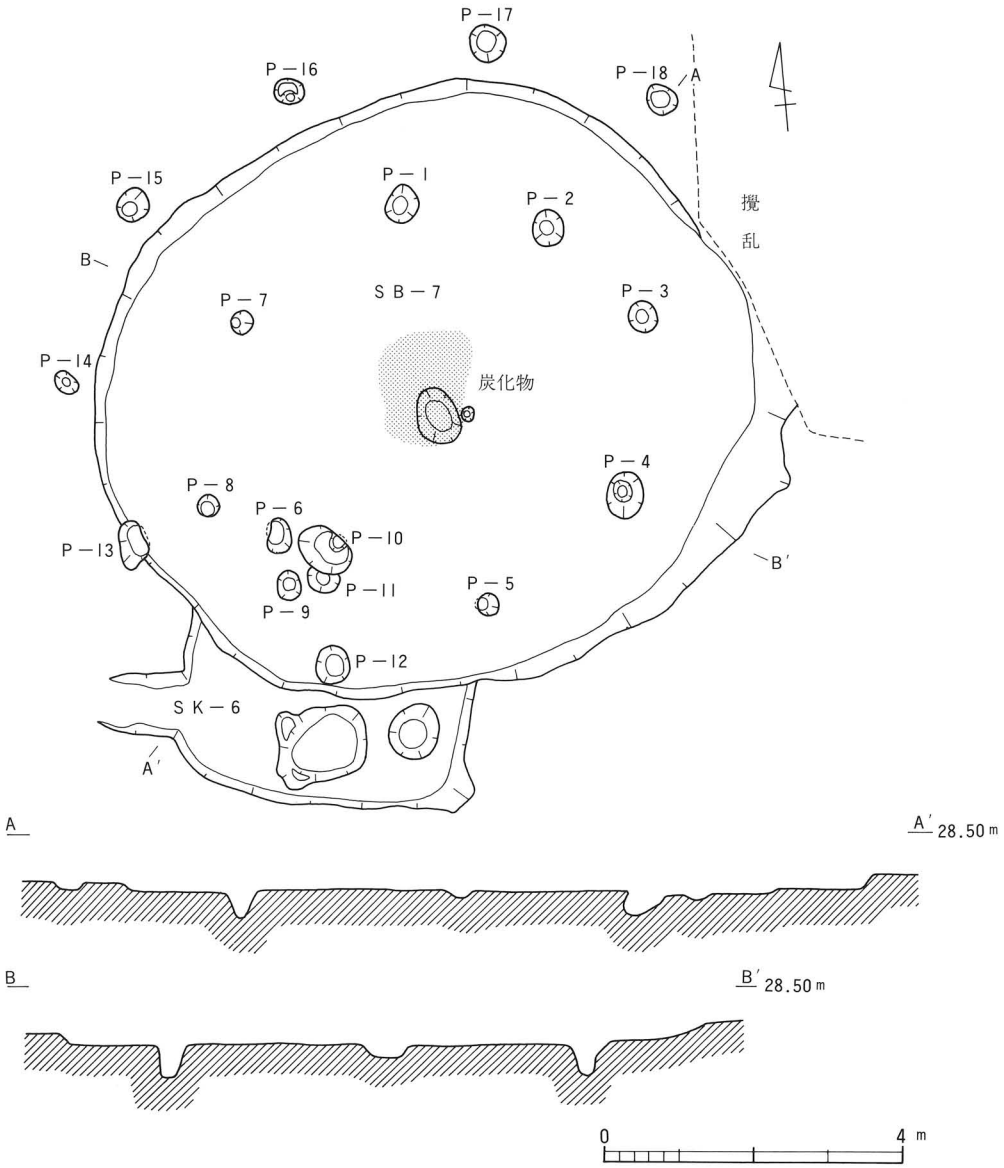
図－73　ＳＢ－６出土遺物(3)



図－74　ＳＢ－６出土遺物(4)

ＳＢ－７（図75）

本調査検出の竪穴住居址のうち、最大規模の楕円形竪穴住居址で、隅丸長方形土壙ＳＫ－６を切って検出された。攪乱により、北東部の立ち上がりを失っているが、長径９ｍ、短径7.9ｍ、残存壁高５～20cmを測る。床面にＰ－１～Ｐ－７までの７本の主柱穴が1.8～2.8ｍ間隔で検出された。これらの柱穴の深さは、いずれも40cm前後である。床面中央部には長径80cm、短径50cm、深さ15cmの楕円形の掘り込みがあり、その周辺部1.5ｍ内外の部分で焼土、なら



図－75　竪穴住居ＳＢ－７

びに炭化物の検出をみており、この部分が火処として考えられる。住居址北部から西部にかけて、立ち上がりの肩部より30～50cm離れた位置で、約2.5m間隔の柱穴が5基検出されている。これらは深さ8～15cmの遺存であり、本来住居址周縁を全周していたものと考えられ、南部から南東部にかけては、削平により欠失したものと思われる。この住居址においても周壁溝は検出されなかった。出土遺物より、弥生時代後期初頭の遺構である。

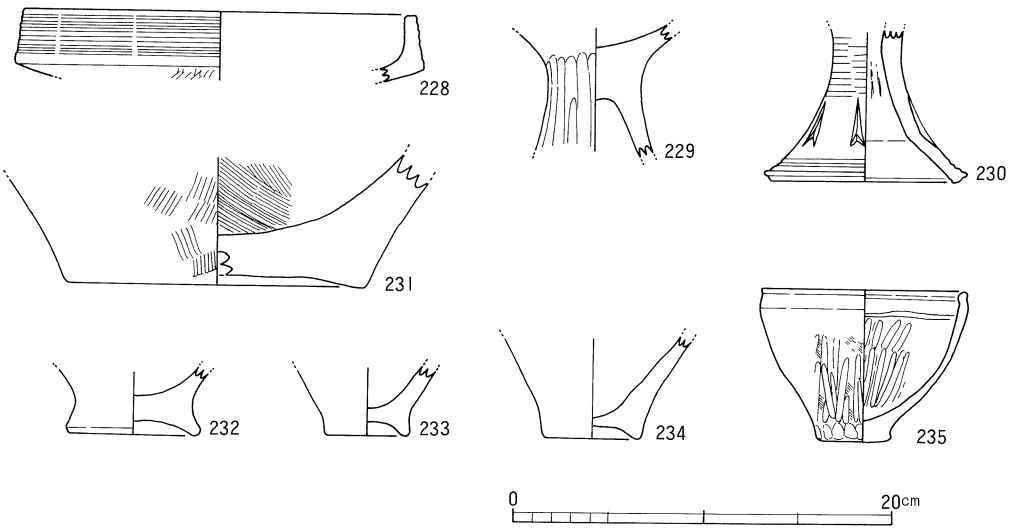
ＳＢ－７出土遺物（図76～78）

高坏（228～230）　228は口縁部片、口径20.7cmを測る。若干内傾気味に上方に立ち上がった口縁部外面には6状の擬凹線文を施され、口端部は平坦な面をなす。口縁部以下の外面は縦、斜め方向の刷毛目、内面は横撫でされる。229は脚部上位の片、充塡による接合部をなす。脚部外面、および坏部内面にヘラ磨きが看取される。230は脚部片で、裾径10.8cm、残存高8.1cmを測る。裾端部の肥厚はさほど大きくなく、外方にのみ若干の肥厚がみられる。裾部周縁に3条、端面に1条、内面端部に1条の凹線が巡る。脚上半部には鋭利な工具による沈線を10条施し、この沈線と裾部の凹線間に矢羽根透かしを7方向に切り取っている。裾部内外面は横撫で、その他の外面の調整は不詳、内面にはシボリ痕が良く残っている。

壺（231）　大型壺の底部で、底径15.9cmを測る。内外面ともに縦、または斜め方向の刷毛目、外底面は不定方向に撫でられている。

甕（232～234）　底部片3点、いずれも窪み底、232はくびれを持つ。

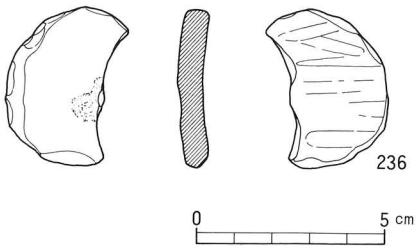
鉢（235）　器高8.1cm、口径11cm、底径4cmの完形品で、やや突出した平底を持つ。内湾する体部は口縁部で鈍い稜を持って内方に軽く屈曲している。口端部は内外方に若干肥厚し、内傾する面をなす。内面の口縁部をやや下った位置に、鋭利な工具による浅い沈線が2条巡



図－76　ＳＢ－７出土遺物(1)

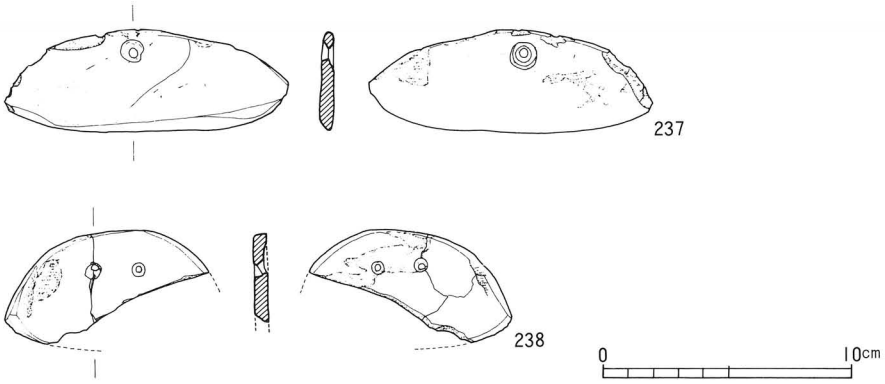
る。口縁部内外面は横撫で、その他の部位は外底面に至るまで入念にヘラ磨きされている。

紡錘車（236）　壺の胴部を再利用した未製品の片である。直径4.1cm、厚さ6mmを測る。製作途上、穿孔段階で破損したものと思われる。



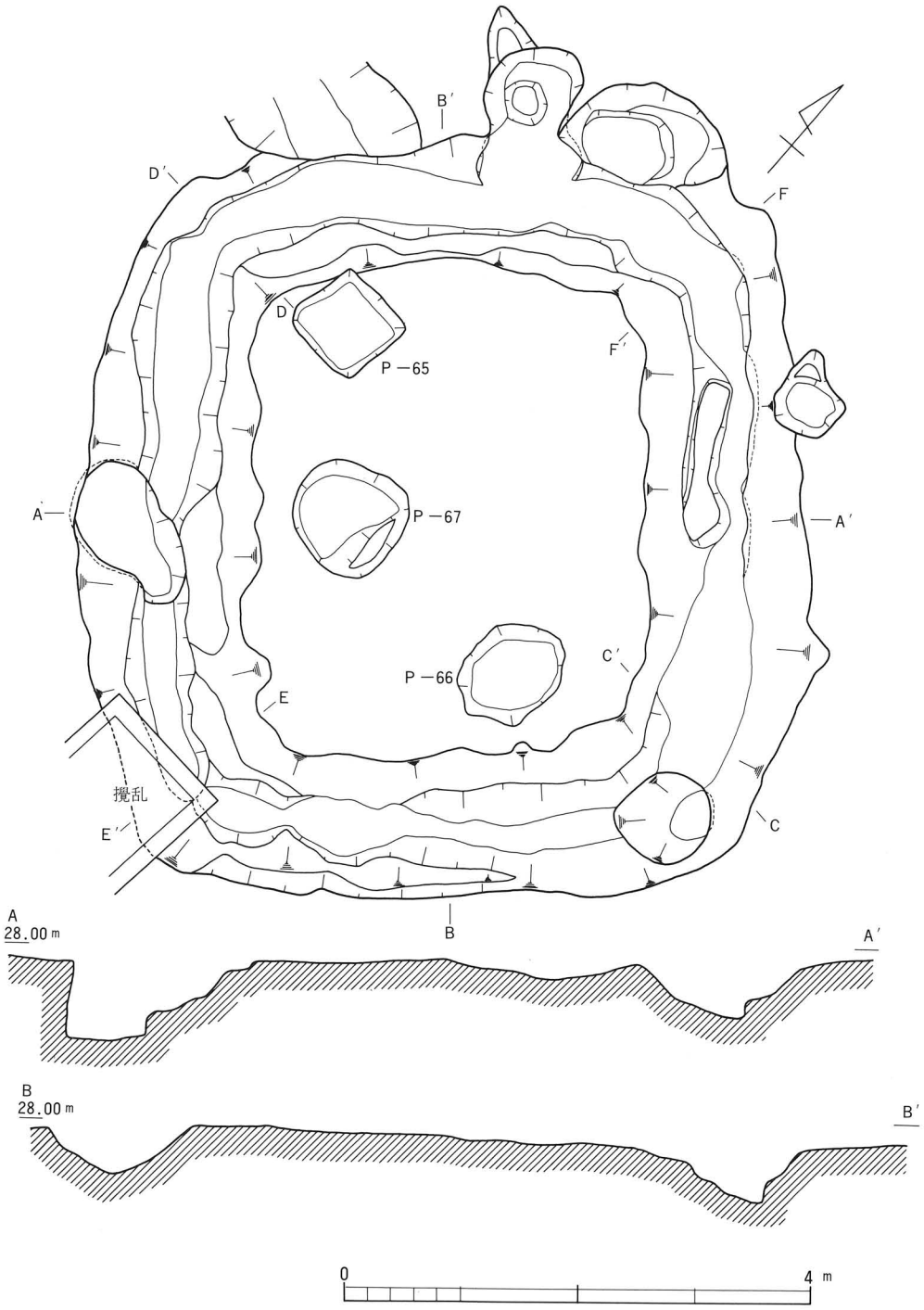
図－77　ＳＢ－７出土遺物(2)

石庖丁（237・238）　緑色片岩製、杏仁形の２点である。237は全長11.4cm、幅4.1cm、最大厚6mm、重量54.1gを測る。背部寄りに位置する１孔は両面から穿たれ、刃部の研ぎ出しは片面からのみ行われている。238は復原長9cm、幅4.7cm前後になるものと思われる。背部と刃部の接点寄りで観察できる刃部は、両面から入念に鋭く刃付けをされている。



図－78　ＳＢ－７出土遺物(3)

(3) 方形周溝状遺構ＳＸ－１

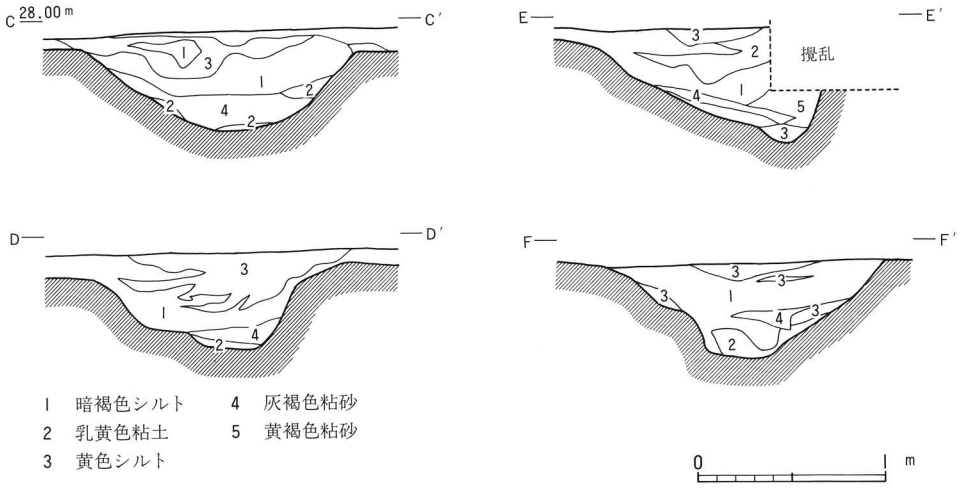


図－79　方形周溝状遺構ＳＸ－１

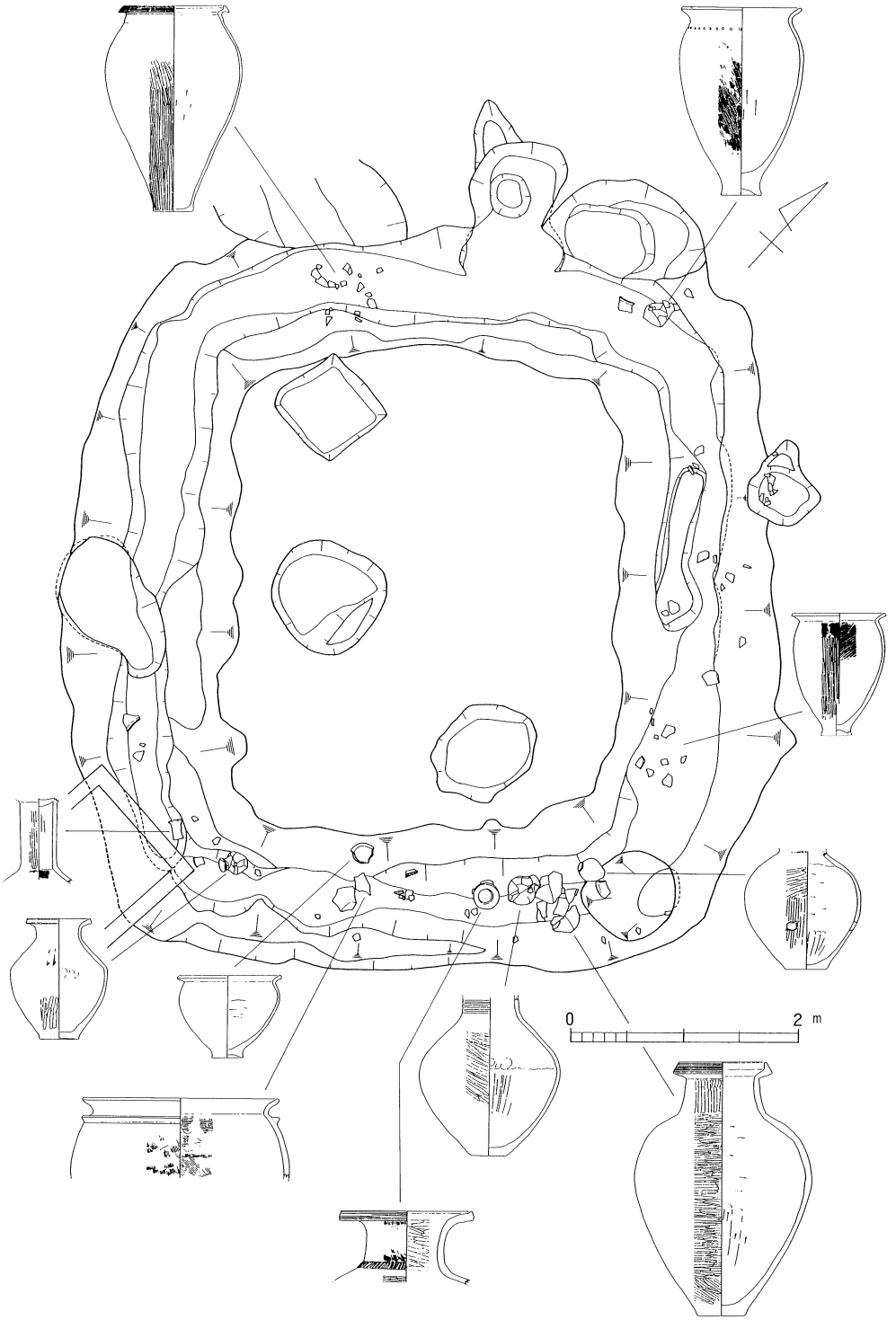
調査区西端部分で検出された幅1.2～1.5ｍ、深さ40～50㎝、断面「U」字状の溝は、隅丸方形状に一周し、この溝によって区画された部分は、隅丸方形の内法で3.2×４ｍ、外周で5.5×６ｍを測る。方位は、隅丸方形のコーナー部が南北、東西方向を指向している。掘り方は整然としたものではなく、ところによってテラス状に残る部分があってみたり、「U」字よりも「V」字に近い断面形を呈する部分もあり、溝底も凸凹が激しい。また東コーナー部分に１箇所、南西辺の中央部に１箇所、不整形の土壙状に掘り込まれた部分がみられた。溝の埋土は、他の竪穴住居址や柱穴等の遺構が暗褐色シルトの単一層で埋まっているのに比べて、歴然とした違いを見せており、この暗褐色シルトに地山の黄色シルトが多量に混入し、人為的に埋め戻されたような様相を呈している。溝内からは、埋置されたような状態で遺物が出土しているが、その多くは、特に南東辺に集中して検出された。遺物には胴部穿孔や、口頸部の打ち欠きを持つ壺等、祭祀的色彩の濃い遺物を含み、また、在地にはない要素を多分に持つ遺物等があり、この遺構が集落内祭祀にかかわる特別な遺構であったことが窺える。この溝による区画内、または周辺部分で祭祀的な行為を行った後、溝内に遺物を投棄し、埋め戻したものと解釈し得る。これらの遺物より、弥生時代後期初頭の遺構と考えられる。

ＳＸ－１出土遺物（図82～84）

壺（239～250）　239・240は口縁部、ないしは口頸部を欠失した個体で、意図的に打ち欠かれたものと思われる。239は胴部の中位よりやや上に最大径を置き、筒状の頸部を持つ。底径７㎝、胴部最大径25㎝、残存高28.3㎝を測る。頸部外面に、浅い、幅広の凹線が４条まで確認できるが、施文時に横撫でされるのは凹部のみであり、したがって凹線間の凸部は丸みを持たず平坦である。そういった意味では、横撫でによる沈線といったほうが適当である

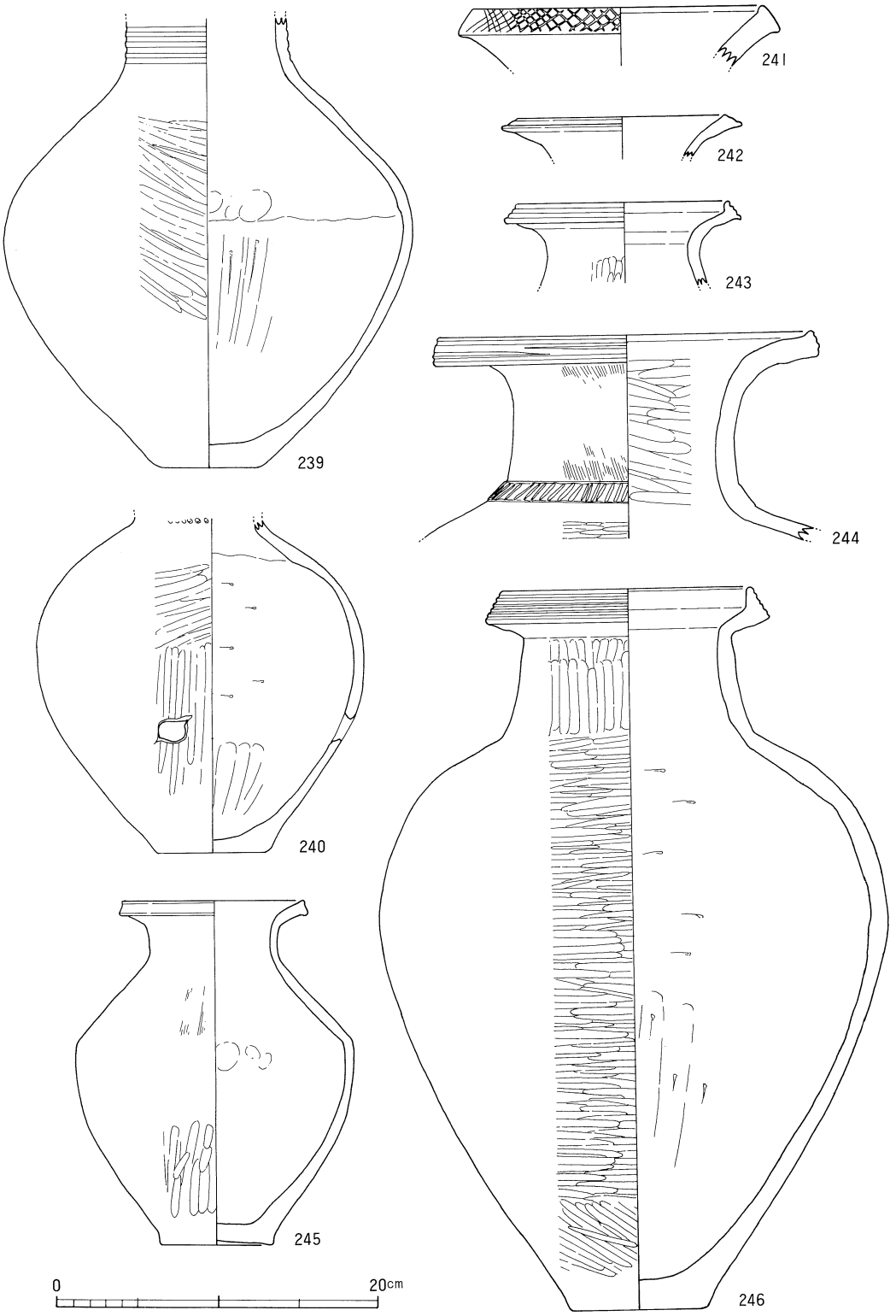


図－80　ＳＸ－１溝内堆積土層



図－81　ＳＸ－１主要遺物出土分布

かもしれない。胴部外面上半には斜め方向のヘラ磨きが観察されるが、底部寄りは器面の損傷のため不詳である。内面頸部から肩部は縦方向の撫で、以下底部までは削り上げられている。胴張り部の内面には接合痕が残っている。松山平野では、この時期、この種の施文が頸部に行われる例は稀である。240は底径7.2cm、胴部最大径20.3cm、残存高20.6cmを測る。口頸部を欠失しているが、頸基部に刺突列点文が残存している。胴張り部の下方に焼成後の円孔を穿たれている。外面肩部から胴張り部までは斜め、以下は縦方向のヘラ磨きが施されている。内面の底部寄りは縦方向の指撫で、以上の部分は横方向に削られる。241～244・247は口縁部、ないし口頸部片である。241は口径18cm、外下方に傾斜した口端部は上下方に若干肥厚し、端面にヘラ描斜格子文を刻まれている。242は口径13cm、外面に肥厚した口端面に2条の凹線が施されるが、上方の1条は浅くて不明瞭なものである。243は口径13.2cm、口端部は上下方に肥厚するが、特に上方には、稜を持って屈曲した小さな立ち上がりのようになっている。口端面には3条の凹線が巡る。頸部外面には縦ヘラ磨きが看取される。口縁部外面は、横撫でによる起伏が顕著である。244は口径23cm、残存高13cmを測る大型壺の口頸部で、筒状の頸部から水平に近く外反した口縁部は、端部を上方につまみ上げられている。端面には3条の浅い凹線が巡り、頸基部には刻み目突帯を貼付けられている。口縁部外面は横刷毛目の後横撫で、頸部は縦刷毛目の後横撫でされる。肩部外面には横方向のヘラ磨きが看取される。内面口縁部周縁は強く横撫でされ、以下はヘラ状工具による横方向の撫でで調整されている。247は口径9.5cm、筒状のやや長めの頸部から素口縁が短く外反する。口縁部内外面を横撫で、頸部外面を縦刷毛目、内面を縦方向に指撫でしている。245は若干の窪み底に、鈍く屈曲する胴部、短い筒状の頸部を有する復原完形品で、器高21.2cm、口径11.4cm、胴部最大径17.5cm、底径7.2cmを測る。口端部は下方に僅かに肥厚し、端面は横撫でによる凹面をなしている。胎土に粗砂粒を多く含み、暗茶褐色の色調が特徴的で、胎土、焼成、色調ともに256の甕に酷似しており、この2点がセットとして用いられていたものと考えられる。復原完形品246は器高44.4cm、口径15.5cm、胴部最大径31.3cm、底径8.7cmを測る。平底に長胴の胴部は、最大径をその上位に持ち、丸みを帯びた肩部から立ち上がる頸部は、やや内方に傾いた筒状をなす。短く屈曲した口縁部は、端部を内上方に突出させて拡張した端面に4条の擬凹線を施している。口縁部内外面は横撫で、頸部外面は縦、胴部の底部付近までは横、底部寄りには斜め方向のヘラ磨きが施されている。内面頸部は縦方向の撫で、以下胴部中位までは横、中位以下は縦方向に削られる。248は無頸壺、上半部と下半部は接合はしないが、推定器高12.2cm、口径8.1cm、胴部径15.8cm、底径4.6cmを測る。口縁部直下の2箇所に、焼成前に径3mmの円孔を穿たれている。底部は窪み底、口端部は丸く収められている。器外表面の摩滅のため、口縁部周縁の横撫でのみしか観察できない。内面の中位以下は不定方向に削られ、胴張り部は横撫で、以上の部位には成形時のシボリ痕が明瞭に残り、調整は行われていない。249・250は平底の壺底部であるが、249は極めて薄く削られており、250

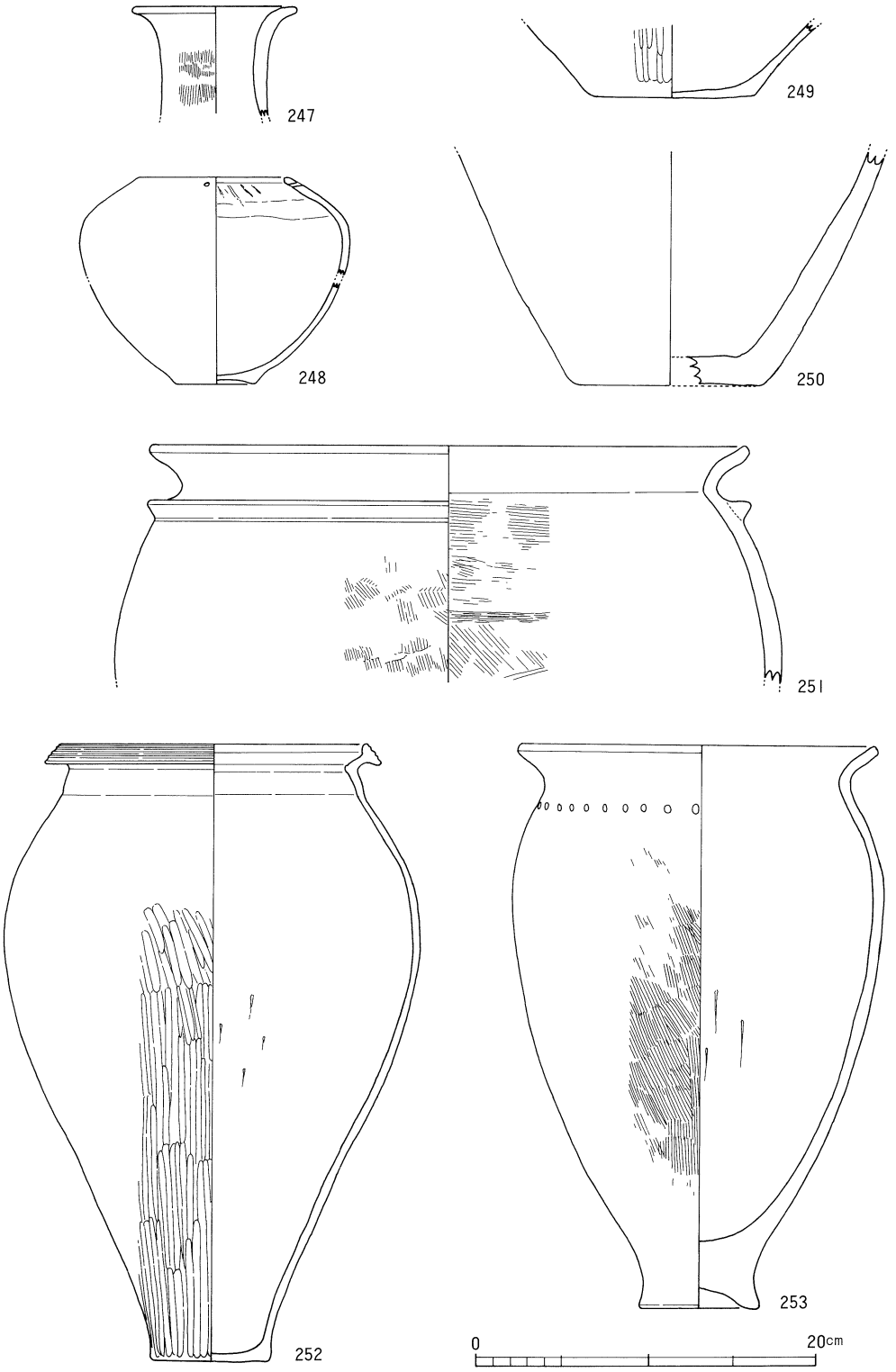


図－82　ＳＸ－１出土遺物(1)

の分厚く堅牢なつくりと好対照をなしている。

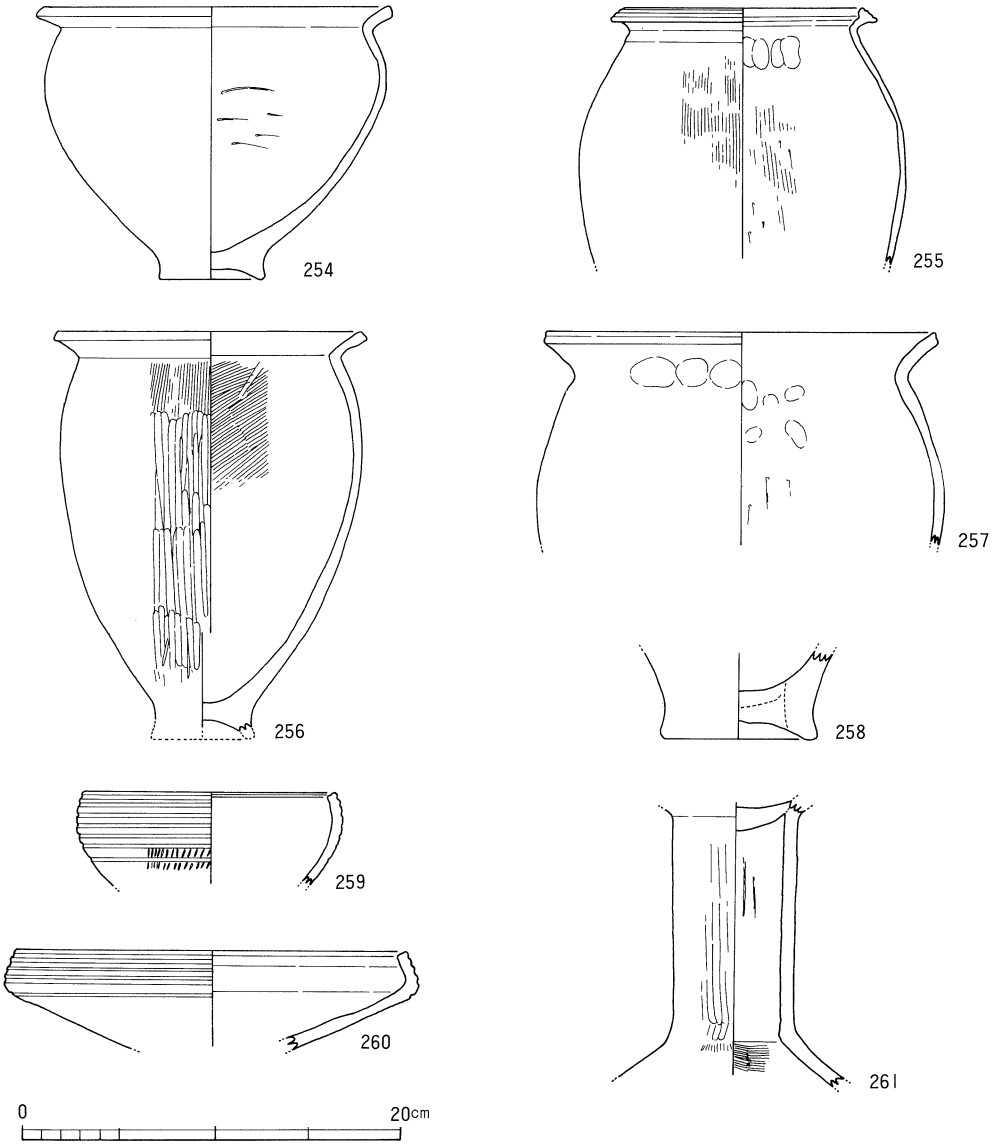
甕（251～258）　251は大型甕の上部片で、復原口径35cm、胴部最大径39.1cmを測る。短く外曲した口縁部は端部を丸く収め、頸部をやや下った位置に断面が鈍い三角形を呈した突帯が1条巡る。口頸部外面は横撫で、以下の外面は斜め、ないしは縦刷毛目、内面口縁部を横撫で、頸部屈曲部以下には横、ないし斜め方向の刷毛目が施される。九州地方の影響を多分に受けた甕である。252は長胴、平底の甕、器高36.7cm、口径18cm、胴部最大径22.1cm、底径7.2cmを測る。張りを胴部上位に持ち、横撫でによって外方に膨らんだ頸部を経て、短い口縁部が屈曲する。口端部は上下方に肥厚し、端面に浅い凹線を4条施されている。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面はヘラ磨き、内面は縦ヘラ削りの後撫でられている。吉備系の甕の特徴を多く備えた遺物といえよう。253は器高33.4cm、口径20.4cm、胴部最大径21.6cm、底径7.1cm、僅かにくびれる分厚い上げ底を持ち、胴張りは胴部上位に置く。頸部に稜を持たずに外反して、外上方に短く開いた口縁部は端部に肥厚を持たず、平坦な面をなす。頸部をやや下った外面に円形刺突文を施されるが、その施文部位、施文形態ともに在地の土器の中では特異な部類に属する。口頸部内外面、および底部周縁は横撫で、胴部外面を縦、および斜め方向の刷毛目、胴部内面の上位は横、下位は縦方向のヘラ削りである。254は器高14.4cm、口径18.1cm、胴部最大径18cm、底径5.5cm、器高の低い甕である。僅かな上げ底を持ち、口縁端部に肥厚も施文もみられない。口頸部、内外面、底部周縁は横撫で、胴部外面は板状工具による横、ないしは斜め方向の撫で、内面頸部以下は横方向に削られるが、胴部中位以下はその後撫でられている。255は上下方に肥厚した口端面に凹線を3条施される甕で、口径12.6cm、胴部最大径17.2cmを測る。252と同様に、頸部で僅かに外方に膨らみを持つが、252ほど顕著ではない。口頸部内外面は横撫で、胴部外面は縦刷毛目、内面の横撫では頸部の膨らみに対応する部分までで、その下方4cm内外の範囲は指撫で、以下は縦刷毛目の後、再度縦ヘラ削りを行い、器壁を薄く仕上げている。256は口径、胴部径ともに16.1cm、上げ底の底部を僅かに欠失するが、推定器高21.5cm前後になるものと思われる。口縁部は頸部で内面に稜を持って屈曲して外上方に開き、端部に平坦な面をつくる。口頸部内外面、底部周縁は横撫で、胴部外面底部寄りは縦刷毛目、以下は縦ヘラ磨きされる。内面の胴部上位は斜め方向の刷毛目、以下は縦方向に撫でられている。257は上半部の片、口径20.6cm、口縁部外面や、頸部内面に指頭痕が明瞭に残る。外面胴部には板状工具による撫でが部分的に看取される。内面は縦方向に削られた後、撫でを施されている。258は径8.4cmを測るくびれの上げ底の底部で、断面には底部内面からと、外底部からの2段階にわけて粘土板を充塡していることが観察できる。

高坏（259～261）　口縁部片2点と、脚部片1点が出土している。口縁部259は深椀タイプの高坏で、復原口径13.3cmを測る。口縁部外面に7条、口端面に1条の凹線を施文し、口縁部最下位の凹線上を「ノ」の字状列点文で刻んでいる。外面の列点文以下は縦ヘラ磨き、



図－83　ＳＸ－Ｉ出土遺物(2)

その他の内外面は横撫でである。260は復原口径20.8cm、直線的に外上方に開いた浅い坏部から屈曲して、内傾する口縁部が立ち上がる。口端部は平坦な面をなす。口縁部外面には4条の、また、屈曲部の下面にも1条の凹線が施文されている。口縁部は内外面とも横撫で、その他の外面は縦、内面は横方向のヘラ磨きで調整される。261は大型高坏の脚部で、その柱部は直径5.4cmの円柱状をなし、内面に稜を持って裾部が広がる。坏底部は充塡によっている。柱部外面には縦ヘラ磨きの痕跡が、また、裾部の内外面には刷毛目がみられる。外面は縦、内面は横方向である。柱部内面は撫でられている。後期中葉に盛期を持つ、いわゆる



図－84　ＳＸ－１出土遺物(3)

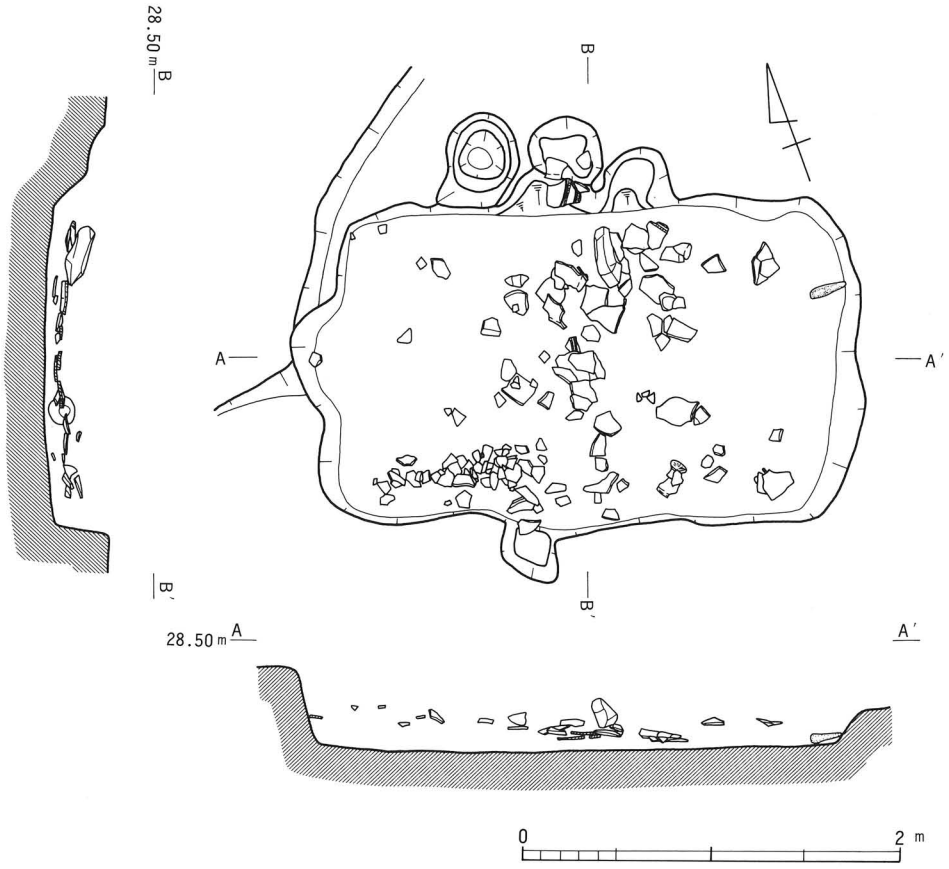
エンタシス状の脚柱部を持つ高坏の祖形となる可能性が強い。

(4) 隅丸長方形竪穴遺構

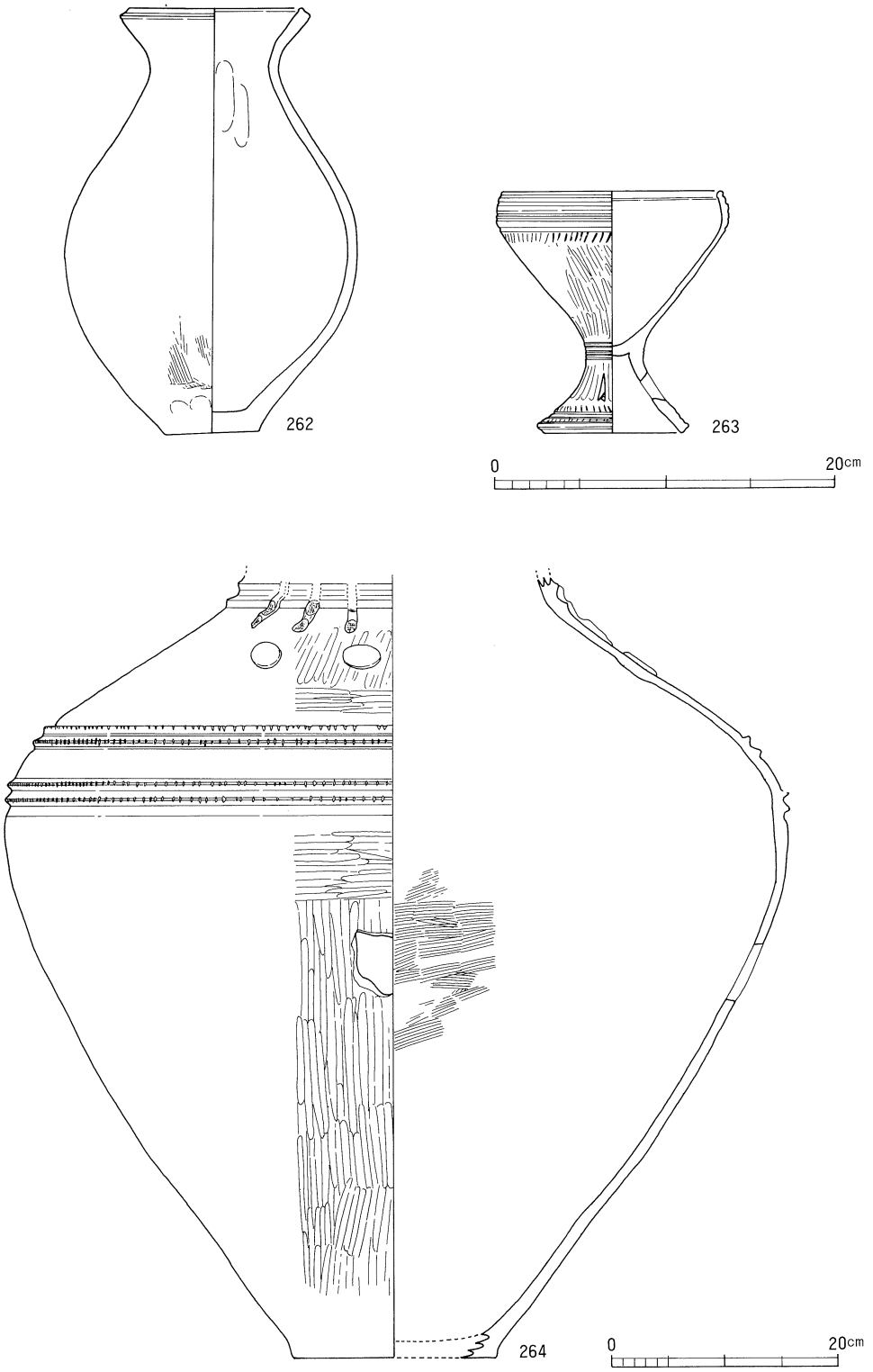
必ずしもその性格はあきらかとは言えないが、祭祀的遺構と判断され得るものを含めて8基の竪穴遺構が検出されている。

ＳＫ－１（図85）

竪穴住居址ＳＢ－１の床面より検出されており、ＳＢ－１に先行するものである。1.7×2.7ｍの隅丸長方形プランをなし、残存壁高20～40cmを測る。床面はフラットで、柱穴等の検出はみられなかった。完形品の小型壺、高坏、敲石ともに、破砕し、床面に散乱した状況で大型壺が出土している。この大型壺は胴部以下の片のみで、口頸部の破片の１点もみられず、意図的に口頸部を打ち欠かれたものと思われる。この壺はいわゆる周防型の陽出文壺で弥生時代中期後半に位置づけられている。この壺と口縁部に凹線文を付す高坏より、中期後葉の遺構であると考えられる。なんらかの祭祀に関わる遺構であろう。



図－85　竪穴遺構ＳＫ－１



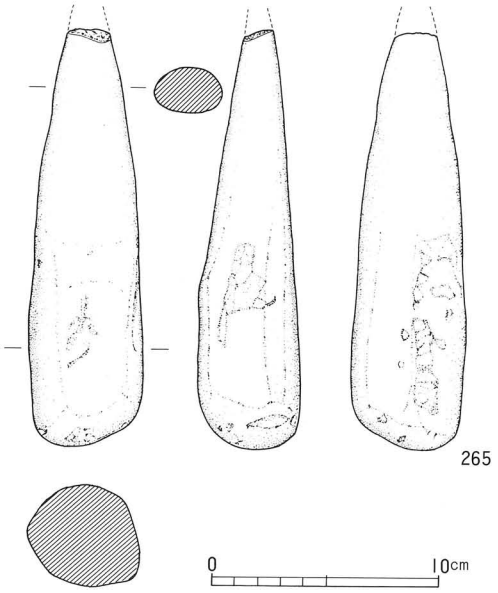
図－86　ＳＫ－Ｉ出土遺物(I)

ＳＫ－１出土遺物（図86・87）

壺（262・264）　262は器高24.8cm、口径10.2cm、底径5.5cm、胴部には土圧による歪みがみられるが径17cmを前後する値になるものである。平底に長めの胴部から緩く外反して、直線的な口縁部が外上方に開く。口端部は肥厚を持たず、端面は横撫でによる凹面をなす。口端部外面、および口縁部内面は横撫で、外面口頸部には縦ヘラ磨きが僅かに看取される。以下の外面は縦刷毛目、底部立ち上がりに指頭圧痕がみられる。内面頸部は縦方向の指撫で、以下は不定方向にヘラ状工具により撫でられている。264は周防灘沿岸地域の影響を大きく受けた大型壺で、口頸部を欠失しているが、朝顔形に大きく開く口縁部をなすものと思われる。残存高58.5cm、胴部最大径58cm、底径15.4cmを測る。肩部に２条単位の刻み目突帯を２段にわたって貼付ける。頸部には断面三角形の突帯が２条遺存しており、この突帯の上に３本単位の棒状浮文を３方向に貼付け、その下位に円形浮文を２個ずつ付している。なお、胴部中位には焼成後の穿孔を施されている。外面は縦刷毛目の後ヘラ磨き、特に胴部中位は入念に縦方向に磨かれる。内面肩部は粗く削られる。胴部中位は横刷毛目、以下の部分には撫で調整が施されている。

高坏（263）　深椀、短脚の高坏である。器高14.2cm、口径12.9cm、脚裾径９cmを測る。緩やかに内湾した口縁部外面には５条の凹線、その直下に「ノ」の字状列点文を刻まれる。坏部と脚部との境には、鋭利な工具による沈線が５条巡る。脚中位の４方向に施された矢羽根透かしは貫通している。脚端部は肥厚を持たず、端面は横撫でによる凹面をなす。裾部には３条の凹線と、ヘラによる２段の刻み目とを組み合わせた施文を行っている。口縁部外面、坏部の内面、および脚裾部外面は横撫で、その他の外面は縦ヘラ磨きされ、脚部内面はヘラ状工具により横方向に撫でられている。

敲石（265）　円錐形状の砂岩の転石の細いほうの部分を把部として、敲打具に用いている。重量、510.7ｇを量る。



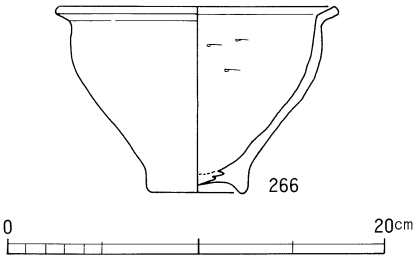
図－87　ＳＫ－１出土遺物(2)

ＳＫ－２（図64）

ＳＢ－３・ＳＢ－５の北側で、ＳＢ－５に切られて検出された遺構であるが、立ち上がり５～10cmの遺存で殆ど消滅しかかっている部分もある。プランは隅丸方形、または長方形で、2.5×2.4ｍ＋αまで確認できる。床面、および東隅部で検出された柱穴がこの遺構に伴うものかどうかは不明である。遺物の検出はみられなかった。

ＳＫ－３（図64）

ＳＢ－３に切られて検出された竪穴遺構で、平面形は1.7×2.4ｍの長方形をなす。深さは15～20cmの遺存であった。弥生土器少量を出土しているが、図化し得たのは鉢片１点のみである。また、磨製石器の原材と思われる緑色片岩１点の出土がみられた。



図－88　ＳＫ－３出土遺物

ＳＫ－３出土遺物（図88）

鉢（266）　上げ底の底部を持つ鉢形土器で、胴部の張りを頸部直下に持つ。器高9.9cm、口径14.5cm、胴部最大径13.4cm、底径5.4cmを測る。外上方に開く短い口縁部は、端部を平坦につくっている。口縁部内外面、頸部外面は横撫で、外面のその他の部位は判然としない。胴部内面の中位以上は横方向に削られ、以下は横撫でされている。

ＳＫ－４・ＳＫ－５（図64）

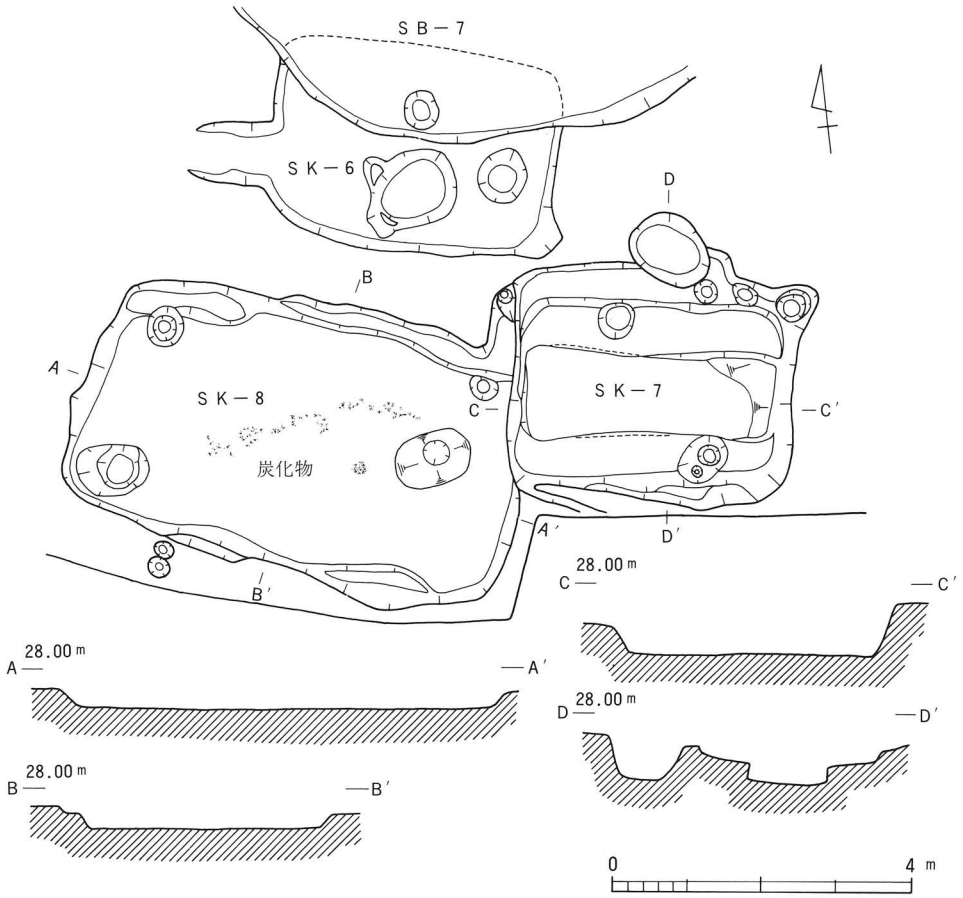
ＳＫ－４はＳＢ－３・ＳＢ－５に切られ、ＳＫ－５はＳＢ－５に切られて検出された。ＳＫ－４の平面形は２×3.3ｍの隅丸長方形で、最も残りの良い部分で立ち上がり15cmを測るが、一部立ち上がりを失っている部分もある。住居址の床面よりの検出、また必ずしも良好とはいえない遺存状況等の事情から、確実にこの遺構に伴う遺物と断定できるものはない。このことは、ＳＫ－５についても同様である。ＳＫ－５は2.6×3.8ｍの隅丸長方形と、前述の３基よりもかなり大きく、埋土もＳＢ－５のそれと明確に峻別できるものではないことから、ＳＢ－５に付随する床面施設である可能性もある。もしそうであった場合、ＳＢ－５は削り出しのベッド状遺構を持つ住居址ということになるが、ＳＢ－５の主柱穴位置と、この竪穴の掘り形との関係、また竪穴床面検出の２本の柱穴を棟木受けの柱とした場合の、特に住居址南部における主柱穴との不合理な位置関係等を考え合わせ、別遺構と判断した。但し、前述の３遺構と異なって床面に２基の柱穴を持つことから、なんならかの上屋を有する建物址であることは間違いなかろう。

ＳＫ－６（図89）

大型円形住居址ＳＢ－７に切られて検出された、隅丸長方形をなすと思われる竪穴で、長辺3.7ｍを測る。西辺の南西コーナーに近い部分を、攪乱溝によって破壊されている。床面検出の２基の柱穴は、この竪穴に伴うものではなく、先行するものである。1987年に愛媛大学法文学部考古学研究室によって、７次調査としてこの３次調査地の西隣接地の調査が行われ、柱穴祭祀を伴う大型柱穴による弥生時代中期後半の掘立柱建物や多数の大型柱穴が検出されているが、この２基を含め、方形周溝状遺構ＳＸ－１の区画内や、その周辺の柱穴もこれらに類するものと思われる。出土遺物より、弥生時代中期後葉の遺構である。

ＳＫ－６出土遺物（図90・91）

壺（267・268）　大型壺の口縁部片２点が出土している。267は復原口径26cmの口縁部片で、上下方、特に下方に肥厚した口端部端面に棒状工具を押圧したような山形文を施してい

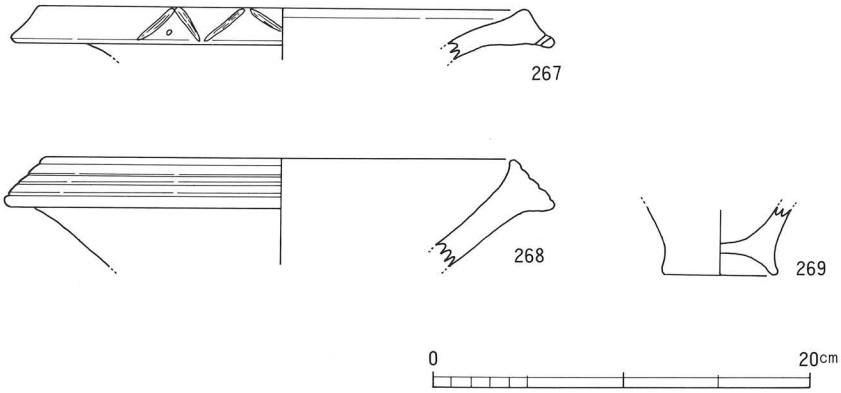


図－89　竪穴遺構ＳＫ－６・７・８

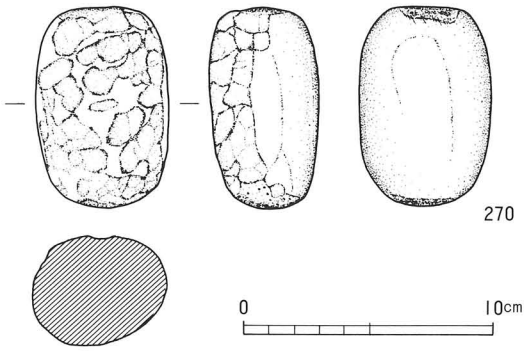
る。口端部下位には斜めに径3㎜の円孔が焼成前に穿たれている。どちらかといえば、中期中葉的な壺口縁部である。268は口径25㎝、上下方に肥厚した口端部の端面に4条の凹線文を施している。凹線文盛行期の口径20㎝を越えるような大型壺の口縁部施文は、上方への肥厚を内面に稜を持つようなかたちで明瞭に行い、凹線上を刻んだり、円形浮文を貼付したりするものと、この個体のように凹線以外に何の加飾も持たないものとがある。第Ⅴ章で詳述されるように、凹線文をとりいれた、より在地的な大型壺が後者である可能性があり、必ずしも時間的な前後関係を反映しているものではないと思われる。

甕（269）　くびれの上げ底の底部片、底径6.2㎝を測る。粘土板充塡痕が観察できる。底部周縁横撫で、外面には縦ヘラ磨きが看取される。

敲石（270）　横断面、平面形ともに楕円形状をなす転石を用いて敲打具としている。背面は入念に磨かれ、打面は使用により咬鼠状に剥離、両方の小口も使用されている。



図－90　ＳＫ－６出土遺物(1)



図－91　ＳＫ－６出土遺物(2)

ＳＫ－７・ＳＫ－８（図89）

２基の長方形竪穴が、一部重複した状態で検出されたが、切りあいは確認されていない。ＳＫ－７は３×3.8ｍの隅丸長方形で、一旦壙内全体をフラットに堀り窪めた後、更に中央部を長辺に平行に1.2×3.3ｍの長方形プランに25cm程度掘り下げている。この堀り残されたテラス状の部分は、北側では２段、南側では１段となっている。埋土は肩部から１段目のテラス部と、長方壙を含む以外の部分とでは明確に異なっており、上層が暗褐色土の単一層で覆われているのに対して、以下は暗褐色土をベースに地山の黄色シルトのブロックを多量に含んでいる。したがって、下位の部分は掘削後人為的に埋め戻されたものと考えられる。土器類はすべて上層の暗褐色土からの出土で、胴部に穿孔を施した甕のような祭祀的な遺物を伴っている。下層からは砥石片１点のみの出土であった。この遺構掘り形からみれば木棺墓のようなプランであるが、先述のように埋土が上、下層に明確に分層でき、棺蓋の腐朽による埋土の崩落などという痕跡がないため木棺墓ではあり得ない。墓であったとするならば土壙墓ということになろうが、土壙墓としては掘り形が大きすぎ、人骨の検出もみておらず積極的に墓として認め得る材料がみられない。したがって、この遺構については墳墓祭祀以外の祭祀を想定しておく。

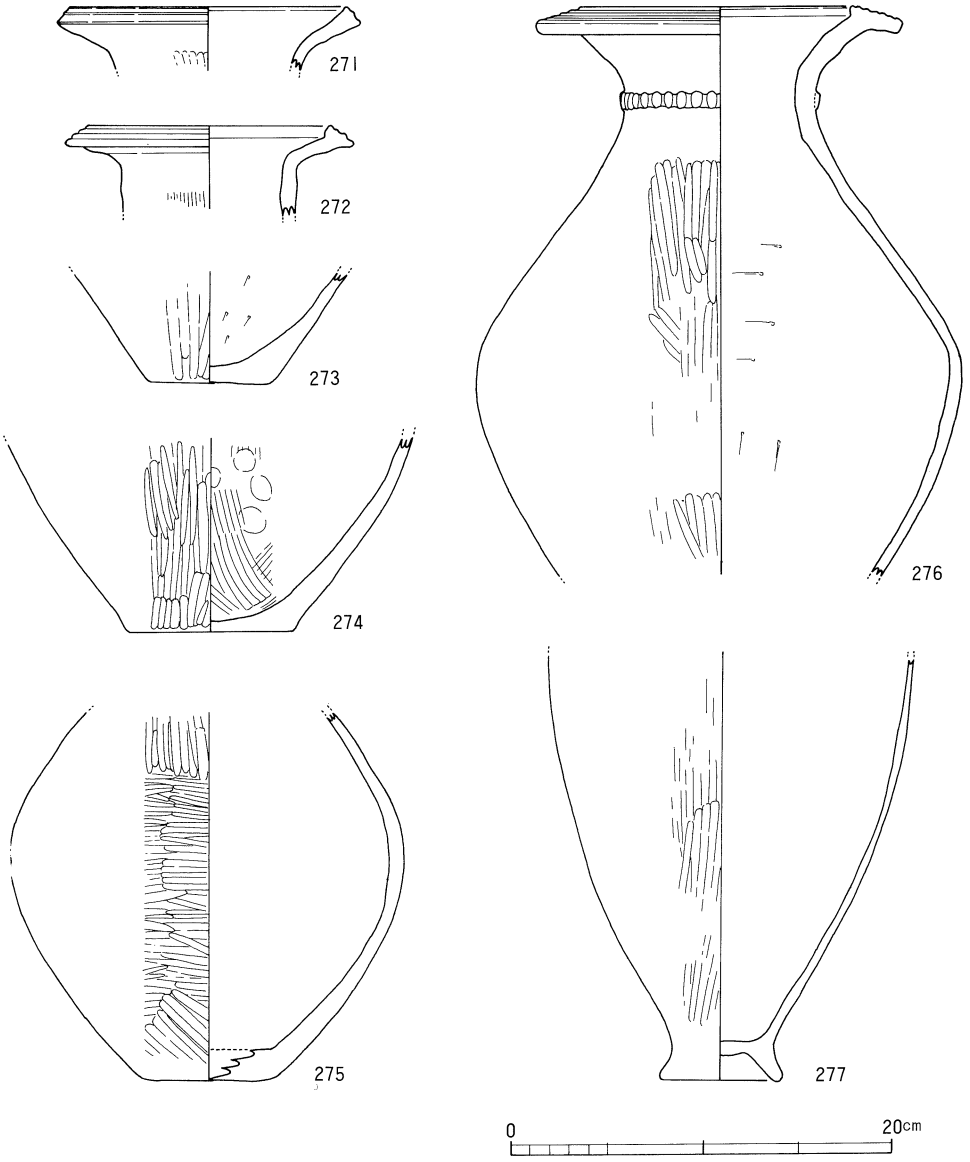
ＳＫ－８はＳＫ－７の西辺に接して検出された隅丸長方形の竪穴遺構で、3.5×５ｍ、深さ20～25cmを測る。床面より柱穴４基が検出されており、なんらかのかたちで上屋を有していたものと思われる。床面中央部では炭化物が帯状に検出されている。前述のように、ＳＫ－７との切り合い関係は確認されていないため、ＳＫ－７に関わる一連の施設として考えておく。両遺構ともに弥生時代中期後葉の遺構である。

ＳＫ－７出土遺物（図92・93）

壺（271～276）　口縁部片217は口径14.5cmを測る。口端部上端と下端とをそれぞれつまむように横撫でするため、端面に２条の幅広の浅い凹線状が巡る。272は口径12.6cm、僅かに外方に膨らむ筒状の頸部から強く外反して口縁部が開く。口端部は上下方に肥厚するが、特に上方へは内面に稜を持った小さな立ち上がりのようになっている。端面には３条の凹線が施されている。口縁部の内外面と頸部の内面は横撫で、頸部外面には縦刷毛目が看取される。273・274は平底の底部で、273の内面は削り上げられ、274では粗い縦刷毛目を施され、一部には指頭痕が残っている。275は肩部以上を欠失した平底の壺で、分厚い平底に球形の胴部を持つ。底径7.2cm、胴部最大径20.8cm、残存高19.4cmを測る。外面のヘラ磨きは部位によって方向を使い分けられ、底部付近は斜め、肩部付近を縦、その他の部分は横方向に磨いている。内面は縦方向に削った後、撫でている。276は底部を欠失しているが、比較的径の大きい安定した平底になるものと思われる。口径は内径で14.2cm、外径19.3cm、胴部最大径25.5cm、残存高30.7cmを測る。下膨れの胴部、撫で肩の肩部から緩やかに外反して外上方に口縁部が開く。口端部は鋤先状口縁に近い形状にまで内外方に拡張し、上面に５条の凹線

を施す。頸部には押圧突帯が貼付けられる。口頸部の内外面は横撫でされ、以下の外面は縦方向にヘラ磨きされている。内面の胴部上半は横、下半は縦方向に削られている。

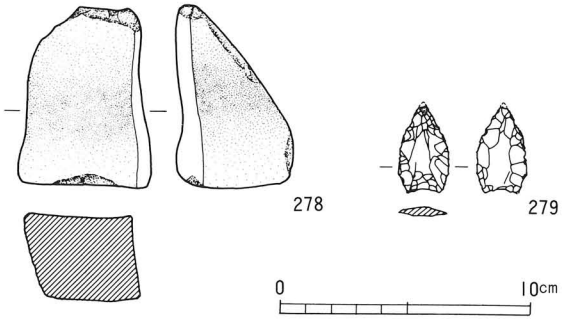
甕（277）　くびれの上げ底を持つ甕の下半部で、底径6.6cm、残存高22.4cmを測る。底部に粘土板の充塡が観察できる。外底部周縁は横撫で、胴部外面は縦ヘラ磨き、内面は縦方向に削られている。



図－92　ＳＫ－７出土遺物(1)

砥石（278）　この１点のみが長方壙内で出土した。砂岩製の不定型な粗砥で、２面を使用されている。

石鏃（279）　先端部を僅かに欠くが、ほぼ完形に近い凹基無茎式石鏃で、基端部でややすぼまる形状をなす。サヌカイト製で、現況長3.4㎝、幅２㎝、重量2.7ｇを測る。両面に大剥離面を残し、縁辺部の調整のみによってつくられている。横断面は偏平な紡錘形をなす。



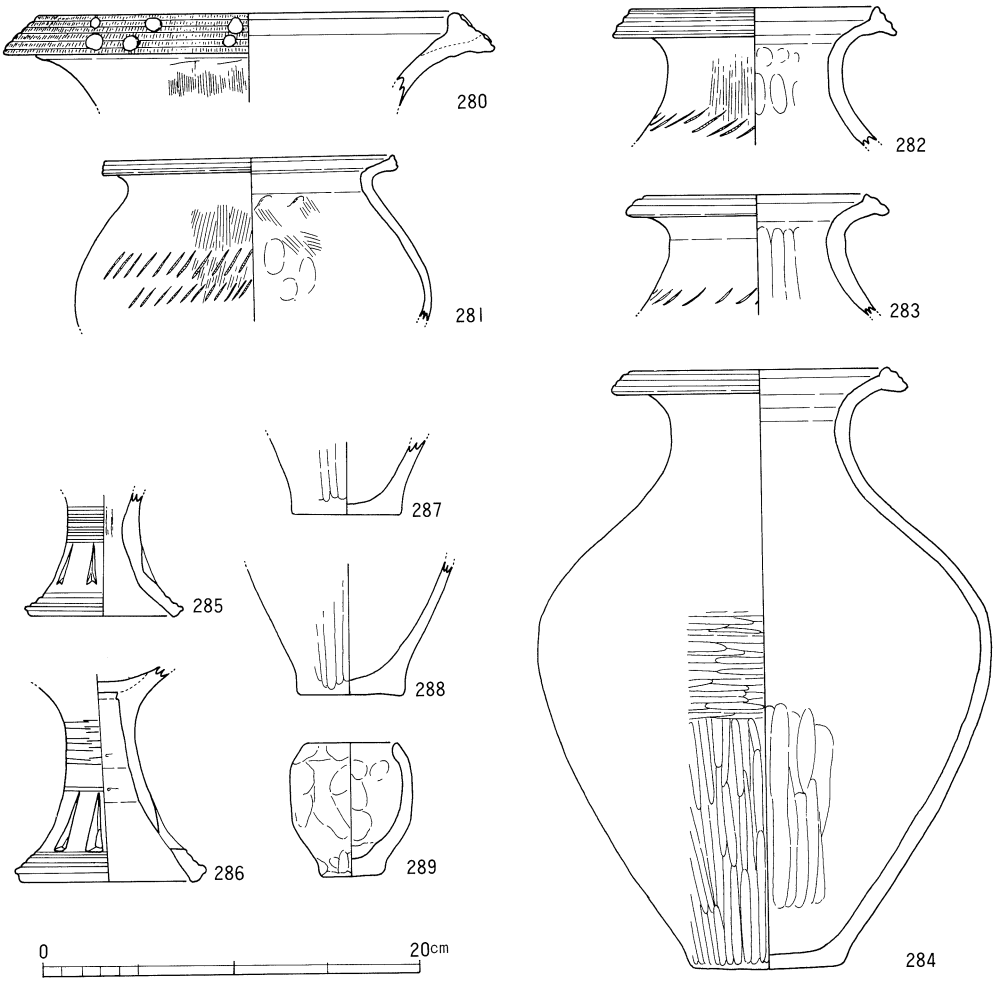
図－93　ＳＫ－７出土遺物(2)

ＳＫ－８出土遺物（図94）

壺（280・282～284）　280は復原口径22㎝を測る大型壺の口縁部である。口端部を上下方に大きく拡張しているが、特に上方には内面に稜を持った小さな立ち上がりのようになっている。端面には５条の凹線を巡らせ、さらに凹線間の凸部を細かく刻み、上下２段に円形浮文を貼付けている。断面に口端部の粘土帯の積み上げが明確に観察でき、擬口縁状に剥離した部分もある。外面の口端部周縁、および内面は横撫で、外面の以下の部分には縦刷毛目がみられる。282・283はそれぞれ口径13㎝、11.6㎝を測る口頸部片で、拡張した口端面に凹線文、頸部下位に「ノ」の字状列点文を施されるものである。両者ともに口端部の上方への拡張は内面に稜をもって行われる。拡張された面は282のほうが大きく、したがって施される凹線も282が３条、283が２条となっている。ともに同様の調整を施されており、口縁部内外面は横撫で、頸部外面縦刷毛目、内面は縦方向の横撫でである。なお、列点文は刷毛目調整具の小口を用いて施文されている。復原完形品284は器高31.7㎝、口径13.5㎝、胴部最大径24.1㎝、底径8.2㎝、器高の中位に胴張りを持つ平底の壺である。緩やかに外反する頸部から開いた口縁部は端部を上下方に拡張し、端面に３条の凹線を巡らせている。口頸部内外面は横撫で、胴部外面の調整は不詳であるが、中位には横、下位には縦方向のヘラ磨きを施している。胴部内面の上位はヘラ状工具により横方向に撫でられ、下位は粗く掻きとったように撫でている。

鉢（281）　口径15.4㎝、胴部最大径19㎝を測る。良く張った胴部を持ち、甕形土器を押しつぶしたような器形である。口端部は上方につまみ上げられ、端面に２条の凹線を施文する。頸部屈曲部の上面にも１条の凹線が巡る。胴張り部の外面には「ノ」の字状列点文が２段にわたって刻まれている。口頸部内外面は横撫で、以下の外面は縦刷毛目、内面は刷毛目の後撫でられている。

高坏（285・286）　出土した２点ともに脚部片である。285は復原裾径8.4㎝、残存高6.6㎝を測る。裾端部の肥厚はなく、内端で接地する。裾部外面に３条、端面に１条の凹線が巡



図－94　ＳＫ－８出土遺物

る。脚柱部の上位には、鋭利な工具による沈線を12条施し、この沈線と裾部の凹線文との間に、貫通しない矢羽根透かしを８方向に施文する。286は裾径10.3cm、残存高11.5cm、裾部外面に３条外方に肥厚した端面に１条の凹線を施している。脚柱部上位には７条、少し下った中位には２条の細沈線を鋭利な工具によって施文するが、これらの沈線は柱部を１周する間に３箇所で描き継がれている。２条の沈線と、裾部の凹線との間に矢羽根というよりも二等辺三角形の透かしを７方向に切りとるが、不均等な割り付けになっている。透かしのうち、２箇所は貫通している。これは意図されたものではなく、内面のヘラ削りの際に図らずも貫通してしまったものである。外面裾部は横撫で、柱部には縦ヘラ磨きが看取される。内面は端部にいたるまで横方向に削られ、その後撫でられる。内面の柱部上端には、削り残された部分が段状に残っている。

甕（287・288）　いずれも平底の甕底部である。順に底径6㎝、5.8㎝を測る。外面には縦ヘラ磨きが観察される。

ミニチュア土器（289）　器高7.1㎝、口径4.8㎝を測る手捏ねによるミニチュアの鉢で、やや突出した平底に砲弾形の体部を持つ。

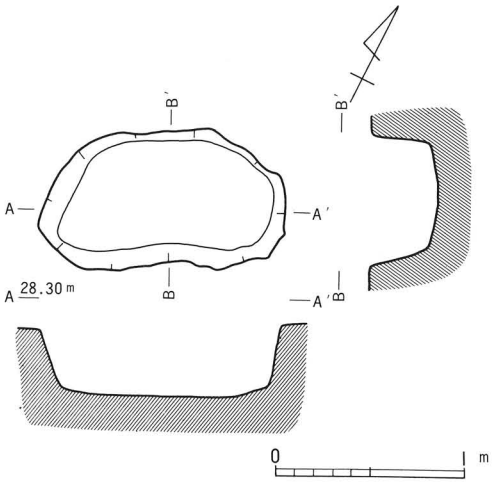
(5)　その他の土壙・柱穴

調査では21基の土壙や、住居址床面検出のものを除いて68基の柱穴が検出されているが、必ずしも土壙と柱穴の区別は明確ではない。原則として楕円形や、不整形のものを土壙として扱った。以下、遺物を出土したものについて概要を記しておく。

土 壙

ＳＫ－９（図95）

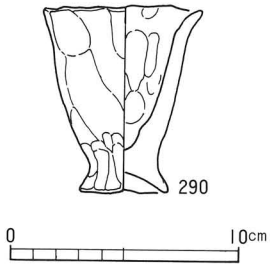
円形住居址ＳＢ－２の床面で検出された土壙で、長径1.3ｍ、短径0.7ｍ、深さ40㎝の楕円形プランをなす。ＳＢ－２に先行するか、もしくは伴うものである。壙底は中ほどがやや深くなっている。ミニチュア土器を１点出土している。



図－95　土壙ＳＫ－９

ＳＫ－９出土遺物（図96）

ミニチュア土器（290）　くびれの上げ底を持つ甕形で、手捏ねによる成形である。器高8.2㎝、口径7.1㎝、底径４㎝を測る。口縁部は若干外方に折り曲げられている。内外面のいたるところに指頭痕がみられる。



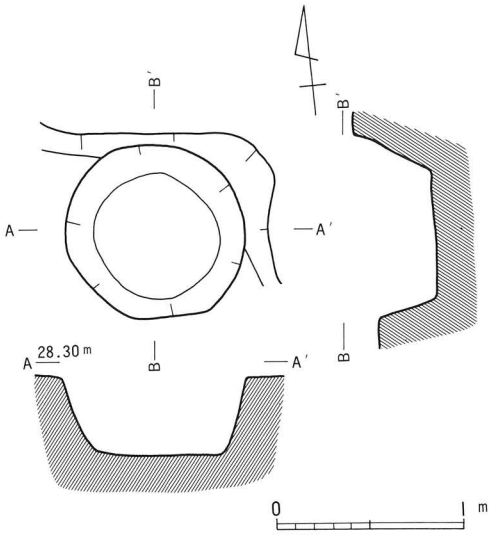
図－96　ＳＫ－９出土遺物

ＳＫ－10（図97）

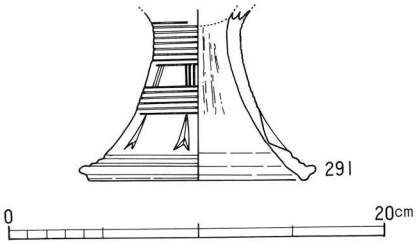
円形住居址ＳＢ－１の北東肩部で、住居址を切って検出された円形土壙で、直径90㎝、深さ40㎝を測るが、柱穴としたほうがよいかもしれない。壙底はフラットで、壺肩部片、高坏脚各１点ずつを出土している。このうち壺肩部片は、ＳＢ－１の壺179と接合する。この土壙、もしくは柱穴の掘削時、または埋め戻しの際に混入したと思われる。そういった意味では、高坏脚も本来、ＳＢ－１に伴う遺物であった可能性もあり得る。

ＳＫ－10出土遺物（図98）

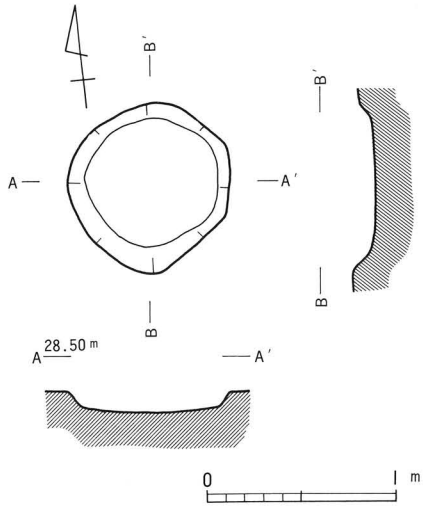
高坏（291）　裾部径12.6㎝、残存高９㎝を測る脚部である。裾端部を外上方に肥厚して端面に１条の凹線を巡らせる。接地は内端で行う。裾部外面にも３条の凹線が巡っている。



図－97　土壙ＳＫ－10



図－98　ＳＫ－10出土遺物



図－99　土壙ＳＫ－17

脚上端に10条、中位に７条の沈線が巡るが、これらの沈線は上方からみて右回りの螺旋状の施文である。沈線帯間の空間を６方向、３本単位の縦沈線で埋めるが、１箇所だけ４本の部分がある。中位沈線帯と裾部凹線帯の間に貫通しない矢羽根透かしを８方向に切り取る。外面裾部は横撫で、柱部はヘラ磨き。内面の裾部から中位までは横撫で、以上にはシボリ痕が、脚上端には充塡剥離痕がみられる。外面には赤彩の痕跡が残っている。

ＳＫ－17（図99）

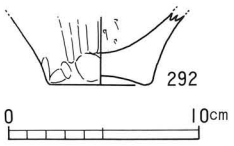
ＳＢ－４の西張り出し部のコーナーをかすめるように切って検出された円形土壙、直径85cm、深さ10cmを測る。甕底部片を１点出土している。

ＳＫ－17出土遺物（図100）

甕(292)　底径5.7cmを測る僅かな窪み底、外面底部周縁には指頭痕、縦ヘラ磨きの痕跡が、内面には削りによる砂粒の移動が観察できる。

ＳＫ－20（図101）

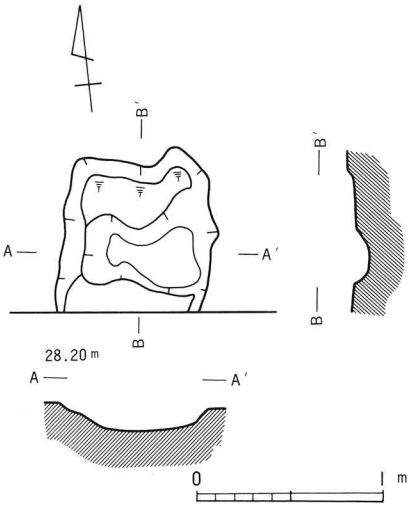
ＳＢ－６の南西に接するように検出された、75×85cm＋αの不整長方形になると思われる遺構で、南部は調査区外に至る。壙底は凹凸をなし、最深部で15cmを測る。



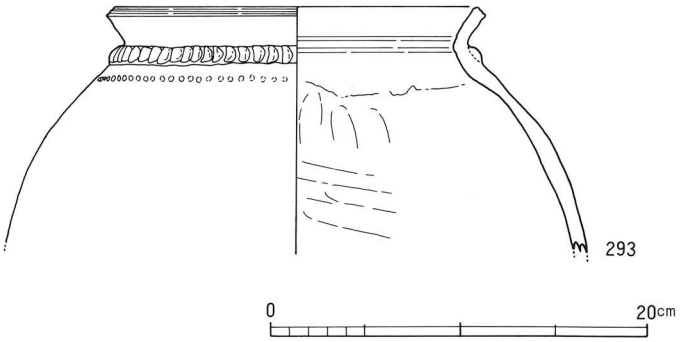
図－100　ＳＫ－17出土遺物

ＳＫ－20出土遺物（図102）

甕（293）　胴部径が口径を大きく上回るもので、口径19.2㎝を測る。口縁部は斜め上方に短く開き、端部に肥厚を持たず、狭い端面に２条の凹線を施す。頸部屈曲部直上の内面には、他の甕にもよくみられるような凹線状が１条巡っている。外面頸部には刻み目突帯が貼られ、そのやや下方には非常に浅く、不明瞭な刺突のような窪みが１条巡るが、施文として意図されたものではなく、突帯を刻む際の工具や手の位置、方向等との関連から一連の作業工程の中で偶然ついたもののようにみえる。口頸部内外面は横撫で、施文部以下の外面は斜めの方向に磨かれていることが一部に看取される。内面の頸部以下は縦、斜め方向に撫でられている。頸部をやや下った位置に粘土帯の積み上げ痕が明瞭に観察できる。



図－101　土壙ＳＫ－20

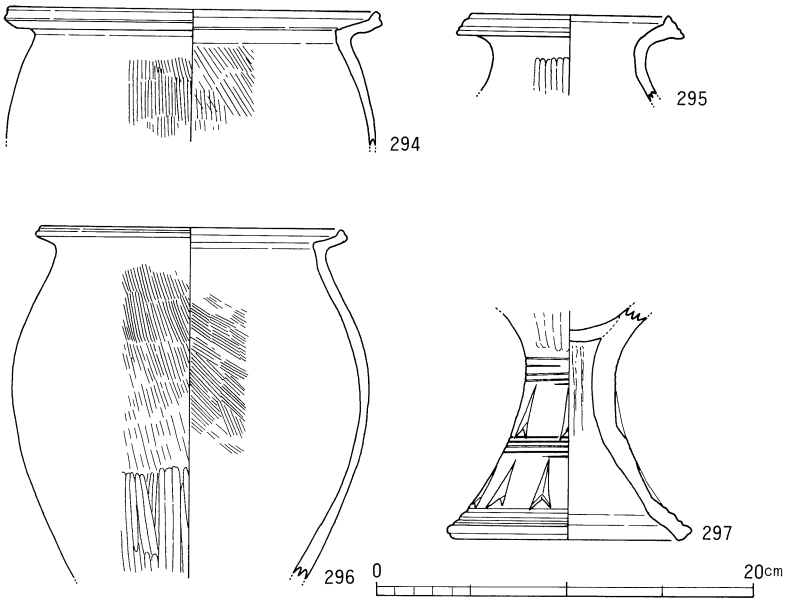


図－102　ＳＫ－20出土遺物

柱穴・柱穴出土遺物（図103）

図化可能な遺物を出土した柱穴は、調査区西部の方形周溝状遺構 SX－1の区画内のＰ－65・66、調査区西端でその半分のみが検出されたＰ-58の３基である。甕294は方形柱穴Ｐ－65からの出土である。復原口径19.4㎝、頸部で強く屈曲した口縁部は端部を上方につまみ上げられ、拡張した端面に凹線を１条施す。外面頸部屈曲部を強く横撫でされるため、口縁部の外面には稜を持った膨らみが形成されている。屈曲部の上面にも凹線が１条巡っている。口頸部内外面は横撫で、以下の外面は縦、内面は縦、および斜め刷毛目で調整されている。

壺口頸部295はP−58からの出土、口径10.5cmを測る。上下方に拡張された口端面には3条の凹線文を施文されている。口縁部内外面ともに横撫で、頸部の外面は縦ヘラ磨き、内面は縦方向に撫でられている。296・297は、ともにP−66からの出土。296は口径16.2cm、胴部最大径19.1cm、残存高18.4cmと、胴径が口径を凌ぐ甕である。294と同様に口端部を上方につまみ上げ、端面に1条の凹線を巡らせる。ただし、頸部屈曲部上面の凹線は持たない。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面は胴張り部をやや下ったあたりまで縦刷毛目、以下の部位を縦ヘラ磨きされる。内面頸部以下の胴部中位までは斜め刷毛目、以下は削りの後撫でられている。高坏脚297は裾径13cm、残存高12.2cmを測る。裾端部は肥厚を持たず、端面に1条、裾部外面に3条の凹線を施す。脚柱部上位と、中位に沈線が4条ずつ巡っているが、これらの沈線は螺旋状に描かれるため、部位によっては5条となるところがある。沈線帯の間には7方向、中位の沈線帯と裾部の凹線帯の間には10方向の貫通しない矢羽根透かしを切り取っている。坏底部は粘土板で塞がれている。裾部周縁は内外面ともに横撫で、外面その他の部位はヘラ磨きされる。内面にはシボリ痕が明瞭に残っている。



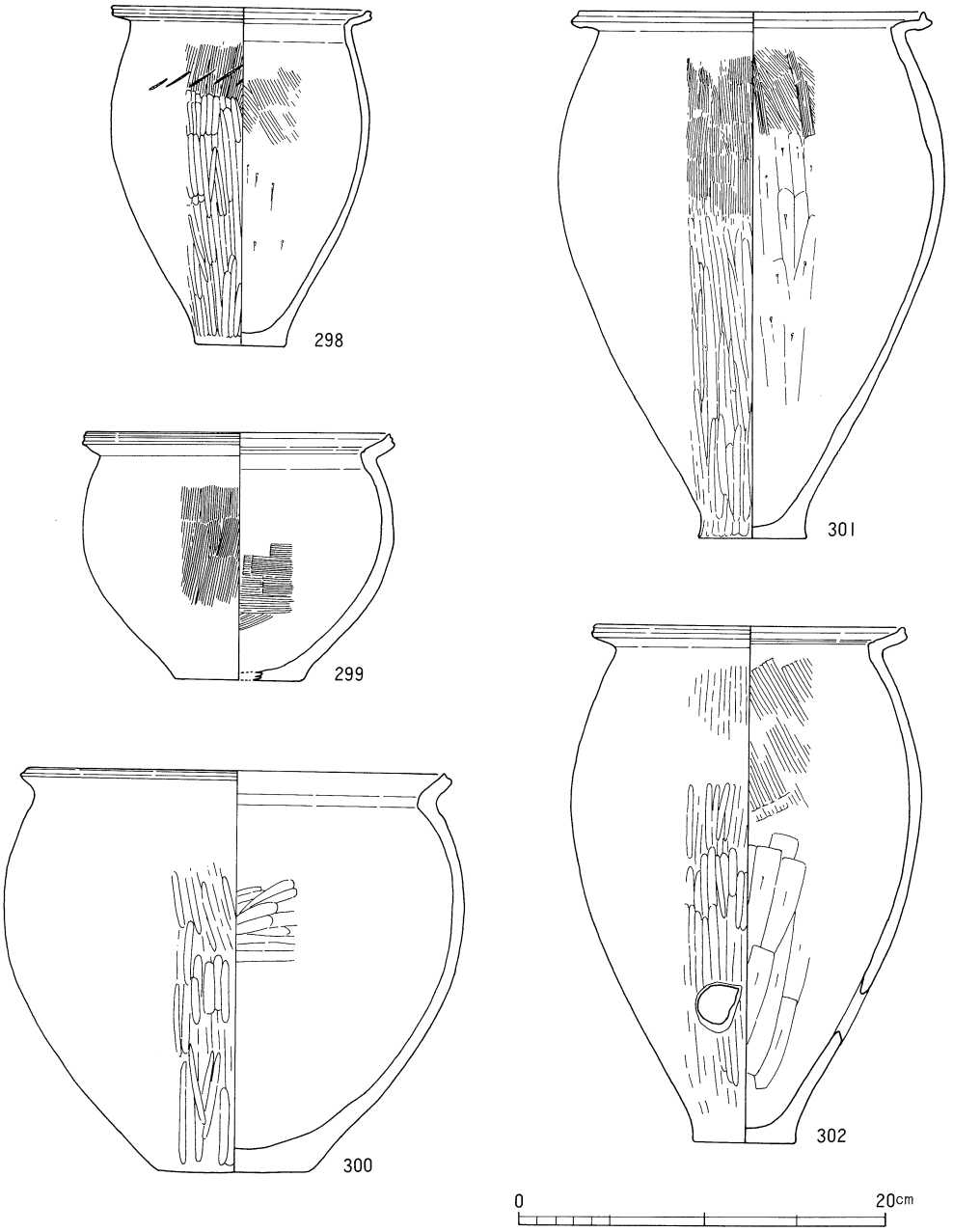
図−103　柱穴出土遺物

(6) 包含層出土の遺物

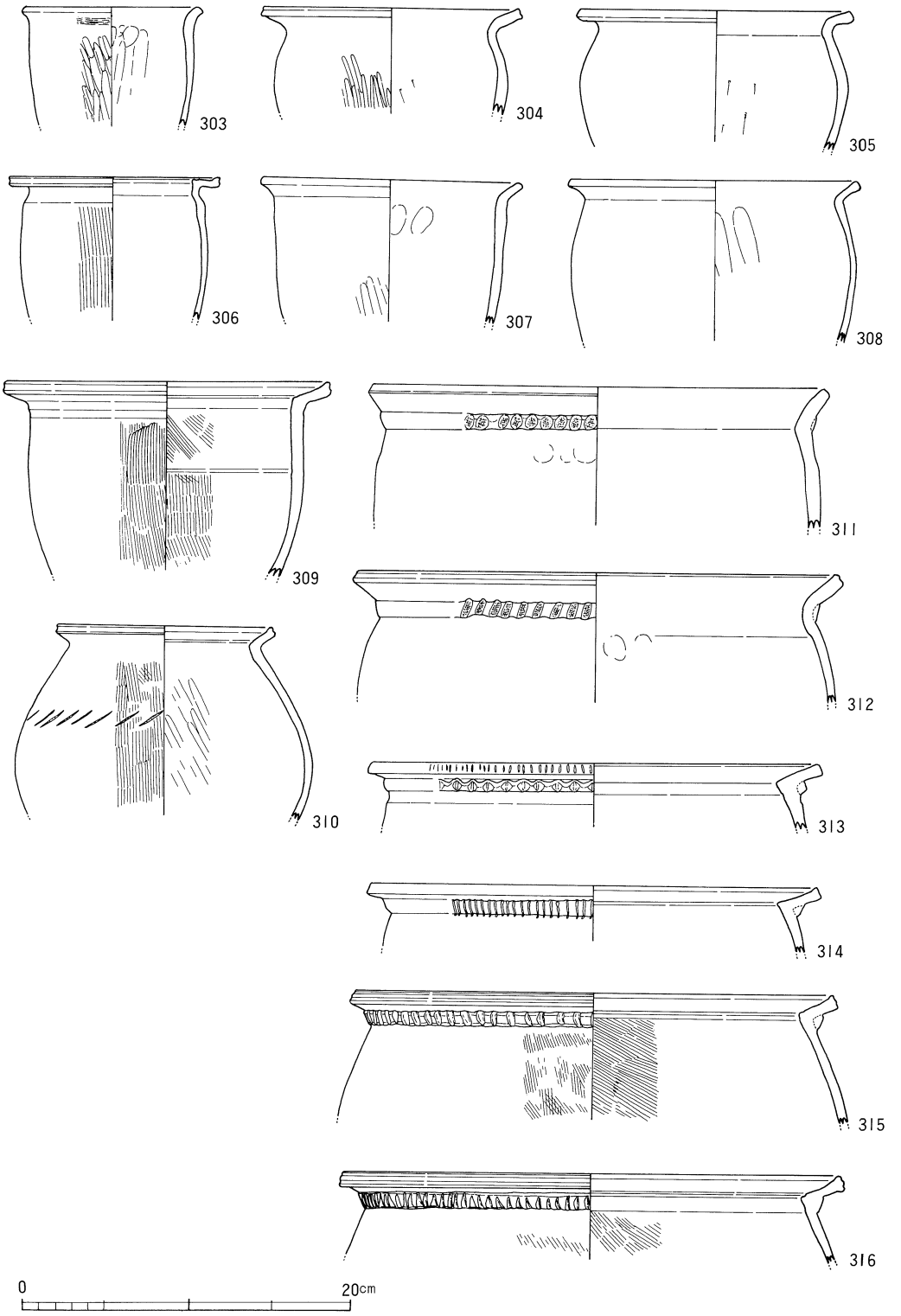
遺物を包含しているのは、主に第４・５層、暗褐色シルト・粘質土で、調査地全域を10～20㎝の厚さで覆っている。包含される遺物は弥生時代中期後葉から後期初頭のものを主としている。この項では図示された遺物のうち主なものについて記述する。

弥生式土器（図104～114）

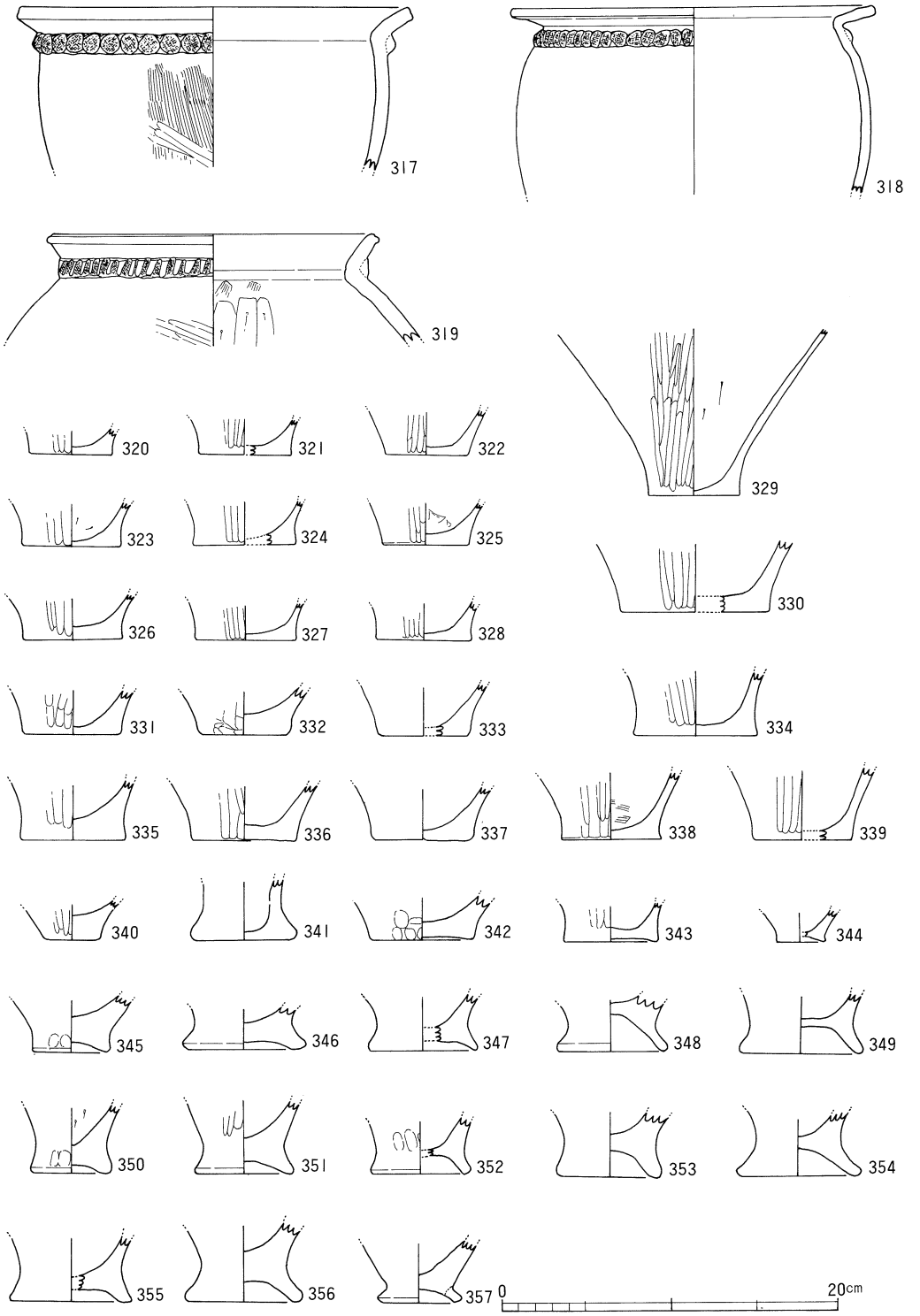
甕（298～387）　298は調査区西部のＳＢ－８とＳＸ－１との間で出土した器高18.6㎝、口径14.2㎝、胴部最大径14.1㎝、底径4.9㎝を測る平底の小型甕である。口縁端部は上方につまみ上げられ、口端面と頸部屈曲部上面にそれぞれ１条ずつの凹線を施されている。頸部をやや下った外面には刷毛目調整具の小口を用いた「ノ」の字状列点文が刻まれているが、部分的に施されるのみで全周はしない。口頸部内外面は横撫で、胴部外面は縦刷毛目の後縦ヘラ磨きされるが、施文部周辺の胴部上位は磨かれない。内面の胴部上位も刷毛目、胴張り部以下は縦方向に削った後、撫でられている。299・300は器高の低い鉢形を呈している。299はＳＢ－３の南西部出土、器高13.5㎝、口径16.5㎝、胴部最大径16.8㎝、底径6.9㎝を測る。端部をつまみ上げられ、拡張した口端面には２条の凹線が、また頸部屈曲部上面には１条の凹線が巡る。口頸部は内外面ともに横撫で、胴部外面上位は細かい縦刷毛目、底部寄りは縦方向に撫でられている。内面の横撫では頸部以下の胴張り部まで行われ、以下を横ないしは斜め刷毛目で調整している。300は方形周溝状遺構ＳＸ－１の区画内での出土である。器高22㎝、口径22.8㎝、胴部最大径25.1㎝、底径8.3㎝を測る。ボウル状の胴部から内面に稜を持たずに短い口縁部が屈曲して外上方に立ち上がる。口端部には肥厚を持たず、端面は僅かな凹面をなしている。口頸部内外面は横撫で、胴部外面は縦ヘラ磨き、内面の胴張り部には横方向のヘラ磨きが看取される。以下は撫でられている。301はＳＢ－６の北東部で出土した。器高29.1㎝、口径18.8㎝、胴部最大径21㎝、底径5.9㎝を測る。胴部から水平に近いところまで強く屈曲した口縁部は、端部を上方につまみ上げられ、端面に凹線を１条施される。頸部屈曲部の上面にも１条の凹線が巡る。頸部外面を強く横撫でされるため、口縁部の外面には鈍い稜を伴う膨らみがみられる。口頸部内外面は横撫で、胴部外面の上位は縦刷毛目、以下の部位は底部周縁にいたるまで縦ヘラ磨きされている。内面の上位は斜め方向の刷毛目、以下は縦ヘラ削りされる。302はＳＫ－７の上層出土である。器高28.4㎝、口径16.8㎝、胴部最大径19.1㎝、底径5.7㎝を測る。口端部を僅かにつまみ上げられ、端面に１条、頸部屈曲部の上面にも１条の凹線が施される。胴部の下位には焼成後に径２㎝の穿孔が、外面から行われている。口頸部内外面は横撫で、胴部外面は縦ヘラ磨き、内面胴部上半は斜め方向の刷毛目、以下は縦ヘラ削りを施される。ＳＫ－７での祭祀に用いられた遺物と思われる。これら５点の完形、または復原完形の甕のうち300を除く４点は弥生時代中期後葉に比定される。300は口縁部の屈曲の弱さ、口端部に肥厚や凹線を持たず横撫でのみで処理されているところから前４点よりも後出の様相を呈しており、後期初頭に位置づけておく。



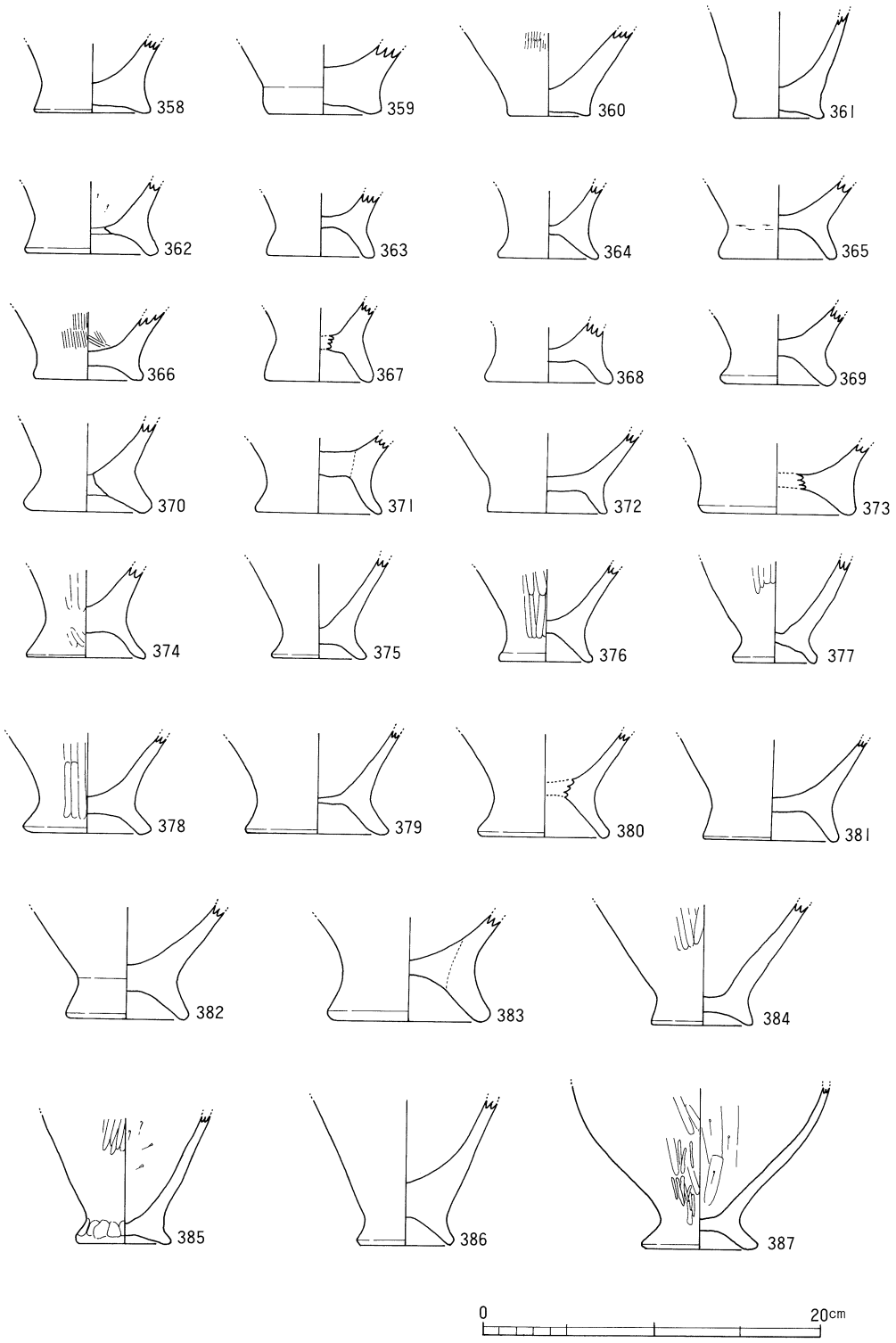
図－104　包含層出土弥生式土器(1)



図－105　包含層出土弥生式土器(2)



図－106　包含層出土弥生式土器(3)



図－107　包含層出土弥生式土器(4)

303～310は小型、ないしは中型の甕上半部である。このうち306・309・310には、口端部の上方へのつまみ上げ、口端面、頸部屈曲部上面の凹線といった中期後葉の甕によくみられる特徴を持っている。ただし、309はその器形、器壁の厚さ、調整の粗雑さ等、該期の甕としては特異である。これらの遺物に比べて304・305・308は後出の遺物であると考えられる。

312～319は頸部に突帯を持つ甕の一群であるが、頸部突帯は口径25cmを越える大型品に施されることが多い。突帯には布目押圧による刻み目を施されるものと、ヘラによる切り取り、またはヘラを押圧しつつたたみこむように刻まれるものとがあるが、概して前者は頸部の屈曲が弱く、口端面に凹線を持たないものに貼られることが多く、それに対して後者は内面に明確な稜を持って強く屈曲し、肥厚した口端面に数条の凹線を施される個体に巻かせることが多い。言いかえれば、東部瀬戸内的な要素を多く持った甕に対して後者の突帯が、より在地的な大型甕に前者が伴うといえよう。313の口端部はヘラにより刻まれており、前時代的な属性を残存させている個体と理解される。なお、318は竪穴住居址ＳＢ－１の上層からの出土である。

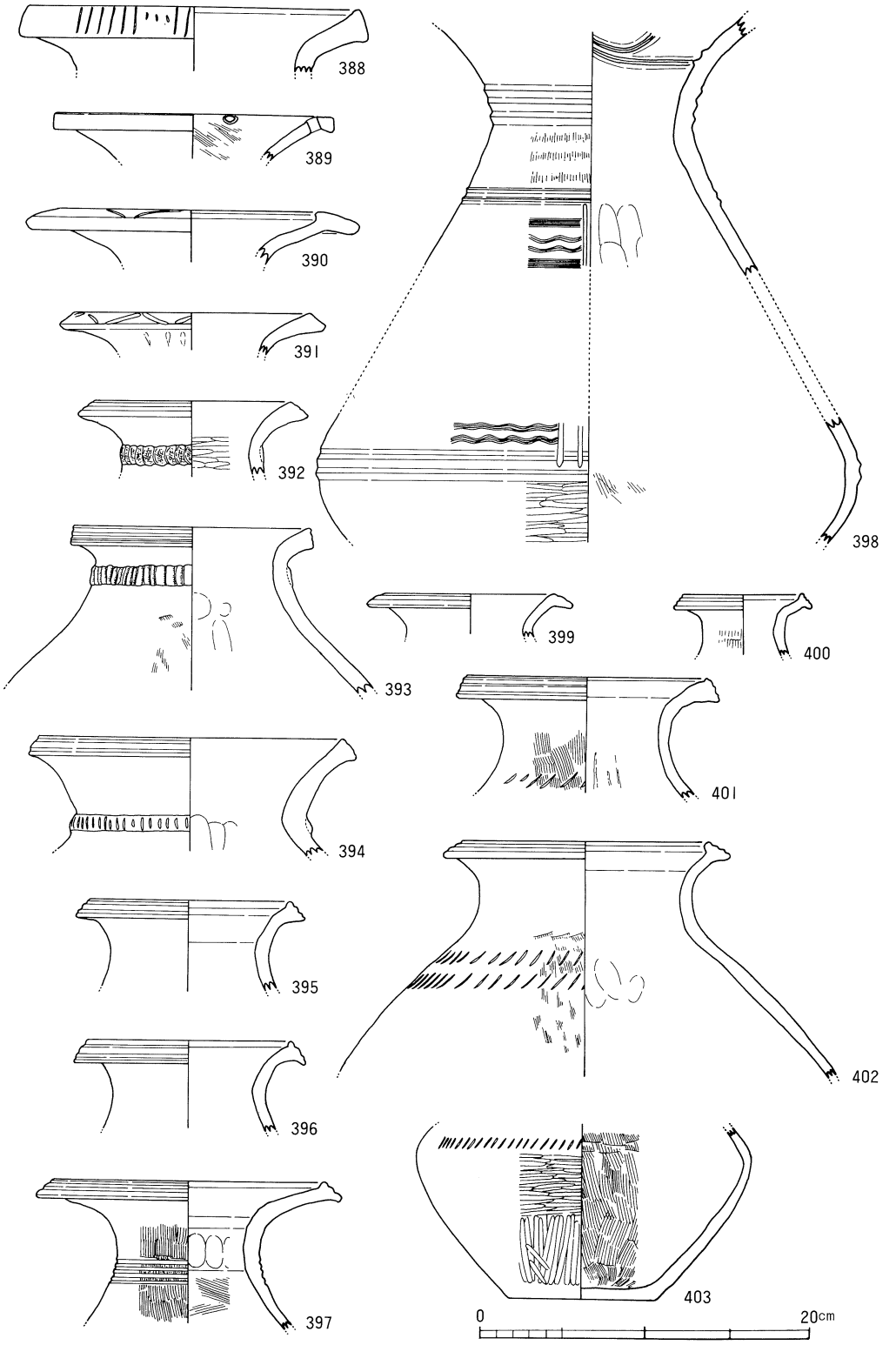
320～387にみられるように底部には平底、くびれの上げ底、窪み底がある。中期後葉、いわゆる凹線文盛行期の甕底部は、平底とくびれの上げ底とが共存するが、口縁部に１条から数条の凹線を施される甕には多くの場合平底が伴っている。窪み底のうち、くびれを持たないものについては後出の要素と考えられる。

壺（388～453）

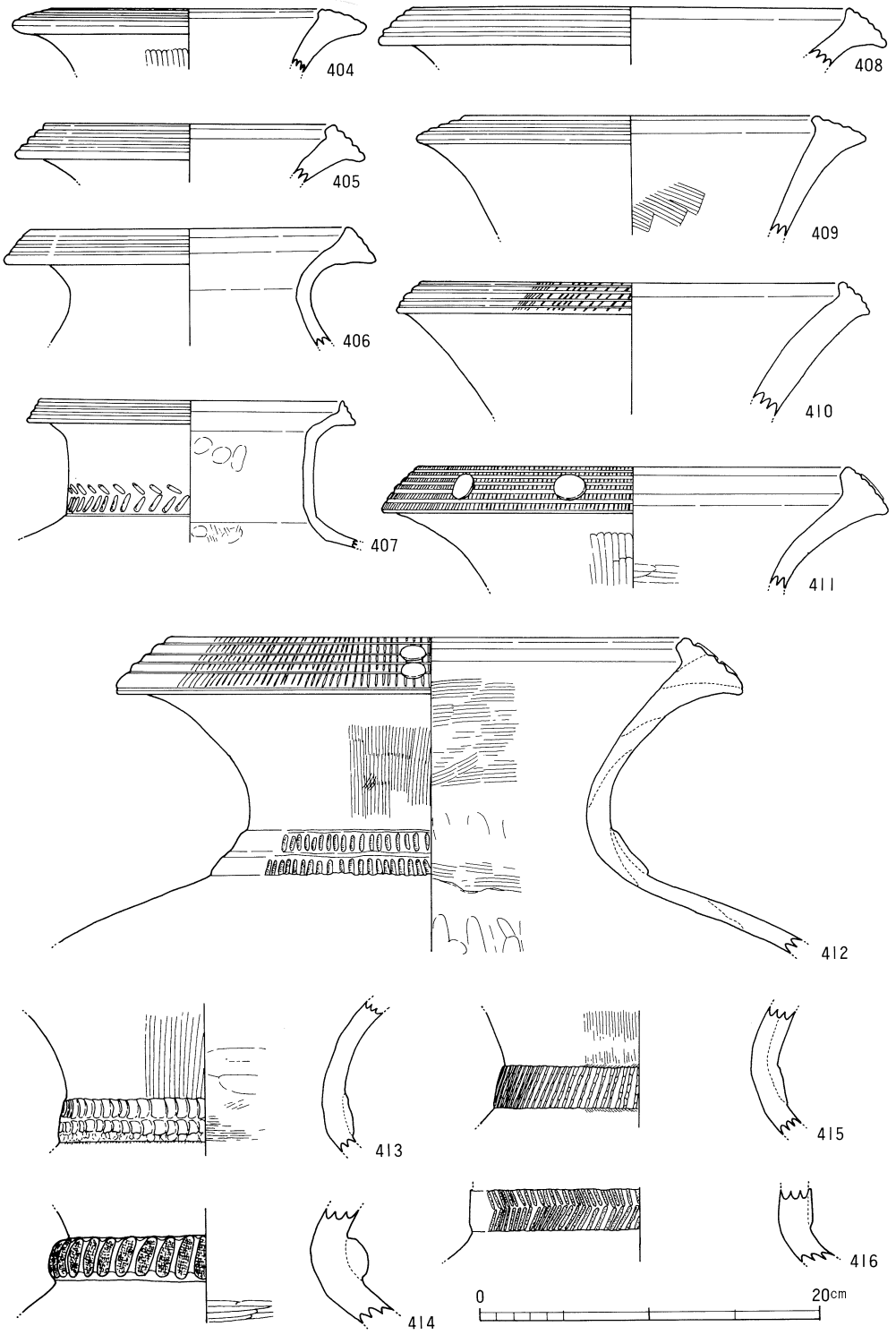
壺には口径20cm未満の中・小型品と、20cmを越える大型品とがある。前者のうちには388～391、398のように明らかに凹線文期よりも遡るものがある。398は調査区内各所の広い範囲にわたって出土した破片が接合している。断面三角形の突帯が頸部に３条、肩部と胴張り部に２条巻かれ、肩部と胴張り部には棒状浮文や、櫛描き直線文、波状文を伴う。口縁部内面にも２条の突帯を持っている。胎土は他の多くの土器群とは異なって、灰白色を呈している。突帯を多用しながら櫛描文を併用する、中期中葉の東西の要素の折衷的な遺物であると考えられる。388～391については、拡張した口端面にヘラ磨きの施文を施されたり、無文ながら口端部の下方向への拡張がみられることから、中期中葉の遺物であると考えられる。

口端面に凹線文を施される中・小型品のうち392～394は頸部に刻み目や圧痕文を施された突帯を持っている。典型的な凹線文系中・小型壺の頸部施文は通常無文であるか、もしくは「ノ」の字状列点文に限られる。これら３点については、より在地的な壺に外来系の要素である凹線文をとりいれた結果と考えられる。頸部の施文でいえば、397の４条の沈線や407の棒状工具の刺突による羽状文も、その筒状の頸部から短く開く口縁部形態とともに当平野においては異例といえる。

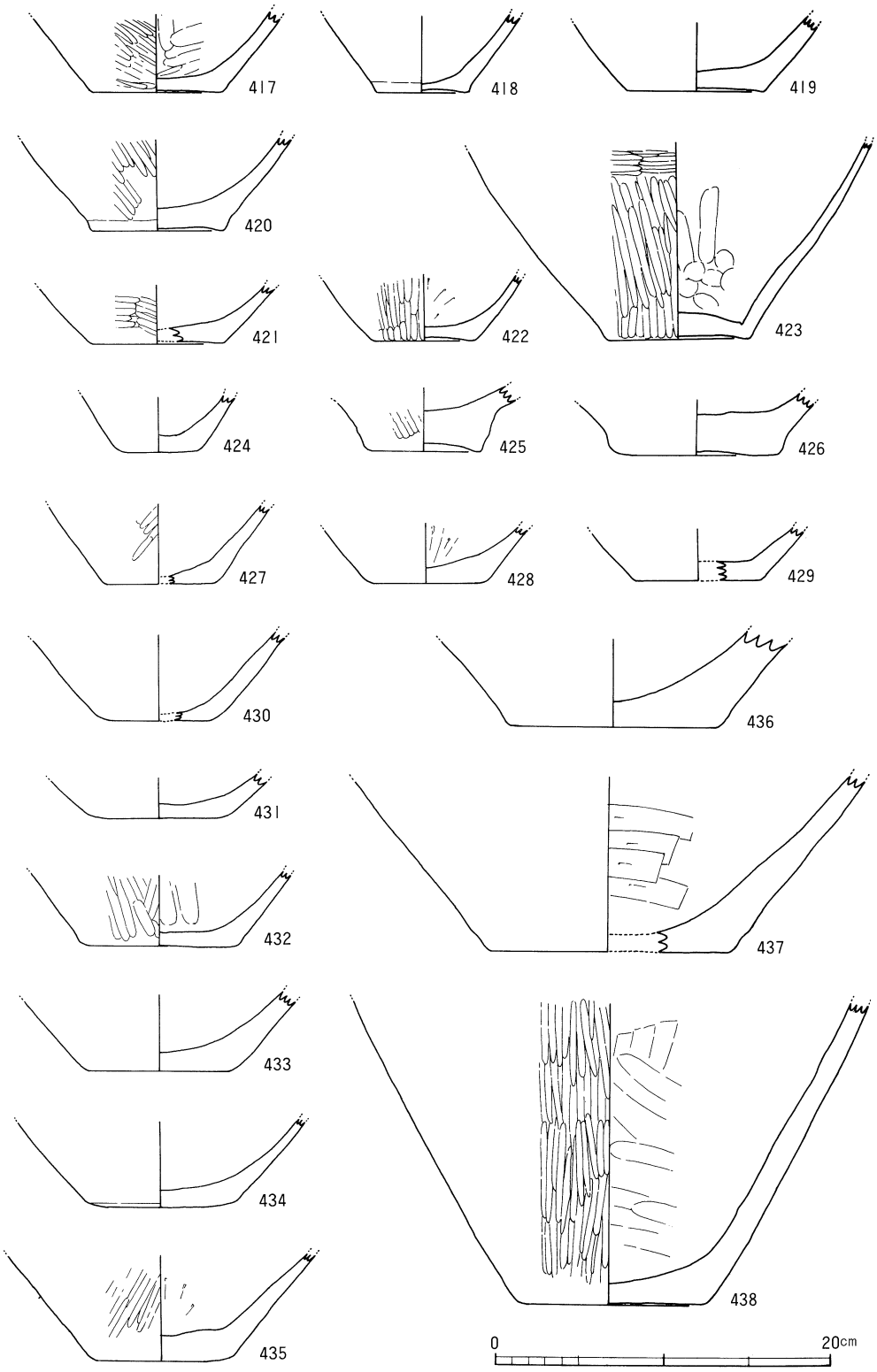
頸部突帯を持たないことを原則とする中・小型品に対して408～416にみられるように、口径20cmを越えるような大型品の頸部には刻み目突帯が巻かれることが多い。このことはこの



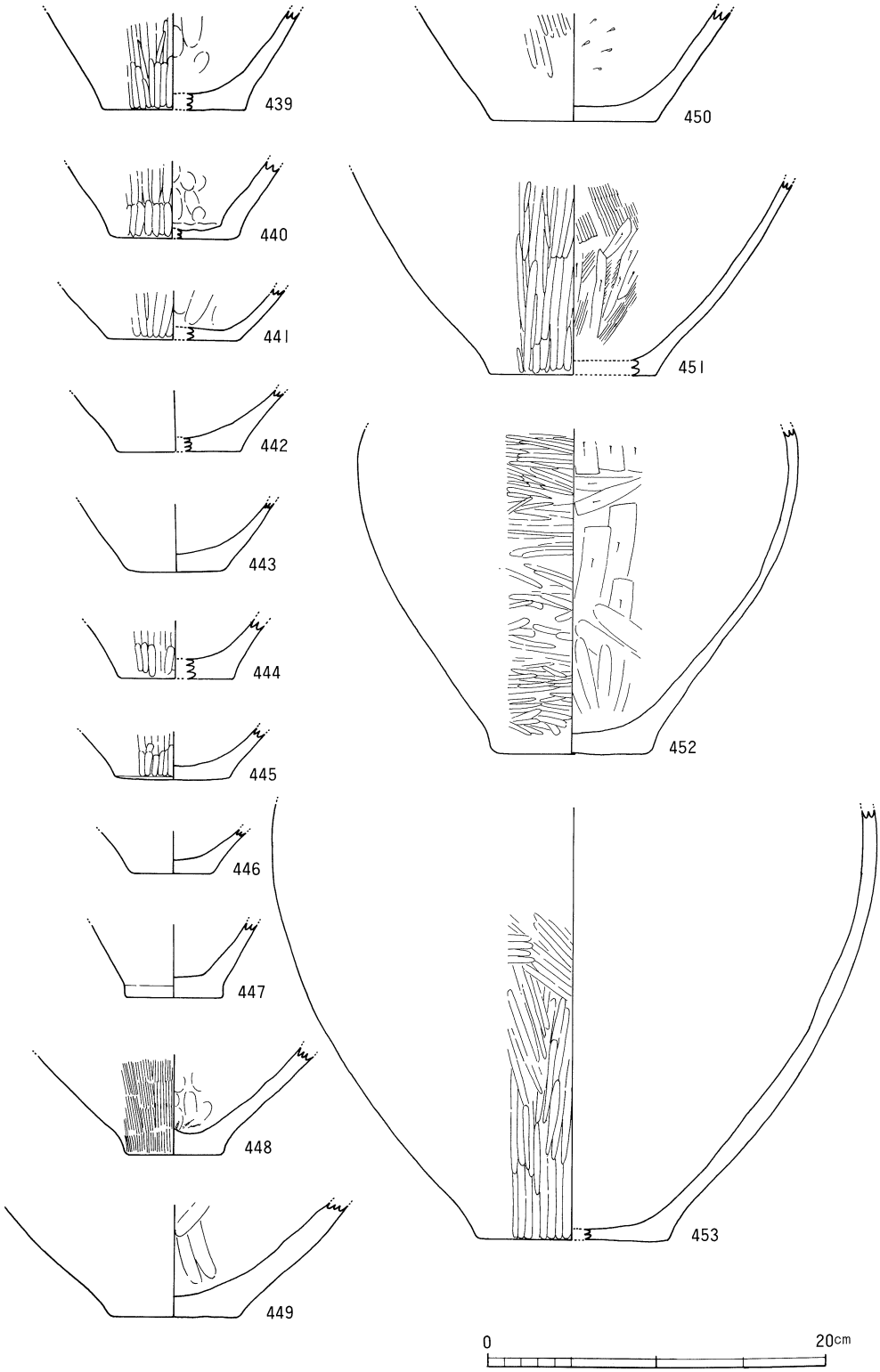
図－108　包含層出土弥生式土器(5)



図－109　包含層出土弥生式土器(6)



図－110　包含層出土弥生式土器(7)



図－111　包含層出土弥生式土器(8)

時期の甕の中・小型品と大型品の施文形態と相通ずるところがある。口端部は多くの場合内面に稜を持って特に上方に拡張し、この端面に数条の凹線を巡らせ、さらに凹線間の凸部を刻み、411や412のように円形浮文を貼付けられる例もある。この大型壺における口端部の上方への拡張指向は、後期に至っていちはやく大型壺に採用される複合口縁の成立過程の一側面を示しているといってよい。

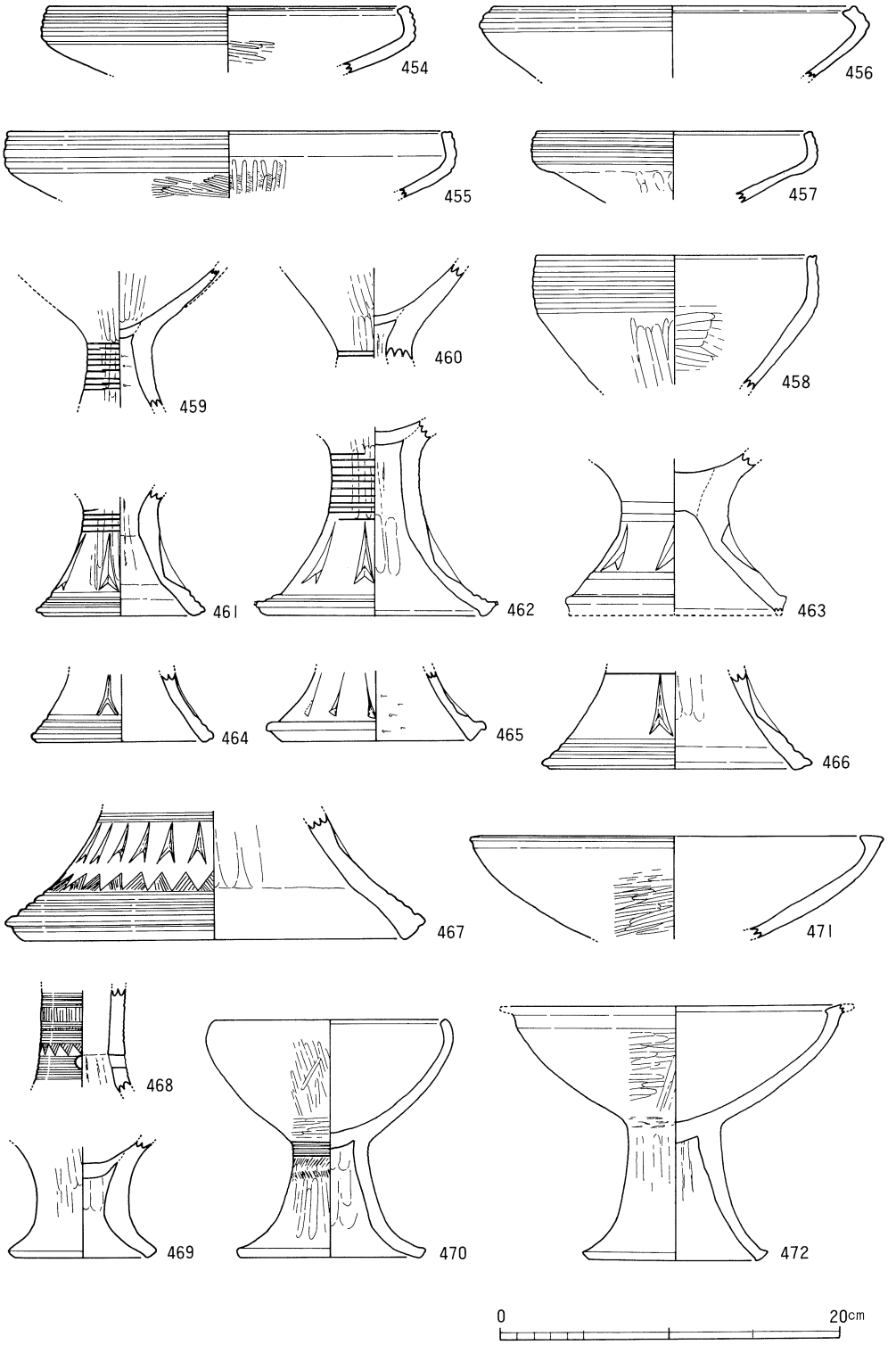
417～453は壺の底部、ないしは下半部である。平底、または僅かな窪み底をなし、外面をヘラ磨き、内面は削りや撫でにより調整されるものが多い。胴部外面の磨きの方向を部位によって変え、装飾的な効果を意図したものもある。

高坏（454～472）　高坏には口縁部外面や、脚裾端部を数条の凹線文で加飾されるものと、そうでないものとがある。凹線文系のものの坏部には、454～457のように口縁部の立ち上がりが短く比較的浅いものと、458のように深いものとがあり、前者には462のような長めの脚が、後者には461のような低い脚が伴うことが多い。調整は、口縁部内外面を横撫で、その他の部位は内外面ともにヘラ磨きされるものが多い。脚部は長脚、短脚の別にかかわらず裾部外面に数条の、場合によっては脚端面にも1条の凹線文、脚基部に2、3条から多い場合には10数条の沈線文を施され、これらの凹線、沈線間の空間を数方向の矢羽根状、または二等辺三角形状の透かしで施文される。この透かしと脚基部の沈線とは同一の工具で施文されたものと思われ、例えば金属器のような非常に鋭利な工具が想定される。凹線文期の前段階にみられる二等辺三角形状の透かしは脚部内面まで貫通するが、この段階では貫通しない場合が多い。467は脚裾径15.2cmと大きく、矢羽根透かしに加えて斜線文で充塡された鋸歯文を施文されており、器台の可能性がある。

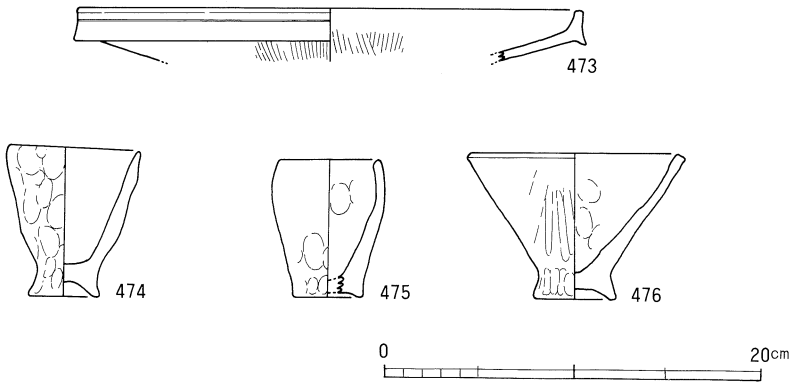
凹線文を持たないものの坏部には、口端部上面に拡張面を持つ471・472と、単純な椀型をなして口端部を丸く収める470とがある。前者にみられるような口端面の拡張は、凹線文期に先行する古い要素とみてよい。470は脚基部に沈線、「ノ」の字状の刻み目を2段に組み合わせて羽状文ふうの施文を行っている。沈線はそれほど鋭い工具によるものではなく、ヘラ状工具によっている。刻み目は凹線文期の高坏においてはよくみられるが、その場合口縁部凹線文の直下に行われることが多い。坏部形態は凹線文系の高坏に似るが、脚裾部の形態等、後出の要素も持っている。中期後葉、あるいは後続する時期の遺物であろう。

器台（473）　受部、または脚端部の小片である。器台以外の、例えばエンタシス状の柱部をなす高坏脚端等の器型も考えられ得るが、ここでは器台として扱っておく。上下方に拡張された口端部外面には不明瞭な沈線が1条巡っている。内外面ともに縦刷毛目調整を施されており、ヘラ磨きがみられないところから、脚端部としたほうがよいのかもしれない。

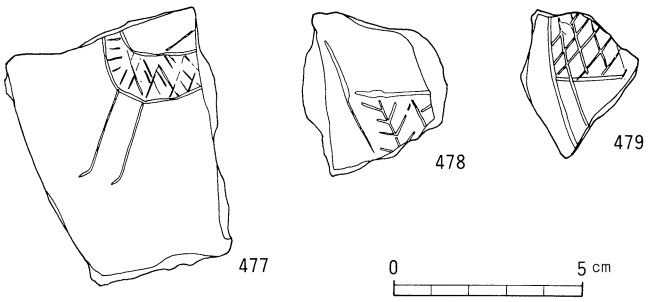
ミニチュア土器（474～476）　3点出土しているが、いずれも手捏ねによる成形である。内面は指撫でされ、474の外面には指頭圧痕が残されたまま未調整である。475では撫で消され、476ではヘラ磨きされている。



図－112　包含層出土弥生式土器(9)



図－113　包含層出土弥生式土器(10)



図－114　包含層出土絵画土器

絵画土器（477～479）　ヘラ描きの絵画文を施された土器小片が3点出土しているが、いずれも壺の胴部片である。477はシカを描いたものと思われ、首、胴体前半部、前足が確認できる。胴体は不規則な斜格子状の沈線で埋められている。背中には斜め上方に1条の沈線が描かれている。胴体に突き刺さった矢を表現したものであろう。478は家屋の屋根の側面を表現したものと思われる。水平な沈線を棟の表現とすると、この沈線に鋭角的に交叉して斜め上方に延びるもう一方の沈線は千木のように突出した妻側の垂木表現と考えられる。この2本の沈線で囲まれた部分は綾杉状の文様で埋められている。479は家屋の一部ともみえるし、動物表現ともとれるが、小片であり、具体的表現を断定することは差し控えておく。

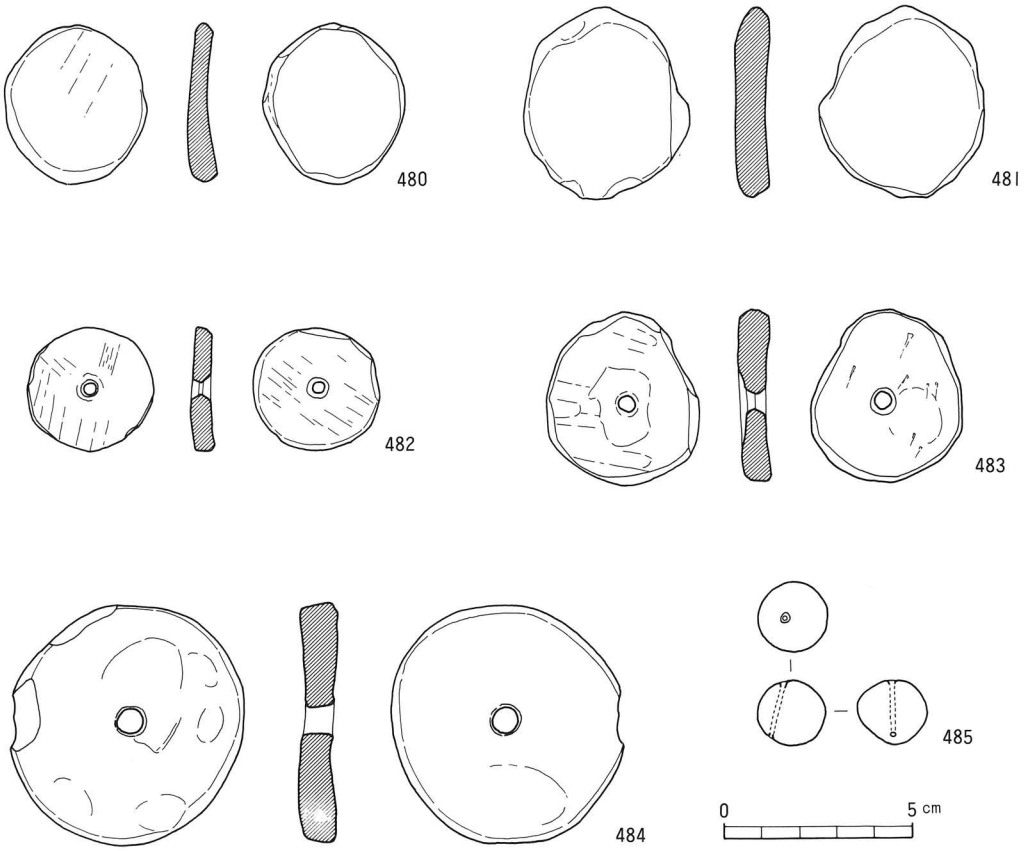
土製品（図115・116）

紡錘車・土玉（480～485）　紡錘車は未製品を含めて5点出土している。そのうち480～483の4点は土器片再利用のものである。480は10.4g、481は20.1g、壺の胴部片と思われる土器片の周縁を打ち欠き、また研磨して楕円形に成形、穿孔工程を残すのみのところまで達している。482は6.6g、甕の胴部片を円形に成形し、穿孔している。483は16.8g、不整

楕円形の壺胴部片に穿孔時の剥離がみられる。484は直径6.3cm、最大厚1cmの粘土円板に焼成前の穿孔を施されている。重量47.3gを量る。

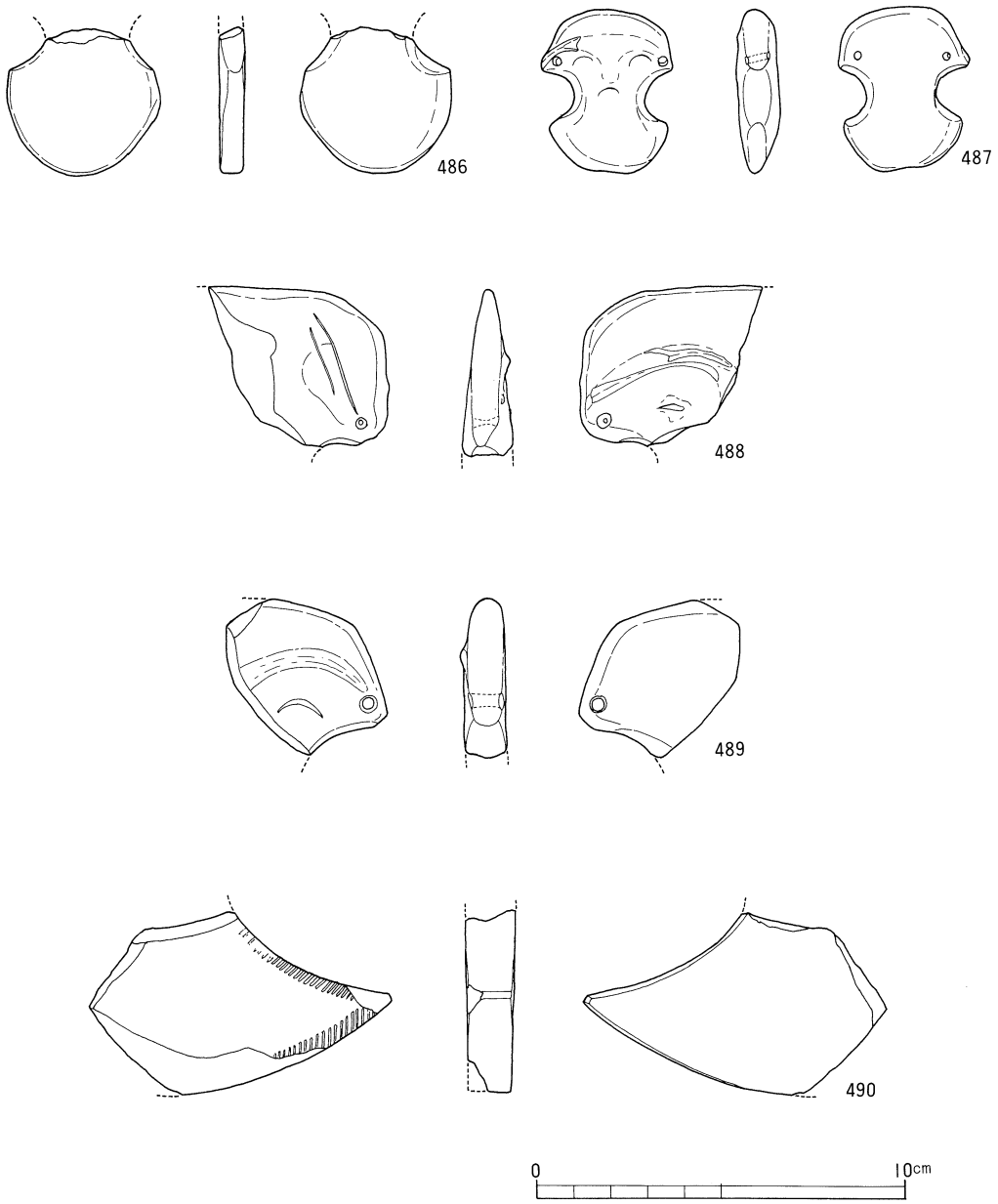
土玉485は直径1.8cmの僅かに歪んだ球形をなし、この球体の大きく偏った位置に径1mmの孔を焼成前に穿たれている。重量5.7gを量る。

分銅形土製品（486～490）　今回の調査では計6点の分銅形土製品が出土しているが、確実に住居址に伴ったものは先述のSB-6出土の224のみであり、ここに掲げた5点はいずれも包含層の出土である。これら5点のなかでもSB-5の上層部で出土したほぼ完形の487は、破砕された状態で出土することに分銅形土製品の祭祀具としての意味があるといわれるほど完形品の出土例が少ないなかでは稀有な例といえる。長さ4.5cm、最大幅3.5cm、くびれ部幅1.9cm、最大厚1.1cmを測る小型品である。正面観は円形と隅丸方形の中間のような形態をなし、側面形は紡錘形に近い形をなす。眉、鼻は隆起帯によって表現されることが、残存する隆起帯の一部と剥離痕により確認される。眼、口は非常に鋭い円弧状の刺突で表現されているが、笹や蘆等の禾本科植物の鞘状外皮を半截したもの、もしくは爪を用いたものと思われる。上



図－115　包含層出土紡錘車・土玉

半部の両側部には一対の円孔が表面から裏面へ貫通している。486は下半部の片、直径4.1cm、厚さ7mmの円板の両上側部を切り欠いたような形態を呈している。出土地点はＳＢ－６の上層部である。488はＳＢ－７の上層部出土、隅丸方形の上半部約１／４の片で、復原長９cm、幅8.5cm前後になるものと思われる。隆起帯による眉と陰刻による眼、側端部には円孔が穿



図－116　包含層出土分銅形土製品

たれている。裏面には2条の平行沈線がみられるが、施文を意図したものかどうかは不詳である。489も上半部の片であるが形態は487に近く、円形と隅丸方形の中間のような平面形を呈し、眉を隆起帯で、眼は爪を用いたと思われる刺突で表現されている。側端部に円孔を持っている。ＳＢ－５の上層での出土である。490は復原幅約14cmの大型品で、ＳＫ－６上層で出土した。下半部１／４の片で、主面の周縁部に櫛歯状工具による刻み目を施されている。非常に入念に作られており、焼成も堅徴である。

石器（図117～119）

石庖丁（491～500）　11点が出土しており、うち９点は磨製、２点が打製である。磨製のもののうち492を除く８点は緑色片岩を素材としている。完形品491は全長10.1cm、幅4.2cm、厚さ７mm、重量55.4ｇの直線刃半月形をなす。研磨は全面に施され、刃部の研ぎ出しは両面から行われるが、片面に大きく偏っている。穿孔は若干背部寄りの２箇所に両面から行われている。494も同様の形態をなすものと思われるが、穿孔は刃部寄りに行われている。492は外湾する刃部と背部を持つ杏仁形をなす。幅６cm、厚さ７mm、推定長12cm前後になるものと考えられる。研磨は凸部を擦り落とすように行われ、凹部には石材の肌理が残っている。刃部は両面から研ぎ出され、穿孔は背部寄りの１箇所にのみ行われているが、この孔に接して穿孔途中で放棄された孔が確認できる。493は外湾刃半月形をなすものと思われる。

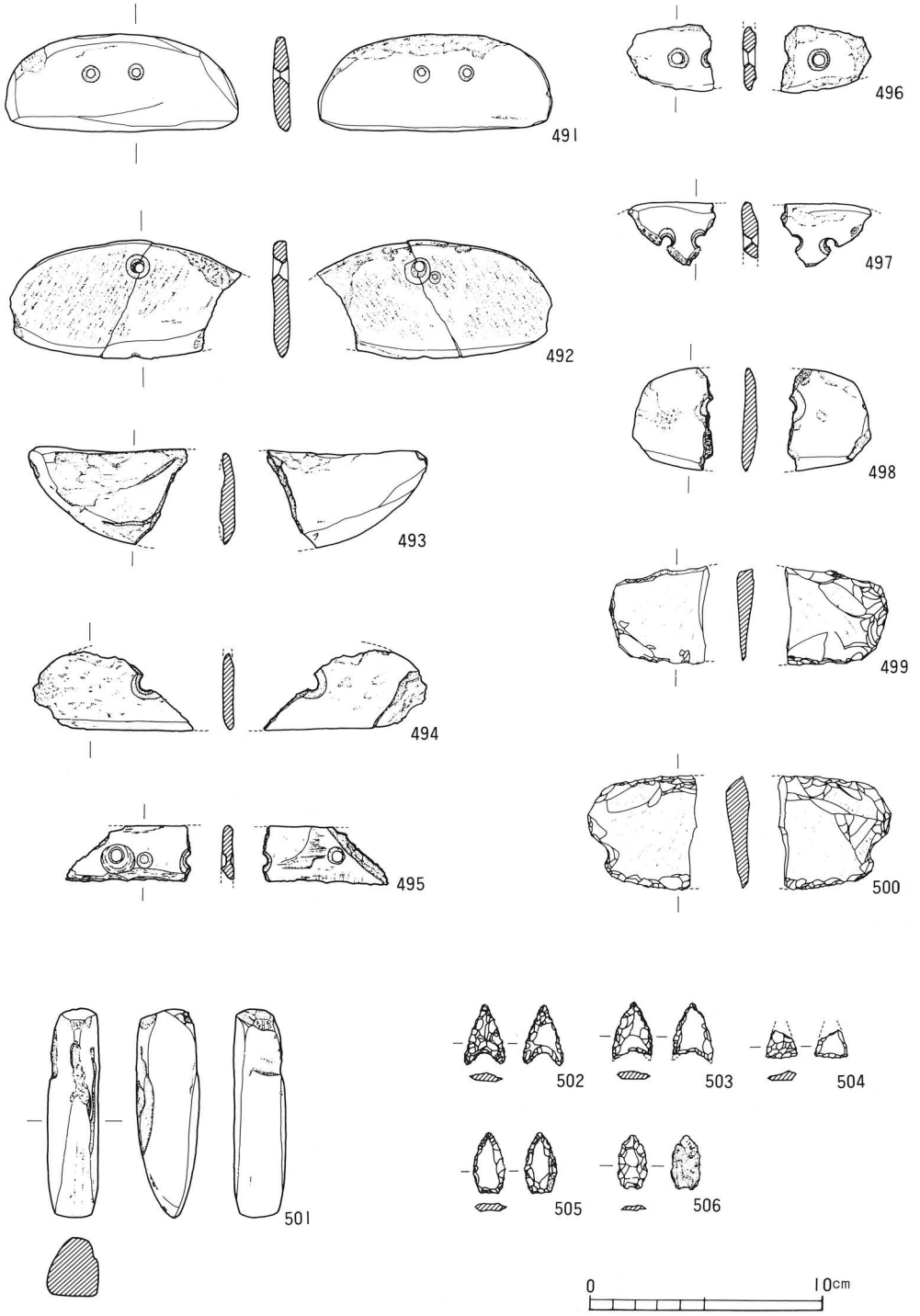
打製石庖丁499、500はいずれも破損品であるが、サヌカイトを素材としている。両者ともに形態としては長方形に近い形をなすものと思われる。499は刃部のみを調整しており、背部、側部には原石の風化面がそのまま残っている。500の調整は周縁部全域に及び、側部の刃部寄りには抉りを入れられている。

石斧（501）　緑色片岩製の柱状片刃石斧である。全長９cm、最大幅2.2cm、最大厚2.6cm、重量93.2ｇを測る。断面カマボコ状を呈し、基端面を除く各面を研磨されているが、斧台装着部付近は段状に敲きべらしを施されている。

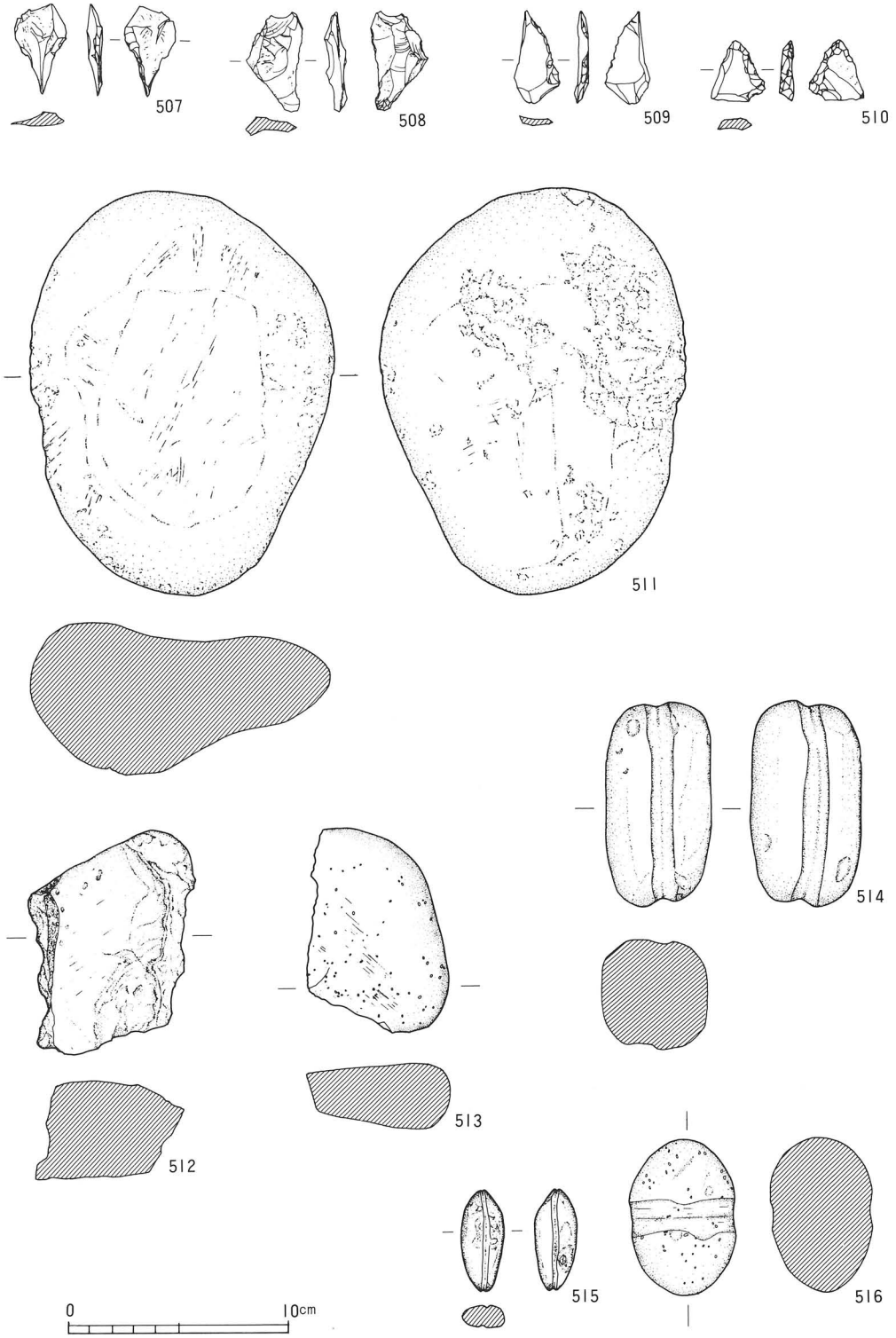
石鏃（502～506）　打製石鏃が５点出土しているが、結晶片岩製の506を除いて、いずれもサヌカイトを素材としている。502、503のような凹基鏃、504～506のような平基鏃に大別されるが、それぞれのタイプには三角形状に基端部まで広がるものと、基端部に至ってすぼまるものとがある。完形品502、505の重量は、それぞれ1.2ｇ、1.4ｇを量る。506は破損品で、板状に剥離している。

石錐（507・508）　赤色チャートを素材とした錐２点である。507は完形品であるが調整は極めて簡単で、手ごろな剥片素材の１側縁のみをの調整して錐部を成形している。508の錐部は断面三角形を呈しているが使用により大きく摩滅している。

スクレーパー（509・510）　509は不定形なサヌカイトの剥片の縁辺部を調整してサイドスクレーパーとしている。510は石鏃の未製品であるかもしれない。



図－117　包含層出土石器類(1)

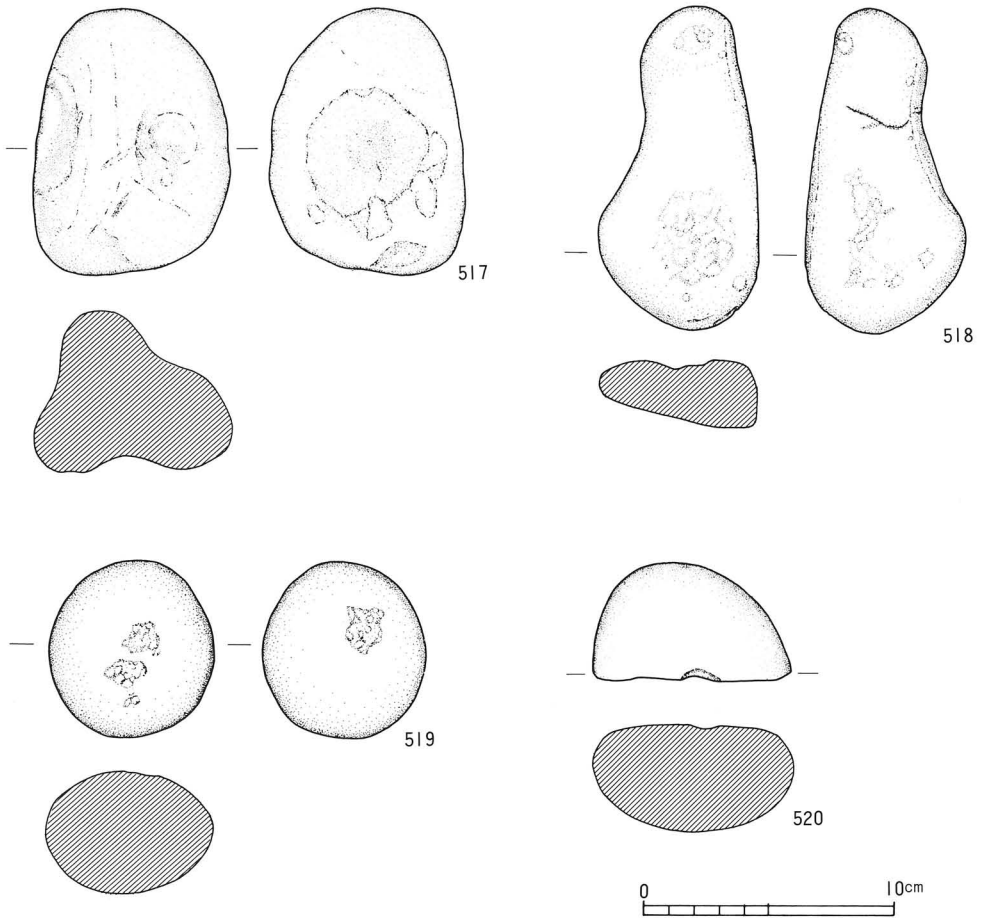


図－118　包含層出土石器類(2)

砥石・擦り石（511～513）　511は偏平な凝灰岩の転石の両面を使用している。石皿のような用途に用いたものと思われる。512・513はアプライトの砥石片、両者ともに火熱を受けて破損したようである。

石錘（514～516）　514は砂岩を隅丸方柱状に成形し、長軸方向に幅広で浅い溝を巡らせている。重量327.3ｇを量る。515は11.5ｇの頁岩の小礫の長軸方向に擦り切りのような細い溝を１条巡らせている。516は砂岩製、214.2ｇを量る。研磨して卵形に成形した礫の中央部、短軸方向に溝というよりは浅い帯状の窪みを施している。

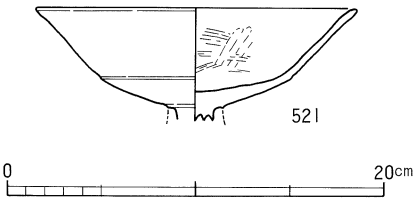
敲石（517～520）　砂岩の転石を敲打具として利用したものが４点出土している。なかでも517は非常によく使いこまれており、各面の随所に使用痕が観察できる。



図－119　包含層出土石器類(3)

土師器（図120）

弥生時代の遺物のほかに何点かの土師器、須恵器片が出土しているが、図示した1点の高坏のみが図化可能であった。復原口径17cmを測る坏部片である。器表面の摩滅が進行しており、器面調整も不明瞭である。坏底部と口縁部とを画する稜はやや鈍い。古墳時代中期の遺物と考えられる。



図－120　包含層出土土師器

3．小　結

3次調査では弥生時代中期後葉から後期初頭にかけての遺構が複雑に切り合って検出された。集落としての盛期は中期後葉に持ち、この時期を若干下って後期初頭に比定される遺構が調査区西部で検出された大型住居ＳＢ−7と方形周溝状遺構ＳＸ−1である。また、ＳＫ−1〜5といった隅丸長方形竪穴遺構が中期後葉の住居址に切られることから住居址に先行するものであることが解っている。ここで住居址、竪穴遺構ともに良好な遺物の出土をみたＳＢ−1、ＳＫ−1についてみてみたい。

ＳＢ−1においては、壺、甕、高坏、鉢といった遺物が比較的良好なセットをなして出土している。中型の甕には口端部を上方につまみ上げられるいわゆる跳ね上げ口縁を持ち、口端面に1条の凹線を施されるものがある。壺には口端部を断面三角形状に肥厚し、拡張した端面に3条の凹線、胴部上位から肩部に「ノ」の字状列点文を持つ完形品、高坏には口縁部外面に凹線文、脚部には沈線、凹線、貫通しない矢羽根透かしを持つものがあり、1点は2段にわたって透かしを切り取られている。これらの遺物を総体としてみると凹線文盛行期の特徴を各器種備えている。

一方、ＳＫ−1では無文の小型壺、突帯や浮文で飾られる大型壺、凹線文系の高坏の3点が出土している。このうち大型壺はいわゆる周防型の陽出文壺で、山本一朗氏の分類によればⅥ式Ｄ類として中期後半に位置づけられている。[①] 共伴して出土した高坏は深椀短脚形で口縁部外面に凹線文、その直下に刻み目を持ち、脚部には沈線、凹線、刻み目、矢羽根透かしを施されている。この高坏の器形そのものは凹線文盛行期のものと大差ないものである。脚部の透かしは4方向に切り取られているが、いずれも貫通している。高坏脚部の矢羽根、もしくは二等辺三角形状の透かしは中期中葉の祝谷六丁場遺跡[②]、大峰台遺跡[③]の出土遺物中に確認することができるが、この時期の透かしは殆どの場合貫通している。他の遺構、および包含層出土の遺物にみられるように凹線文盛行期の透かしは貫通しないことを基本としており、この高坏は属性としては幾分古い要素を持っているものと考えられる。その意味では、頸部に突帯を持つ在地的な凹線文中・小型壺にも同様のことがいえよう。したがって、凹線文期の遺物が将来的に時間的な前後関係として細分できる可能性はある。いずれにしても、現段階ではこのことを検証できるだけの良好な一括遺物は無く、よってこれら隅丸長方形竪穴遺構ＳＫ−1〜5と円形竪穴住居址ＳＢ−1・2・3・5・6、およびＳＫ−7・8とに関しては中期後葉という年代幅のなかでの、土器型式として一型式を画さない程度の前後関係としてとらえておく。

次に、隅丸長方形竪穴遺構の性格について考えておきたい。ＳＫ−1出土の胴部穿孔大型壺は周防では壺棺として用いられることが多い。松山平野での壺棺の検出例は後期に多くみられ、該期の例は現在のところ知られていないが、後期を例にとればその墓壙は埋葬される

棺よりもやや大きめのプランに掘られることを常とし、これらの竪穴のような掘り形を持つ例はない。しかもＳＫ−１では意図的に破砕されたように床面に散乱した状態で検出されており、蓋に用いられたと思われる土器の出土もない。さらに、さほどの時期を隔てずして同じ場所に住居が営まれている。これらのことを総合して判断すると墓としての可能性は低く、なんらかの祭祀的行為に伴う遺構であるとするのが妥当であろう。

上述のような隅丸長方形竪穴遺構は、次の段階においてはＳＫ−７・８にみられるように若干規模を大きくして調査地の西部に営まれる。ＳＫ−７においても祭祀的な行為が行われたことは出土遺物から明らかである。このＳＫ−７に辺を接するように検出されたＳＫ−８にはなんらかの上屋を有し、ＳＫ−７とともに一連の祭祀を行ったものと判断したが、この両遺構の関係は前段階のＳＫ−５と例えばＳＫ−４とのありかたに似ている。こういった上屋を持つ施設と竪穴とが一体となって集落内祭祀がとり行われた可能性は高いものと考える。また、これらの祭祀的遺構に近接してＳＢ−６のような集落内でもとりわけ大きな住居が営まれていることにも注目しておきたい。なお、ＳＢ−６では床面より分銅形土製品が１点出土しているが、松山平野における明確な遺構からの出土は初例である。分銅形土製品はこの１点を含めて計６点出土しており、うち５点が破損品である。中・後期含めた竪穴住居総数が７棟であり、出土個体数と近似する値を示していることはこの土製品による祭祀のレベルを示唆しているものといってよかろう。

後期初頭に属する遺構は、調査区西部の大型住居址ＳＢ−７と方形周溝状遺構ＳＸ−１である。ＳＸ−１は方形周溝墓に非常に似通った形態をなしているが、その比較的良好な遺存状況にもかかわらず埋葬主体の痕跡すらみられないこと、遺物を溝内に配置した後埋め戻された形跡がみられることから祭祀的遺構と判断した。中期段階の隅丸長方形竪穴からこの段階に至って方形周溝状に祭祀遺構の形態が変化するとはいえ、近接地に大型住居を配する遺構配置は中期後葉の状況と通ずるものがある。２次調査検出の円形周溝状遺構も同じく後期初頭に位置づけられるものであり、この両者の微妙な前後関係を云々することは難しいが、この時期以降、後期の間を通じて円形周溝状遺構による祭祀が行われることを考えれば、この方形周溝状遺構の系譜の上に円形周溝状遺構があり、一方、遡ればその祭祀形態は中期後葉の隅丸長方形竪穴遺構での祭祀に求めることができるといってよかろう。

この３次調査の後、昭和62年に愛媛大学考古学研究室によって行われた西隣接地の調査では、柱穴祭祀を伴う中期後葉の大型掘立柱建物や後期初頭の大型竪穴住居と推定される遺構群が検出されており[④]、方形周溝状遺構を中心とする本調査区西部一帯は中期後葉から後期初頭にかけて文京集落の中核的な祭祀空間であったことが推定されている[⑤]。

最後に、調査区東端で検出された不整形の竪穴住居址ＳＢ−４は「花弁形住居」になる可能性がある[⑥]。この種の住居址の松山平野での検出例はなく、愛媛県下でも宇摩郡土居町所在の小富士遺跡に後期の検出例が１例あるのみである[⑦]。ＳＢ−４は遺存が悪いうえに、遺物の

小　　結

出土をみておらず時期比定は難しいが、遺跡総体の時期からみて弥生時代後期初頭を下るものではなかろう。

注

①山本一朗　「防長の弥生式土器」『山口県の弥生式土器―集成と編年―』　周陽考古学研究所報2　1979

②松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　『祝谷六丁場遺跡』　1991

③栗田茂敏　「大峰台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』　松山市教育委員会　1989

④古代学協会四国支部　『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』　（シンポジウム資料）　1988

⑤宮本一夫　「文京遺跡の集落立地について」『文京遺跡第10次調査―文京遺跡における弥生時代遺跡の調査』　愛媛大学埋蔵文化財調査室　1991

⑥宮崎県教育委員会　長津宗重氏の指摘による。

⑦愛媛県埋蔵文化財調査センター　『四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　1991

Ⅳ　5次調査の概要

1．調査に至る経緯と組織

昭和59年9月、愛媛大学学長（当時）坂上英より、松山市文京町3番、愛媛大学城北地区構内における工学部危険物貯蔵所建設に伴う埋蔵文化財確認調査願が、松山市教育委員会・文化教育課に提出された。城北地区構内は周知の包蔵地であることは各章で述べたとおりである。松山市教育委員会は申請面積68㎡と狭小なことに加えて、既存のブロック堀等の施設に制約され、調査実施可能な範囲がさらに限定されること等を勘案、工事実施段階での立会で対応することとし、同年10月26日担当係員による立会が行われた。

この結果、弥生土器を包含する層の検出がみられたため、掘削を一時中断して急遽記録保存を行うこととなった。調査地は城北地区構内の南端にあたる部分であり、文京遺跡の南限にも関わる地点であることが予想され、文京遺跡の範囲確認が主目的となった。調査面積は約18㎡である。調査は同月28日までの3日間にわたって下記の組織で実施した。

調 査 地	松山市文京町3番		
調査面積	18㎡		
調査期間	昭和59年10月26日～28日		
調査委託	愛媛大学学長　坂上　英		
調査主体	松山市教育委員会	教育長	西原多喜男
		教育次長	森田富士弥
		〃	二神　貢
		文化教育課長	藤原　渉
		課長補佐	坪内　晃幸
		第二係長	大西　輝昭
調査担当		主任	西尾　幸則
		調査員	栗田　茂敏

2．遺構と遺物

調査地はその面積が18㎡と狭小なため、個々の遺構についてはその全容を把握することが難しい。竪穴住居址状に掘り込まれた浅い遺構が4基検出されているが、住居址と断定できる積極的な材料がないため、ここでは正確不明竪穴遺構として取り扱っておく。その他柱穴が11基検出されており、掘立柱建物になると思われるものをＳＢ－１、調査地内で屈曲が確認できず１列の直線的な並びのみが確認されたものを柵列ＳＡ－１として扱った。以下、層序から記述する。

(1) 層序（図121）

調査地は城北キャンパス南端にあたり、アスファルト舗装がなされ、通路または駐車スペースとして利用されていた部分である。旧水田面に約40㎝の客土を施し、砕石を敷きつめた後舗装されている。土層図の第５層が旧耕土にあたる。この第５層直下に20～30㎝堆積した第６層暗褐色シルトに弥生時代中期末から後期段階の遺物を包含している。遺構は第６層を撤去した段階で下層の地山、黄色シルトを切り込んだ状態で検出された。なお、地山面での遺構検出段階で、７世紀前半期の掘立柱建物や柱穴列が弥生時代の遺構を切って検出されており、本来第６層を切り込んでいたものと思われるものの、第６層上面での精査時に確認することができなかった。

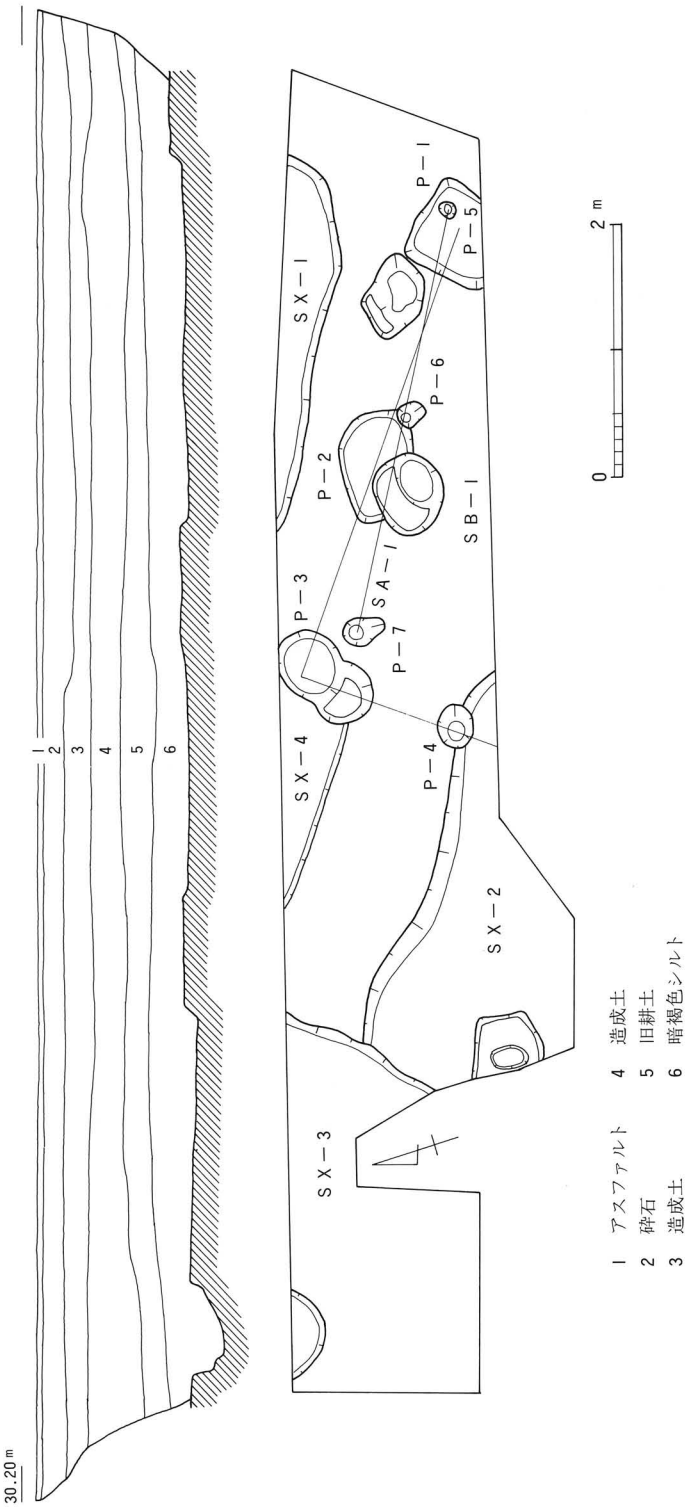
(2) 竪穴遺構（図121）

検出された竪穴遺構は計４基であるが、いずれも立ち上がり10～15㎝程度の浅いもので、壙底はフラットである。ＳＸ－１やＳＸ－２の一部にコーナーになると思われる部分が検出されているが、その形状によると隅丸方形に近い平面プランをなすもののようである。図化可能な遺物の出土をみたのはＳＸ－２のみで、これらの遺物によれば弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。ＳＸ－３・４からの出土はない。ＳＸ－１では弥生土器の細片が少量出土したが時期比定に有効なものはみられなかった。

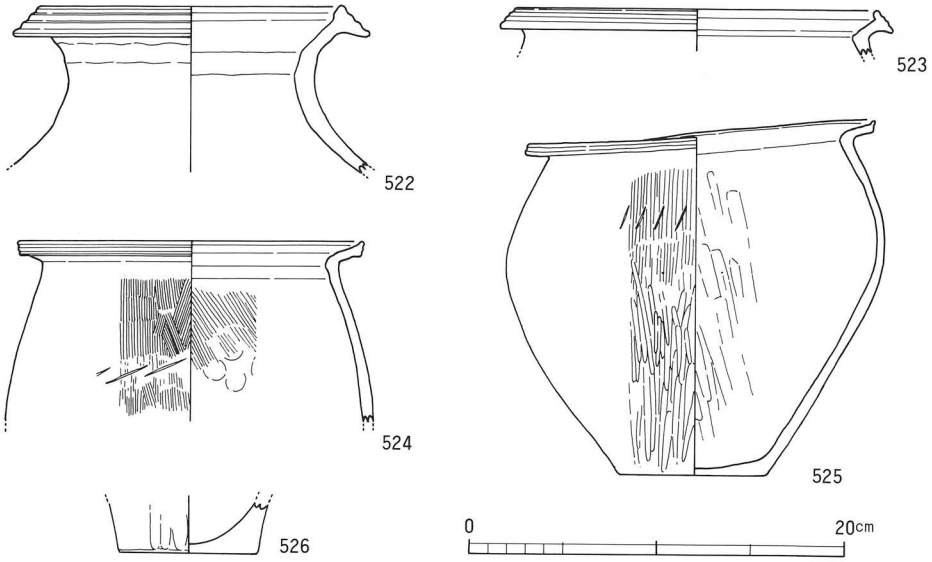
ＳＸ－２出土遺物（図122・123）

壺（522）　口径16㎝を測る口頸部片である。口端部を上下方に拡張し、端面に３条の凹線を施している。頸部の内外面に強く横撫でされた痕跡が残っているが、器面の剥離が激しく調整については不明瞭な部分が多い。

甕（523～526）　523は口頸部の小片、口径19.3㎝を測る。口端部を大きく拡張し、３条の凹線を施している。中東部瀬戸内的な甕である。524は口径18.4㎝の上半部片で、上方につまみ上げて拡張した口端部外面に２条の凹線を施文している。胴部外面の上位には「ノ」の字状列点文を施されている。口頸部内外面ともに横撫で、胴部は内外面ともに刷毛目で調

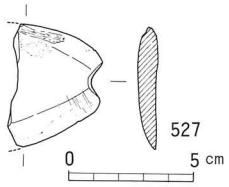


図－121　遺構配置と調査地北壁の土層



図－122　ＳＸ－２出土遺物(1)

整されている。復原完形品525は、器高18cm、胴部最大径20.1cmを測る器高の低い甕で、底部は径7.8cmの比較的大きく安定した平底をなしている。口端部は上方につまみ上げられ拡張した端面に1条の凹線、胴部外面の上位には「ノ」の字状列点文が施される。口頸部内外面ともに横撫で、胴部外面の上位は幅広の縦刷毛目、下位は縦ヘラ磨きされ、内面は縦方向に削られている。526は径7.3cmの平底の甕底部である。



図－123　ＳＸ－２出土遺物(2)

石庖丁（527）　緑色片岩製の石庖丁片が１点出土している。平面形は杏仁形をなすものと考えられる。刃部は片面より研ぎ出され。側部には抉りを入れられている。

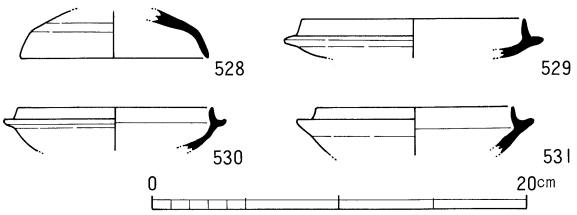
(3)　掘立柱建物・柵列（図121）

竪穴遺構ＳＸ－２、ＳＸ－４を切る掘立柱建物ＳＢ－１はＰ－１～Ｐ－４で構成されており、現況では２＋α×１＋α間分が確認されている。Ｐ－１～Ｐ－３に比べてＰ－４の規模が若干小さすぎるきらいはあるが、その位置関係から、一応この柱穴を拾って１棟の建物を想定しておく。主軸をＮ53°Ｗにとる東西棟になるものと考えられる。桁行柱間190cm、梁行柱間120cmを測る。柱穴のうちＰ－１、Ｐ－２からは、図化不能な弥生土器小片とともに図示した須恵器坏片を出土しており、この建物の上限を７世紀前半期におくことができる。

柵状遺構ＳＡ－１はＳＢ－１に切られて検出された。小規模な柱穴が３基、175cmの間隔をおいて1列に並んでいる。Ｐ－７より弥生土器細片を数点出土しているのみである。

ＳＢ－１出土遺物（図124）

蓋坏（528～531）　528～530がＰ－２出土、531はＰ－１出土である。蓋531は口径10cmを測る口縁部片で天井部との境に鈍い稜を持っている。身529は口径11.8cm、非常に偏平な器形である。小片のため明らかではないが、焼け歪みの部分なのかもしれない。530は口径10.5cm、短い立ち上がりと受け部を持つ。Ｐ－１出土の531も530と同様に短い立ち上がりと受け部を持つ口径10.6cmの身の口縁部片である。これら４点の蓋坏はその法量、器型とともに陶邑編年のＴＫ217型式古段階に相当するものと考えられる。



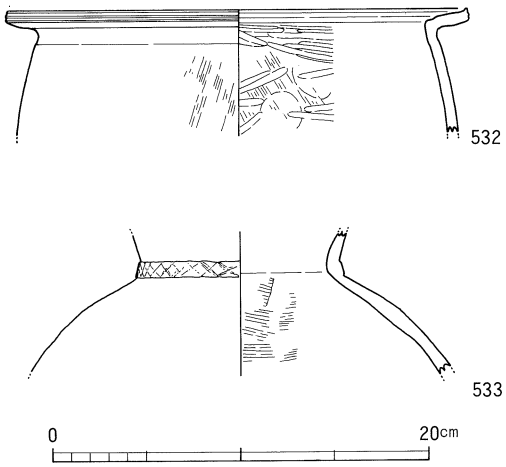
図－124　ＳＢ－１出土遺物

(4)　包含層出土の遺物（図125）

包含層からの遺物の出土はかならずしも多いものではなく、また細片遺物がそのほとんどを占めるため、実測に耐え得るものは以下の２点のみであった。

532は甕口頸部片で、口径24.3cmを測る。口端部はＳＸ－２出土の甕と同様に上方へつまみ上げられ、口端面に２条の凹線、頸部屈曲部の上面にも凹線状の横撫でによる窪みが１条巡る。口縁部の内面と口頸部の外面は横撫で、胴部外面には僅かながら縦刷毛目が窺える。内面は刷毛目の後、頸部屈曲部直下まで横方向にヘラ磨きされている。弥生時代中期後葉の遺物である。

533は壺の頸部から肩部の片で、丸みを帯びた肩部から屈曲して外上方に直線的に頸部が立ち上がる。頸部外面には斜格子刻み目を持つ突帯が貼られている。器面の損傷が著しく、内面肩部の横刷毛目以外は観察できない。弥生時代後期に属する遺物と考えられる。



図－125　包含層出土遺物

3．小　結

5次調査の課題のひとつは文京弥生集落の南への拡がりを確認することにあった。文京遺跡は高縄山系南西麓の分岐丘陵御幸寺山と、独立丘陵勝山（松山城山）との間にはさまれた沖積地上に位置しているが、地形の現況をみると、勝山北麓をほぼ東西に走る谷部を南面に望む東西方向の微高地上に乗っている。このことは、後に道後城北地域での遺跡の立地と動態を探ろうとした谷若倫郎氏の一連の作業の中で作成された遺跡分布図「道後城北弥生遺跡の分布」[①]によってより鮮明にされたが、現地形のコンタをみるかぎり調査地は先述の東西方向の谷部に面する南斜面上に位置し、集落の南限に近い部分ではないかと推測された。

調査面積は18㎡と非常に限られた部分ではあったが弥生時代中・後期の包含層のみでなく、住居址になる可能性の高い竪穴遺構が切り合って検出され、集落域がさらに南へ拡がる様相を確認できたのは大きな成果であった。

また、7世紀代の須恵器を伴う掘立柱建物の検出は文京遺跡においては初例である。数次にわたる文京遺跡内での調査では散発的な古墳時代、古代の遺物の出土や小溝の検出をみることがあっても建物跡等の検出はなかった。これら既住の調査結果からも城北地区構内において古墳時代以降の集落が大きく展開することは予測し難いが、該期の遺構についても留意しておかなければならないのはいうまでもない。

注

①谷若倫郎　「道後城北遺跡の展開」『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』古代学協会四国支部シンポジウム資料　1988

V　出土弥生式土器の検討

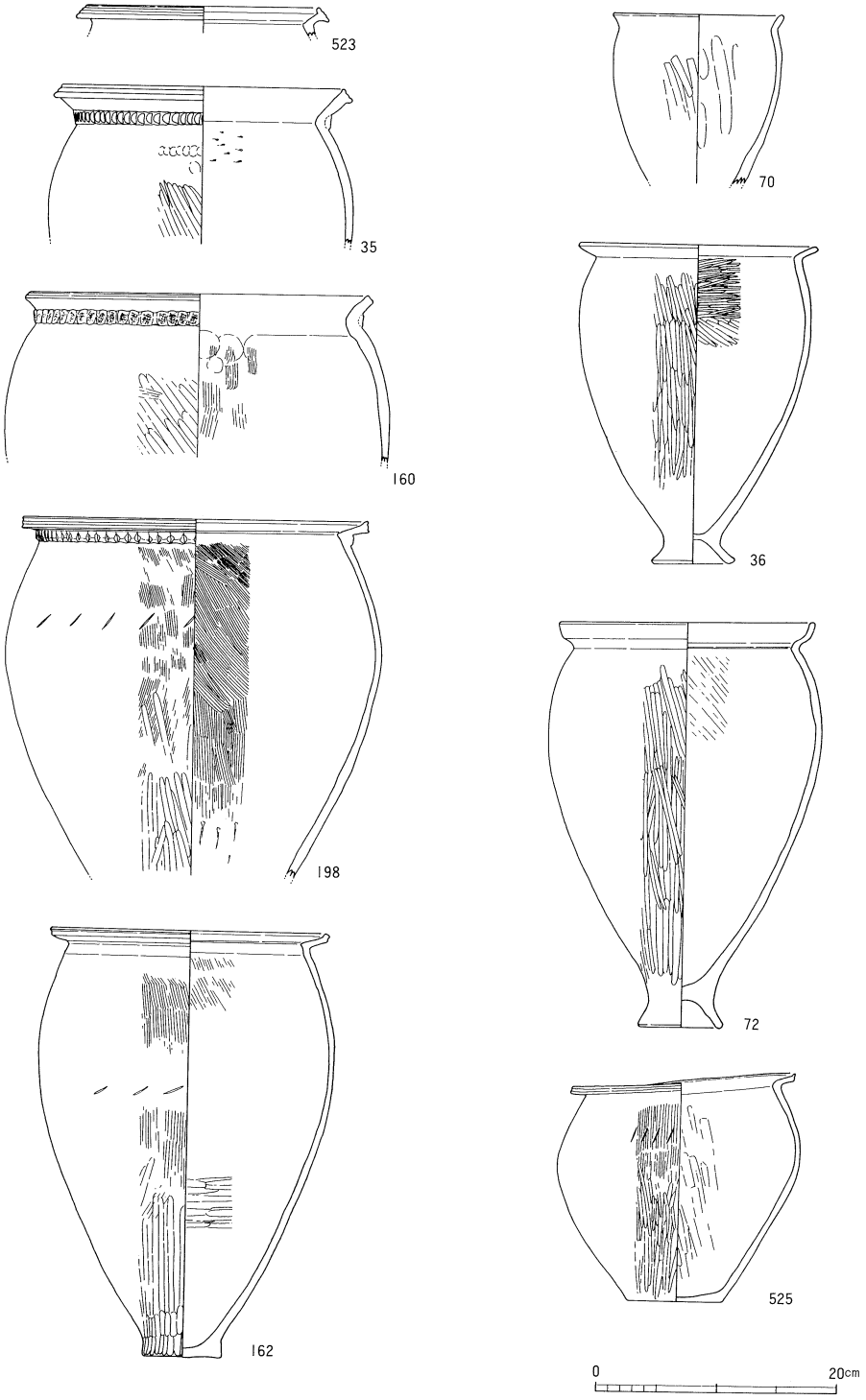
2・3・5次調査においては、弥生時代中期後葉から後期初頭までの遺物を多く出土している。ここでは中期後葉、凹線文期を軸とした文京遺跡出土の土器類についてあらためて整理を行っておきたい。

(1)　弥生時代中期後葉（図126～128）

中期後葉に比定した遺構は多くあるが、器種も豊富でなおかつ一括性が高く、器種構成を端的に呈示できるような遺構には恵まれていない。これらの遺構のなかにあって、比較的まとまった出土状況を示した遺構に3次調査の竪穴住居址ＳＢ－1がある。この住居址からは器種ごとのバリエーションはともかく、甕、壺、高坏、鉢といった主要な器種が一応出そろっている。この3次調査ＳＢ－1出土の遺物を軸として、なお欠落している資料を2次調査ＳＢ－4、ＳＫ－3、3次調査ＳＢ－2・6、ＳＫ－1・7・8、5次調査ＳＸ－2出土の遺物を用いて補完し、器種ごとにまとめたのが図126～128である。2次調査ＳＢ－4に関しては、遺物総体を判断して本文中では後期初頭に位置づけたが、中期的な特徴を非常によく備えた甕の完形品36を出土しているため、あえてここにとりあげている。また、3次調査ＳＫ－1はＳＢ－1に切られ、遺構としては先行するものの出土遺物からは大きな時期差はみられず、弥生時代中期後葉の土器を大きく概観するため採用した。以下、器種ごとにみてゆく。

甕（図126）　甕には大きくわけて、口径25cmを越えるような大型品と中・小型品の2種類があり、その各々に口端面に凹線を持つものと持たないものとがある。凹線文系中型品の例を3次調査ＳＢ－1出土の162でみてみると、底部は平底、口縁部は内面に稜を持って強く屈曲し、口端部を上方に僅かにつまみあげ、端面に1条の凹線を施されている。胴部外面の上位は縦刷毛目、下位を縦ヘラ磨き、内面の上位を縦ないし斜めの刷毛目、下位にはこの個体では一部磨きがみられるが、多くの場合削り上げられる。胴張り部周辺の外面には「ノ」の字状の刺突が加えられることが多いが、全周する場合と部分的に施される場合とがある。また、頸部屈曲部の上面に凹線状の窪みが巡ることも多くみられる。これらの特徴は、525のような器高の低い甕についても同様である。凹線文を持つ中・小型の甕は、一般的に凹線文盛行期にあっても多条化することはなく、したがって523のような口端部を上下に肥厚させ、複数条の凹線を巡らせる中・東部瀬戸内的な甕は当地方においては主流とはならない。

中・小型品のうち凹線文を持たないものは口端部を単純に丸く収めるか、丸みを帯びた不明瞭な面をなす。この部分が横撫でによるしっかりとした平坦面をなし、頸部の屈曲の度合が緩くなる場合は後出の要素とみてよい。2次調査出土の36・72にみられるようにこの種の甕の底部は凹線文系の平底に対してくびれを持った上げ底となる。器面の調整にはヘラ磨き



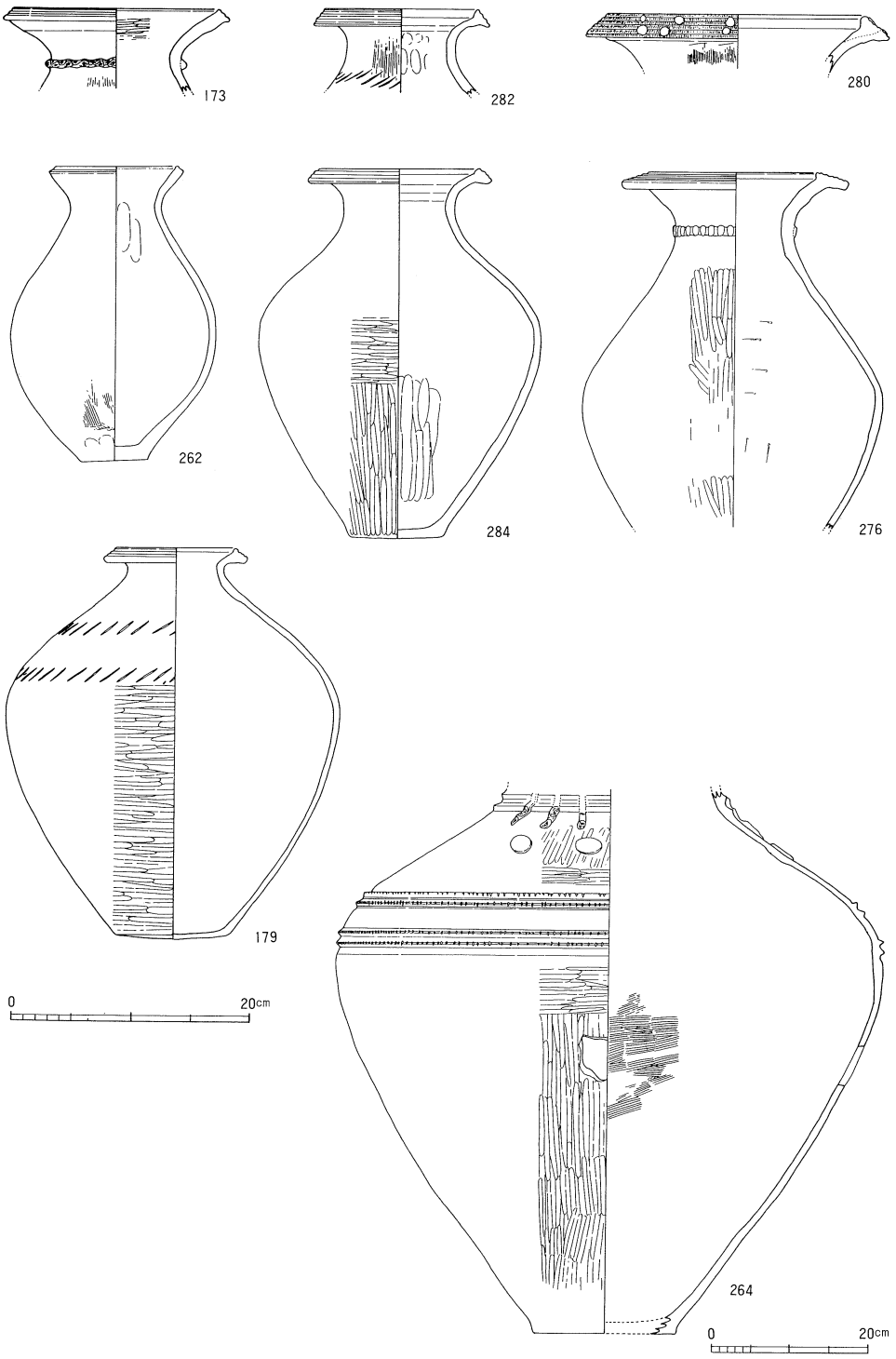
図－126　弥生時代中期後葉の甕

が多用され、36のように内面の上位にまで用いられる場合がある。内面の下位は削り上げられるが、その後撫でられることもある。72の口縁部は大きく内湾することに特徴があるが、それほど出現頻度の高い口縁部形態ではない。これほど極端ではないが内湾しながら開く口縁部を持つ甕は前段階、中期中葉には存在している。小型品には70のような口縁部を緩く外反させただけの単純な器型のものがあるが、これらの甕の胴部外面もヘラ磨きされている。この種の小型甕も前段階から存在している。

大型の甕にも凹線文を持つものと持たないものとがあるが、両者ともにほとんど例外なく頸部に突帯を貼付けられる。3次調査ＳＢ−6出土の198にみられるように、前者では口端面の凹線が2条と複数条になり、頸部突帯を持つことを除けば中・小型品と全く同様の特徴を有している。このことから考えれば中・小型品と同様、底部形態は平底をなしているものと思われる。

凹線を持たない甕160は162とともに3次調査ＳＢ−1から出土したものであるが、頸部の屈曲は緩く口端面は横撫でによる若干の凹面をなすのみである。胴部外面には中・小型品と同様ヘラ磨きが行われ、刷毛目は用いられない。頸部に突帯をもつことは凹線文系の大型甕と同様であるが、凹線文系のそれがシャープに刻みこまれているのに対して圧痕文による施文と、ここでも対照的な特徴を有している。この種の甕の完形品は、昭和57年愛媛大学東に隣接する松山東中学校グランドにおけるゴミ焼却穴掘削中の採集例があり、この例によれば底部はくびれの上げ底になっている〔古代学協会四国支部1988〕。中・小型品と同様の底部形態の違いがあったものと思われる。また、35のような個体はこれら2者の大型甕の折衷的な遺物として理解される

壺（図127）　壺には断片的な資料が多く、必ずしも良好な遺物に恵まれているとはいえない。そのなかにあって器型の全容を窺い得る数少ない遺物が3次調査ＳＢ−1出土の179、ＳＫ−8出土の284、ＳＫ−1出土の262の3点である。まず、凹線文を施されるものについてみてみたい。壺にも甕と同じく中・小型品と口径20cmを越える大型品とがある。中・小型品では口端部を断面三角形状に上下に肥厚され、拡張された端面に2・3条の凹線が施されるのが一般的な口縁部形態のありかたである。短く外曲する頸部から短い口縁部が開く179の底部は比較的大きな平底で、胴部はその上位で大きく張っている。肩部には凹線文系の甕と同様に刷毛目調整具の小口による「ノ」の字状刺突列点文が巡っている。口端部を肥厚する典型的な凹線文壺にあってはロ端面の凹線以外の加飾は、頸部下位または肩部のこの種の施文に限られる。外面の胴張り部以下においては横方向に入念にヘラ磨きされ、以上は縦刷毛目の後撫でられているが、この調整においても下位にヘラ磨き、上位に刷毛目という使い分けの点では甕と共通している。284は179に較べて若干頸部が長くロ縁部の外反度も弱く、179を細頸短頸壺というならば太頸広口壺とでも表現できる個体である。やはりこの壺においても平底、上位に張りを持った胴部、胴下半部のヘラ磨きと179に共通する部分が多い。また、



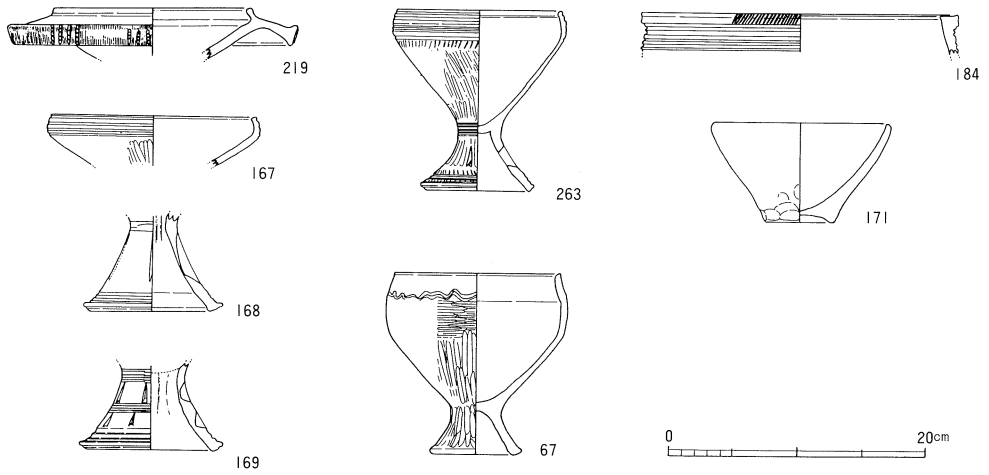
図－127　弥生時代中期後葉の壺

胴部のヘラ磨きは、縦、横とその方向を部位によって使い分け、ある種装飾的な効果を意図している。なお、この個体では刺突列点文は施されないが、同様の器型になると思われる共伴の282では頸部の下位にこの施文が認められる。

凹線文系の中・小型壺のなかには僅かながら3次調整ＳＢ−1出土の173のように、口端部に明確な肥厚を持たず2条程度の凹線を口端面に施されるものがある。上述のように典型的な凹線文壺には列点文以外の加飾を持たないことを基本とするが、これらの壺の頸部には圧痕文や、刻み目を持つ突帯が貼付けられることが多い。この突帯を含めて口頸部そのものの形態も前段階、中期中葉の器型を踏襲している。外来系の要素である凹線文をより在地的な器型にとりいれた結果であろう。その意味では、当地における凹線文の受容過程をこれらの遺物が示しているのかもしれない。もし仮にこれらの遺物が主体を占めるような一括遺物が得られれば凹線文土器の細分編年は可能になるであろう。276の口端部の水平に近い肥厚は極めて異例でありその出自は定かでないが、この部分を除いてみれば、下ぶくれの器型、逆「ハ」の字状に短く直線的に開いた口縁部は無凹線壺262や凹線文壺173に通ずるものがある。在地的な壺の変異形態として考えておきたい。

遺構に伴って出土した凹線文系の大型壺は、3次調査ＳＫ−8出土の280のみである。ここでは282や284と共伴していることをあらためて確認しておいて106ページ、図109の包含層出土の遺物を参照しながら進めたい。104ページ本文中でも述べたように、凹線文系の中・小型壺と大型壺との関係は甕の中・小型品との関係に通ずるものがある。頸部突帯を持たないことを基本とする中・小型壺に対して、大型壺の頸部には突帯が貼付けられる。突帯は刻み目、もしくは圧痕文を施される。口端部は中・小型品と同様上下に肥厚されるが、特に上方には内面に稜を持った立ち上がりのようになる場合がある。大型壺の複合口縁化には様々な要因があろうが、ここにもその傾向を看取することができる。立ち上がりを持って拡張された口端面には数条の凹線が施され、さらにこの凹線間の凸部を縦方向に細かく刻み、円形浮文を貼付けるものもある。また口端部の拡張の度合が弱く、凹線のみを施されるものもある。中・小型壺と同様に前者を外来的要素を多く持ったもの、後者を在地的な器型に凹線をとりいれたものと考えられる。さらに大型甕の例から推測すれば、前者に刻み目突帯が、後者に圧痕文突帯が伴っていた可能性がある。胴部形態やその他については、良好な資料を欠くため残念ながら不明とせざるをえない。なお、陽出文大型壺264については別項で扱う。

高坏・鉢・その他の器種（図128）　高坏にも凹線文系と、それ以外のものがある。遺構から出土した主なものは図示したようなものであるが、包含層からはこれら以外にも口端部に僅かな水平拡張面を持つもの等がある。凹線文を持つものには坏部が浅いもの、深いものの2通りがあり、そのいずれも口縁部外面に3・4条から多い場合は7・8条の凹線が施される。全容を窺い得る1点、3次調査ＳＫ−1出土の263は深椀低脚の器型をなすが、坏部の深さと脚の高低には規制はないようで、愛媛大学による10次調査のＳＢ−6では深めの坏部



図－128　弥生時代中期後葉の高坏・鉢

に、坏部の深さにほぼ等しい高さを持った脚部を有する１点が出土している。〔愛媛大学埋蔵文化財調査室1991〕。脚部の施文は、脚上端に数条の鋭利な工具による沈線、脚裾外面に数条の凹線、この沈線と凹線間に矢羽根透かしを数方向に施すことを基本としている。脚端部を内外面に肥厚して端面に１条の凹線を巡らせることも多い。また、甕や壺と同様、凹線文と「ノ」の字状の刺突や刻みを組み合わせることや、３次調査ＳＢ－１出土の169のように沈線と矢羽根透かしの組合せを２段、あるいはそれ以上繰り返すこともある。透かしは沈線と同じ工具、おそらく鉄器を用いて切り取られたものと考えられるが、貫通しないものがほとんどである。中期中葉の高坏脚部にも三角形、または矢羽根状の透かしを持つものがみられ、この場合のすべてが貫通していることを考えあわせれば263は古い属性を残存させいる個体といってよかろう。この高坏を出土したＳＫ－１がＳＢ－１に切られることも含めて、壺の項でも述べたような凹線文期の遺物の細分編年の可能性は有り得よう。しかし、この程度の土器の変化がどのくらいの時間幅のなかで行われているのか、個体差でなく時間差としてとらえるにはやはり良好な一括遺物が不足している。

凹線文を持たない高坏には先述のように包含層出土品のなかに施文を持たず、口端部上面を水平方向に僅かに拡張したものや、無文で単純な椀形の坏部をなし脚上端にヘラ描き沈線、その下位に「ノ」の字状の刻みを組み合わせた羽状文のような施文を持ったものがある。前者は中葉段階の高坏に系譜を求めることができ、後者には凹線文高坏の施文の影響がみられる。遺構出土のものには２次調査ＳＫ－３の67や、３次調査ＳＢ－６の219がある。67は低脚深椀の台付鉢といってもいいような形態で、口縁部の外面に粗雑で浅い波状文が施されているがしっかりとした櫛描きではなく、こしの弱い例えば植物の茎を束ねたようなもので描かれている。いずれにしても櫛描文の粗雑化したものであろう。ただし、当地方においては中期の前葉から中葉の間、櫛描きが盛行することはなくあくまで傍流としての施文形態である。

219は、鉢184とともに別項で取り扱う。

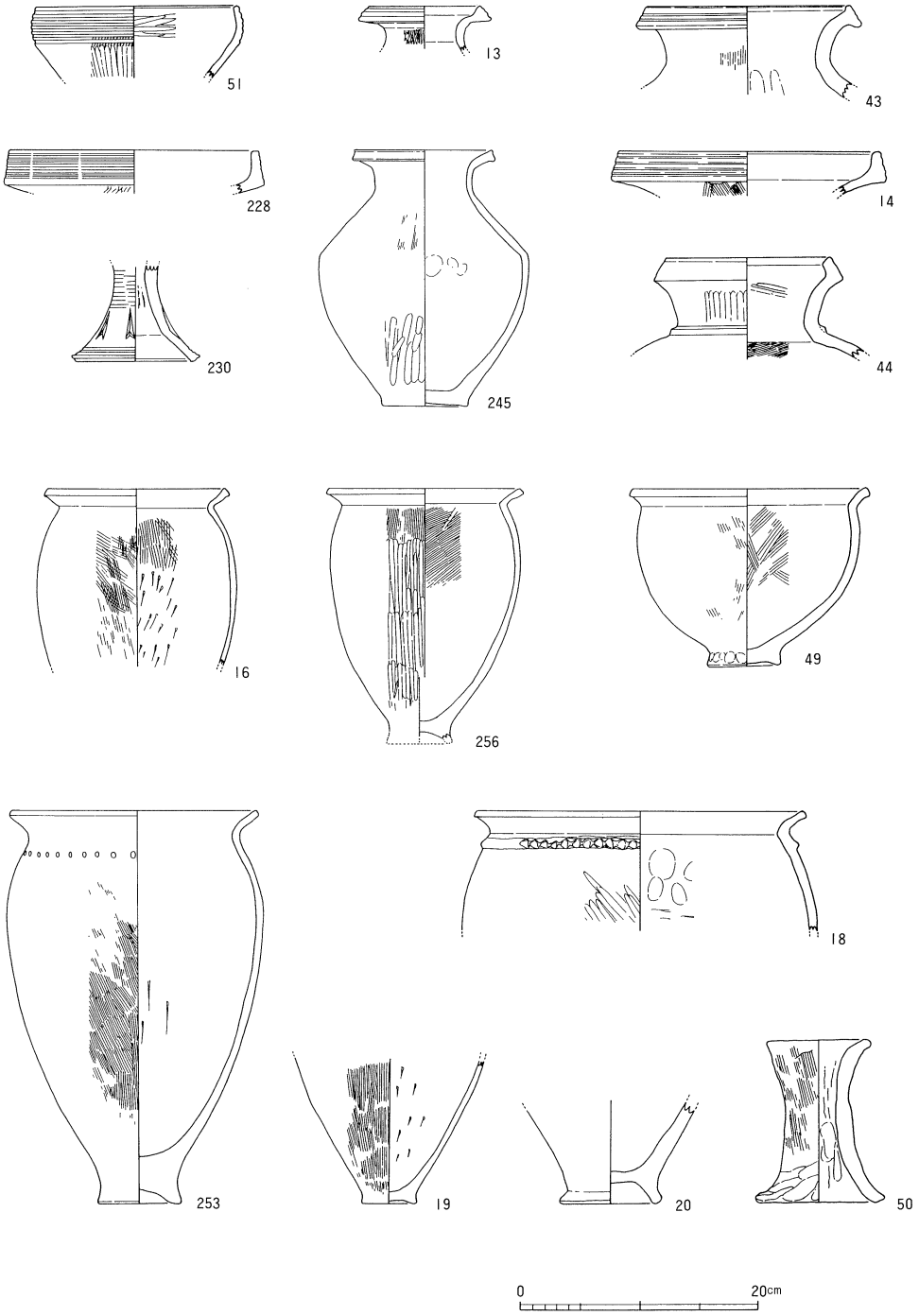
鉢にはＳＢ－１出土の171のような単純な器型の小型のものがあるがこういった小型のものにはとりたてていうべき特徴がない。大型のものとしては３次調査ＳＢ－２出土の小破片184があるのみである。おそらく器高の低い甕、図126-525のようなものがこの用途に用いられたものと思われる。

その他、前段階中期中葉には把手付鉢、いわゆるジョッキ形土器がある。本調査でも図示はされなかったが把手と考えられる小破片が包含層中より出土しており、この段階までは残っているものと思われる。器台に関しては確実にそれと認定できるものの出土はない。しかし、昭和52年に松山市教育委員会によって調査され、報告もなされている松山市鷹子町所在五郎兵衛谷古墳調査中に検出された弥生時代中期後葉の竪穴住居址ＳＢ－１からは、凹線文に矢羽根透かしの脚台部を持った器台の出土例がある〔松山市教育委員会1978〕。包含層出土遺物、図112中の467はその可能性が高い。支脚の出土はなく、この段階では出現していないものと思われる。

(2) 弥生時代後期初頭（図129）

中期後葉に続く時期、後期初頭に関してはそれぞれの器種を個別に検討できるだけの材料が揃っていない。したがって、２次調査ＳＢ－３・５、３次調査ＳＢ－７、ＳＸ－１の遺物から主要なものをとりあげておおまかに概観することにする。これらの遺物のなかでも２次調査ＳＢ－５出土の遺物は、梅木謙一氏によって組まれた弥生後期土器編年にもとりあげられ、後期４期区分のなかで後期１段階、前葉に比定されている〔梅木1991〕。３次調査の方形周溝状遺構ＳＸ－１からは完形品を含めた比較的豊富な遺物の出土がみられているが、在地の系譜に乗らない特殊な遺物を多く含んでおり、該期の当地方の普遍的な遺物のありかたを知るうえにおいては必ずしも適当とはいえない。したがって、とりあげた資料は後述する３点にとどまった。

この時期になっても最も変化が顕著に現れるのは甕である。前段階において普遍的に存在した凹線文系の甕は中・小型品では姿を消す。シャープなつくりの平底、強く屈曲して水平に近いところまで開き、端部をつまみ上げる口縁部を持つものはなくなり、くびれの上げ底を持つ無凹線甕の系譜につながるものが残る。２次調査ＳＢ－３出土の16・19、ＳＢ－５の49、３次調査ＳＸ－１出土の253・256にみられるように底部のくびれは小さく、上げ底といっても若干の窪み底のようになってしまうものもある。頸部の屈曲度も弱まり口縁部は外上方に開き、丸く収めていた口端部には横撫でによりしっかりとした面を持つようになる。また、外面の調整に多用していたヘラ磨きもすたれ、刷毛目調整が行われるようになる。中・小型品の変化に対して大型品にはさしたる変化もなく、16と共伴の18・20のように前段階の器型を踏襲している。２次調査ＳＢ－５では大型で平底の甕底部を出土しており、凹線文系大型



図－129　弥生時代後期初頭の土器

甕がこの時期まで残っている可能性がある。

壺や高坏においては、甕の特に中・小型品に現れたような一律的な変化はみられず、実態が不明確である。2次調査ＳＢ−3出土の壺13、同じくＳＢ−5出土の高坏51、3次調査ＳＢ−7の230のように凹線文期そのままの器型が残る一方、器型に大きな変化はなく凹線だけが浅く不明瞭になる2次調査ＳＢ−5の43、無文で複合口縁状の立ち上がりを持つ同住居址出土の44や、上方に立ち上がり、外面にやはり浅く不明瞭な凹線状の施文を持つ2次調査ＳＢ−3出土の口縁部14等がある。3次調査ＳＢ−7出土の高坏228も壺14と同様の特徴を持っている。3次調査ＳＸ−1出土の壺245は、甕256同様の胎土、焼成で、外面の調整、口端部の横撫でによる面など256とセットとなるべく製作された壺であり、その意味ではやはり特殊な遺物といえよう。いずれにしてもこの段階の壺や、高坏にはまだまだ不明な部分が多い。ただ、凹線文期の特徴を残しながら粗雑化、形骸化していったのがこの時期といえよう。また、壺44や新たな器種、支脚50の出現にみられるように新しい段階への萌芽が現れる時期としてとらえておきたい。

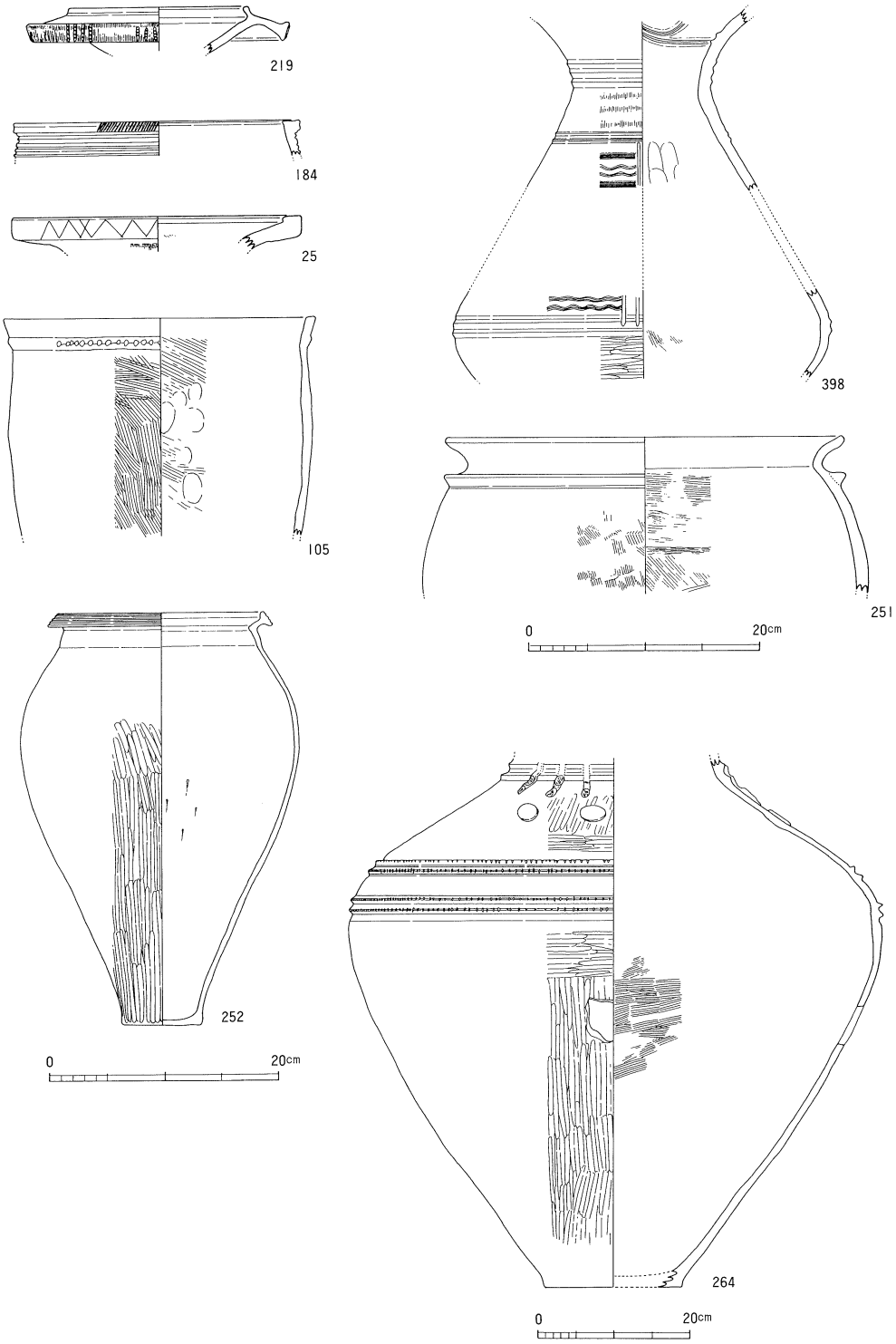
(3) 他地域との交流（図130）

西瀬戸内における対外交流に関しては、土器のみならず青銅利器、武器形石製品、農工具、祭祀具等を通じて地域間交流を試みた下條信行氏の論文に詳しい〔下條1991〕。ここでは、本報文中に報告した土器群のなかから搬入品、または搬入品そのものではなくとも他地域との交流を窺わせるものを抽出して資料化しておきたい。

周防（264）　伊予と周防の間には、土器に関してのみいえば中期中葉の垂下口縁壺、後期の複合口縁壺の近親性が指摘されている。ただし、中期後葉の凹線文の受容に関しては、これを積極的に受け容れた伊予と、基本的に受け容れなかった周防との間にある種の断絶が認められる〔下條1991〕。3次調査ＳＫ−1出土の264は中期後葉の祝谷六丁場遺跡〔松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター1991〕等の垂下口縁壺の系譜につながるものであり、単純に搬入品とはいいきれない部分もあるが、いずれにしても周防との関わりは否定しきれないものであろう。

吉備（252）　3次調査ＳＸ−1出土遺物のなかには在地の系譜につながり難いものを含んでいる。甕252にはあきらかに吉備地方の影響が考えられ、搬入品といってもさしつかえなかろう。同地方においては中期後半の新しいところに位置づけられているが、共伴遺物を総体的に判断してここでは後期初頭においている。また共伴の壺、図82−246や、包含層出土の図109−407の壺にみられる筒状の頸部から短く開く口縁部の形態も、中・東部瀬戸内の影響下にあるものと考えられる。

北部九州（251）　大型甕251も3次調査ＳＸ−1の出土であるが、頸部をやや下った位置に断面三角形の突帯を持つことに特徴がある。器型そのものには在地的な要素がみられるもの



図－130　他地域の影響を受けた土器

の、北部九州の影響を考えさせずにはおかない遺物である。

豊後（25）　2次調査ＳＢ－4出土の壺口縁部25は、口端部に幅広の粘土帯を貼付けて拡張した口端面にヘラ描鋸歯文を施している。このような口端部の肥厚は豊後の後期前葉の壺の地域的な特色である。

東・南部九州（105）　2次調査包含層出土の甕105は下城式の系譜をひくものである。松山平野での突帯文系の甕の出土は、量の多寡はともかく前期を通じてあるが、中期以降みられなくなる。他の土器との胎土の際だった相違から判断して、東・南部九州地方のいずこからの搬入品と考えられる。

畿内周辺（184）　3次調査ＳＢ－2出土の184はいわゆる段状口縁の鉢で、このような器型の鉢は本来当地方には存在しない。中期後葉に鉢として存在するのは小型のもののみで、大型のものは器高の低い甕をもってこれに充てていたものと思われる。畿内周辺地域の影響の産物であろう。

その他（219・398）　在地のものでもなく、かつ出自のよくわからない遺物が2点ある。3次調査ＳＢ－6出土の高坏219は、水平口縁・内面突帯の変形とも、鋤先状口縁の変形ともいい難い口縁部形態をなしている。口縁拡張部の下方への垂れ下がりは鋤先状口縁に似るが、内方への突出部がむしろ立ち上がりのようになっているところは水平口縁高坏に似ている。口縁拡張部の端面への刻みや、棒状浮文による加飾も異例であるがどちらかといえば西の要素である。398も突帯を多用しながら、畿内第2～4様式併行期にあっても当地では盛行することのない櫛描文を併用している。両者ともに東西の要素の折衷的な遺物として理解しておく。

(4)　おわりに

松山平野の弥生時代中期土器は近年に至るまで、中期を前半・後半として2大区分し、その後半部分を受け持たされていたのがいわゆる凹線文を持つ一群の土器であった。この前半・後半という用語自身は、通常そのどちらにも等質の時間幅があることを意味する。本来、そういった意図があって用いた用語ではないにせよ、例えば弥生時代中期を200～250年の幅に見積もってその後半約100年の間延々と凹線文系の土器が使われていたかのような印象を与えかねない用語の使用法であったといえよう。この原因として、まず中期の土器の内容そのものが不明確であったことが挙げられるが、その不明確なもののなかにあってその斉一性ゆえにひときわ目だったものが凹線文土器であったということも大きな要因となっていよう。

近年の祝谷六丁場遺跡や大峰台遺跡〔栗田1989〕の発掘調査の結果、中期中葉が垂下口縁壺に代表される土器群によって構成されることが明確となり、これに伴って実年代としての幅はともかくも凹線文期は3期区分のうちの中期後葉という、より実態に即した表現を与え

られることが可能になった。しかし、ここに至ってもまだ凹線文の受容過程そのものが解明されておらず、結果として凹線文は中期中葉の後、いきなり盛期を迎えるようなことになっているのである。この現象が実態であるにしろないにしろ、いずれにしても凹線文の側、またその前段階とされている側、双方の資料を再度見つめなおして型式学的な検討を重ねてゆく必要がある。現在その作業も進行中であり、この作業を経ることによってはじめて松山平野の弥生時代中期後葉に対する歴史的認識が得られることであろう。

また、今回、凹線文系の中・小型甕の消失をもってひとつの画期ととらえて、中・後期の間の一線を引いたが、その実、後期初頭とした段階での土器の実態は本中でも述べたように混沌としている。確たる後期初頭の土器型式の認定のためには、この混沌の中での型式学的操作が求められることはいうまでもない。今回はその操作に耐え得るだけの資料として質、量ともに不安を残したため、あえてこれを避けて実態を把握するにとどめた。なお、文京遺跡第10次調査報告中で、愛媛大学宮本一夫氏は10次調査ＳＫ-11・15出土の遺物を用いてこの作業を行い、該期の土器型式の設定に成果を挙げられている〔宮本1991〕ことを付記しておく。

文献

古代学協会四国支部　『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』（シンポジウム資料）　1988

愛媛大学埋蔵文化財調査室　『文京遺跡10次調査－文京遺跡における弥生時代遺跡の調査－』　1991

松山市教育委員会　『五郎兵衛谷古墳』　1978

梅木謙一　「松山平野の弥生後期土器－編年試案－」『松山大学構内遺跡－第２次調査－』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991

下條信行　「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山大学構内遺跡－第２次調査－』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991

松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　『祝谷六丁場遺跡－調査報告１－』　1991

栗田茂敏　「大峰台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会　1989

宮本一夫「文京遺跡出土弥生土器の編年」『文京遺跡第10次調査－文京遺跡における弥生時代遺跡の調査－』愛媛大学埋蔵文化財調査室　1991

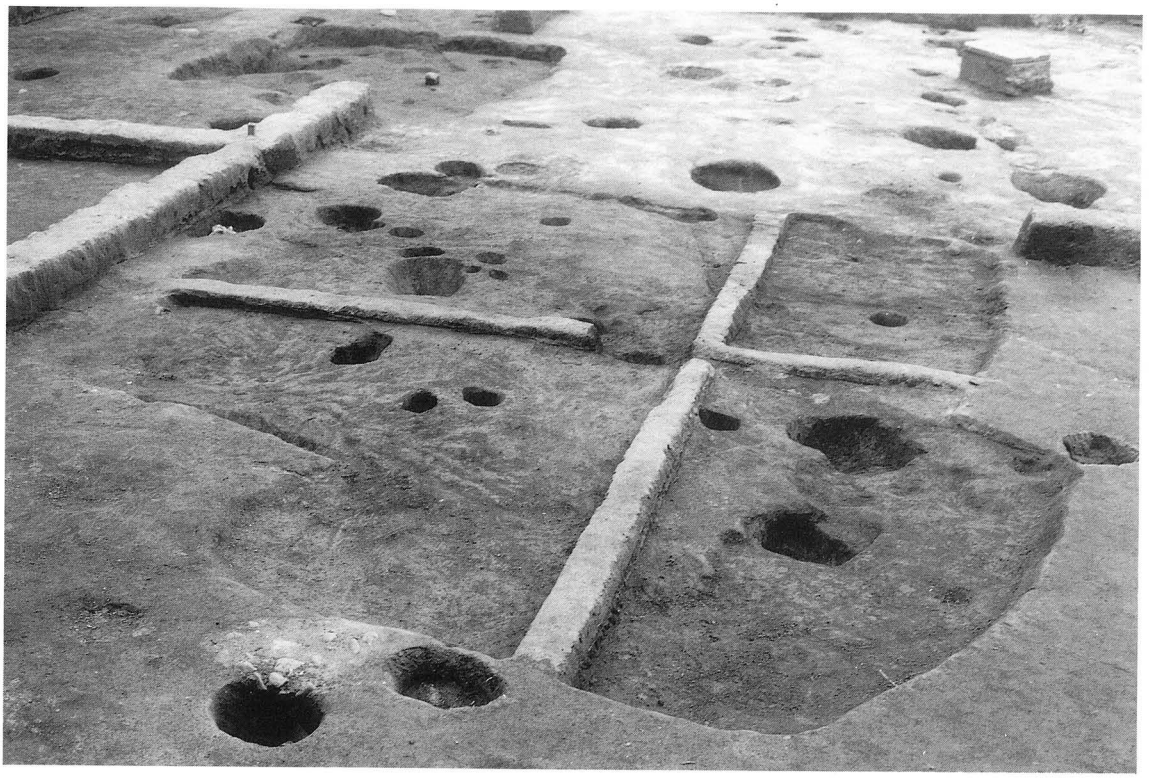
図　　版

文京遺跡の遠景（南西より）

2次調査地調査前全景（北西より）

調査地東半の遺構配置（南上方より）

竪穴住居ＳＢ－１（東南より）



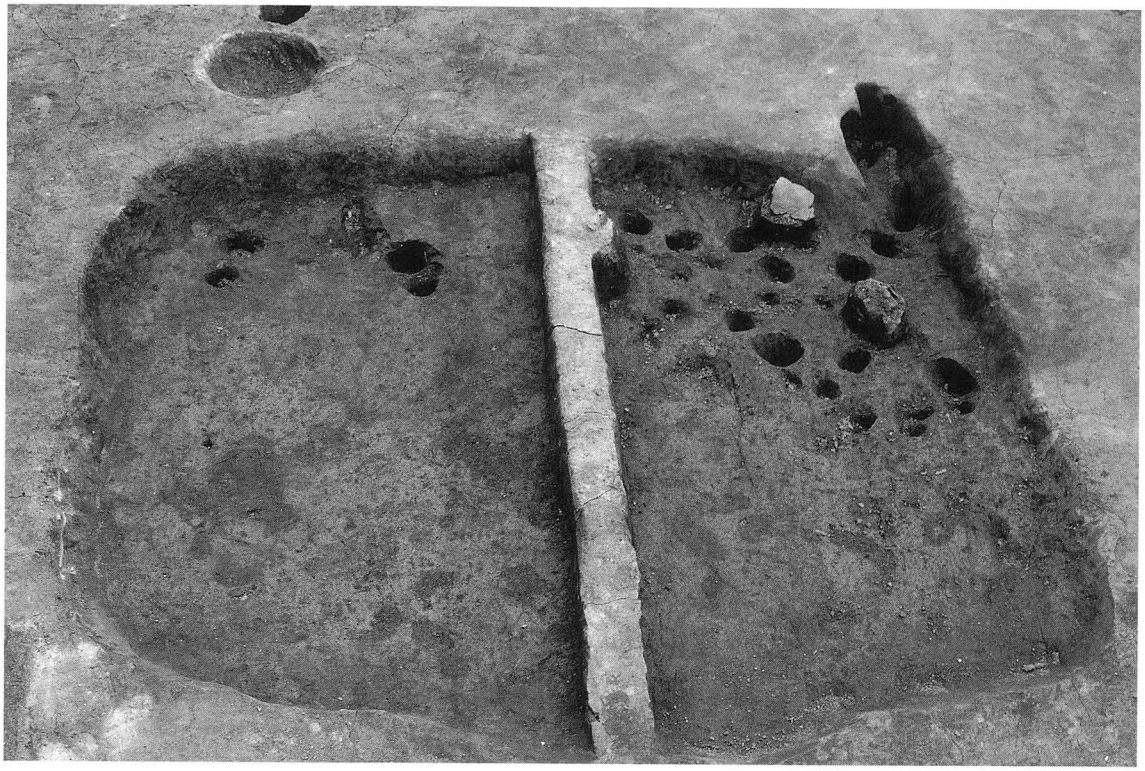
竪穴住居ＳＢ－２・３（東より）

竪穴住居ＳＢ－４（東より）

竪穴住居ＳＢ－５遺物出土状況（南より）

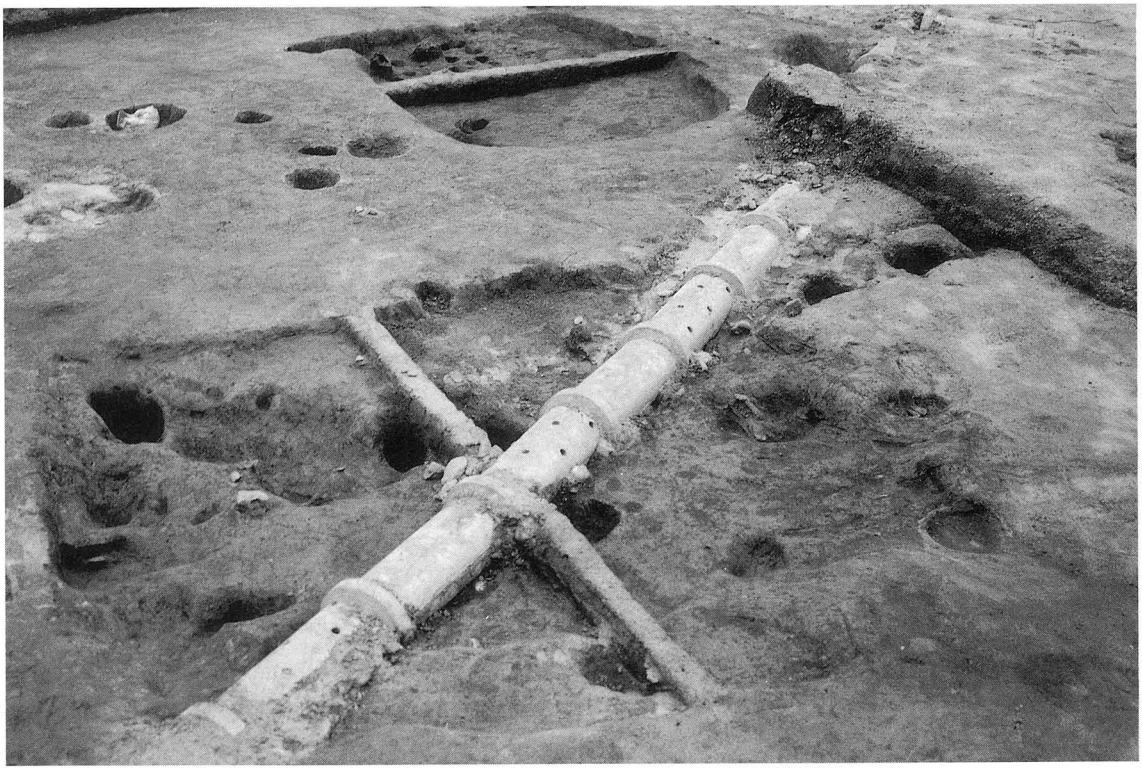
竪穴住居ＳＢ－５（北東より）

竪穴住居ＳＢ－6（北より）



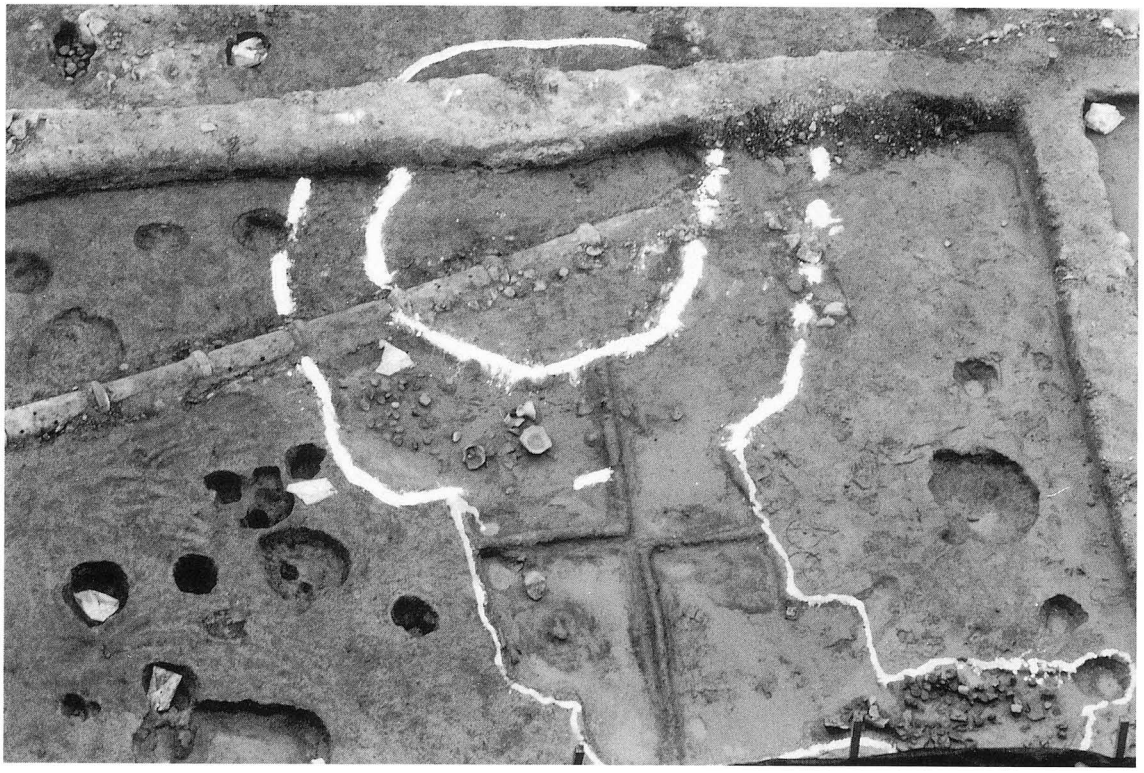
竪穴住居ＳＢ－7（東より）

調査地西半の遺構配置（南上方より）



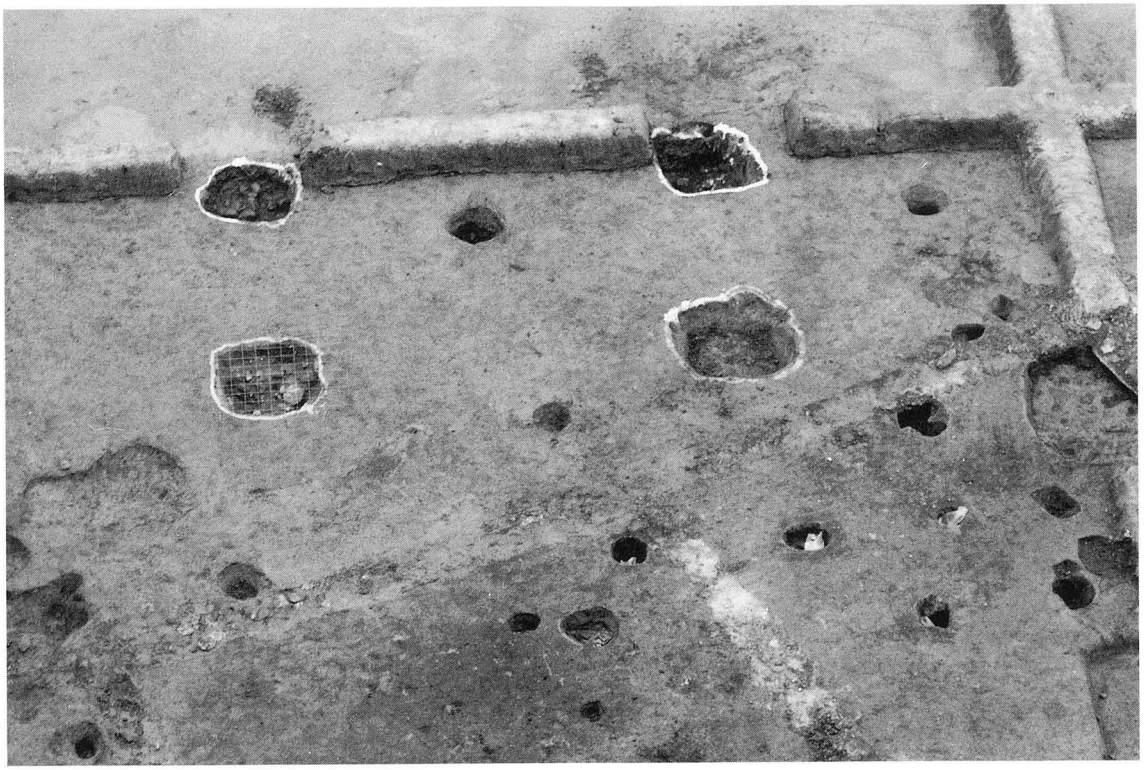
竪穴住居ＳＢ－８（南より）

竪穴住居ＳＢ－９（北より）



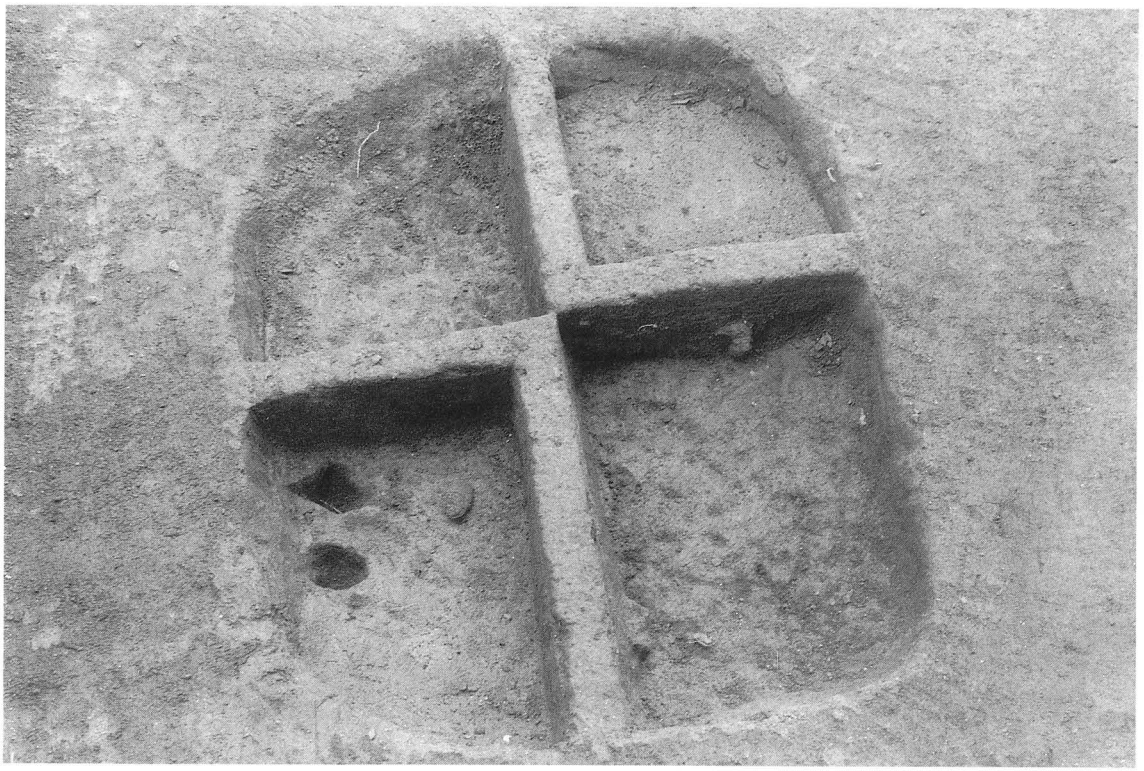
円形周構状遺構ＳＸ－１・不整形竪穴遺構ＳＸ－２（南上方より）

ＳＸ－１遺物出土状況（西より）



掘立柱建物ＳＢ－11（南上方より）

土壙ＳＫ－１遺物出土状況（西より）



土壙ＳＫ－２（東より）

土壙ＳＫ－３遺物出土状況

溝ＳＤ－１（東より）

出土遺物(1)（9：ＳＢ－１，15・16・22：ＳＢ－３，36：ＳＢ－４，80：ＳＸ－１）

44

57

49

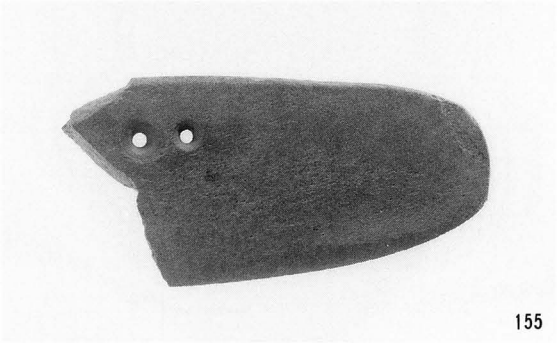
62

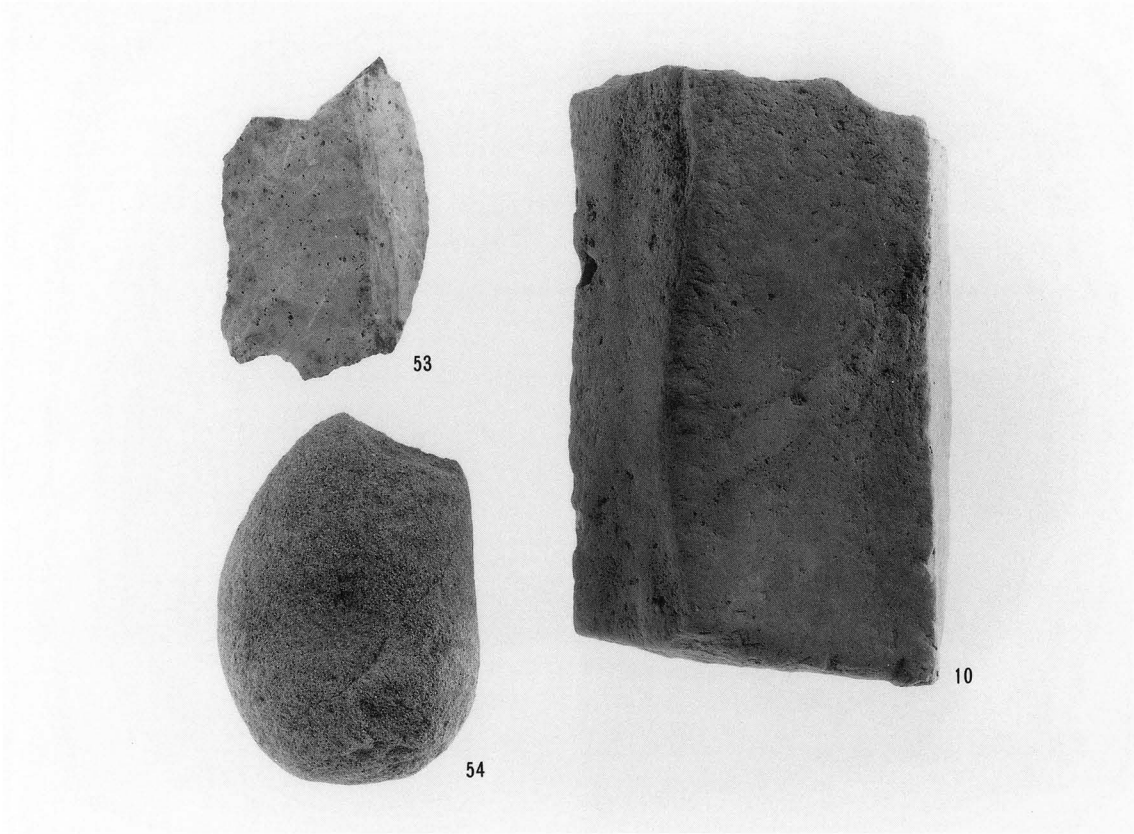
50

64

出土遺物(2)（44・49・50：ＳＢ－５，57・62：ＳＢ－11，64：ＳＫ－１）

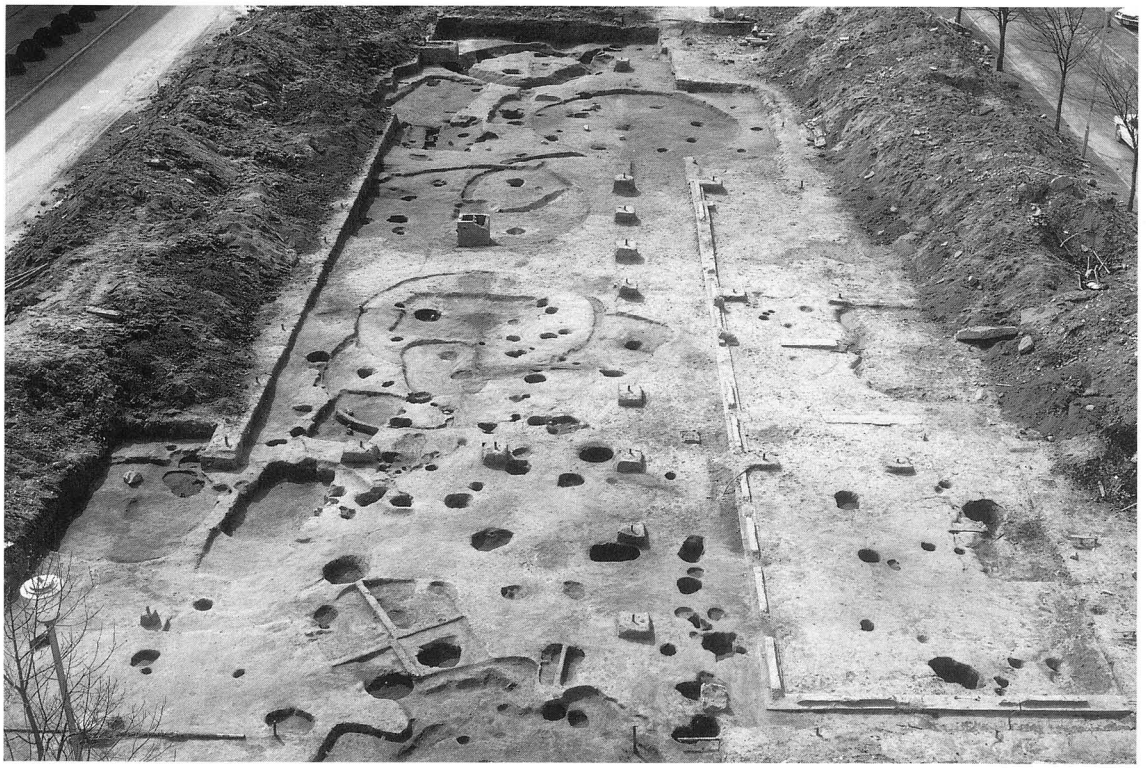
出土遺物(3)（ＳＫ－３）



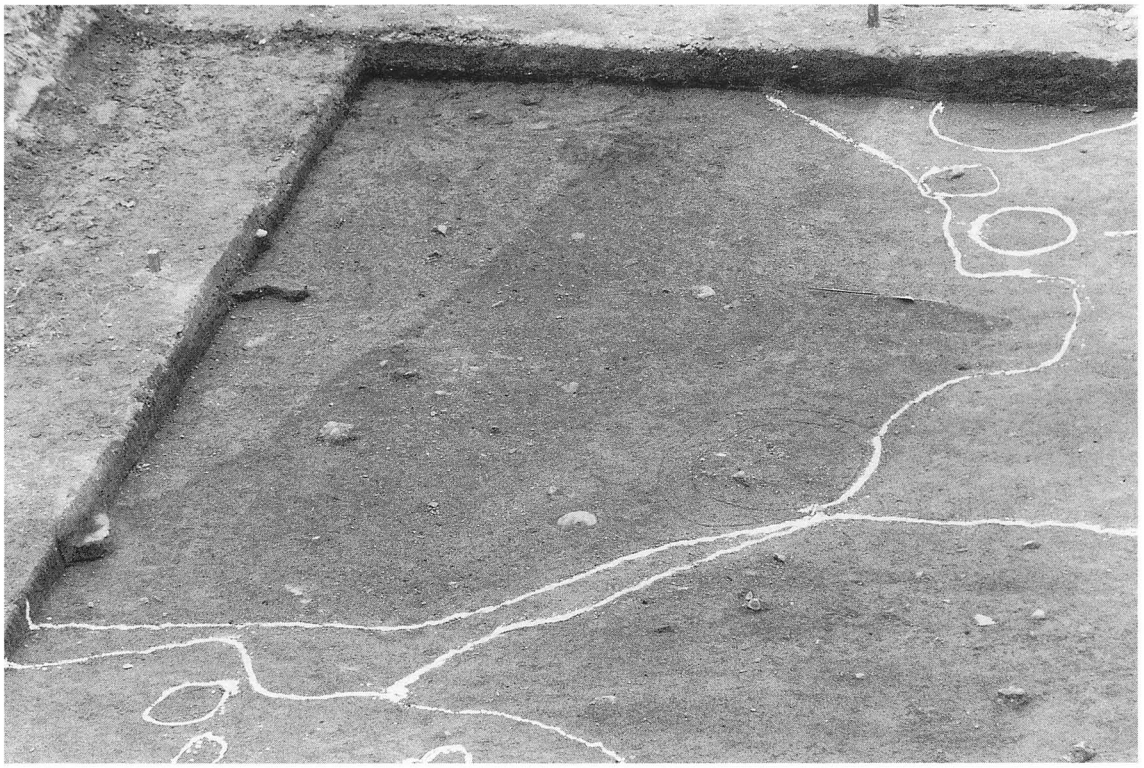


出土遺物(4)（10：ＳＢ－１，42：ＳＢ－４，52・53・54：ＳＢ－５，155・156：包含層）

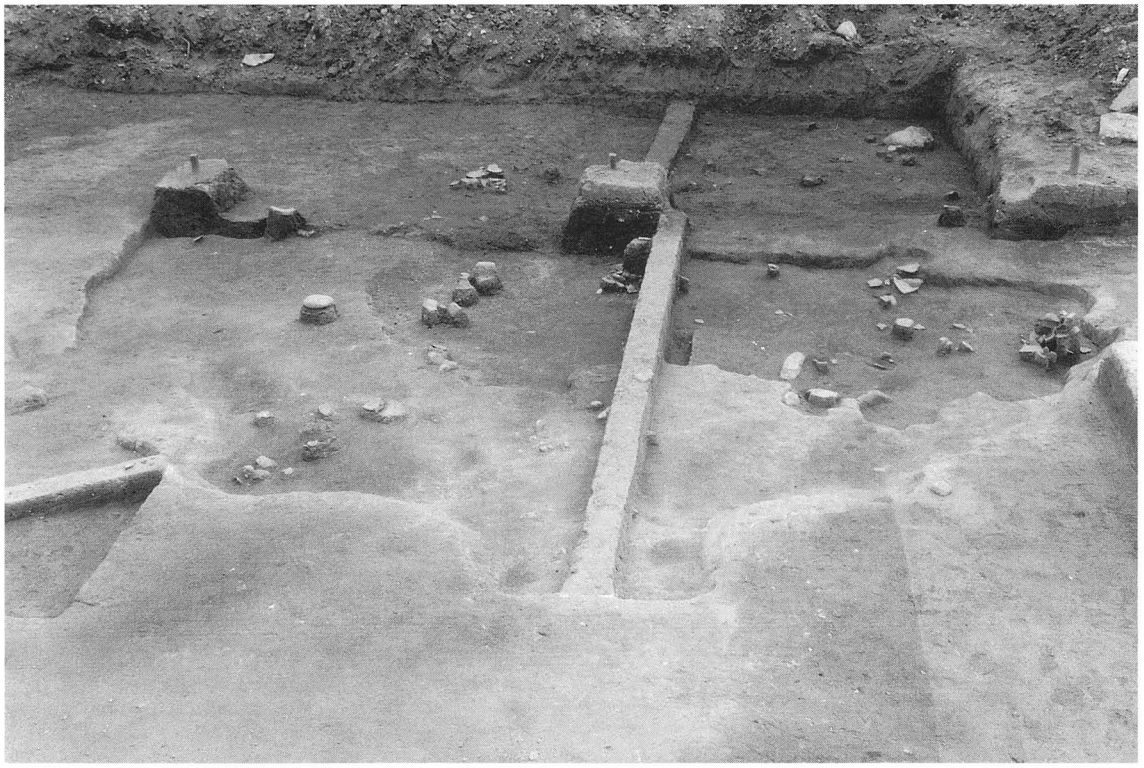
3次調査地調査前全景（東上方より）



完掘状況全景（東上方より）



竪穴住居ＳＢ－１検出状況（東より）



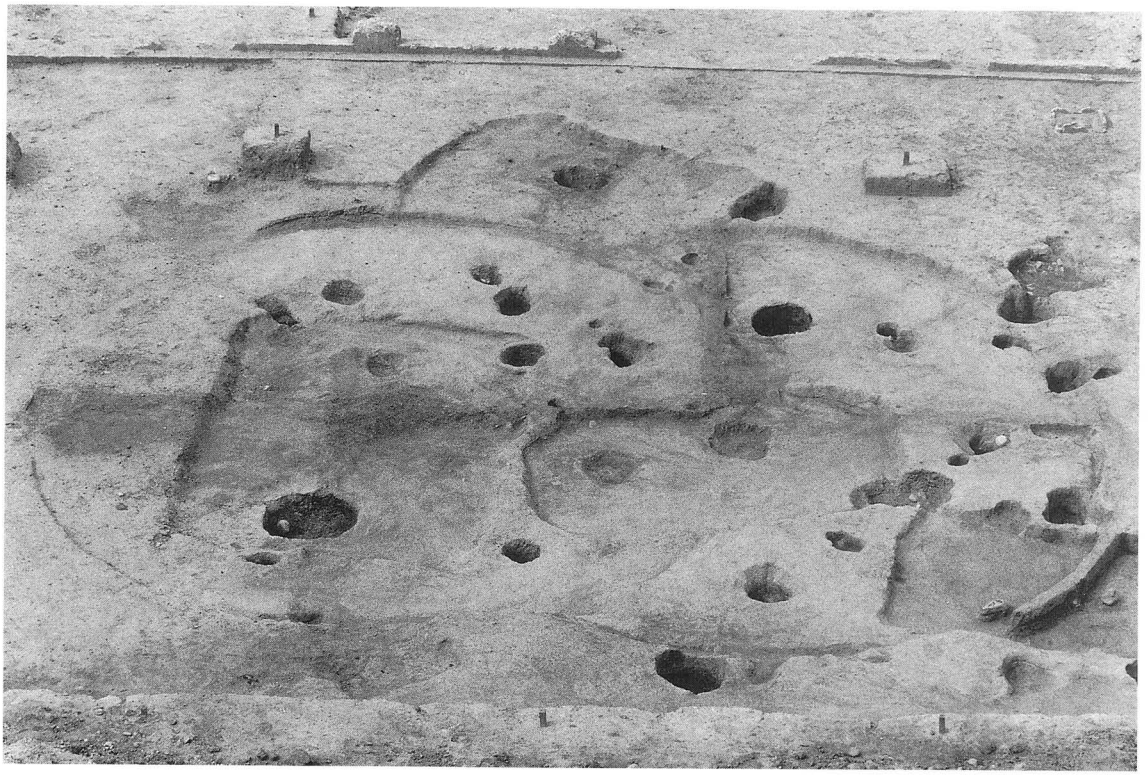
ＳＢ－１遺物出土状況（北より）

隅丸長方形竪穴遺構ＳＫ－１遺物出土状況（東より）

ＳＢ－１・ＳＫ－１周辺の遺構（南より）

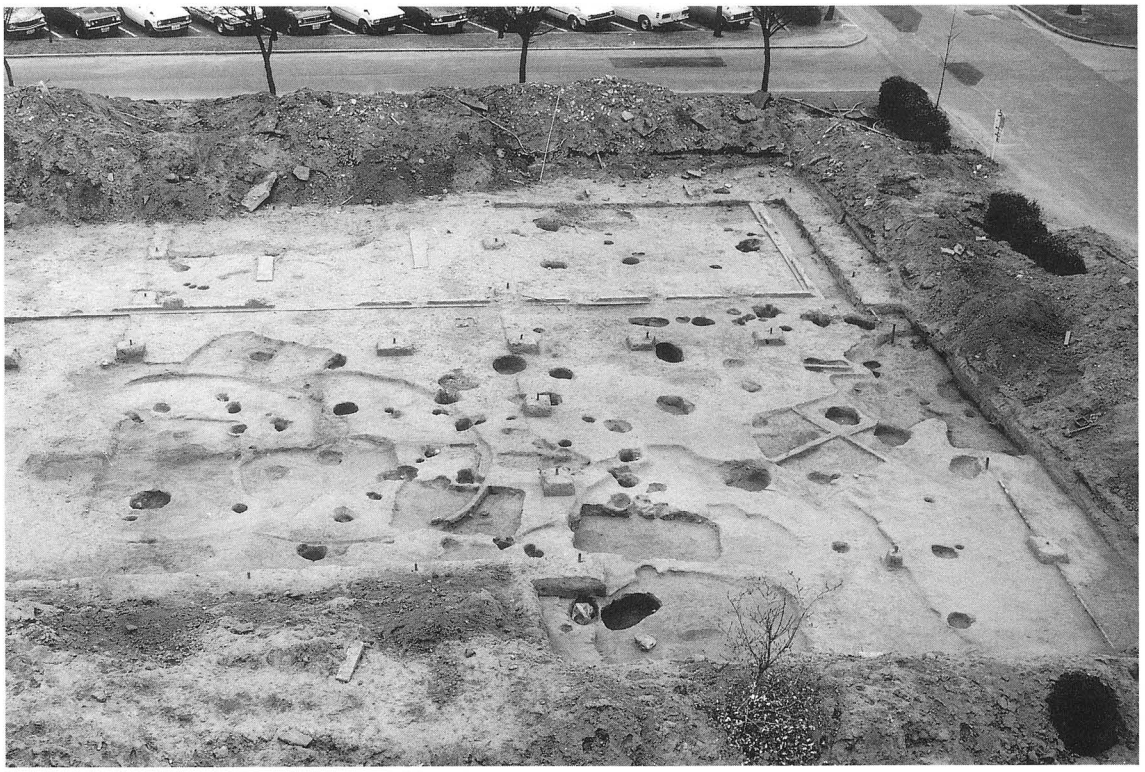
ＳＢ－１・ＳＫ－１（東より）

竪穴住居ＳＢ－２・土壙ＳＫ－９（東より）



竪穴住居ＳＢ－３・５，隅丸長方形竪穴遺構ＳＫ－２～５（南より）

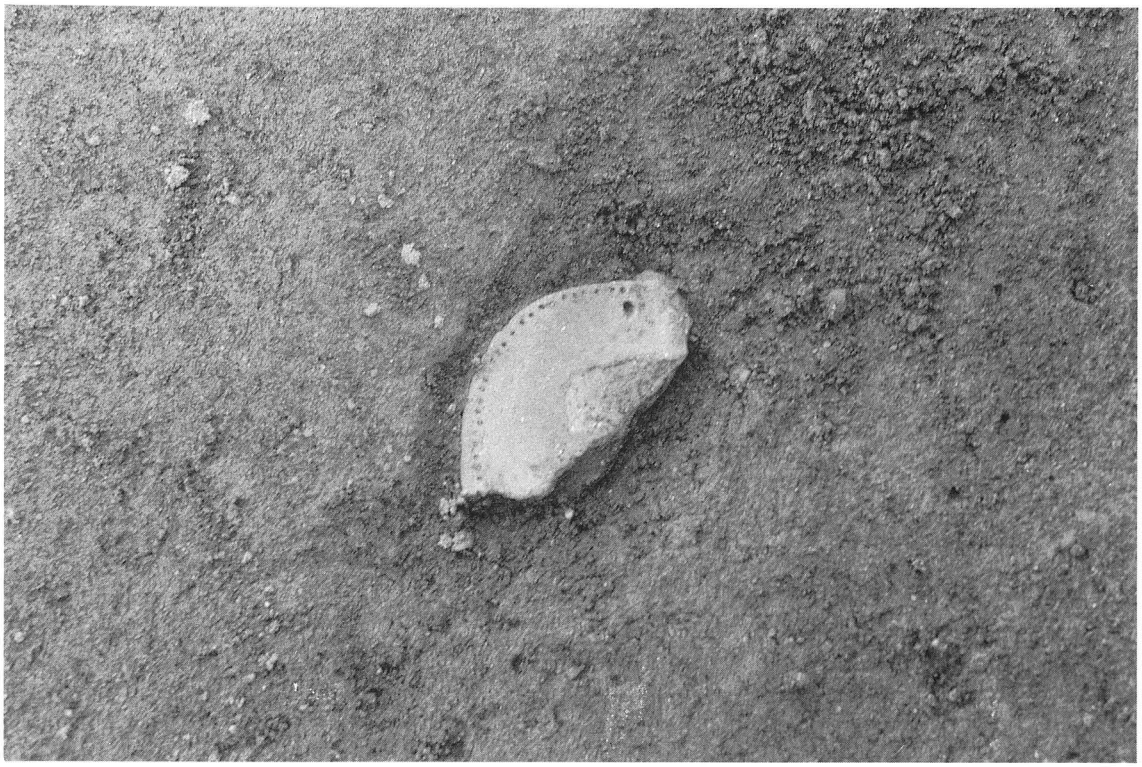
ＳＢ－３とＳＫ－３・４（北東より）



調査地東半の遺構配置（南上方より）

調査地西寄りの遺構配置（南上方より）

竪穴住居ＳＢ－６（南東より）



ＳＢ－６分銅形土製品出土状況

竪穴住居ＳＢ－７（北より）

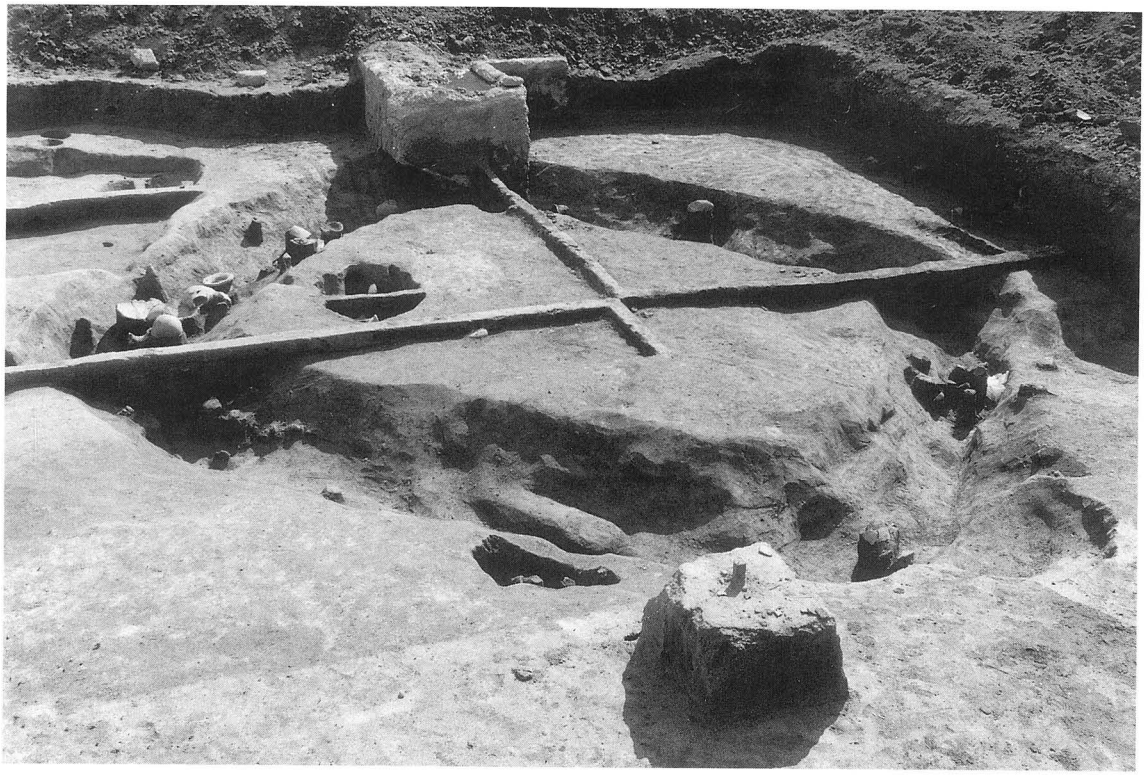
ＳＢ－７鉢形土器出土状況

隅丸長方形竪穴遺構ＳＫ－７（西より）

ＳＫ－７壺出土状況

隅丸長方形竪穴遺構ＳＫ－８（南西より）

ＳＫ－８遺物出土状況



方形周溝状遺構ＳＸ－１遺物出土状況（北東より）

ＳＸ－１遺物出土状況（部分，北東より）

ＳＸ－１完掘状況（北東より）

調査地西半の遺構配置（南上方より）

162

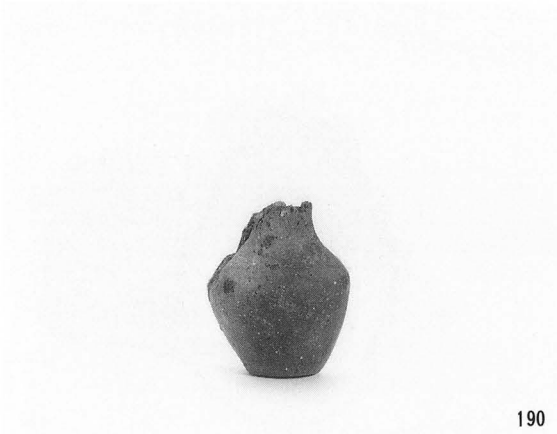
175

171

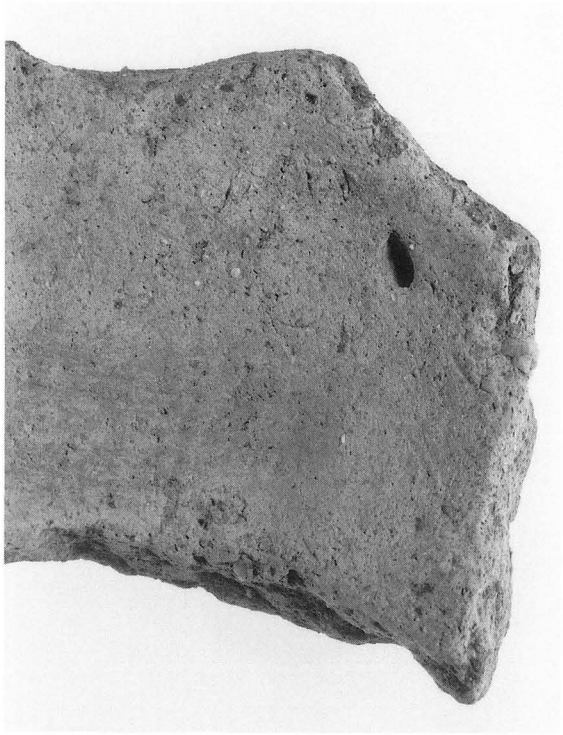
179

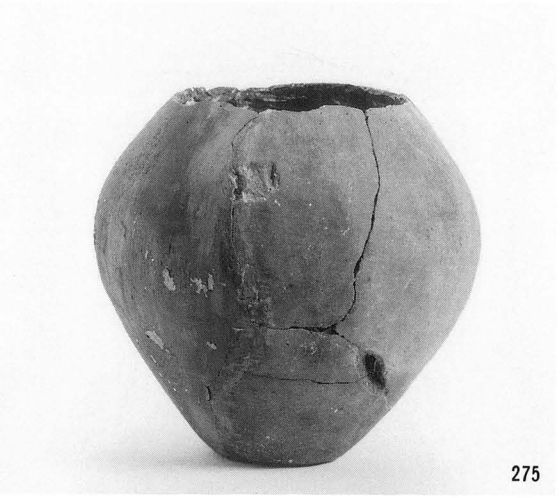
169

出土遺物(1)（ＳＢ－１）



出土遺物(2)（185・187：ＳＢ－３，190：ＳＢ－５，198：ＳＢ－６，266：ＳＫ－３）





出土遺物(3)（籾圧痕土器：ＳＢ－６，235：ＳＢ－７，275・276：ＳＫ－７）

240

245

239

246

出土遺物(4)（ＳＸ－１）

243

244

252

256

253

254

出土遺物(5)（ＳＸ－１）